

一般国道23号中勢道路（10工区）建設事業に伴う

# 藏田遺跡発掘調査報告

1999・10

三重県埋蔵文化財センター



橢形罐



噴砂

## 序

三重県の県庁所在地である津市は県の中央部に位置し、伊勢湾や鈴鹿山脈の豊かな自然環境と温暖な気候にも恵まれ、古来より多くの遺跡が営まれてきました。とくに安濃川左岸には、県内有数の弥生時代の遺跡である納所遺跡が所在しており、その豊富な出土品は全国的にも注目を集めています。

今回報告します蔵田遺跡は、納所遺跡の西方に位置しており一般国道23号中勢道路建設に先立って調査されたものです。蔵田遺跡からは弥生時代・古墳時代の集落をはじめ、自然流路や河道、またそれに付属する護岸施設や貯水施設が見つかり、当時から生活の場とされてきたことが明らかになりました。また条里地割に沿った平安時代末から鎌倉時代初頭頃の建物群の検出は、安濃川流域に行われた条里制を解明する上で貴重な成果と言えます。このような遺構や、初期須恵器をはじめ木製農具や建築部材など出土した遺物は、安濃川下流域の沖積地での当時の生活を知る上で重要な遺産と言えるでしょう。

遺跡は、現状保存が困難なため記録保存というかたちになりましたが、その記録を整理して報告書というかたちで世に公開することが私どもに課せられた重要な責務と考えています。今後、これらの成果が、各方面で活用されることを切に望んでやみません。

最後に、調査にあたり御協力いただいた関係諸機関および地元の皆様に厚くお礼申し上げますとともに、県民の皆様の文化財保護への一層の御理解や御協力を得られますことをお願い申し上げる次第です。

平成11年10月

三重県埋蔵文化財センター

所長 大井與生

# 例　　言

1. 本書は、三重県津市納所町字蔵田ほかに所在する蔵田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、三重県教育委員会が建設省中部地方建設局から委託を受け、平成元年と平成7年に範囲確認調査を行い、平成6年度から平成8年度に本調査を実施した。また、整理・報告書作成業務は平成9年度から平成10年度にかけて行った。調査にかかる費用は、建設省中部地方建設局の全額負担によるものである。
3. 調査の体制は下記のとおりである。
  - ・調査主体 三重県教育委員会
  - ・調査担当 三重県埋蔵文化財センター
  - ・調査協力 津市教育委員会 鈴鹿市教育委員会
  - ・現場作業 社団法人中部建設協会
4. 蔵田遺跡の発掘調査は、平成元年度の範囲確認調査を浅生悦生・竹内英樹が、平成7年度の範囲確認調査を米山浩之が実施し、本調査は平成6年度に第1次調査を山本義治・宮田勝功が、平成7年度に第2次調査を米山浩之・池端清行・宮田勝功が、平成8年度に第3次調査を米山浩之・山本義治がそれぞれ担当した。市道部分の調査については、平成11年度以降に調査を予定している。
5. 本書作成にかかる報文執筆者は、日々および文本にその氏名を記した。
6. 発掘調査ならびに整理・報告書作成にあたっては、下記の方々に御指導・御教示を得ました。記して感謝の意を表します。(順不同・敬称略)  
吉木哲哉(立命館大学)・浅生悦生(津市立農が丘小学校)・石野博信(徳島文理大学)・磯部克(県立松阪高校)・加藤元信(山田陽穂(三重県農業技術センター)・金原正明(天理大学付属天理参考館)・寒川一旭(通産省工業技術院地質調査所)・森勇一(愛知県立明和高等学校)
7. 蔵田遺跡については、すでに『一般国道23号伊勢道路埋蔵文化財発掘調査概報』Ⅱ(三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター 1990)および『同』VII~IX(三重県埋蔵文化財センター 1995~1997)、『伊勢道路ニュース』No.10・23・25・28に、その調査途中の概要を報告しているが、本書をもって正式報告とする。
8. 本書に用いた地図および遺構平面図は、国土地理院の第VI座標系を基準とし、挿図の方針は全て座標北を示している。なお、当該遺跡の磁北は座標北からN 6° 30' W(平成4年)振れている。
9. 本書で報告した記録および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターにおいて保管・管理している。
10. 本書で用いた遺構表示略記号は、下記の通りである。なお遺構の名称・番号は、調査時点および調査途中の機報での呼称を踏襲せずに、新たに改称したものである。

S A 杜列	S B 掘立柱建物	S D 溝	S E 片井	S F 焼土坑	S K 上坑
S R 河道・自然流路	Pit 桟穴・小穴	S Z 蓋厚施設・貯水施設			
11. 用語については、次の説明を用いた。  
「つき」には、杯・壺があるが、杯を使用した。  
「わん」には、碗・椀・甌があるが、山茶碗を陶器碗とし、灰釉陶器と共に碗を使用した。またこのほかの陶器製品や磁器製品には碗を使用した。
12. スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。  
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

# 本文目次

序	
例言	
日次	
I. 前言	(米山・宮田) 1
1. 調査にいたる経緯	1
2. 調査の体制	1
3. 調査の経過	4
4. 調査の方法・遺構番号付与方法	6
5. 記録・整理方法	6
6. 調査日誌(抄)	6
II. 位置と環境	(宮田) 9
III. 地形と層序	(米山) 13
IV. 繩文時代	(宮田) 21
V. 弓生時代	(米山) 23
1. 掘立柱建物	23
2. 杖列	27
3. 方形周溝墓	27
4. 焼土坑	31
5. 土坑	31
6. 溝・自然流路・杭列	36
7. 小穴	38
8. 包含層出土遺物	38
VI. 古墳時代	(米山・宮田) 39
1. 掘立柱建物	39
2. 井戸	41
3. 土坑	41
4. 溝、河道・自然流路	48
5. 小穴	84
6. 包含層出土遺物	84
VII. 飛鳥・奈良時代	(米山) 85
1. 掘立柱建物	85
2. 井戸	85
3. 自然流路	87
4. 包含層出土遺物	90
VIII. 平安時代以降	(宮田) 91
1. 掘立柱建物	91
2. 井戸	92
3. 土坑	95
4. 溝	96
5. 包含層出土遺物	100
IX. その他	(宮田) 101
1. 畦畔状遺構	101
2. 牛の足跡	101
3. 噴砂	102
X. 自然科学分析	105
1. 放射性炭素 <sup>14</sup> C年代測定	(パリノ・サーヴェイ) 105
2. 上壤分析および種実同定	(パリノ・サーヴェイ) 105
XI. 遺構・遺物のまとめと考察	(米山・宮田) 135

# 插図目次

第1図 中勢道路(8・9・10丁区)内 遺跡位置図	2	第44図 S R 3、S D 4・8・9・ 10上層断面図	48
第2図 調査区・試掘坑位置図	5	第45図 S R 3出土遺物実測図・拓影図(1)	49
第3図 大地区割図	7	第46図 S R 3出土遺物実測図(2)	50
第4図 小地区割図	7	第47図 S R 3出土遺物実測図(3)	51
第5図 遺跡位置図	10	第48図 S R 3出土遺物実測図(4)	52
第6図 遺跡周辺地形図	11	第49図 S R 3、P i t 2遺物出土状況図	53
第7図 遺跡周辺地形図	13	第50図 P i t 2出土木製品実測図	54
第8図 土層断面図(1)	14	第51図 河道出土S字甕分類図	54
第9図 土層断面図(2)	15	第52図 河道出土高杯分類図	54
第10図 土層断面図(3)	16	第53図 S Z 3遺物出土状況図	55
第11図 蔵田遺跡遺構図(1)	17~18	第54図 S Z 3出土木製品実測図	56
第12図 蔵田遺跡遺構図(2)	19~20	第55図 S R 4、S R 1土層断面図	57
第13図 銚文土器出土位置図	21	第56図 S R 4出土遺物実測図(1)	59
第14図 銚文土器拓影図・実測図	22	第57図 S R 4出土遺物実測図(2)	60
第15図 弥生時代遺構略図	23	第58図 S R 4出土遺物実測図(3)	61
第16図 S B 1~7実測図	24	第59図 S R 4出土石製品実測図	62
第17図 S B 2出土柱根実測図	25	第60図 S R 4木製品出土状況図・ 出土木製品実測図	62
第18図 S B 8~16・S A 1~4実測図	26	第61図 S R 5、S D 8・9・ 10出土遺物実測図・拓影図	63
第19図 S X 1実測図・遺物実測図	28	第62図 S Z 4実測図・出土木製品実測図	64
第20図 弥生時代中期前葉上器分類図	29	第63図 S R 6出土遺物実測図	65
第21図 S F 1実測図・出土遺物実測図	30	第64図 S R 7出土・弥生時代遺物拓影図	65
第22図 S K 1遺物出土状況図	31	第65図 S R 7土層断面図	66
第23図 S K 1出土遺物実測図	32	第66図 S R 7出土弥生時代遺物実測図	67
第24図 S K 2~9実測図	34	第67図 S R 7出土古墳時代遺物実測図	68
第25図 S K 3~4出土遺物実測図	35	第68図 S R 7出土石製品実測図	69
第26図 S K 2~6~9出土遺物実測図	35	第69図 S R 7出土木製品実測図	70
第27図 S K 10実測図・出土遺物実測図	35	第70図 S Z 5実測図	71
第28図 S R 1出土遺物実測図	36	第71図 S Z 5出土木製品実測図	72
第29図 S Z 1実測図	36	第72図 S Z 6実測図・出土木製品実測図	73
第30図 S D 4出土遺物実測図	36	第73図 S Z 7実測図	74
第31図 S Z 2実測図	37	第74図 S Z 7出土木製品実測図	75
第32図 S R 2出土遺物実測図	37	第75図 S Z 7~8位置図	75
第33図 S R 2、S Z 1~2 出土木製品実測図	38	第76図 S Z 8実測図	75
第34図 弥生時代小穴・包含層出土遺物実測図	38	第77図 S R 8~9~10土層断面図	76
第35図 古墳時代遺構略図	39	第78図 S R 8遺物出土状況図、 S Z 9杭列実測図	77
第36図 S B 17~26実測図、 S B 23~26出土遺物実測図	40	第79図 S R 8出土遺物実測図(1)	78
第37図 S E 1実測図・出土遺物実測図	42	第80図 S R 8出土遺物実測図(2)	79
第38図 S K 11実測図・出土遺物実測図	43	第81図 S R 8、S Z 10出土木製品実測図	80
第39図 S K 12実測図・出土遺物実測図	43	第82図 S R 8、S Z 9~10 出土木製品実測図	81
第40図 S K 13~14遺物出土状況図、 S K 14出土遺物実測図	44	第83図 S R 8、S Z 9出土木製品実測図	82
第41図 S K 13出土遺物実測図	45	第84図 S Z 10遺物出土状況図	83
第42図 S K 15遺物出土状況図	46	第85図 S R 9出土遺物実測図	83
第43図 S K 15出土遺物実測図	47		

第 86 図	S D13・14・15上層断面図	84
第 87 図	古墳時代包含層出土遺物実測図	84
第 88 図	飛鳥・奈良時代遺構略図	85
第 89 図	S B27・28実測図	85
第 90 図	S E 2 実測図・出土遺物実測図	86
第 91 図	S R11実測図・遺物出土状況図	88
第 92 図	S R11出土遺物実測図	89
第 93 図	S D18~20実測図・出土遺物実測図	90
第 94 図	飛鳥・奈良時代包含層出土遺物実測図	90
第 95 図	平安時代以降遺構略図	91
第 96 図	S B29実測図	92
第 97 図	S B30実測図	93
第 98 図	S B31実測図	93
第 99 図	S B32・33実測図	94
第100図	S B30根石出土状況	95
第101図	S E 3 実測図・土層断面図	96
第102図	S E 3 出土遺物実測図	96
第103図	S E 4 実測図・土層断面図	97
第104図	S E 4 出土遺物実測図	97
第105図	S K16遺物出土状況図・土層断面図	98
第106図	S K16出土遺物実測図	98
第107図	S D29出土遺物実測図	99
第108図	S D32出土遺物実測図	99
第109図	S D36出土遺物実測図	100
第110図	平安時代以降包含層出土遺物実測図	100
第111図	その他遺構配置図	101
第112図	畦畔状遺構実測図	102
第113図	A地区牛の足跡実測図	102
第114図	D地区牛の足跡実測図	102
第115図	繩文土器出土状況図	102
第116図	噴砂実測図	103
第117図	B地区東西トレンチ上層断面図	104
第118図	分析試料採集地点	109
第119図	弥生・古墳時代集落変遷図	136
第120図	護岸施設・貯水施設等配置図	139
第121図	S R 8 出土土器	140
第122図	藤田遺跡周辺条里推定図	141
第123図	県内活断層分布図	143

## 目 次

第 1 表	藏田遺跡調査一覧表	1
第 2 表	一般国道23号中勢道路上遺跡	
	調査経過・予定表	3
第 3 表	調査区対照表	6
第 4 表	藏田遺跡D地区放射性炭素 年代測定結果	108
第 5 表	土壤理科学分析結果	108
第 6 表	弥生時代掘立柱建物・柱列一覧表	110
第 7 表	古墳時代掘立柱建物一覧表	111
第 8 表	飛鳥・奈良時代掘立柱建物一覧表	111
第 9 表	平安・鎌倉時代掘立柱建物一覧表	111
第 10 表	平安時代以降溝一覧表	112
第 11 表	遺物観察表(1)	113
第 12 表	遺物観察表(2)	114
第 13 表	遺物観察表(3)	115
第 14 表	遺物観察表(4)	116
第 15 表	遺物観察表(5)	117
第 16 表	遺物観察表(6)	118
第 17 表	遺物観察表(7)	119
第 18 表	遺物観察表(8)	120
第 19 表	遺物観察表(9)	121
第 20 表	遺物観察表(10)	122
第 21 表	遺物観察表(11)	123
第 22 表	遺物観察表(12)	124
第 23 表	遺物観察表(13)	125
第 24 表	遺物観察表(14)	126
第 25 表	遺物観察表(15)	127
第 26 表	遺物観察表(16)	128
第 27 表	遺物観察表(17)	129
第 28 表	遺物観察表(18)	130
第 29 表	遺物観察表(19)	131
第 30 表	遺物観察表(20)	132
第 31 表	遺物観察表(21)	133
第 32 表	遺物観察表(22)	134
第 33 表	櫛形出土遺跡一覧	138
第 34 表	S R 8 出土土器器種構成	140
第 35 表	平安・鎌倉時代掘立柱建物方位	142
第 36 表	平安時代以降溝方位	142

## 図 版 目 次

P L - 1	安東地区航空写真	146
P L - 2	遺跡遠景	147
P L - 3	調査前 (D ~ F 地区)	148
	A・B 地区全景	148
P L - 4	C・D 地区全景	149
	E・F 地区全景	149
P L - 5	A 地区全景	150
	B 地区全景	150

P L - 6	C地区全景	151	S R 7 曲物底板出土状況	171
	D地区全景	151	S R 7 錐柄出土状況	171
P L - 7	E地区全景	152	S R 8 曲柄又鍬出土状況	171
	F地区全景	152	P L - 27 S B27	172
P L - 8	C地区中央部	153	S B28	172
	S B 5	153	P L - 28 S E 2	173
P L - 9	S B 2・3	154	S E 2 木組み	173
	S B 2 柱根出土状況	154	P L - 29 S R11	174
P L - 10	S B 7	155	S R11遺物出土状況	174
	S B10	155	P L - 30 S B29	175
P L - 11	S B 8・9・11、S A 4	156	S B30	175
	S B12	156	P L - 31 S B31	176
P L - 12	S B13・14	157	S B32・33	176
	S B15・16	157	P L - 32 S E 3	177
P L - 13	S X 1、S K 5～8	158	S E 3 土層断面	177
	S F 1 検出状況	158	P L - 33 S E 4	178
	S F 1 完掘状況	158	S E 4 土層断面	178
P L - 14	S K 1 遺物出土状況	159	P L - 34 B地区噴砂検出状況	179
	S K 1 完掘状況	159	B地区噴砂断面	179
	S K 5	159	P L - 35 B地区繩文土器出土状況	180
	S K 9	159	D地区東壁土層断面	180
P L - 15	S D 4	160	P L - 36 繩文土器	181
	S R 1	160	P L - 37 S X 1・S F 1 出土遺物	182
	S Z 1	160	P L - 38 S K 1・3・4・7・8 出土遺物	183
	S Z 2	160	P L - 39 S R 2・S D 4・S B23・S E 1	
			・S K10～12出土遺物	184
P L - 16	S B17	161	P L - 40 S K13・14出土遺物	185
	S B18	161	P L - 41 S K15出土遺物	186
P L - 17	S B19・20	162	P L - 42 S R 3 出土遺物 1	187
	S B21	162	P L - 43 S R 3 出土遺物 2	188
P L - 18	S B22	163	P L - 44 S R 4 出土遺物 1	189
	S B23～26	163	P L - 45 S R 4 出土遺物 2	190
P L - 19	S E 1	164	P L - 46 S D 8・9・12、	
	S K11遺物出土状況	164	S R 5・7 出土遺物	191
P L - 20	S K13遺物出土状況	165	P L - 47 S R 7 出土遺物	192
	S K15遺物出土状況	165	P L - 48 S R 7 出土遺物 1	193
P L - 21	S R 7	166	P L - 49 S R 7 出土遺物 2	194
	S R 8・9・10	166	P L - 50 S R 9、包含層出土遺物	195
P L - 22	S Z 5	167	P L - 51 S E 2・S R11出土遺物	196
	S Z 5 桅列	167	P L - 52 S E 3・4・S D29・36、	
P L - 23	S Z 6	168	包含層出土遺物	197
	S Z 7	168	P L - 53 S B 2・S E 1	
P L - 24	S Z 8	169	・S Z 2 出土木製品	198
	S Z 9	169	P L - 54 S R 4・7・8、	
P L - 25	S R 8 遺物出土状況	170	S E 2、Pit 2 出土木製品	199
	S R 8 遺物出土状況拡大	170	P L - 55 S E 2 側板	200
P L - 26	S R 3 小型丸底壺出土状況	171	P L - 56 種実	201
	S R 4 土師器甕・碗出土状況	171		
	S R 4 風呂鍬出土状況	171		

# I. 前 言

## 1 調査にいたる経緯

昭和 58 年 4 月に都市計画道路中勢バイパスとして鈴鹿市北垣町から一志郡三雲町までの 33.8km の区間が都市計画道路に決定された。

この道路は中勢地域の道路網を充実させるとともに総合的な地方都市交通体系の確立を図るためにも現国道 23 号の交通集中の緩和と周辺の適切な土地利用の誘導を目指し、地域の経済発展に寄与しようとするものである。

この中勢バイパス建設計画にかかる埋蔵文化財保護については、昭和 57 年 1 月に建設省から事業地内の埋蔵文化財の有無の照会を受け、三重県教育委員会が主体となり、関係する市町村教育委員会の協力を得て分布調査を昭和 58 年度に実施した。昭和 59 年 5 月に建設省へ分布調査結果を回答するとともに、建設省三重工事事務所、県道路建設課と今後の取扱いについて協議を重ねた。

中勢道路は、中勢バイパスの一環で、津市大里庄山町の主要地方道津閑線から同市大字神戸の都市計画道路雲出野田線にいたる 7.2km の区間が昭和 59 年 4 月に事業採択された。この計画道路内の埋蔵文化財の遺跡数は、20 遺跡を数え、一部未調査部分をのこすものの約 117,000m<sup>2</sup> の調査を終えている。(平成 9 年 3 月現在)

これらの埋蔵文化財の取扱いについては、建設省中部地方建設局三重工事事務所と三重県教育委員会

文化課との間で協議し、現状保存が困難な遺跡について事前の発掘調査を実施し、記録保存を図ることとなった。

現地作業については、調査件数も多く調査面積も広大であるため、作業員の安定的確保と発掘調査の適正かつ円滑な推進を期して、建設省が社団法人中部建設協会に委託する方法を採用することとした。昭和 63 年 4 月に建設省中部地方建設局長と三重県知事および社団法人中部建設協会理事長の二者による協定を締結して発掘調査を実施することになった。

## 2 調査の体制

調査主体は三重県教育委員会で、調査担当は三重県埋蔵文化財センターである。調査にあたっては、「県教育委員公・市町村教育委員会職員人事交流実施要綱」に基づく協定を締結して、津市教育委員会および鈴鹿市教育委員会から派遣職員を得て調査体制を整えた。

本書に所収した藏田遺跡については、平成元年度、平成 6 ~ 8 年度に現地調査を行い、平成 9 ~ 10 年度に整理業務および報告書の作成業務を実施した。その体制は以下のとおりである。

### 〔平成元年度〕

主幹兼調査第二課長 山澤義貴

第三係長 浅生悦生(津市教育委員会より派遣)

主 事 増田安生・森川幸雄

主 事 村木一弥(津市教育委員会より派遣)

番号	遺跡名・年次名	調査区分	所 在 地	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査期間	調査担当者	備 考
	藏田遺跡	範囲確認調査	津市納所町字藏田ほか	608m <sup>2</sup>	平成元年 11 月 27 日～ 平成 2 年 2 月 26 日	浅生悦生 竹内英昭	グリッド 35 か所
	藏田遺跡 第 1 次	本調査	津市納所町字藏田ほか	5,600m <sup>2</sup>	平成 6 年 8 月 22 日～ 平成 7 年 1 月 26 日	山本義浩 宮田勝功	
38	藏田遺跡 第 2 次	本調査	津市納所町字藏田ほか	6,810m <sup>2</sup>	平成 7 年 4 月 17 日～ 平成 7 年 12 月 21 日	米山浩之・池端清行 宮田勝功	
	藏田遺跡	範囲確認調査	津市納所町字藏田ほか	748m <sup>2</sup>	平成 7 年 10 月 31 日～ 平成 7 年 11 月 17 日	米山浩之	トレンチ 14 か所
	藏田遺跡 第 3 次	本調査	津市納所町字藏田ほか	3,300m <sup>2</sup>	平成 8 年 5 月 7 日～ 平成 8 年 8 月 2 日	山本義浩 米山浩之	

第 1 表 藏田遺跡調査一覧表



第1図 中勢道路 (8~10工区) 内遺跡位置図 (1 : 50,000)

(国土地理院 1 : 25,000 棚本・白子・津西部・津東部)

工区	遺跡名	調査対象面積 (m <sup>2</sup> )	調査年度											
			範囲確認調査	本調査	昭和63	平成1	2	3	4	5	6	7	8	9
8	18 丸市遺跡	128	—							範				
9	19 山王遺跡	128	—							範				
工区	20 内垣内遺跡	128	—							範				
21 天堤古墳	55	—								範				
22 河崎遺跡	256	—								範				
23 六大A遺跡	448	13,220								範	範8,830	4,130	260	
24 六大B遺跡	456	26,235	範		17,525	3,420	範3,350	1,270	670					
25 橋垣内遺跡	176	12,000	範	7,000	4,925	75								
26 大古曾遺跡	680	12,435	範			範	5,160	範240	7,035					
27 新池2号墳	198	—									範			
9	28 新池1号墳	20	—	範										
29 西岡古墳	70	2,000				範	2,000							
30 西岡2号墳	30	—				範								
工区	31 山籠遺跡	208	1,100	範	1,100									
32 門脇北古墳		1,100		1,100										
33 コウゼンジ遺跡	80	—	範											
34 宮ノ前遺跡	144	2,800	範	2,700				100						
35 森山東遺跡	240	5,230	範4,230	1,000										
36 太田遺跡	469	3,320	範3,320											
37 松ノ木遺跡	144	7,800	範	7,800										
65	長遺跡	0	3,700							3,700				
38	藏田遺跡	1,356 [16,100]		範					5,600	範6,810	3,300		390	
10	39 位田遺跡	416	4,600		範						4,600			
40	替田遺跡	432	[10,060]		範						範6,620	3,140	300	
工区	41 弐ノ坪遺跡	320	5,100		範							5,100		
42	里前遺跡	256	(3,000)		範						範		3,000	
66	栗瀬遺跡	1,152	(3,860)								範	範	3,860	
43	鎌切3号墳	—	—											
	範囲確認調査	7,990		2,249	1,680	300	100	68	1,047	96	748	1,024	678	
	本調査合計		133,660	7,550	20,700	22,450	8,655	5,590	8,405	15,100	14,640	14,780	8,240	7,550

第2表 一般国道23号中勢道路(8~10工区)内遺跡調査経過・予定表

範：範囲確認調査 ( )一部調査済 ( )未調査 本調査面積に下層含まず (1998. 3)

臨時調査員 竹内英昭・油田秀紀

調査協力員 青木哲哉

調査補助員 横谷領子・宮澤織江・新井ゆう子  
陰山誠一・清山 健・河村万里子  
竹島直美・大西貴夫・川辺光則  
森 貴子・谷口裕美・野間達也  
江崎康裕

室内整理員 市川嘉子・畠ひろ子・小坂規美子  
堀さや子・奥山晃子

[平成 6 年度]

主幹兼調査第二課長 伊藤克幸

主査兼第三係長 河北秀実

主 事 本堂弘之・山本義浩・中川 明  
技 師 穂積裕昌  
主 事 宮田勝功・中村光司(津市教育委員会より派遣)

調査補助員 藤田有紀・川崎志乃・杉崎淳子  
田中美穂

室内整理員 市川嘉子・鶴葉輝美・太田浩子  
森川絹代・小坂規美子・鈴木 妙

[平成 7 年度]

主幹兼調査第二課長 伊藤克幸

主査兼第三係長 河北秀実

主 事 宮田勝功・山本義浩  
技 師 穂積裕昌  
主 事 池端清行・米山浩之(津市教育委員会より派遣)  
主 事 筒井昭仁(鈴鹿市教育委員会より派遣)

調査補助員 川崎志乃・杉崎淳子・田中美穂  
中村友子

室内整理員 市川嘉子・鶴葉輝美・黒川敬子  
太田浩子・蒔田やよい・森川絹代  
鈴木 妙

研 修 生 Eric Chen

[平成 8 年度]

主幹兼調査第二課長 山田 猛

主査兼第三係長 本堂弘之

主 事 宮田勝功・山本義浩  
技 師 水橋公恵  
主 事 池端清行・米山浩之(津市教育委員会より派遣)

会より派遣)

主 事 筒井昭仁(鈴鹿市教育委員会より派遣)

調査補助員 井早智代・杉崎淳子・坂下真弓  
田中美穂・池野香代・森崎 豊  
下畑典正

室内整理員 市川嘉子・黒川敬子・太田浩子  
蒔田やよい・森川絹代・鈴木 妙  
新田智子

[平成 9 年度]

主幹兼調査第二課長 山田 猛

主査兼第三係長 本堂弘之

主 事 宮田勝功  
技 師 西村美幸・水橋公恵  
主 事 池端清行・米山浩之(津市教育委員会より派遣)  
主 事 筒井昭仁(鈴鹿市教育委員会より派遣)

調査補助員 田中美穂・池野香代・酒井巳紀子  
坂下真弓・下畑典正

室内整理員 市川嘉子・黒川敬子・太田浩子  
森川絹代・鈴木 妙・蒔田やよい  
新田智子

研 修 生 Neky Cheung

[平成 10 年度]

主幹兼調査第二課長 古木康夫

主査兼第三係長 本堂弘之

主 事 宮田勝功  
技 師 西村美幸  
主 事 村木一弥・山口 格(津市教育委員会より派遣)  
調査補助員 池野香代・酒井巳紀子・西脇智広  
室内整理員 市川嘉子・黒川敬子・太田浩子  
森川絹代・鈴木 妙・蒔田やよい  
新田智子

3 調査の経過

藏田遺跡の発掘調査は、範囲確認調査を平成元年度および平成 7 年度に、また本調査を平成 6 ~ 8 年度の 3 か年にわたって実施した。

平成元年度に行なった範囲確認調査は、遺跡推定範囲に 4 m × 4 m の試掘坑を 20 m ピッチで路線内の

東西幅杭に沿って設定し、合計で35か所の調査を行った。その結果、弥生から古墳時代、中世にわたる遺構・遺物が認められた。またプランツオバール分析を行い、水田遺構の存在の可能性が高い分析結果を得たため、低地部に水田跡が考えられた。調査の結果、本調査面積は約12,800m<sup>2</sup>が必要と判断された。

平成6～8年度に実施した本調査は、各年度の調査区に現行水路や市道が横切るため、便宜的に調査区を北・南の2地区に分けて調査を行ったが、本報告書では、調査区の名称を変更して北から順にA～F地区として報告する。(第2図・第3表)

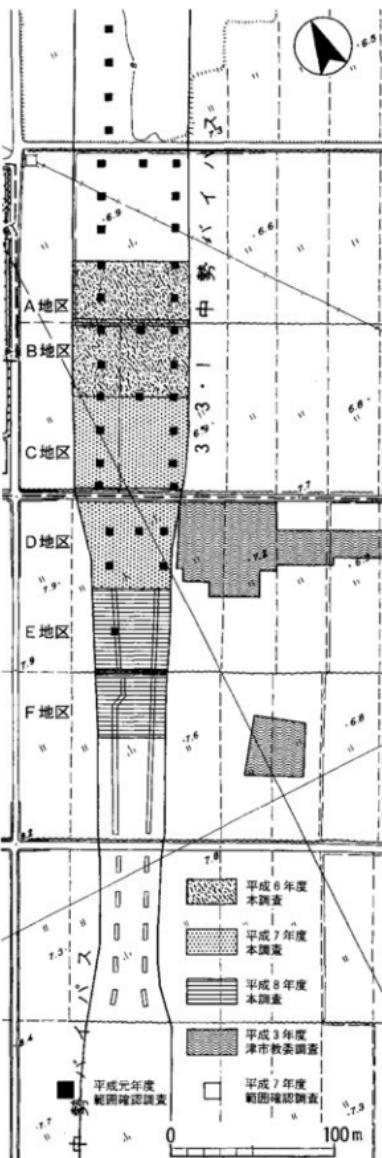
平成6年度のA・B地区は、A地区では水田跡が期待されたが、中世と思われる畦畔の一部にとどまった。しかし、牛の足跡を検出し水田の可能性が残る。B地区では弥生時代の上坑墓や弥生から古墳時代にかけての自然流路や土坑などを検出し、当該時期の土器や石器が出土した。また、下層からは地震の痕跡である噴砂が確認された。

平成7年度のC・D地区は、前年度の南に位置し、市道をはさんで北と南に地区が分かれる。調査は南のD地区から始め、弥生から古墳時代の河道や飛鳥時代の溝などを検出した。市道北のC地区では弥生から鎌倉時代にかけての掘立柱建物、弥生時代の上坑墓、前年度のB地区から続く弥生から古墳時代の自然流路を検出し、土坑からは初期須恵器が出土した。また、C地区で検出した平安から鎌倉時代の掘立柱建物は、条里方向に沿うものであった。

D地区の南側は、範囲確認調査の箇所が少なく、さらに遺構が南に延びると考えられるため幅2mのトレーナによる試掘調査を行った。その結果、ピット・溝等の遺構や土師器・須恵器・陶器碗等の古墳時代から中世の遺物が確認され、D地区の南側について新たに約3,600m<sup>2</sup>の本調査が必要となった。

平成8年度に第3次調査としてD地区の南側をE・F地区として調査した。E地区で飛鳥時代の溝や奈良時代の掘立柱建物・井戸などを検出し、F地区では平安から鎌倉時代の条里方向に沿う掘立柱建物・溝や同時期の井戸を検出した。県下7例目の注口土器が出土して注目された。

平成6年度から3か年に及ぶ調査の結果、最終的な調査面積は約15,710m<sup>2</sup>となった。なお、D・E地



第2図 調査区・試掘坑位置図 (1 : 3,000)

区間の市道部分については、平成11年度以降に本調査の予定である。

#### 4 調査の方法・遺構番号付与方法

調査にあたっては、蔵田遺跡全体で南北200mを越えるため、地区割りは大地区及び小地区を採用した（第3・4図）。方角は座標北を基準とし、大地区は国土座標第VI系に沿って100m方格を区割りし、北から南に向かい2列にアルファベットの大文字でA～H区とした。さらに、小地区（グリッド）は、大地区の1区画を縦横それぞれ25等分し、北から南にアルファベットの大文字A～Yを、西から東にアラビア数字の1～25をあて、その組み合わせで小地区名とした。

調査での遺構名称は略記号と番号を用いた。番号については、河道や自然流路など小地区（グリッド）を越える遺構は、各年度の調査区の中でアラビア数字の通し番号を与え、ピットについては小地区毎に通し番号を付与した。

遺物の取り上げに際しては、ラベルを用いた。ラベルには遺跡名と第何次調査かということを明記し、地区名については、各年度の調査区が北・南地区の2地区に分かれているため、北・南を明記し、大地区名と小地区名を記入した。また遺構欄には、遺構略記号と遺構番号を記入した。

（例：蔵田遺跡 2次 北 F-A 7 SD 40）

調査時		報告
第1次調査	北 地区	A 地区
	南 地区	B 地区
第2次調査	北 地区	C 地区
	南 地区	D 地区
第3次調査	北 地区	E 地区
	南 地区	F 地区

第3表 調査区対照表

表土除去は重機（バックフォー）を用いたが、以後の掘削は全て人力で行った。また、遺跡が冲積地に立地するため、下層遺構の有無を確認するため各調査区で適宜箇所を設定してトレンチ調査を実施した。あわせて青木哲哉氏には、古環境の復元について依頼するとともに、地形及び上層について現地で指導を得た。

#### 5 記録・整理方法

蔵田遺跡の調査記録は、調査区の遺構実測は基本的に航空写真測量によるが、遺構密度の薄いA・B地区については、平板測量（1/100）・通り方測量（1/20）をおこなった。航空写真測量は、平面図・等高線図・遺構図の3種類を成果品とし、各1/100・1/50の縮尺の図面の計6種類を保管している。

各遺構・土層断面・遺物出土状況等の実測は、必要に応じて1/10や1/20等で作成した。

写真撮影は、重要な遺構については4×5判や6×9判のモノクロおよびカラーリバーサルをメインカメラとし、35mmをサブカメラとして同一カットを撮影した。その他は35mm判のモノクロおよびカラーリバーサルを用いた。広報用として重要なものは35mm判のカラーネガを用いた。全ての写真には遺構・撮影方向などを記入した一覧表を作成している。

遺物については、実測した各遺物には「R」を付した整理番号を与えており、実測図1枚日の3番目の遺物の場合、「R 001-03」となる。これらの図面は、ファイルに収納し、報告番号、地区名、出土地区、遺構、層位などを記入したノートを作成している。

#### 6 調査日誌（抄）

第1次調査（1994～1995年）

8/8 表土除去開始。

8/18 地区杭設定。

8/22 現場作業開始。トレンチ掘削。

8/25 B地区で自然流路S R 3を検出。

9/1 B地区南端で溝を検出。

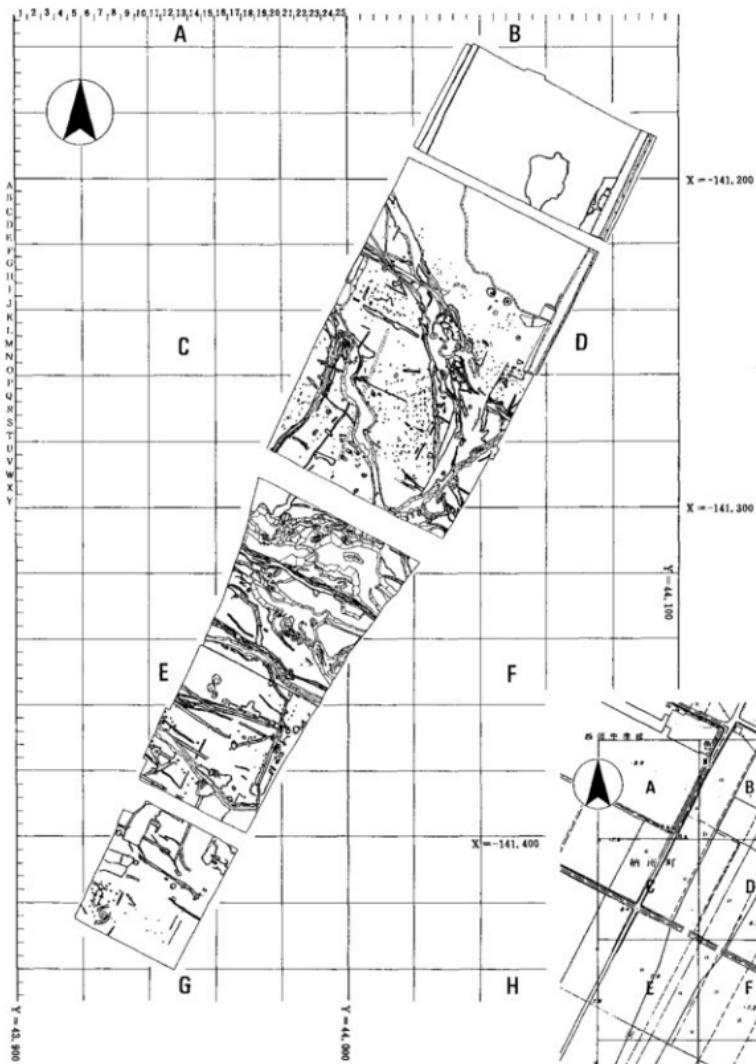
9/10 B地区で円形土坑を検出。S字甕出土。

9/14 A地区で畦畔を検出。

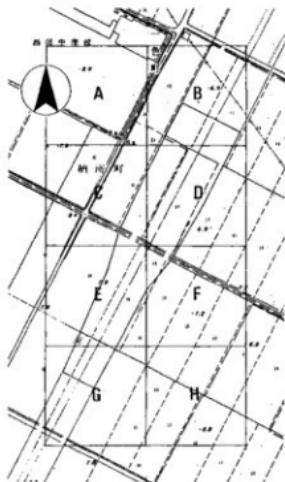
9/19 B地区S R 3より滑石製勾玉出土。

10/4 A地区牛の足跡検出。

10/5 A地区牛の足跡掘削。B地区S K 14より滑



第4図 小地区割図（1:1,500）



第3図 大地区割図（1:1,000）

- 石製勾玉出土。
- 10/13 A地区牛の足跡写真撮影。
- 10/14 B地区S D 14より石鎌出土。
- 10/18 B地区S K 14・15写真撮影。
- 10/19 A地区牛の足跡を石膏型取り。
- 10/20 B地区S K 14・15遺物取り上げ。
- 10/27 調査区写真撮影。
- 10/28 A地区平板測量。A地区トレンチ調査開始。  
B地区遺構写真撮影。
- 10/31 B地区遺構実測のため通り方設定。
- 11/4 B地区実測開始。
- 11/8 B地区遺構実測終了
- 11/9 B地区遺構実測図に標高値書き入れ。
- 11/10 B地区調査区西半を平板測量。
- 11/14 A地区Aトレンチより縄文土器出土。
- 12/14 森勇一氏来所。噴砂と判断。
- 12/21 B地区東西トレンチから縄文時代後期深鉢出土。
- 1995年
- 1/12 B地区噴砂写真撮影。
- 1/23 B地区平板測量。
- 1/26 A・B地区現場調査終了。
- 第2次調査(1995年)
- 4/18 C地区から遺構検出・遺構掘削開始。
- 4/21 D地区的トレンチで河道S R 7を確認。
- 4/24 S D 29から陶器碗出土。
- 5/10 河道S R 8南側に分流。
- 5/17 弥生時代の河道S R 2検出。
- 5/18 古墳時代のS R 8から高杯多数出土。S R 2から建築部材出土。S R 8から高杯・S字壺・二重口縁壺出土。
- 5/19 S R 8・S R 2出土状況写真撮影。
- 5/23 S R 8出土状況図作成。
- 5/25 S D 29平板測量。S R 8からナスピ形農具出土。
- 6/2 S R 7南側掘削開始。
- 6/6 S R 7北側(大溝本流)掘削開始。北端部で弥生時代中期後葉の無頸壺出土。
- 6/7 S R 7北端部流部で護岸施設検出。
- 6/20 S R 7から垂木出土。
- 6/27 S R 7から鍬柄出土。
- 7/10 S R 7より鍬先、曲物底板など出土。
- 8/1 S R 7から木組み遺構検出。
- 8/4 D地区写真撮影。
- 8/8 C地区調査開始。
- 8/9 西端部で根石をもつ掘立柱建物S B 30検出。
- 8/23 井戸S E 2検出、S B 30に伴うものであろう。
- 8/25 D地区、航測図面の現地校正。S E 2出土の曲物取り上げ。
- 9/1 S R 8から鍬先出土。
- 9/4 D地区下層確認トレンチ掘削。
- 9/11 S F 1検出、上器開炉か。
- 9/21 井戸S E 1検出。くり抜き井戸枠完存。掘立柱建物S B 5確認。4×1間に櫛持柱付きか。
- 9/29 3×2間の大型掘立柱建物S B 19・20確認。
- 10/20 S K 15から樽形甕出土。
- 10/31 遺構掘削終了。
- 11/1 範囲確認調査開始。
- 11/9 写真撮影開始。
- 11/10 航空写真撮影。遺構写真撮影。
- 11/17 調査終了。
- 12/2 現地説明会開催。約50名参加。
- 12/18 航測図面現地校正。柱穴断ち割り。下層確認トレンチ掘削。青木哲哉氏調査指導。
- 12/21 上層断面図作成。現地調査終了。
- 第3次調査(1996年)
- 5/7 調査開始。溝多数検出。
- 5/13 S R 11から注口土器出土。
- 5/17 井戸S E 21検出、井戸枠一段完存。
- 5/23 北東部の掘立柱建物S B 15・16は弥生時代か。
- 5/28 西側拡張。掘立柱建物S B 27は3×2間で確定。
- 6/3 F地区遺構検出開始。
- 6/7 西端部で土坑を伴う掘立柱建物S B 32・33検出。
- 6/12 掘立柱建物S B 32・33に伴う井戸と区画溝検出。
- 7/3 全景写真撮影。
- 7/12 航空写真測量実施。プレ現地説明会実施。
- 7/13 現地説明会開催。約140名参加。
- 8/1 図面現地校正。
- 8/2 柱穴掘削・現地調査終了。

## II. 位置と環境

### 〔地理的環境〕

伊勢平野の西に連なる鈴鹿山脈の南部に位置する錫丈ヶ岳付近に源を発する安濃川は、東流して芸濃町忍田付近で平野部に流れ出て扇状地を形成する。方向を南東にかえて一部に河岸段丘を残しながら鮮新世から洪積世に形成された見当山（長岡）丘陵と半田丘陵の間を流れ、下流域に南北幅約3km程の肥沃な沖積平野を形成し、津市島崎町付近で伊勢湾に注ぐ。

支流には、長谷山の北麓を流れる穴倉川や左岸の見当山丘陵の南麓を流れる美濃屋川がある。一方、右岸には半田丘陵の北麓を岩田川が流れる。

集落は両岸の河岸段丘や自然堤防上に連なる。

藏田遺跡（1）は、安濃川によって形成された沖積平野の下流域左岸に位置する。行政上は津市西郊の津市納所町字藏田ほかに所在する。標高は6.9mから7.2m前後で、付近は水田地帯である。

### 〔歴史的環境〕

ここでは安濃川流域を中心として歴史的環境について概説することにしたい。

旧石器時代の遺跡は現在のところ未確認である。遺物としては、見当山丘陵北側に所在する東浦遺跡<sup>①</sup>（2）で木葉形尖頭器が見つかっている。また大古曾遺跡<sup>②</sup>（3）でナイフ形石器や縦長剥片が出土している。津市周辺の旧石器時代は今後に検討される課題である。

縄文時代には、中流域左岸の大石遺跡<sup>③</sup>で中期後半の竪穴住居3棟が確認されている。また、藏田遺跡の北にある松ノ木遺跡<sup>④</sup>（4）で、旧河道と竪穴住居を確認している。ともに晚期後半の五貫森式の深鉢が出土している。さらに納所遺跡<sup>⑤</sup>（5）でも晚期後半の土器が出土している。

弥生時代には、安濃川下流域の沖積地に前期から後期まで存続する拠点的集落である納所遺跡がある。

周辺には右岸の半田丘陵裾部に前期の土器や木製品が出土した上村遺跡<sup>⑥</sup>（6）をはじめ安濃川左岸の見当山丘陵南麓部には辻の内遺跡<sup>⑦</sup>（7）や龜井遺跡<sup>⑧</sup>（8）がある。中期後葉には見当山丘陵に長遺跡<sup>⑨</sup>（9）や山籠遺跡<sup>⑩</sup>（10）が、半田丘陵裾部には後期

の高松C遺跡<sup>⑪</sup>（11）、人ヶ瀬遺跡<sup>⑫</sup>（12）が見られる。また生産遺跡では、前期と後期の水田跡を検出した森山東遺跡<sup>⑬</sup>（13）で、その土壤基盤層から遠賀川系上器が出土している。津市教育委員会によって平成3年から4年にかけて調査された藏田遺跡<sup>⑭</sup>では旧河道に伴う中期の片堀が検出されている。

墓制では、松ノ木遺跡で県下でも古い中期前半の方形周溝墓が見つかっているほか、安濃川左岸の位田遺跡<sup>⑮</sup>（14）でも下層から後期から古墳時代前期の方形周溝墓が検出されている。周辺の丘陵部には中期の倉谷弥生墳墓<sup>⑯</sup>（15）や後期の高松弥生墳墓<sup>⑰</sup>（16）、大ヶ瀬弥生墳墓<sup>⑱</sup>（17）などの方形台状墓が見られる。

古墳時代には、安濃川流域最古の古墳群として、坂本山古墳群<sup>⑲</sup>（18）がある。古式土師器が出土しており4世紀末から5世紀初めの築造とされる。5世紀には、中流域に造り出しをもつ方墳の明合古墳（19）、下流域に前方後円墳の池ノ谷古墳（20）が造られる。両墳は中流と下流の盟主的な古墳と言える。5世紀後半になるとおこし古墳（21）や鎌切1号・3号古墳（22・23）など前方後円墳が安濃川右岸の丘陵に造られる。6世紀以降の後期古墳では、見当山丘陵の東端に造られた鳥居古墳<sup>⑳</sup>（24）で横穴式石室に家形石棺が、君ヶ口古墳<sup>㉑</sup>（25）では横穴式木芯室が見られる。6世紀後半から7世紀になると長谷山東麓には県下有数の規模をもつ長谷山古墳群（26）があり、総数は約500基を数える。その一文群である平田古墳群<sup>㉒</sup>（27）が調査されている。集落では、右岸の丘陵部で中期の竪穴住居を検出した新烟遺跡<sup>㉓</sup>（28）のほか、調査された遺跡数は少なく今後に残された課題である。また生産遺跡では、右岸の半田丘陵には県下でも古い須恵器窯の久居（藤ヶ丘）古窯址群<sup>㉔</sup>（29）や須恵質の埴輪も焼いた併用窯の藤谷埴輪古窯址<sup>㉕</sup>（30）がある。また高茶屋大塙内遺跡<sup>㉖</sup>では竪穴住居や土師器焼成坑が検出されている。

飛鳥時代には、宮ノ前遺跡（31）で竪穴住居と一緒に掘立柱建物が検出されている。安濃川流域ではこの時期の掘立柱建物は初例である。

一方、見当山丘陵を隔てた橋垣内遺跡<sup>㉗</sup>（32）では周囲を区画する溝をもつ地方集落としての性格をもち、



第5図 遺跡位置図 (1 : 50,000)

(国土地理院 1 : 25,000 棚本・白子・津西部・津東部)

飛鳥時代には既に竪穴住居から掘立柱建物へ転換されている。また大古曾遺跡でも、飛鳥時代の掘立柱建物が検出され、また県道津闘線を隔てた北の六大方遺跡（33）からは踏脚硯や土管などが出土しており中央と結びついた豪族の館跡が期待されている。

奈良時代・平安時代には、安濃川中流右岸の段丘低位面の北浦遺跡（34）で掘立柱建物が検出されている。また淨土寺南遺跡（35）では奈良時代の竪穴住居群とともに平安時代の大型掘立柱建物が検出されており、綠釉陶器、陶硯の出土上や井戸枠の形態などから一般集落というより地方官衙的な性格をもつとされる。下流域左岸の見当山丘陵の南麓に位置する宮ノ前遺跡では、平安時代末期から鎌倉時代初頭の区画溝と井戸を伴う掘立柱建物が見つかっている。位田遺跡では区画溝をともなう掘立柱建物が見つかっており、綠釉陶器や墓石の出土から豪族層の建物とされている。また平安時代の道路遺構も検出されている。

見当山丘陵を隔てた毛無川流域の橋垣内遺跡では

奈良時代の掘立柱建物群が、その北に隣接する六大方遺跡（36）では平安時代の大型掘立柱建物を中心にして計画的に配置された建物群が見つかっており、綠釉彩綠陶器をはじめ多くの綠釉陶器が出土している。また平城宮出土の木簡に「伊世国奄伎郡」（表）「久善多里私郡小□□」（裏）があり、このことから地方政府の可能性が推測されている。

平安時代の古道としては、安濃川中流域左岸の松山遺跡<sup>9</sup>で平安京から伊勢神宮への古代の道路遺構と考えられる幅約4mの条里に斜向する計画的な直線道路が検出されている。『延喜式』に記されている五駅のうち鈴鹿駅から市村駅に向かう駅路の可能性もある。市村駅の推定地については諸説があるが、津市殿村付近とする説が有力視されている。

安濃川流域の条里制は、海岸線を基準にして北に対して約30°東に隔たっているとされる<sup>10</sup>。上流域左岸から下流域の沖積地に条里地割の名残りをとどめていたが、近年の土地区画整備により変貌してしまっ



第6図 遺跡周辺地形図（1：10,000）

た。安濃川流域の条里は、四天王寺所蔵の康平五年の「民部田所勸注状<sup>9</sup>」などの古文書をもとに条里が復元され、津市渋見町付近の「一条一塔世里」から安濃川上流の芸濃町忍田付近までの「二三条一忍田里」までの23条にわたり、東から西に条、北から南に向い里が施工され、坪並びは千鳥式とされる。六条・七条に渋見里や九条に四加茂里がみえ、四加茂里は現在の鹿毛にその名が残っている。六条から七条にあたる納所町一帯には、文書から平安時代には四天王寺の寺領が存在したことが伺える。

中世には納所町から北河路町一帯は伊勢神宮の神

#### 〔註〕

- ① 清水正明・小林 秀「東浦遺跡・桜木南遺跡」三重県埋蔵文化財センター 1993
- ② 山口 格「大古曾遺跡」「大古曾遺跡・山難遺跡・宮ノ前遺跡発掘調査報告書」三重県埋蔵文化財センター 1995
- ③ 伊藤優也・森川重雄「三、安芸郡芸濃町桜木 大石遺跡」「平成3年度農業基盤整備事業地城埋蔵文化財発掘調査報告第1分冊」三重県埋蔵文化財センター 1992
- ④ 竹内英昭「松ノ木遺跡」「松ノ木遺跡・森山東遺跡・太田遺跡発掘調査報告書」三重県埋蔵文化財センター 1993
- ⑤ 伊藤久嗣・吉永康大「納所遺跡・通轍・遺物」三重県教育委員会 1980
- ⑥ 吉村利夫「上土遺跡発掘調査報告」津市教育委員会 1972
- ⑦ 伊藤克幸「昭和50年度農業基盤整備事業地城埋蔵文化財発掘調査報告」三重県教育委員会 1976
- ⑧ 谷本毅次「津市河辺町 龜井遺跡」「昭和47年度農業整備事業地城埋蔵文化財発掘調査報告」三重県教育委員会 1973
- ⑨ 中村光司ほか「山難遺跡」前掲載②同書
- ⑩ 谷本毅次「高松弥生墳墓発掘調査報告」津市文化財保護協会 1970
- ⑪ 谷本毅次・伊藤久嗣「松ノ木遺跡・大・木遺跡・平栄遺跡」「近畿自動車道埋蔵文化財調査報告Ⅰ」三重県教育委員会 1973
- ⑫ 倉田直純ほか「森山東遺跡」「松ノ木遺跡・森山東遺跡・太田遺跡発掘調査報告書」三重県埋蔵文化財センター 1993
- ⑬ 米山浩之「蕨田遺跡」「三重産業振興センター埋蔵文化財発掘調査概報」津市教育委員会 1993
- ⑭ 米山浩之「位田遺跡」「一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ」三重県埋蔵文化財センター 1997
- ⑮ 田中秀和・倉谷伸子「現地説明会資料」1995
- 田であり、元徳元年（1329）の「安東郡専当沙汰文<sup>10</sup>」に記されている神田には「烏加部」がみえ、その名は現在の小字、鳥壁にみられる。また「深見」「横井」「松本」があり、納所町に現在の小字名として残っている。また前文書には作人も書かれており納所全次郎など納所の地名を冠するものが多い。「勢陽雜記」によれば、行基の開設と伝える納所町地内にある神宮寺は、中世よりこの寺に属する伊勢神宮の神田は11村におよぶとあり、当時は在郡御倉と呼ばれ、付近の神宮領からの収納所となっていた。

（宮田）

- ⑯ 小玉道明徳「坂本山古墳群・坂本山中世墓群」津市教育委員会 1970
- ⑰ 高橋武機穴式石室で、開口部から投げ入れられたとされる金剛押出仏は今に注目される。
- ⑱ 宮庄康亮「轟ヶ古墳発掘調査報告」津市教育委員会 1974
- ⑲ 伊藤秋男ほか「平田古墳群」安濃町遺跡調査会 1987
- ⑳ 吉村利夫「新畑遺跡発掘調査報告」津市教育委員会 1973
- ㉑ 小玉道明「山沢義貴「久居古窯址群発掘調査報告」三重県教育委員会 1968
- ㉒ 橋本 出「藤谷遺跡—猿輪古窯跡—」『津市民文化』第4号 津市教育委員会 1977
- ㉓ 三重県埋蔵文化財センター「高茶屋大堀内遺跡パンフレット」1998
- ㉔ 伊藤久嗣「安芸郡安濃町 北浦遺跡」「昭和53年度庶長園場整備事業地城埋蔵文化財発掘調査報告」三重県教育委員会 1978
- ㉕ 中村信裕「安芸郡安濃町 幸土寺南遺跡」「昭和55年度庶長園場整備事業地城埋蔵文化財発掘調査報告」三重県教育委員会 1981
- ㉖ 稲垣昌昌ほか「橋田内遺跡」三重県埋蔵文化財センター 1997
- ㉗ 森川重雄・近藤 雅「六大鳥遺跡」「一般国道23号 中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ」三重県埋蔵文化財センター 1991
- ㉘ 久志木統也ほか「昭和63年度三重県埋蔵文化財年報18」三重県教育委員会 1988
- ㉙ 仲見青雄「芸芸・安濃・一志郡の条里」「伊勢海岸地域の古代条里制」東京堂出版 1979
- ㉚ 津市四天王寺文書「平安遺文」第980号
- ㉛ 群書類聚第22巻。

#### 〔参考文献〕

- ・平松今子監修「日本の地名」平凡社 1988
- ・伊藤久嗣編「日本の古代遺跡」保育社 1996

### III. 地形と層序

#### 1 遺跡周辺の微地形

藏田遺跡は、安濃川左岸に広がる沖積地内の微高地に立地する。ここでは遺跡周辺の微地形を第7図から見ていただきたい。

遺跡付近では等高線が舌状に東側に張り出し、微高地であることは明らかであるが、その中央部は深い谷地形（A）となっている。縄文時代後期ないし晩期の時期に南北2つの微高地が沖積作用によって形成され、その両者の間が取り残された状態となり谷地形となったと考えられる。この部分には弥生～古墳時代の河道が検出されている。微高地間の谷地形はさらに西側に延びていくことが確認できるが、微高地本体は周囲の地形に取り込まれ、その境界が判然としない。

また、遺跡の北側（B）では大きく等高線が西側に寄り谷地形であることがわかる。この付近の試掘調査ではシルトあるいは細砂層が厚く堆積し遺構の検出もなく、遺物の出土も見なかったと報告されている。南側（C）でも谷地形が認められ、試掘調査

でも厚い粘質土の堆積を確認した。この付近は安濃川左岸の後背湿地と考えられる。

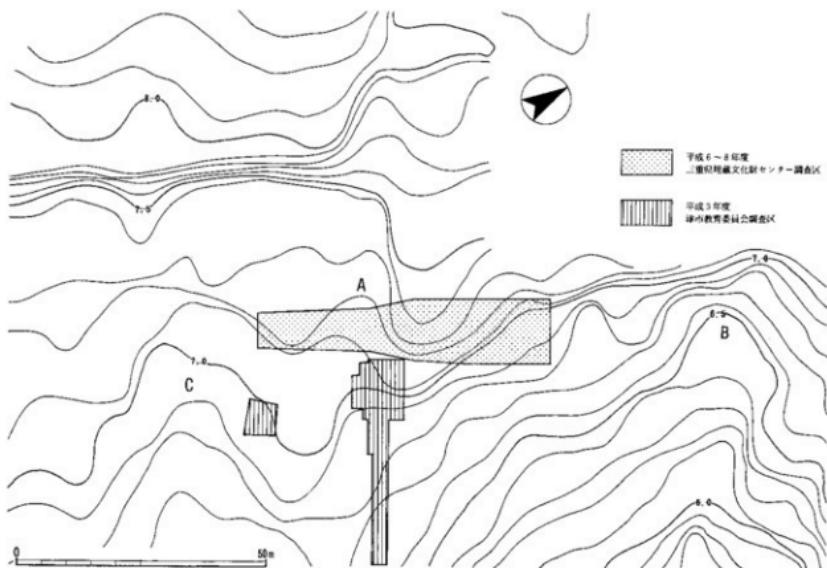
#### 2 基本的層序

藏田遺跡の層序は地区毎に異なるが、基本的には、I層耕作土・旧耕作土、II層褐色粘質土、III層灰色シルト・灰褐色粗砂層である。

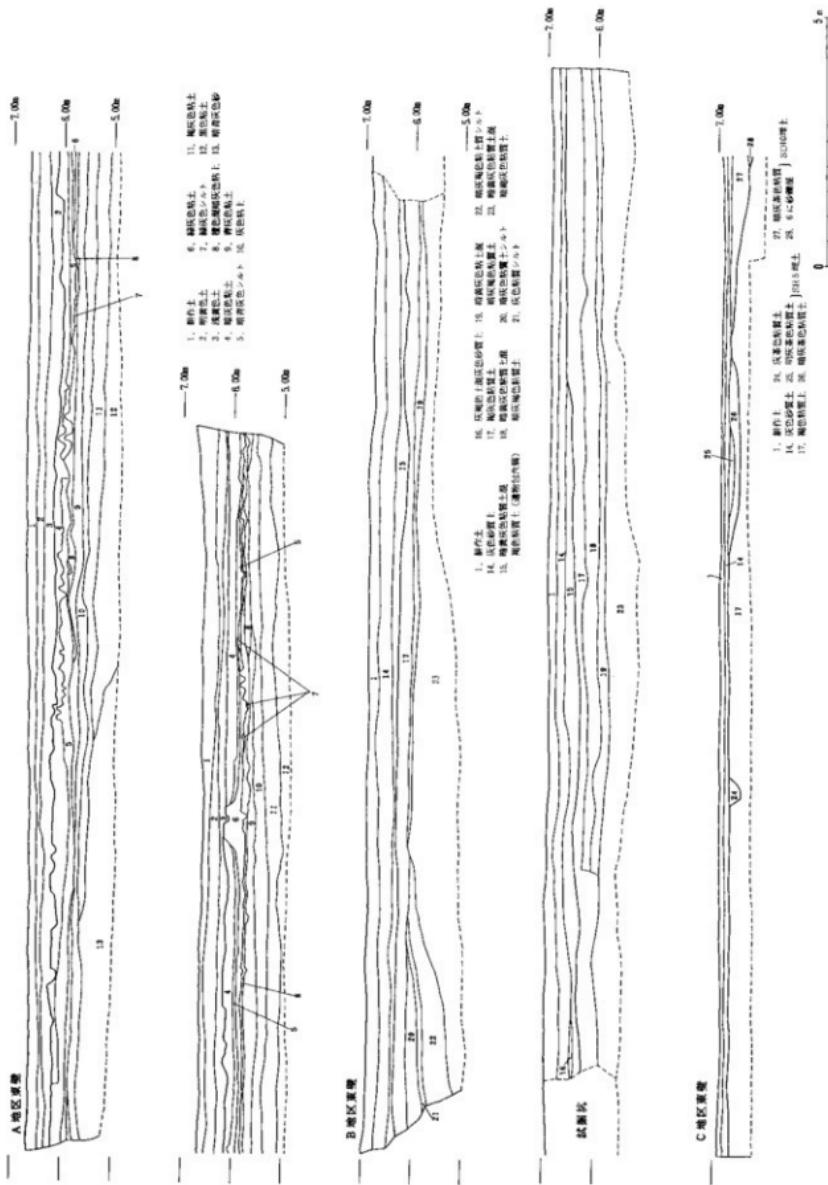
藏田遺跡は微高地に立地するため後世の削平が著しく、弥生時代以降の遺構が検出されたB～F地区ではほとんどがI層の耕作土あるいは旧耕作土直下が遺構検出面である。II層の遺物包含層は、微高地斜面と考えられるA～B地区北東部以外では遺構検出面直上に部分的に残存するに過ぎない。また、C地区の南西部はわずかな窪地となっていて、弥生時代の遺物のみを含む包含層が存在し、その上面では平安時代末期の掘立柱建物が検出された。

III層は、沖積土と思われる灰色シルト層と洪水層と考えられる灰褐色粗砂層で、縄文時代後期から晩期の遺物を含んでいる。

（米山）



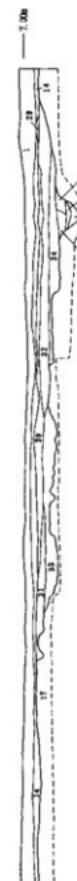
第7図 遺跡周辺微地形図 (1:10,000 県営圃場整備現況計画図より作図)



第8図 土層断面図(1) (1 : 100)

第9図 土層断面図(2) (1 : 100)

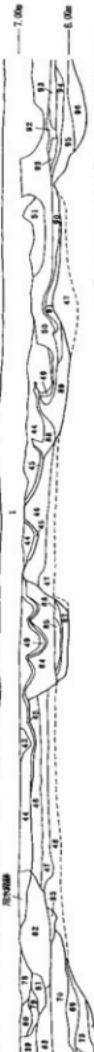
——— 7.0m



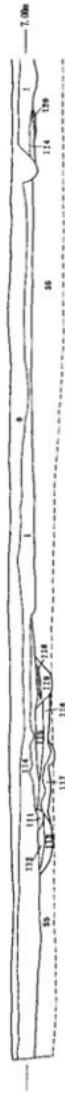
D 断面位置



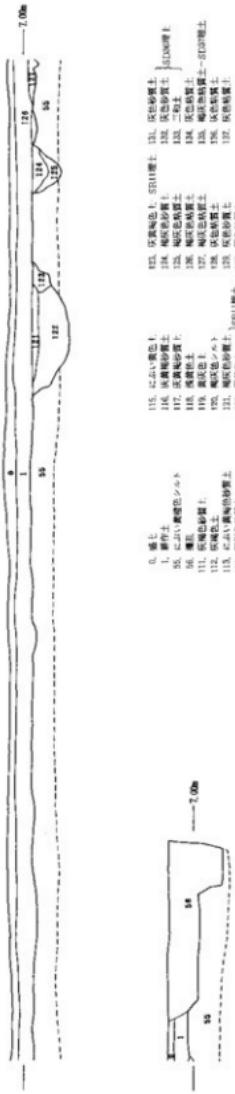
1. 成土・耕土土 4. 岩灰岩質粘土 5. 乾燥褐色シルト・サンドガルト  
2. 灰色褐色土 3. 灰色褐色土 6. 鹿の子田上土  
7. 黄褐色土 8. 黄褐色土 9. 黄褐色土 10. 黄褐色土  
11. 灰色褐色土・褐色土 12. 灰色褐色土 13. 黄褐色土  
14. 褐色褐色土・褐色土 15. 黄褐色土 16. 黄褐色土  
17. 黄褐色土 18. 黄褐色土 19. 黄褐色土  
20. 黄褐色土 21. 黄褐色土 22. 黄褐色土  
23. 黄褐色土 24. 黄褐色土  
25. 黄褐色土 26. 黄褐色土 27. 黄褐色土  
28. 黄褐色土 29. 黄褐色土 30. 黄褐色土  
31. 黄褐色土 32. 黄褐色土  
33. 黄褐色土 34. 黄褐色土  
35. 黄褐色土 36. 黄褐色土  
37. 黄褐色土 38. 黄褐色土  
39. 黄褐色土 40. 黄褐色土  
41. 黄褐色土 42. 黄褐色土  
43. 黄褐色土 44. 黄褐色土  
45. 黄褐色土 46. 黄褐色土  
47. 黄褐色土 48. 黄褐色土  
49. 黄褐色土 50. 黄褐色土  
51. 黄褐色土 52. 黄褐色土  
53. 黄褐色土 54. 黄褐色土  
55. 黄褐色土 56. 黄褐色土  
57. 黄褐色土 58. 黄褐色土  
59. 黄褐色土 60. 黄褐色土  
61. 黄褐色土 62. 黄褐色土  
63. 黄褐色土 64. 黄褐色土  
65. 黄褐色土 66. 黄褐色土  
67. 黄褐色土 68. 黄褐色土  
69. 黄褐色土 70. 黄褐色土



E断面図

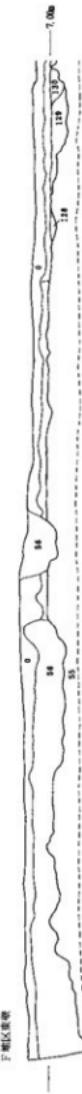


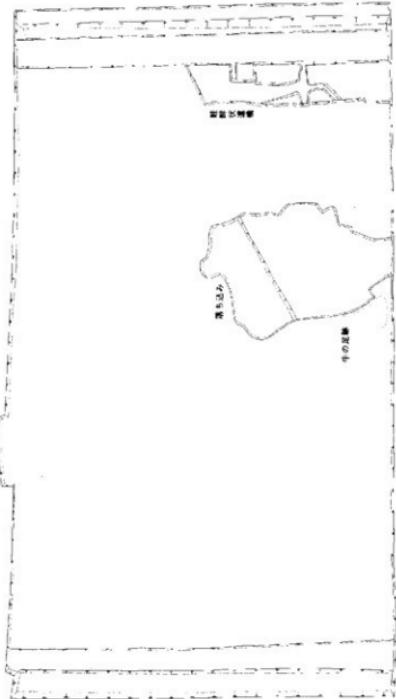
第10図 土層断面図(3)(1:100)



- |            |            |
|------------|------------|
| 0. 透じ      | 115. こぶし色土 |
| 1. 施作土     | 116. 保水砂質土 |
| 2. 保水砂質土   | 117. 保水砂質土 |
| 3. こぶし色砂質土 | 118. 保水砂質土 |
| 4. 保水砂質土   | 119. 保水砂質土 |
| 5. 保水砂質土   | 120. 保水砂質土 |
| 6. 保水砂質土   | 121. 保水砂質土 |
| 7. 保水砂質土   | 122. 保水砂質土 |
| 8. 保水砂質土   | 123. 保水砂質土 |
| 9. 保水砂質土   | 124. 保水砂質土 |
| 10. 保水砂質土  | 125. 保水砂質土 |
| 11. 保水砂質土  | 126. 保水砂質土 |
| 12. 保水砂質土  | 127. 保水砂質土 |
| 13. 保水砂質土  | 128. 保水砂質土 |
| 14. 保水砂質土  | 129. 保水砂質土 |
| 15. 保水砂質土  | 130. 保水砂質土 |
| 16. 保水砂質土  | 131. 保水砂質土 |
| 17. 保水砂質土  | 132. 保水砂質土 |
| 18. 保水砂質土  | 133. 保水砂質土 |
| 19. 保水砂質土  | 134. 保水砂質土 |
| 20. 保水砂質土  | 135. 保水砂質土 |
| 21. 保水砂質土  | 136. 保水砂質土 |
| 22. 保水砂質土  | 137. 保水砂質土 |
| 23. 保水砂質土  | 138. 保水砂質土 |

F断面図



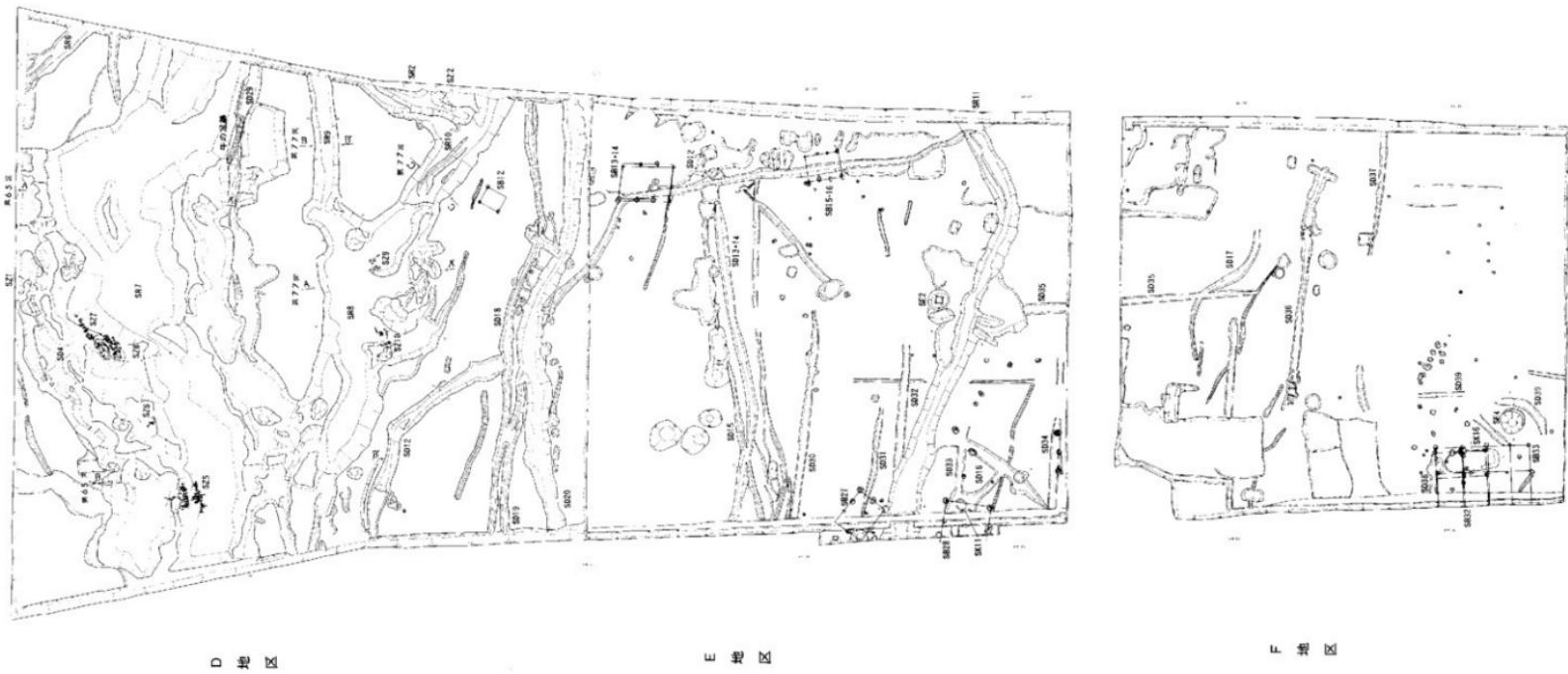


A 型図



B 型図

C 型図



第12図 蔵田遺跡遺構図(2)(1:400)

## IV. 繩文時代

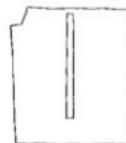
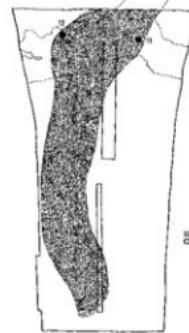
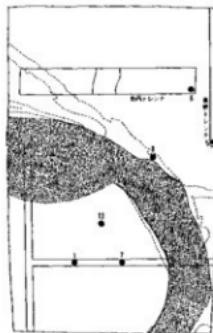
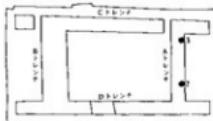
この時代の遺構は検出されていない。遺物はA～D・E地区の自然流路や河道の遺構や包含層および下層確認トレンチから出土した。時期は縄文時代中期から晩期である。

1～7は縄文時代中期から後期の七器である。1は沈線がみられ、中期前半にあたる。2は口縁部片で、中期末から後期初頭に相当しよう。3は口縁部から体部片で、外面には条痕調整がみられ後期の粗製土器であろう。4は深鉢の口縁部片で、外面に巻貝による条痕調整が見られる。後期に属そう。5は口縁部片で、頸部に段をもち外済する口縁部には巻貝による4本の凹線を施す。6はB地区の下層調査のための東西トレンチから出土したもので、口縁部の一端を欠くがほぼ完形の深鉢である。口縁部には巻貝による4本の凹線を施した後に粘土塊の貼付けによる巻貝の局状圧痕が2個みられる。5・6は後期末の宮壇式に属そう。7は小型壺で、底部には木葉痕がみられる。

8～13は晩期の上器である。8は口縁部片で、口縁部下の突帯にはヘラ状工具によるD字形の押圧がめぐり、突帯以下は二枚貝の条痕がみられる。晩期後半の滋賀里IV式併行ないし西之山式に属しよう。9は口縁部片で、口縁端部に刻み目、口縁部の下の突帯にはD字形の押圧がみられる。10は、9と同じく突帯にはD字形の押圧がみられる。9・10は五貫森式に属そう。11は外面をケズリで調整する浅鉢である。12は外面を条痕調整した後に口縁部の下に突帯を施し櫛状具により3条の沈線を施す。11・12は晩期末の馬見塚式に属そう。13は体部にヘラミガキがのこる。

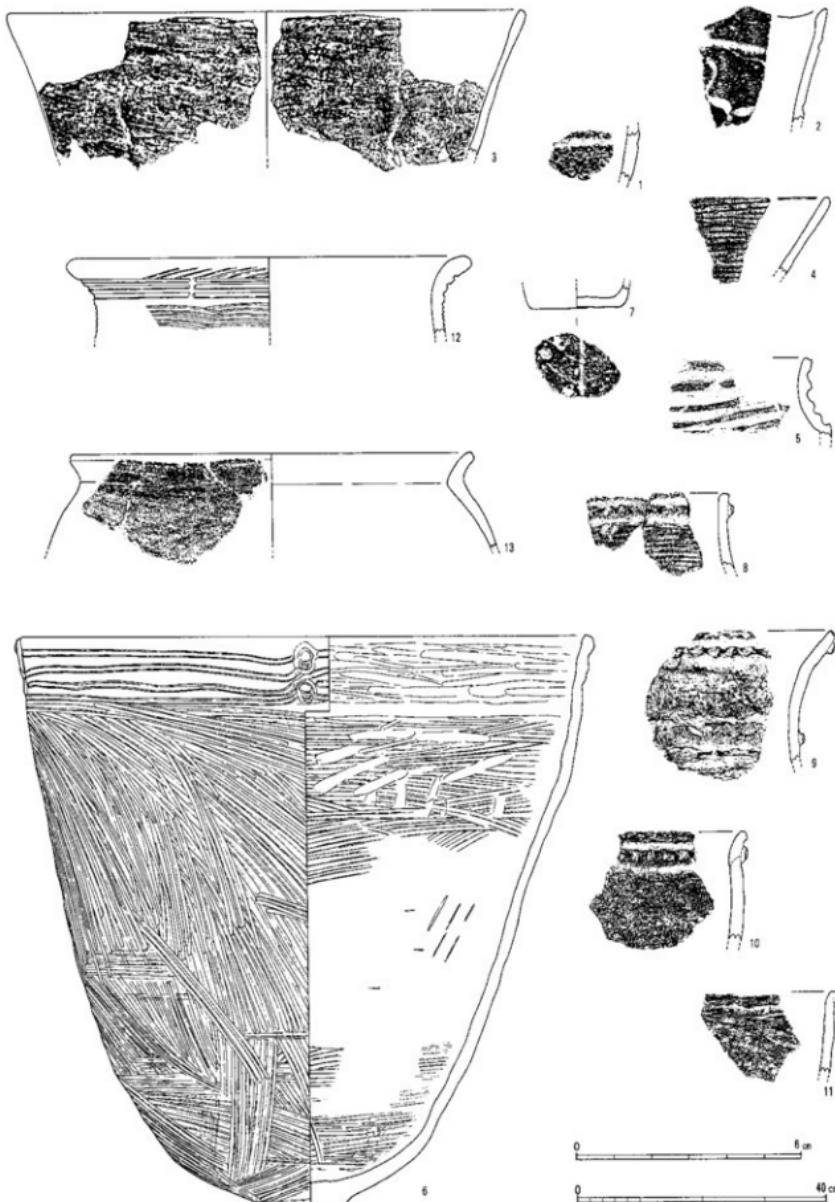
縄文時代中期から後期の土器は、包含層出土の土器もあるが、概ねA～C地区の下層確認トレンチから出土したものである。また晩期の土器は、B・C地区のSR3やD地区のSR7およびSD4の遺構、C地区の遺構基盤層や包含層から出土したものである。遺構から出土のものは磨滅が著しく混入と考えられる。B地区の南西から南に広がる灰褐色粗砂層は、このような上器の出土状況や層位から縄文時代晩期頃に形成されたものと考える。

(宮田)



- 下層確認トレンチ  
遺構・基盤層出土
- 基盤層出土
- 灰褐色  
粗砂層
- 下層確認  
トレンチ

第13図 縄文土器出土位置図 (1:1,500)



第14図 縄文土器拓影図・実測図 (1 : 3、6は1 : 4)

## V. 弥生時代

この時代の遺構には掘立柱建物 19 棟、柱列 3 条、方形周溝墓 1 基、土坑 10 基、溝 5 条などがある。

北畿高地では中期前葉の集落・墓域と後期初頭の集落が、南畿高地でも弥生時代と推定される集落が確認された。両畿高地間では、集落と同時期の河道やそれに伴う杭列がみられ、以前の調査ではその下流に井堰が検出されている。

### 1 掘立柱建物

藏田遺跡では、33 棟の掘立柱建物が検出されているが、当然柱穴出土遺物は少なく、中には全くないものもあり、明確に時期決定できるものは少ない。その中で今回、弥生時代の掘立柱建物と考えたのは以下の理由による。

1 B・C 地区の場合、古墳時代・平安時代の掘立柱建物は方位にまとまりがみられ、これら以外は方位が N 10° ~ 40° W・N 10° E 前後でまとまる。

2 形態的にも SB 5 のように弥生時代のものと考えられるものがある。

3 周囲の遺構には弥生時代のものが多くあり、古墳・平安時代以外のものは皆無である。

4 柱穴に遺物を含まないということは、逆に掘立柱建物構築当時、柱掘形に紛れ込むほど遺物包含層の形成が進んでいなかったということを示しており、その建物がその場所で最も最初に建てられた建物であると考えることも可能である。

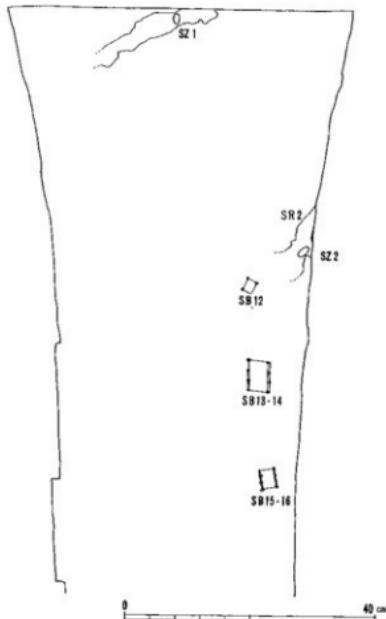
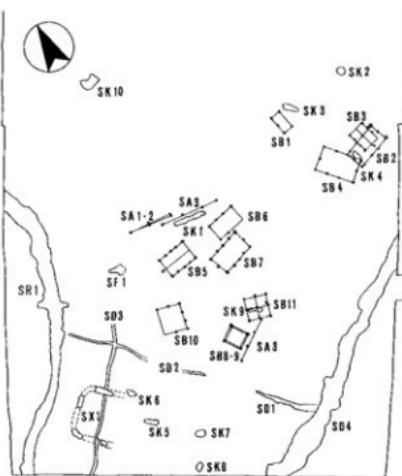
### SB 1 (第 16 図)

B・C 地区にまたがって検出された桁行 2 間、梁行 1 間の南北棟 (N 15° W) の側柱建物で、桁行東側の中央柱穴を欠く。桁行は 3.2 m で柱間 1.6 m の等間、梁行は 1.7 m である。柱掘形は 20 ~ 40 cm、深さ 7 ~ 30 cm で径 10 cm の柱痕跡を一部で確認した。

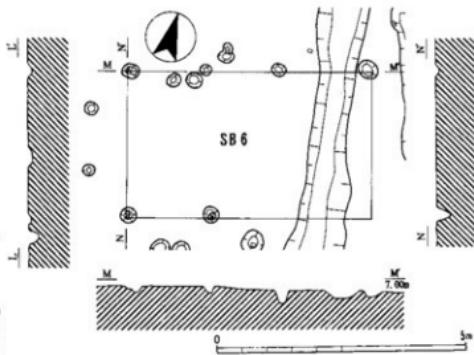
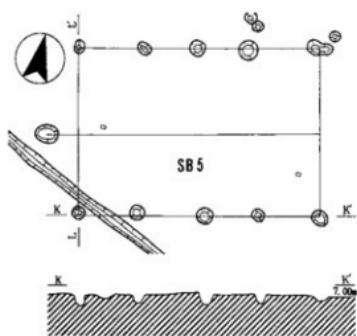
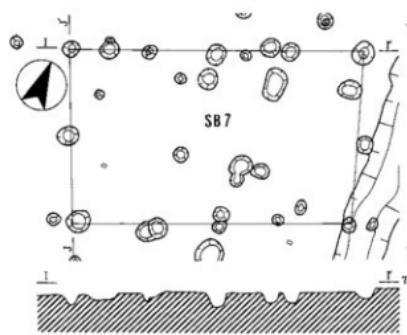
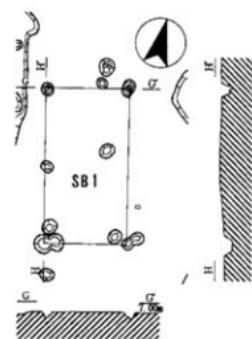
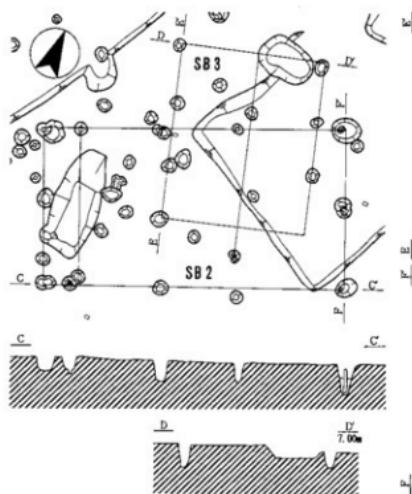
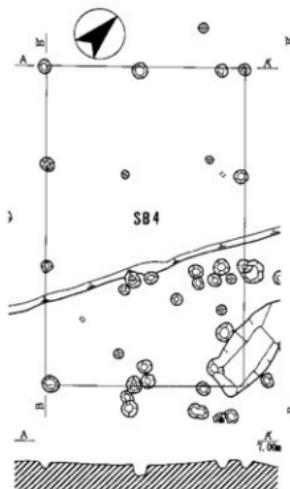
出土遺物はないが、棟方向からこの時期と考えた。

### SB 2 (第 16・17 図・PL-9・53)

C 地区北東部で検出された。桁行 3 間、梁行 2 間の身舎に西面廂の付く東西棟 (E 25° N) の建物と考えた。身舎桁行は 5.3 m で柱間が西から 1.6 + 1.6 + 2.1 m である。梁間は 3.2 m で柱間 1.6 m の等間である。廂の柱間は 0.6 m である。柱掘形は径 30 ~ 60 cm、深さ 15 ~ 60 cm と比較的大きい。東側柱の 2



第 15 図 弥生時代遺構略図 (1 : 800)



第16図 SB 1～7実測図 (1 : 100)

柱穴には、径12cmほどの柱根(14・15)が遺存していた。

柱穴出土遺物は細片で時期は不明であるが、棟方向からこの時期と考えた。SK4との前後関係は不明である。

#### SB3 (第16図・PL-9)

SB2と重複して検出された。南東隅柱穴を検出できなかったが、桁行3間、梁行1間の南北棟(N19°W)の側柱建物と考えられ、南側に独立棟持柱が伴う。桁行は3.6mで1.2mの等間、梁行は2.9mである。棟持柱は妻側から0.5m離れている。柱掘形は径20~30cm、深さは40cm前後と比較的深いものが多いが、棟持柱は20cmと浅い。

柱穴出土遺物は細片で時期決定根拠を欠くが、柱掘形の形態と棟方向からこの時期と考えた。

#### SB4 (第16図)

SB2の西側で検出された桁行3間、梁行2間の南北棟(N42°W)の側柱建物である。桁行は6.3mで2.1mの等間、梁行は3.9mで1.95mの等間である。柱掘形は径20~30cm、深さは削平されている部分が多いが20cm前後で、柱痕跡は確認できなかった。

柱穴出土遺物はなく、棟方向からこの時期と考えた。切り合い関係からはSB2より新しいが、SK

4との前後関係は不明である。

#### SB5 (第16図・PL-8)

C地区中央部で検出された桁行4間、梁行1間の東西棟(E12°N)の側柱建物である。西側に独立棟持柱が伴う。桁行4.8mで、柱間は1.2mの等間、梁行は3.3mである。棟持柱は妻側から0.6m離れている。柱掘形は径20~40cm、深さ6~20cmで、柱痕跡は確認できなかった。

柱穴から遺物は出土していないが、形態から弥生時代の建物と考えられ、狭い柱間から倉庫の可能性が高い。

#### SB6 (第16図)

C地区中央部で検出された桁行3間、梁行1間の東西棟(E16°N)の側柱建物であるが、南東側2柱穴を欠く。桁行は4.8m。柱間は不等間で西から1.5+1.5+1.8mである。梁行は2.8mである。西妻部の0.8m西側にある2小穴も梁方向に平行し、建物に伴う施設の可能性がある。柱掘形は径20~40cm、深さ7~24cmで、径10~15cmの柱痕跡が確認されたものもある。

柱穴出土遺物は細片で時期は不明であるが、棟方向がSB5と近くこの時期と考えた。

#### SB7 (第16図・PL-10)

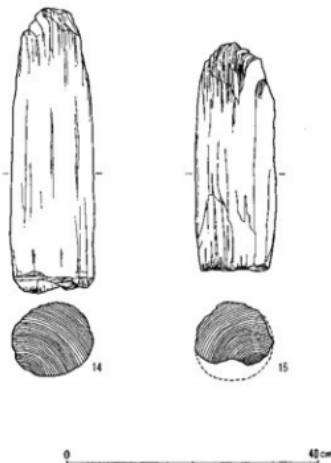
SB6の南側で検出された。桁行4間、梁行1間の東西棟(E22°N)の建物で、東西に近接棟持柱を伴う。桁行は5.6mで柱間は1.4mの等間である。梁行は3.6mである。柱掘形は径20~50cm、深さ6~45cmで、径10cmほどの柱痕跡が確認されたものもある。

柱穴出土遺物はないが棟方向・形態からこの時期と考えた。

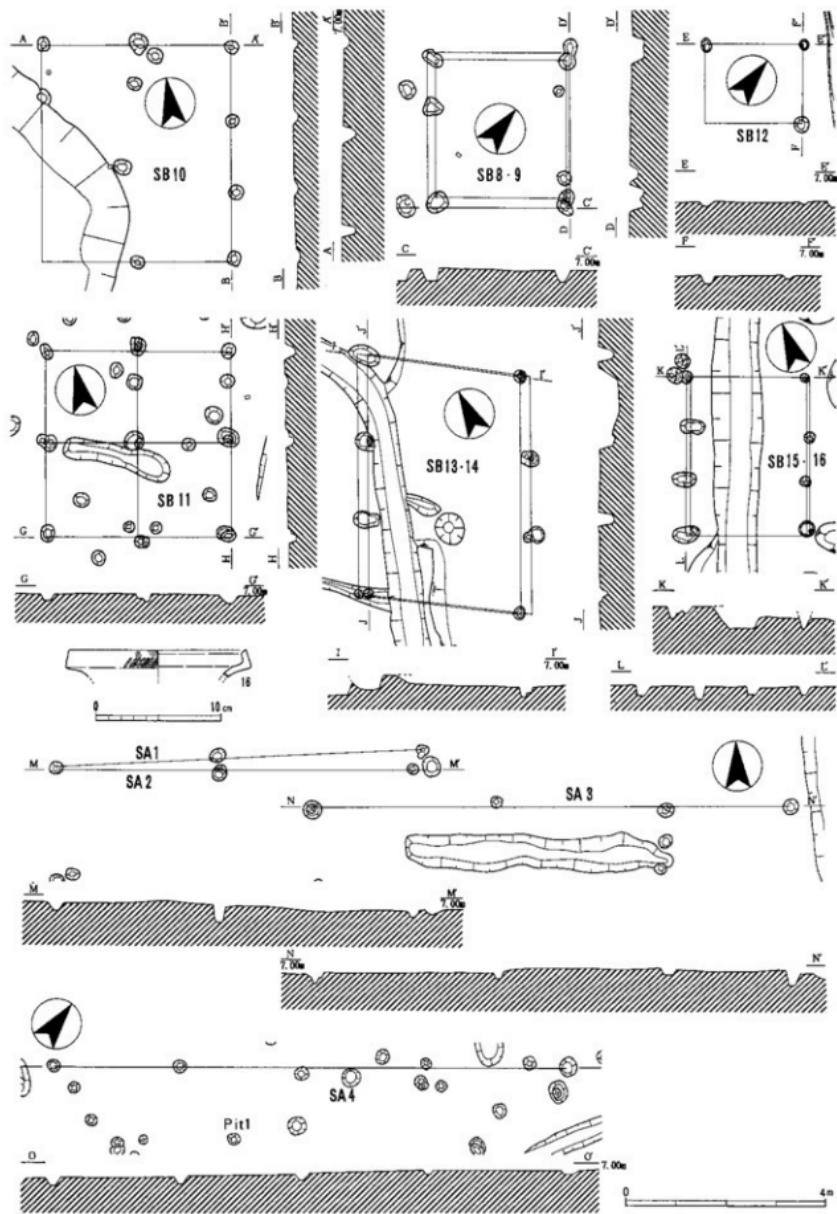
#### SB8・9 (第18図・PL-11)

いずれもC地区南部で検出された1×1間、南北棟(N37°W)の建物で、ほぼ同一地点・同一規模で建替えられている。堅穴住居の主柱穴の可能性もあるが、周溝などが全く検出されなかったため、他の建物と同様に掘立柱建物と考えた。規模は、桁行2.7m、梁行2.6mから桁行3.1m、梁行2.7mのものに拡張されている。柱掘形は径30cm、深さ23~28cmで柱痕跡の確認されたものはない。

柱穴出土遺物はないが、棟方向からこの時期と考



第17図 SB2出土柱根実測図(1:8)



第18図 SB8~16・SA1~4実測図 (1 : 100)

えた。

#### S B 10 (第18図・P L-10)

C地区の中央部で検出された。南西部の柱穴はS R 4によって消失しているが、桁行3間、梁行2間の南北棟( $N 9^{\circ} E$ )の側柱建物と考えられる。桁行は4.2mで柱間1.4mの等間、梁行は3.8mで柱間1.9mの等間である。柱掘形は径20~30cm、深さ7~26cmで柱痕跡は確認されていない。

柱穴出土遺物は細片のみで時期は不明であるが、S B 11と棟方向が近く同時期の建物と考えられる。

#### S B 11 (第18図・P L-11)

S B 10の東側で検出された桁行2間、梁行2間の総柱建物である。その形態から倉庫と考えられる。棟方向は南北辺で表せば $N 13^{\circ} E$ である。桁行・梁行とも3.6mで柱間1.8m等間である。柱掘形は径30~40cm、深さ6~25cmで径20cmほどの柱痕跡が確認されたものもある。

**出土遺物** 16は受口状口縁の甕で、端部外間にハケ原体による刺突文が施されている。中期後葉ないし後期初頭のものと考えられ、建物もこの時期と考えられる。

#### S B 12 (第18図・P L-11)

D地区南東部で検出された。南東隅柱穴を欠くが、1×1間・東西棟( $E 36^{\circ} N$ )の建物と考えられる。建物北東の溝は古墳時代の河道の末端であり、S B 12とは無関係である。堅穴住居の可能性もあるが、S B 8・9と同様の理由で掘立柱建物と考えた。桁行2.0m、梁行1.6mである。柱掘形は径20~30cm、深さ2~18cmで柱痕跡は確認されていない。

柱穴出土遺物はないが、南側にあるS B 13~16との関連からこの時期と考えた。

#### S B 13・14 (第18図・P L-12)

S B 12の南側で検出された。東半は擾乱により削平されていて、柱穴の確認できない部分もあるが、ほぼ同一地点・同一規模での建替えと考えられる。いずれも桁行3間、梁行1間の南北棟( $N 29^{\circ} E$ )の建物であり、平面形はいずれも平行四辺形状にやや歪む。桁行は6.0mで柱間は2.0m等間、梁行は3.2mである。柱掘形は径30cm前後、深さ22~29cmで径10~20cmほどの柱痕跡が確認されたものもある。

柱穴から出土遺物はなく時期は不明であるが、形

態から弥生時代のものと考えられる。

#### S B 15・16 (第18図・P L-12)

S B 13・14の南側で検出された。東半部は擾乱により削平され、柱穴の確認できない部分もあるが、同一地点・同一規模で建替えと考えられる。いずれも桁行3間、梁行1間の南北棟( $N 18^{\circ} E$ )の側柱建物である。桁行は3.0mで柱間1.0m等間、梁行は2.3mである。柱掘形は径30cm前後、深さ13~18cmで柱痕跡は確認されていない。

柱穴出土遺物はなく、時期は不明であるが、形態から弥生時代のものと考えられる。

## 2 柱列

#### S A 1・2 (第18図)

いずれもC地区の北部で検出された東西方向に2間分の柱列である。全長7.3mで、柱間は4.0+3.3mと不等間である。柱穴は径20~30cm、深さ18~34cmで、柱痕跡は確認されなかった。これらは建替えと考えられるが、前後関係は不明である。方向はS A 1がほぼ真東西、S A 2が $E 3^{\circ} S$ である。

いずれも柱穴から遺物は出土していないが、S K 1の方向に近いことからこの時期と考えた。

#### S A 3 (第18図)

S A 1・2の東で、東西方向( $E 2^{\circ} S$ )に3間分検出された。全長9.4mで柱間は西から3.6+3.4+2.4mと不等間である。柱穴は径20~40cm、深さ15~29cmで、一部で径10~15cmの柱痕跡を確認した。

柱穴からは遺物は出土していないが、S A 1・2と同様の理由からこの時期と考えた。

#### S A 4 (第18図・P L-11)

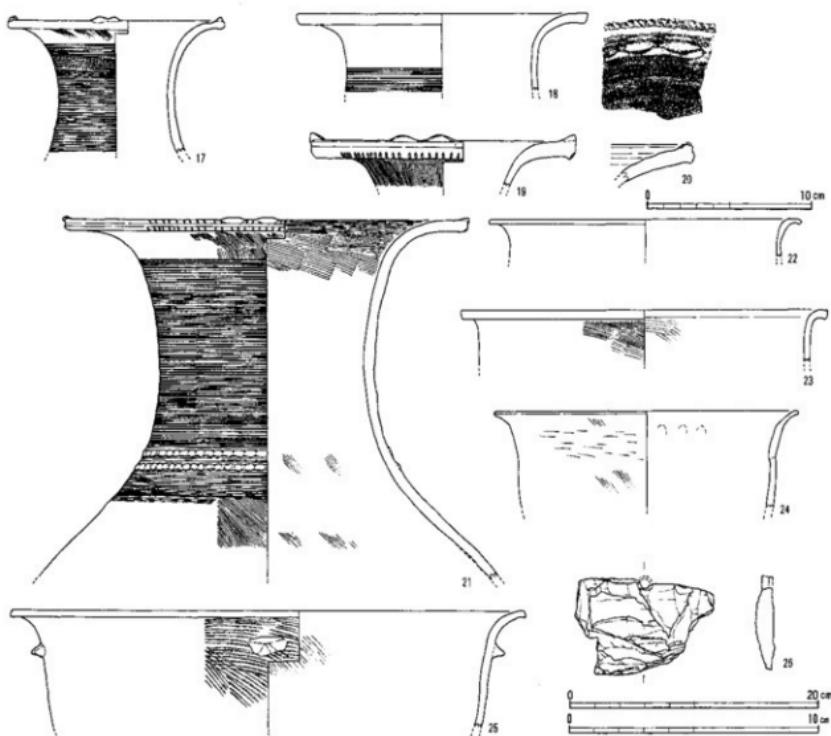
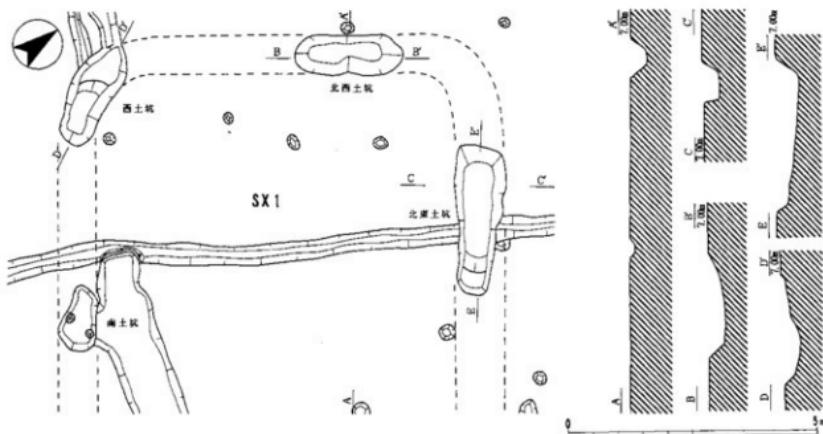
C地区の中央部、S B 8・9の東側で東西方向( $E 41^{\circ} N$ )に4間分検出された。全長10.3mで、柱間は東側1間分が2.8mとなる以外は2.5mの等間である。柱穴は径20~30cm、深さ4~21cmで、柱痕跡は確認されていない。

柱穴からは遺物は出土していないが、S B 8・9の方向に近く、この時期と考えた。

## 3 方形周溝墓

#### S X 1 (第19図・P L-13・37)

C地区の南東部で検出された。大小4基の土坑が断続的ながらコの字状になること、西土坑と北西土坑の出土遺物(21)が接合したことから、4基の土



第19図 SX 1実測図(1:100)・遺物実測図(1:4、20は1:3、26は1:2)

坑は1基の方方形周溝墓の周溝内の落ち込みが削平されずに残ったものと考えられる。平面形態は明らかでないが、西隅は周溝が繋がる可能性が高く、少なくとも4隅の切れるタイプではないであろう。

東西長は不明であるが、南北長7.5m（溝内側面で計測）、周溝最大幅1.0m、深さ0.15~0.45mである。方位は北東辺でおよそN 46° Wで、北側の区画溝SD 2とはほぼ揃う。周溝埋土は上層が灰褐色粘質土、下層が黒褐色粘質土で炭化物が混じる。遺物の多くは下層から出土した。なお、埋葬主体は全く遺存していない。

方形周溝墓・土坑から出土した中期前葉の壺・甕に関しては、以下の分類基準によって記述する。なお、鉢は量的に少なく敢えて分類は行わず、高杯・盞は出土が確認されていない。

壺A類 口縁部が大きく開き、端部が無文または、波状文などを施すもの。

B類 器壁が厚く、口縁の外反が弱いもの。

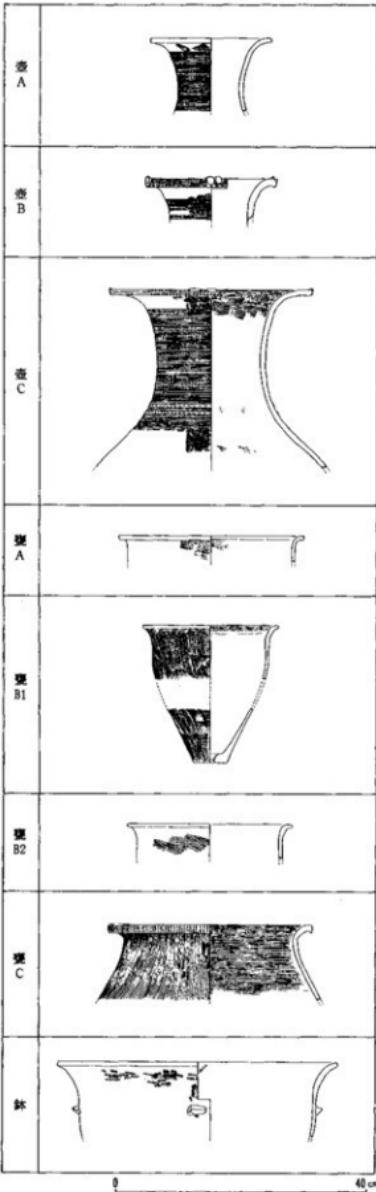
C類 口縁が大きく開き、端面下端に刻目または押圧を施すもの。大小2種に細分できる。

壺A類 口縁部が強く屈曲するもの

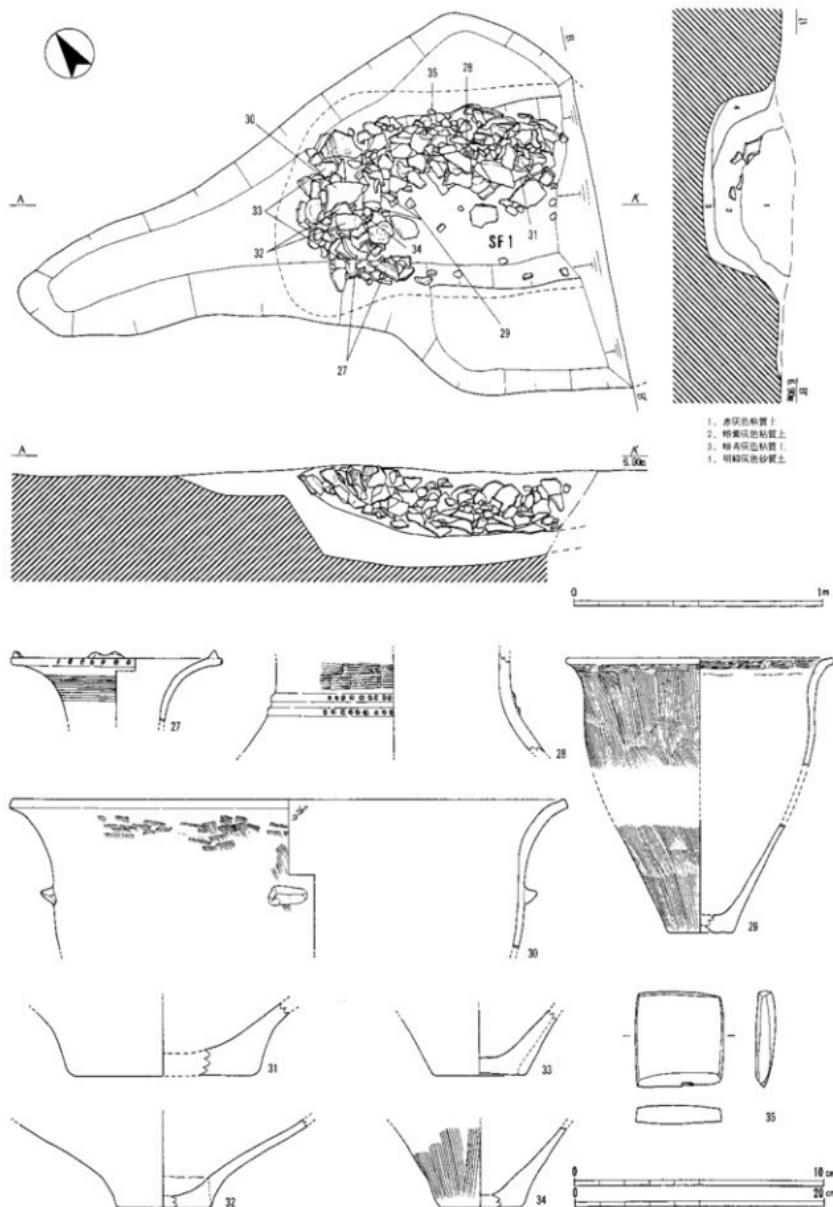
B類 口縁部が緩やかに外反するもの

C類 口縁部が強く屈曲し体部が大きく張るものさらに体部外面の調整技法から1類（ハケ調整）、2類（条痕調整）とした。

**出土遺物** 17・18は、いずれも壺A類である。17は口唇部は無文で、口縁端部内面に2個一対の瘤状突起を4方向に貼り付いている。頸部はタテハケ調整の後、二枚貝腹縁による直線文を施す。18は瘤状突起の有無は小片のため不明である。頸部は直立気味で、原体は不明だが直線文がみられる。壺C類の19は、口縁端面の下端と口縁端部内面に刻目列があり、内面には2個一対の瘤状突起が4方向に貼り付けられている。20は口縁部内面に指頭による凹線が見られる。21は同一個体と思われる破片を図上復元したものである。口縁端面には沈線と上下端に刻目列があり、内面には2個一対の低い瘤状突起が4方向に貼り付けられている。頸部はタテハケ調整の後、二枚貝腹縁による直線文がある。頸部下位



第20図 弥生時代中期前葉土器分類図（1：8）



第21図 SF 1実測図(1:20)・出土遺物実測図(1:4、35は1:2)

には貼り付け突帯が2条あり、押圧されている。体部以下と口縁部内面はハケ調整である。

甕にはA類(23)、B類(22・24)がある。24の頸部には擦痕が残る。

鉢(25)は口縁部が緩やかに外反し、体部上位に把手が付く。外面は条痕調整である。

26は石包丁の破片で、表面は全て剥落しているが、穿孔が1ヵ所確認できる。

#### 4 焼土坑

##### S K 1 (第21図・PL-13・37)

C地区の中央部で検出された焼土坑である。東側が搅乱で不明であるが、東西2.3m以上、南北1.5mの不整二等辺三角形状の落ち込みがあり、その東側寄りの床面を更に約20cm掘り込み、暗灰色系土の上に土器片利用した壁体を構成している。壁体の土器は2次焼成を受け脆くなっている。壁体は内法で東西1.1m以上、南北0.6m、深さ0.25mで、断面逆台形状である。壁体は北から西側の残りは良いが、南側は悪い。底部にはほとんど土器片はなく、本来存在しなかったのか否かは不明である。

**出土遺物** 27は壺A類である。口脣部には刺突文が、内面には2個一対の瘤状突起が4方向にある。頸部には二枚貝腹縁による直線文を施す。28は壺C類の頸部から体部である。頸部下位には2条の貼付け突帯があり、刺突文を施す。突帯より上位を二枚貝腹縁による断続的な直線文を施す。31・32はいずれも壺の底部と考えられ、ナデ調整である。

29はB1類の甕で、同一個体と考えられる。外面をタテハケ、口縁部内面をヨコハケ調整する。33・34はいずれも甕の底部と考えられ、外面をタテハケ調整している。

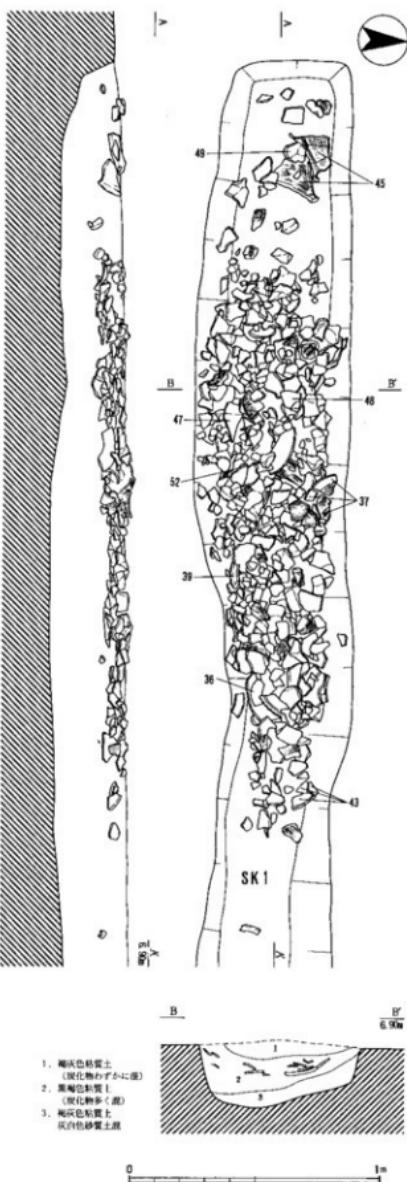
鉢(30)は、体部上位に把手を貼り付けている。体部外面はタテハケ調整である。

35は小型の扁平片刃石斧で、砂岩製である。

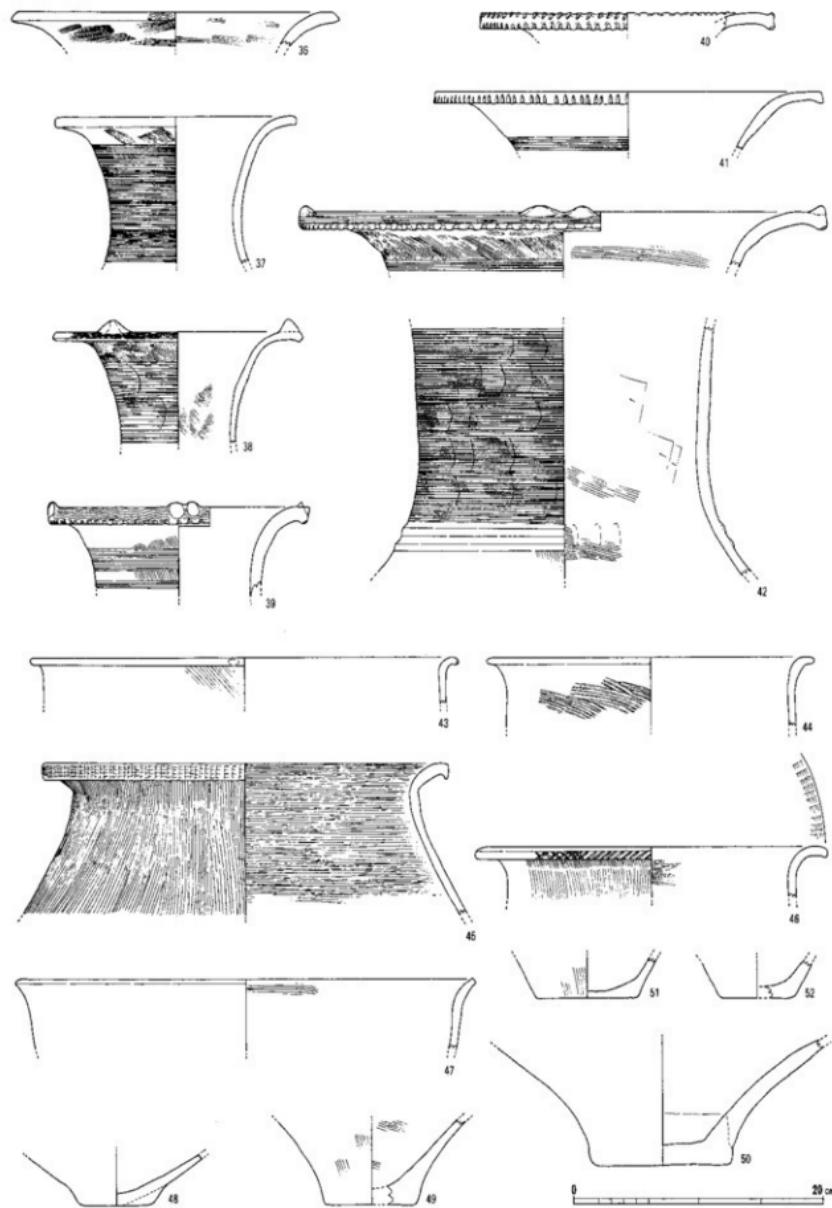
#### 5 土坑

##### S K 1 (第22・23図・PL-14・38)

C地区北部で検出された細長い土坑で、全長5.2m、幅0.45~0.6m、深さ0.25~0.3mである。埋土は3層に分けられ、中層の黒褐色粘質土からは比較的多くの炭化物と大量の土器片が西側を中心に出土した。土器は完形に復元できるものはなく、廃棄



第22図 SK 1 遺物出土状況図 (1 : 20)



第23図 SK 1出土遺物実測図 (1 : 4)

土坑と考えられる。

**出土遺物** 36~38は壺A類である。36の口唇部には波状文があり、他はハケ調整している。37の口唇部は無文で、頸部にはタテハケ調整の後、二枚貝腹縁による直線文が施されている。38の口唇部には波状文が、口縁端部内面には瘤状突起が3方向に各1個ある。頸部はハケ調整の後、二枚貝腹縁による直線文が施されている。

39は壺B類である。口縁端面には波状文を施し、さらに下端に刻目、上端に指頭による押圧が2個一対で4方向にある。頸部はタテハケ調整の後、横描直線文が2帯以上施されている。

40~42は壺C類である。40は口縁端面の上下端にヘラ状工具による押圧がある。41は口縁端面にはヘラ状工具による刺突文が、頸部には二枚貝腹縁による直線文が施されている。42は接点はないが同一個体と考えられる。口縁端面には二枚貝腹縁による直線文と下端には棒状工具による押圧が施される。口縁端部内面には2個一対の瘤状突起が4方向にある。頸部はタテハケ調整の後、下位に無文の突帯を2条貼り付ける。突帯より上位を二枚貝腹縁による直線文を施す。二枚目の圧痕が明瞭に残り、7段以上ある。48~50は壺底部と考えられる。

46はB1類の甕である。口唇部にはハケ状工具による斜め方向の刺突文、内面には同一原体による押引き状の刺突文が施されている。内外面はハケ調整である。43はA類の甕である。外面は風化し明確でないが、ハケ調整と思われる。口縁端部外面上には指頭による押圧が1カ所確認できる。44は体部外面上を斜めないし横位の条痕調整する甕B2類である。甕C類の(45)は、体部が口径を凌駕する篷をもつ甕である。口縁部は強く屈曲し、垂下する口縁端面には、ハケ状工具による浅い角度からの刺突文がある。体部外面上がタテ方向、内面が横方向のハケ調整である。51・52は甕の底部と考えられる。

47は鉢で、内面にヨコハケ目が若干残る。

**S K 2 (第24・26図)**

B地区の南東部で検出された。円形の土坑で、直径2.8m、深さ0.3mである。埋土は暗茶褐色砂質土である。

**出土遺物** 壺B類の63は、口縁端部上端に2個

1対の低い瘤状突起があり、下端には刻目文を施す。頸部はタテハケ調整の後、二枚貝腹縁による直線文を施す。

**S K 3 (第24・25図・PL-38)**

B地区の南東隅部で検出された片側が幅広の略椭円形の土坑である。全長2.5m、最大幅0.8m、深さ0.25mで、主軸は北西~南東方向を向く。埋土は炭化物の混じった暗茶褐色砂質土である。

**出土遺物** 54は壺A類である。口縁部は無文で、端部内面には4方向に瘤状突起がある。頸部はタテハケ調整後、二枚貝腹縁による直線文が施されている。53は壺C類で、口縁端部下端には押圧列がある。55はB1類の甕で、ハケ調整する。56は鉢の小片で把手が付く。57は四基無茎式の石巖でサメカイトイ製である。

**S K 4 (第24・25図)**

C地区の北東隅部で検出された。全長2.2m、最大幅0.95m、深さ0.4mで、主軸は南北方向を向く。埋土は灰黒色粘質土である。

**出土遺物** 壺C類(58)は、口縁端面の上下にヘラ状工具による刻目があり、内面には2個一対の瘤状突起が3ないし4方向に貼り付けられている。頸部外面上はタテハケ調整の後、二枚貝腹縁による直線文が施される。甕(59・60)はいずれもB1類で、ハケ調整が主体である。61には底部中央に焼成前の穿孔がある。

**S K 5 (第24図・PL-14)**

C地区の南西部で検出された。平面形は、片側が幅広の椭円形状で、その主軸は方形周溝墓SX1とほぼ一致することや区画溝と考えられるSD2とは平行することから上墳墓の可能性がある。全長は西側が後世の擾乱で消失しているため正確ではないが約2.2mと推定でき、最大幅0.85m、深さ0.35mである。埋土は灰黒色粘質土で、下部に地山の黄灰色シルトが混じる。

遺物は少なく、壺・甕の小片のみである。

**S K 6 (第24・26図)**

方形周溝墓SX1の東、ほぼ接するような位置で検出された。全長1.35m、最大幅0.9m、深さ0.25mで、底面に径30cm程の小穴があるが、この土坑に伴うものか不明である。埋土は灰黒色粘質土で下

部に地山の黄灰色シルトを含む。

**出土遺物** 64は壺B類で、口縁端面には上下に刺突列文がある。頸部には直線文があるが、原体は不明である。

#### SK 7 (第24・26図)

C地区の南部で検出された不整形の土坑で、南北1.1m、東西1.6m、深さ0.2mである。埋土は、地山の黄灰色シルトと炭化物が混じる灰黒色粘質土である。

**出土遺物** 62は壺A類で、口唇部は無文であるが、口縁端部内面には瘤状突起が4方向に各1個貼り付けられている。頸部外面は二枚貝腹線による直

線文を施す。

#### SK 8 (第24・26図・PL-38)

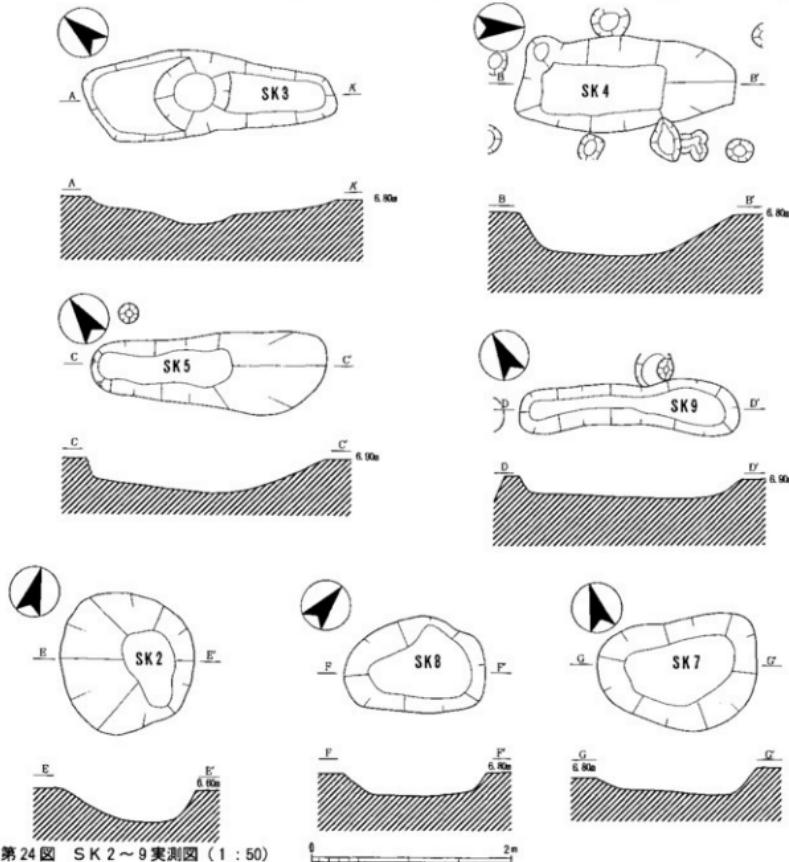
SK 7の南側で検出された不整形な土坑で、南北1.4m、東西0.95m、深さ0.3mである。埋土は灰黒色粘質土で下部ほど地山の黄灰色シルトを含む。

**出土遺物** 66は壺B 1類で、頸部外面には横描波状文が、口縁部内面には横描波状文が2段以上認められる。

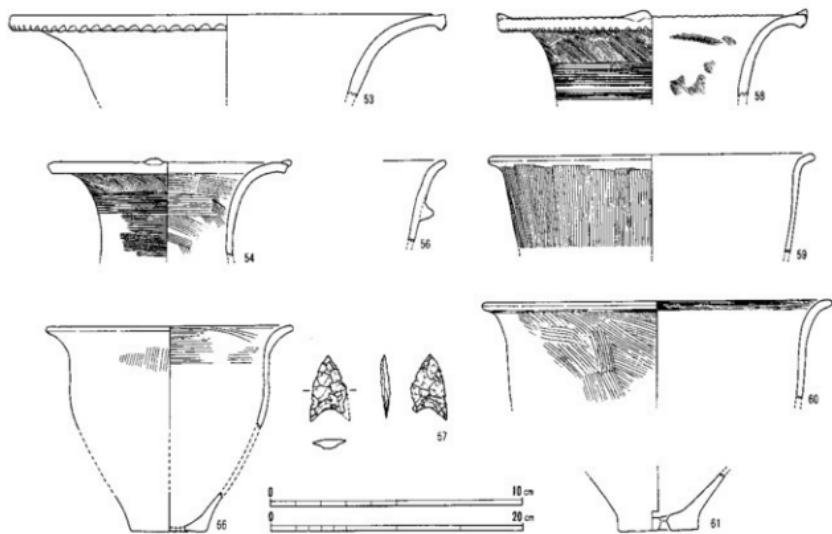
#### SK 9 (図24・26・PL-14)

C地区の中央部で検出された細長い土坑である。全長4.4m、幅1.1m、深さ0.15mである。

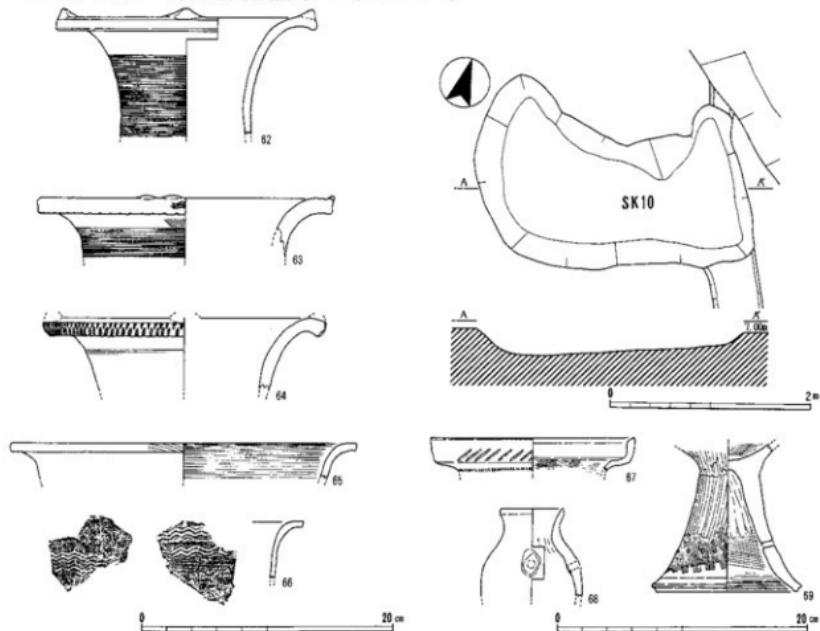
**出土遺物** 65はハケ調整が主体のものである。



第24図 SK 2～9実測図 (1:50)



第25図 SK 3 + 4 出土遺物実測図 (1 : 4、57は1 : 2)



第26図 SK 2 + 6~9 出土遺物実測図 (1 : 4)

第27図 SK 10 実測図 (1 : 50)・出土遺物実測図 (1 : 4)

### S K 10 (第27図)

B地区の南西部で検出された不整形な土坑である。東西2.7m、深さ0.2mである。

**出土遺物** 67は受口状口縁甕で、口縁部外面には刺突列文が施される。高杯(69)の脚部中位には2個1対の小孔が8方向にある。小型壺(68)の体部には焼成前に約径3cm程の小孔が粘土で充填されている。

### 6 溝・自然流路・杭列

#### S D 1・2

いずれもC地区の南部で検出された。直線的に北西から南東に延び、部分的に後世の造構や削平によつて消失しているが、本来同一の溝と考えられる。最大幅1.2m、深さ0.15m前後である。

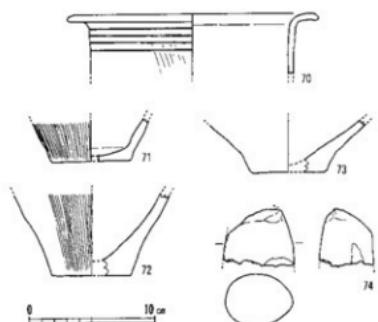
南側の方形周溝墓と方向が近く、またSR 1の付

近の落ち込みから東に広がる微高地縁辺部を南北に区切るように掘られていることから北側の集落域と南側の墓域を区画する溝と考えられる。

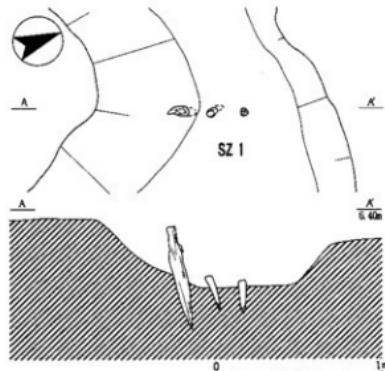
**遺物**は小片のみで図示できるものはないが、中期のものと思われる。

#### S R 1 (第28図・PL-15)

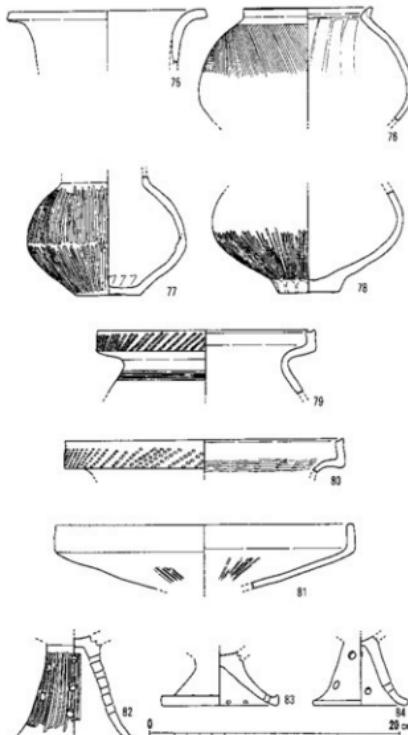
C地区の西端部で検出した。C地区南西部は周囲より若干低く、造構検出面以下には黒色粘質土が厚く堆積しており、湿地であったと考えられる。SR 1はその縁辺を北から南に流れていた自然流路である。幅1.2~3.6m、深さ0.2~0.5m、南北両端での底の比高差0.2mで、全体に緩やかに蛇行し約47mほど検出した。埋土は黒褐色砂質土のほぼ単層である。その下流は、河道SR 7付近の谷部に流れ込んでいたと考えられる。



第28図 SR 1出土遺物実測図 (1 : 4)



第29図 SZ 1実測図 (1 : 30)



第30図 SD 4出土遺物実測図 (1 : 4)

**出土遺物** 遺物は比較的小ない。70は、直立する体部から強く屈曲する口縁部をもつ。口肩部は無文である。外面をハケ調整の後、頭部にヘラ描沈線を4条施す。前期のものであろう。71・72はいずれも壺の底部と思われ、外面はタテハケ調整である。73はナデ調整する壺の底部である。

74は小型の大型蛤刃石斧と考えられ、全面敲打した後研磨している。

### S D 3

S R 1 の東側で、それとほぼ平行して延びる南北方向の溝である。幅0.2~0.5m、深さ0.1m前後で約22mに渡って確認された。図示できる遺物はないが、中期のものと思われる。

### S D 4・S Z 1 (第29・30・33図・P L-15・39)

C地区南東部からD地区北部にかけて検出された溝である。わずかに蛇行しながら東西方向に流れしており、幅1.6~4.3m、深さ0.3~0.9mで、73mほど検出された。埋土は褐色系の粘質土が中心で流れは弱かったと思われる。

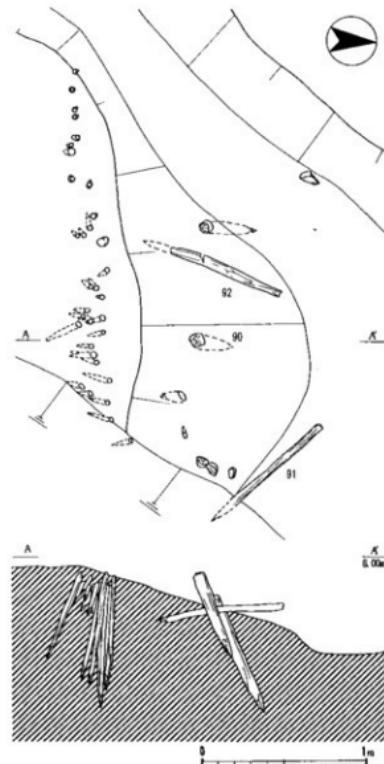
S Z 1 は S D 4 の C 地区北端部で検出された杭列である。溝のはば中央で、流水方向に直交して3本の杭が、約20cm間隔で打ち込まれていた。しかし、杭の残りが悪く、構造は不明である。

**出土遺物** C地区で後期初頭のものが比較的まとまって出土しているが、D地区では遺物は少ない。

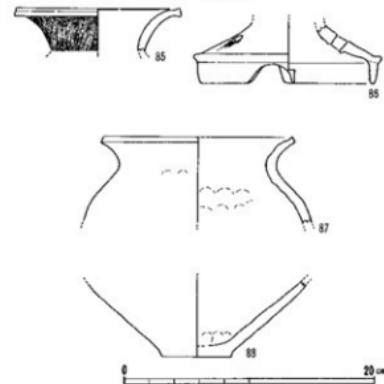
75は広口壺の口縁部であるが、表面が荒れ調整・文様は不明である。76は短頭壺で体部をハケ調整する。77・78は小型壺の体部で丁寧なヘラミガキを施す。79・80は受口状口縁の壺で端部は内傾する。81は高杯で口縁部は短く直立している。82は高杯脚部、孔列が5方向に開けられている。83は壺の脚台部と考えられ、端部に2孔一対の小孔が8方向にある。84も壺の脚台部と考えられ、上下2段各5方向の透孔が千鳥状に穿たれている。

### S R 2・S Z 2 (第31・33図・P L-15・39・53)

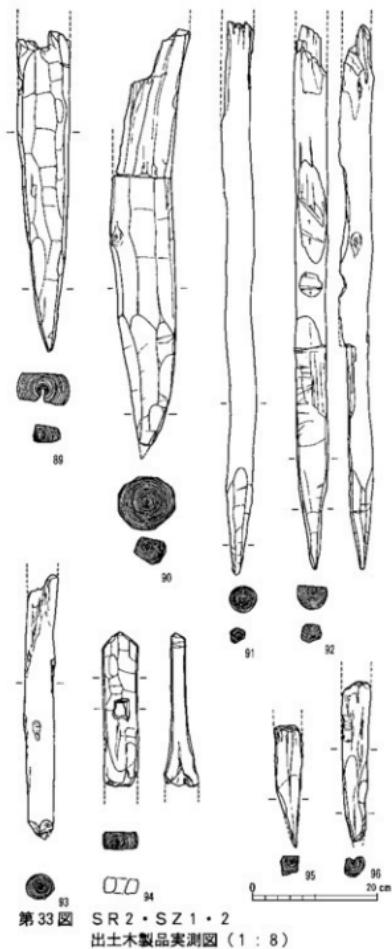
D地区の南東で検出された自然流路である。ほとんどが調査区外あるいは古墳時代の自然流路に切られているため明らかでない部分が多いが、下流は位置関係・出土遺物から東に隣接する平成3年度の津市教育委員会調査区で検出された自然流路・井堰に至ると考えられる。



第31図 S Z 2 実測図 (1 : 30)



第32図 S R 2 出土遺物実測図 (1 : 4)



第33図 SR2・SZ1・2  
出土木製品実測図 (1:8)

規模は幅3.0~4.5m、深さ1m前後で、主流は東北方向に流れているが、一部は東方向に分流する。また、東岸部分では杭列SZ2が検出された。

SZ2は約3mに渡って確認された杭列で、更に東側に延びると思われる。杭列は、杭頭をやや流路中央に傾けた34本の細杭と反対方向に傾けた2本の太杭からなるが、いずれも杭先端部が残っているに過ぎない。

**出土遺物** 遺物には後期初頭の壺・甕・器台などがある。85は広口壺の口縁部で、頸部はヘラミガキ調整である。86は器台脚部で、外面は朱塗りされている。裾部には円孔が4方向、端部には半円形の抉りが4方向にある。木製の高杯を模倣したものであろうか、松阪市阿形遺跡に類例がある。

89・90・92~94はSZ2に利用された太杭と細杭である。92は一部に欠き込みがみられ、94には納穴が残る。いずれも建築部材の転用であろう。

#### 7 小穴

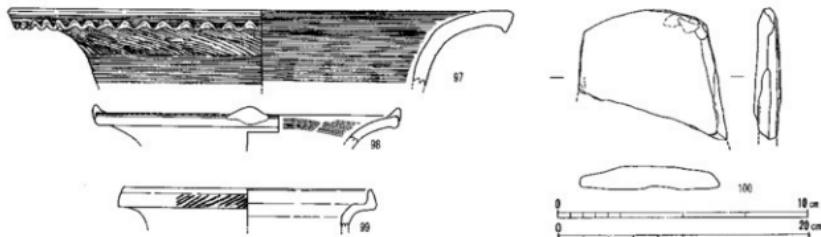
Pit 1(第18図) SA4の東側で検出された径30cm、深さ20cmの小穴である。

**出土遺物** 97は壺Cで、口縁端部は二枚貝腹縁による直線文を施し、下端を押圧する。頸部はハケ調整後、二枚貝腹縁による直線文を施す。内面はヨコハケ調整である。

#### 8 包含層出土遺物(第34図)

98は壺C類の口縁部で、端部に3方向ないし4方向の瘤状の突起が貼り付けられている。99は受口状口縁の甕で、口縁部外面に刺突列文が施されている。中期後葉ないし後期初頭と思われる。

100は扁平片刃石斧の破片である。基部は丸味を帯び、側辺は開き気味である。  
(米山)



第34図 弥生時代小穴・包含層出土遺物実測図 (1:4、100は1:2)

## VI. 古墳時代

この時代の主な遺構としては掘立柱建物 10 棟、井戸 1 基、土坑 5 基、溝・自然流路等 20 条などがある。

前期の遺構・遺物は E 地区に集中し、調査区の西側に集落域が想定される。中期では B・C 地区に掘立柱建物のみからなる集落があり、D 地区では同時期の河道があり、大量の土器や木製品が出土している。後期では C・D 地区に自然流路が流れ、E 地区の遺物の出土状況から調査区の西側に集落域が想定される。

### 1 掘立柱建物

古墳時代の掘立柱建物は 10 棟確認され、C 地区の中央部に集中する。棟方向は南北棟のものが大半で、北を指向するまとまりがある。柱穴出土遺物は少ないが、S 字型片が散見され、須恵器は含まれないことから古墳時代でも中期前半以前に属するものと考えられる。

#### S B 17 (第 36 図・P L-16)

C 地区中央部で南北 2 間、東西 1 間分を検出した。西側は擾乱や古墳時代後期の自然流路で消失している。検出した柱穴の配置や未検出の柱穴の存在を考慮すれば、西側にのびる東西棟（棟方向は E 5° S）の側柱建物の可能性が高い。桁行 1.8 m 以上、梁行は 4.6 m で柱間 2.3 m の等間である。

柱掘形は径 30 cm 前後、深さ 15 ~ 21 cm で、柱痕跡は確認されていない。柱穴からは S 字型などが出土し、古墳時代の建物と考えられる。

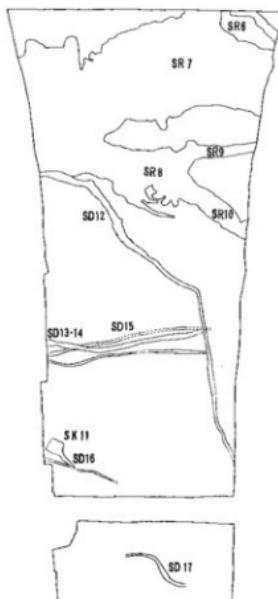
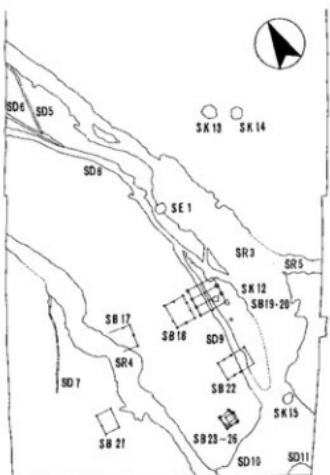
#### S B 18 (第 36 図・P L-16)

C 地区中央部で検出された。西側柱の一部を欠くが南北棟（棟方向は N 1° W）の桁行 3 間、梁行 2 間の側柱建物である。桁行は 5.1 m で、柱間は 1.7 m の等間、梁行は 4.2 m で柱間は 2.1 m の等間である。

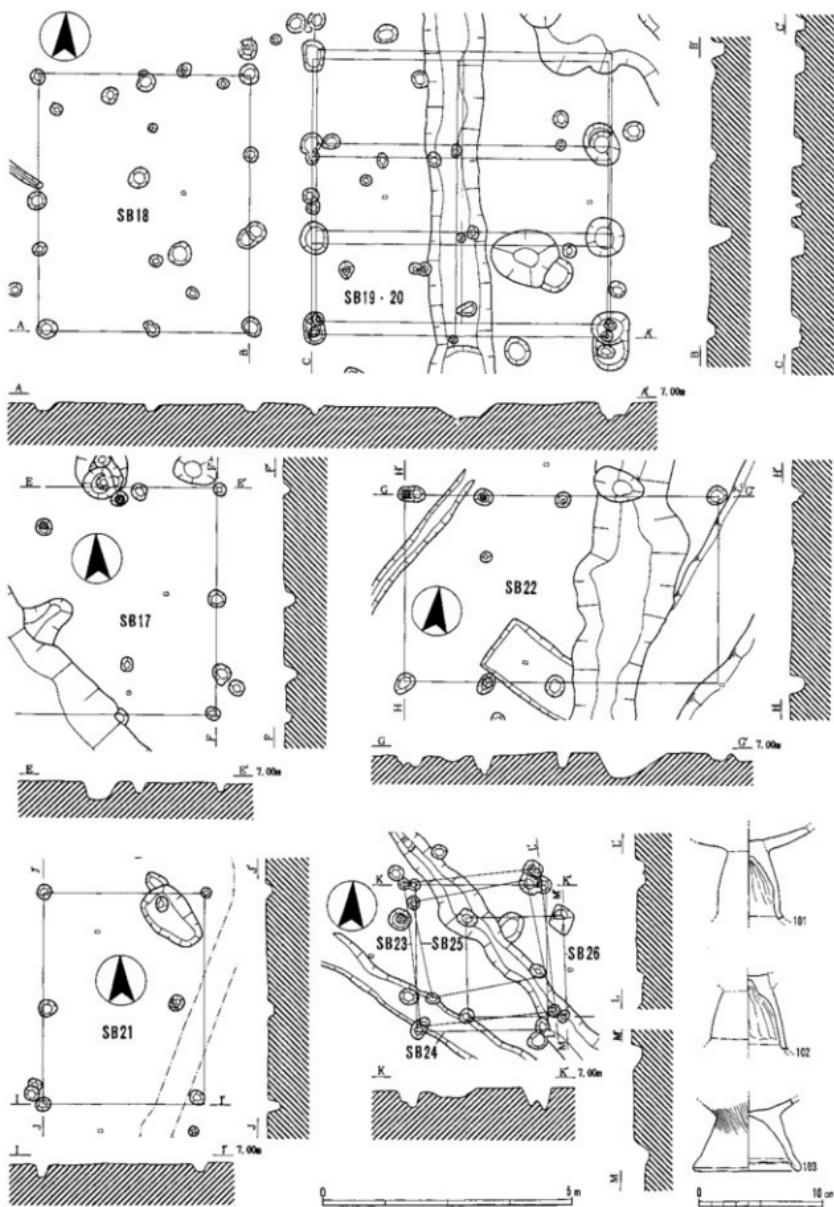
柱掘形は径 30 ~ 40、深さ 10 ~ 19 cm で、柱痕跡は確認できなかった。柱穴出土遺物はないが、隣接する S B 19 と南側の柱筋を揃えることから同時期のものと考えた。

#### S B 19・20 (第 36 図・P L-17)

S B 18 の東側で検出された。いずれも南北棟（棟方向は N 1° W）の桁行 3 間、梁行 2 間の建物で北にわずかにずらした位置ではほぼ同一規模で建替



第 35 図 古墳時代遺構略図 (1 : 1,000)



第36図 SB 17~26 実測図 (1 : 100) • SB 23・26 出土遺物実測図 (1 : 4)

えられている。妻柱列は S D 9 で削平され残存状態は悪いが、各側柱と対応する柱痕跡が確認されていることから総柱建物と考えられる。桁行は 5.4m で 1.8m の等間、梁行は 5.8m で、2.9m の等間である。桁行より梁行の方が長いやや異質な建物である。

柱掘形は径 40~70cm、深さ 10~28cm と他の掘立柱建物に比べて大型で、径 20cm 程度の柱痕跡を確認した柱穴もある。

柱穴からは S 字型などが出土しており、いずれも古墳時代中期の建物と考えられる。

#### S B 21 (第 36 図・P L-17)

C 地区南西部で検出された。東側柱の一部は擾乱で欠くが、南北棟（棟方向は N 0° S）の桁行 2 間、梁行 1 間の側柱建物である。桁行は 4.2m で柱間は北から 2.3m + 1.9m と不等間であり、梁間は 3.2m である。

柱掘形は径 20~30cm、深さ 11~24cm で、柱痕跡は確認されていない。柱穴出土遺物には S 字型片があり、古墳時代の建物と考えられる。

#### S B 22 (第 36 図・P L-18)

C 地区の中央部で検出された。南側柱の一部を欠くが、東西棟（棟方向は E 4° S）の桁行 4 間、梁行 1 間の側柱建物と考えられる。桁行は 6.4m で、柱間は 1.6m の等間で、梁行は 2.7m である。

柱掘形は径 30~50cm、深さ 12~29cm で、10~15cm の柱痕跡を一部で確認された。柱穴からは土師器高杯・S 字型などが出土し、古墳時代の建物と考えられる。

#### S B 23~26 (第 36 図・P L-18・39)

C 地区の南部でほぼ同一地点で建替えられた建物である。いずれも 1 × 1 間であるが、規模・棟方向には、若干ばらつきがある。S B 23 が 2.8m × 2.7m、S B 24 が 2.9 × 2.6m、S B 25 が 2.3 × 1.9m、S B 26 が 2.0 × 2.0m である。棟方向は南北辺で表すと、N 3° ~ 16° W を示す。切り合い関係からは S B 23 が S B 24・25 より新しい以外は不明である。連続して建替えられており、恒久的な建物と考えられる。

柱掘形はいずれも径 20~40cm、深さ 10~44cm で径 15cm の柱痕跡を確認したものもある。

#### 出土遺物 S B 23 の柱穴からは S 字型脚台部

(103) が、S B 26 の柱穴からは高杯 (101・102) が出土しており、古墳時代中期の建物と考えられる。

#### 2 井戸

#### S E 1 (第 37 図・P L-19・39・52)

C 地区の北部で検出された。掘形は梢円形で長径 2.3m、短径 1.9m、深さ 0.9m の断面描録状である。掘形の中央やや東側寄りに内法 0.6m のくり抜きの井戸枠があり、その周囲には大小 14 枚の板材が打ち込まれていた。板材は特に加工したものではなく転用材と思われ、井戸枠上部の補強用に用いられたと思われる。井戸枠は高さ 50cm ほどしか残っていないが、その上部にはほぼ同様の井戸枠痕跡が土層断面で確認できた。なお、切り合い関係から S R 3 より古い。

**出土遺物** 井戸枠 (104) は、底径 65.1cm、厚さ 5.0cm で最大 52.3cm 遺存していた。底部内側には、高さ 4.4cm、厚さ 0.8cm を帯状に削り出しており、桶の転用と考えられる。腐食が進んでいない底部には、工具痕が残る。樹種はクスノキである。

S 字型 (105) は口縁部の屈曲は鈍い。S 字型脚台部 (106) は裾の開きは弱く、端部を折り返す。土師器高杯脚部 (108) は、柱状部はやや膨らみ気味で屈曲して大きく開く裾部となる。107 の口縁部は直線的にのび、脚柱状部はやや膨らむ。

109~113 は井戸枠周囲から出土したものである。農具などの転用と考えられ、109・110・113 には方孔がみられる。

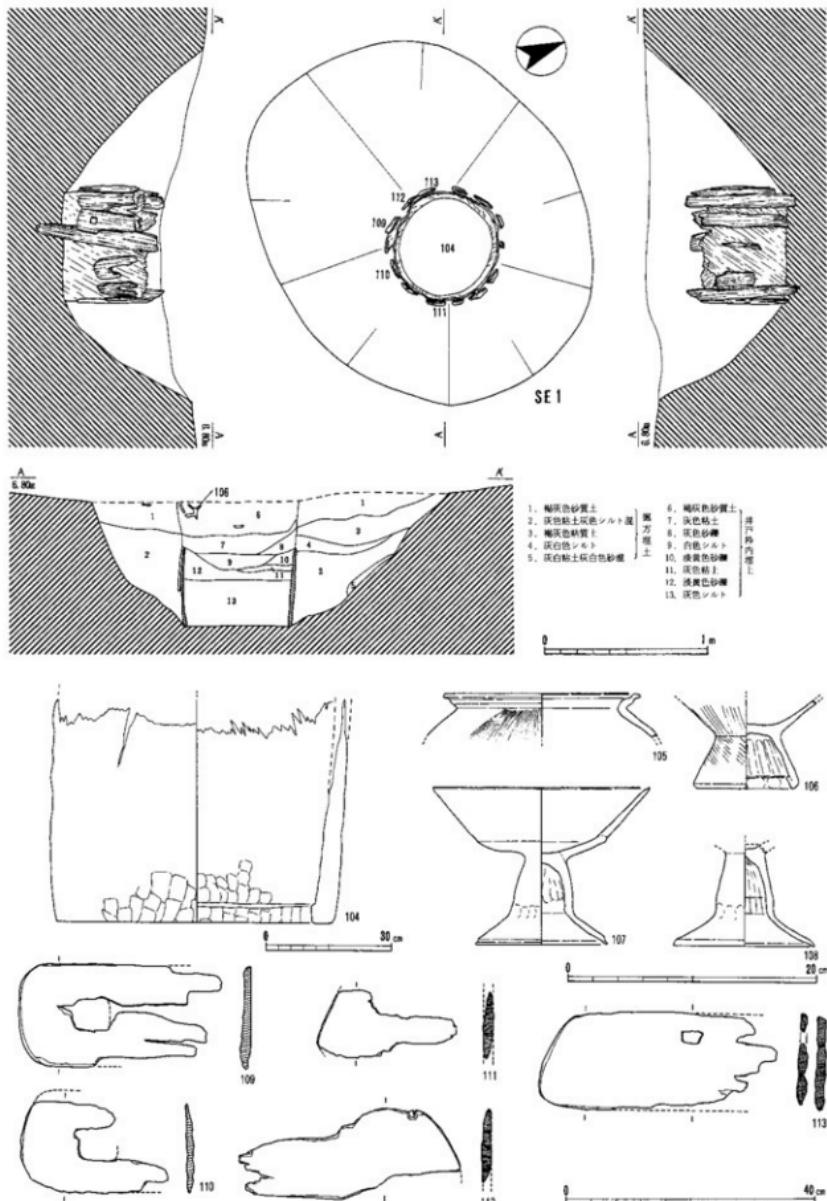
#### 3 土坑

#### S K 11 (第 38 図・P L-19・39)

E 地区の南西部で検出された。一辺 2.7~3.0m、深さ 0.2m の方形の土坑で、ほぼ中央には径 1.0m 前後、深さ 0.3m の小穴があるが、S K 11 に伴うものかは不明である。また、南側に幅 0.7m、深さ 0.2m の溝が 2.5m に統き、一連のものと考えられる。

遺物は中央部から、土師器高杯・器台・小型壺が比較的まとまって出土した。

**出土遺物** 116 は椀状の杯部をもつ高杯で外面横位の、内面縦位のヘラ磨きが施されている。115 はハの字状に開く杯部をもつ高杯で、杯底部は狭く、口縁端部は丸く収める。小型壺 (118) は口縁部を欠くが、球形の体部をもつ。117 は小型器台で、屈



第37図 SE 1実測図(1:30)・出土遺物実測図(104は1:12、105~108は1:4、109~113は1:8)

曲して短く立ち上がる口縁部をもつ。

S K 12 (第39図・P L -39)

S B 19・20と重複して検出された。東西1.4m、南北1.1m、深さ0.35mの楕円形の土坑である。埋土は暗褐砂質土である。

出土遺物 114は砂岩製の砥石で、両端を欠くが幅11cm厚さ3cmで一面のみに研磨痕がある。

S K 13 (第40・41図・P L 20・40)

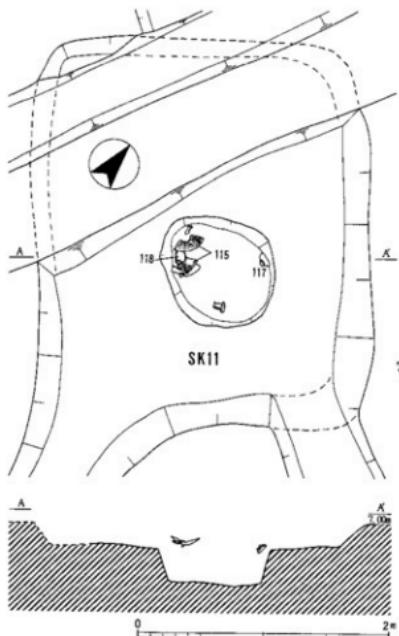
B地区の南東部で検出された。径2.7m前後、深さ0.6mの不整円形で、底部に深さ0.1mほどの落ち込みがある。埋土は大きく3層に分かれ、下層の青灰色粘質土から棒状木片が、上・中層の暗茶褐色砂質土ないし暗褐灰色粘質土から土師器が大量に出土した。土器は完形に復元できるものではなく、廃棄土坑と考えられる。

出土遺物 遺物には大量の上顎器と勾玉が1点ある。133～135は直口壺で、口縁部は外上方に直線的にのびる。厚手の口縁部のもの133と薄手のもの132・

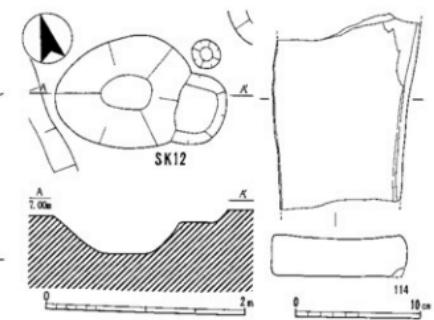
134・135がある。132はヒサゴ形壺で、下膨れの体部外面をヘラ磨き調整する。130・131は小型丸底壺で、いずれも底部外面はヘラ削りするが130は形態的には若干時期の遅るものである。

136は布留系の壺である。口縁端部は弱い面をもつ。体部外面は斜位あるいは横位のハケ調整で、内面中位はヘラ削り調整する。138はミニチュアのS字壺である。口縁部は省略され単純であるが、他の調整などは通有のものとほぼ同一である。139～142は通有のS字壺で、口縁部の形態は若干の差異はあるが、いずれも強いヨコナデによる綾は下位にあり、体部は粗いハケ調整である。脚部(137)は端部を内面に折り返している。

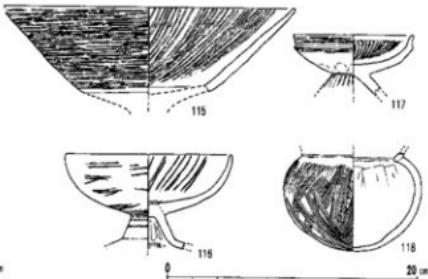
高杯には、丸い杯底部と口縁部の境に段をもつものの(143・144)と平らな杯底部から口縁部が大きく開くものの(145・146)がある。後者の脚部(147～150)の柱状部はやや膨らみ気味のものが多い。151は基部から緩やかに大きく開くもので、器壁は厚い。

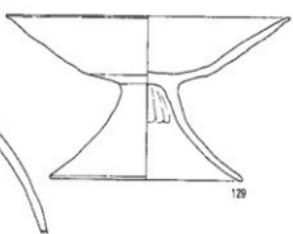
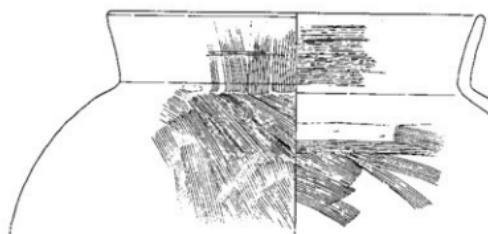
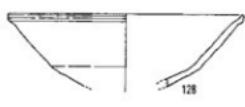
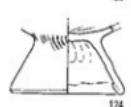
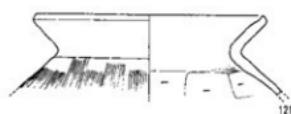
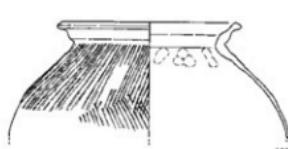
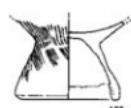
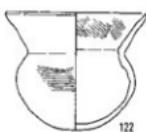
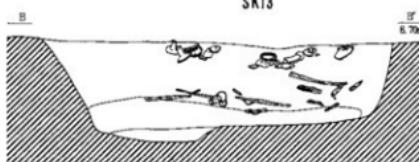
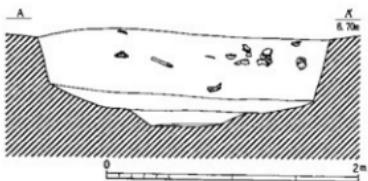
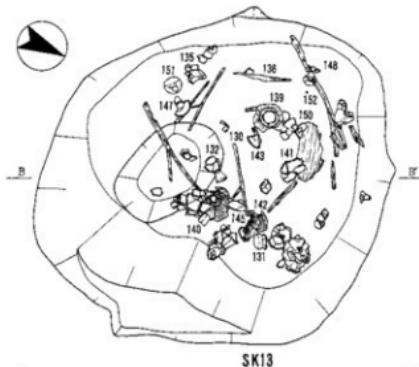
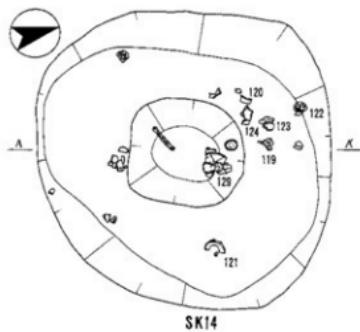


第38図 SK 11実測図(1:40)・出土遺物実測図(1:4)

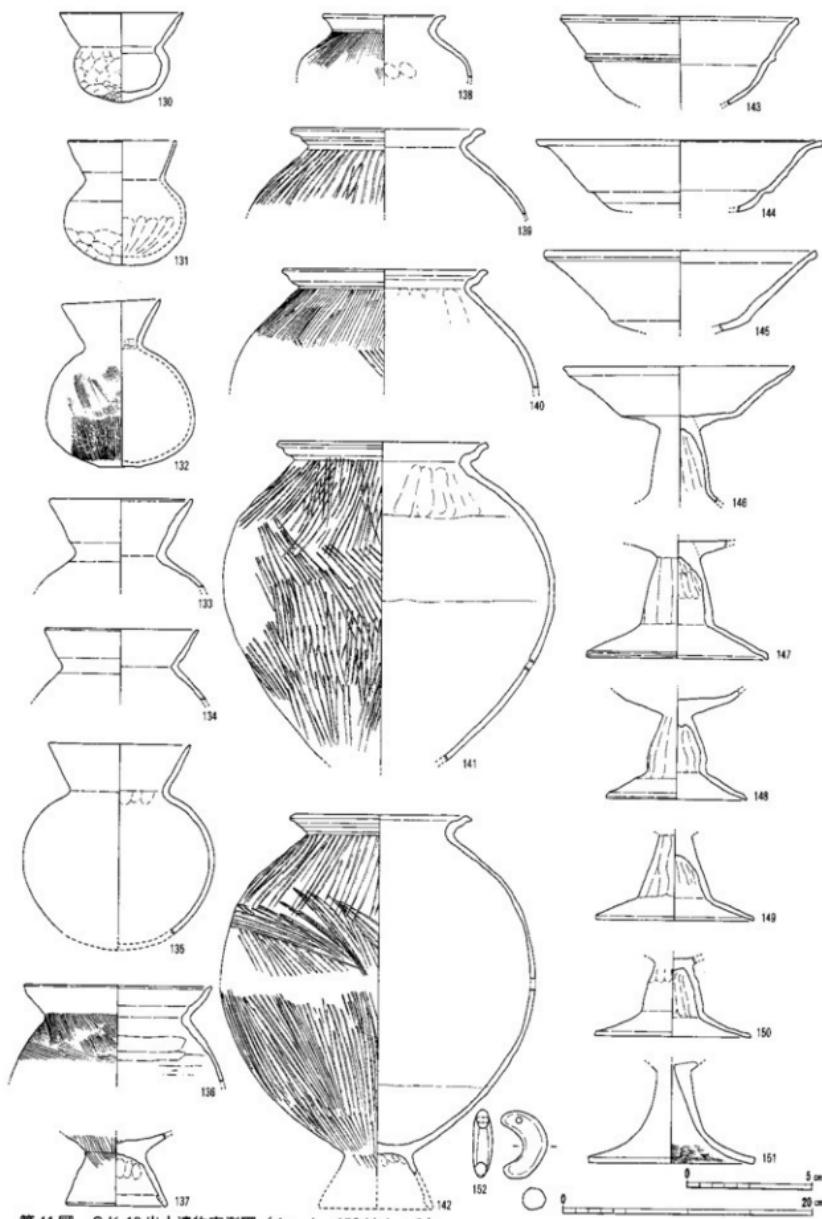


第39図 SK 12実測図(1:50)・出土遺物実測図(1:4)





第40図 SK 13・14 遺物出土状況図 (1 : 40)・SK 14 出土遺物実測図 (1 : 4)



第41図 SK 13出土遺物実測図 (1 : 4、152は1 : 2)

152は滑石製の勾玉である。

S K 14 (第40図・P L-40)

S K 13の東側で検出された。径2.3m前後、深さ0.6mの円形の土坑で、底部中央には深さ0.1mほどの落ち込みがある。埋土はS K 13とほぼ同じで、遺物のはほとんどは上・中層から出土している。

**出土遺物** 広口壺(119)は、やや外反する長い口縁部をもつ。直口壺(127)は、推定口径30.1cmの大型のもので、内外面ともハケ調整している。小型丸底壺(122)は、ハケ調整が主体の粗製品である。

123~126はS字壺である。口縁部は強いヨコナデで稜を有するが、全体に肥厚し屈曲も弱い。脚台部(123・124)は外面をハケ調整、端部内面を折り返すものである。120・121はく字形で、121の体部内面はヘラ削り調整である。

高杯(128・129)には、口縁端部をつまみ上げ気味に仕上げる通有のもの(128)のほかに、直線的に

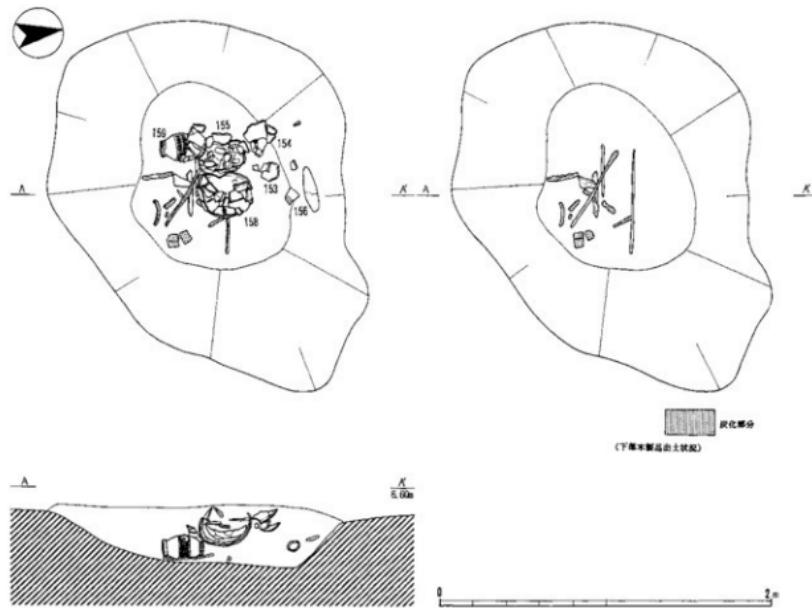
のびる口縁部と柱状部をもたず大い基部から緩やかに大きく広がる楕部をもつ異形のもの(129)がある。

S K 15 (第42・43図・P L-20・41)

C地区の南東部で検出された長径2.3m、短径1.7m、深さ0.5mの楕円形の土坑である。埋土は暗灰色粘質土の単層であるが、上部には砾が混じる。土坑底部には一部炭化した棒状の木片がなど散在し、直上からは須恵器樽形瓶、土師器S字壺・鉢(韓式系土器模倣)・短頸壺・直口壺の他、臼玉が1点出土した。土器はほぼ完形に復元できるものが多く、一括廻棄と考えられる。

**出土遺物** 短頸壺(153)の体部は球形で、下半はヘラ削り調整する。直口壺(154)の肩部には、S字壺のそれとよく似た粗いハケ目が横位と継位に施され、体部下半はヘラ削り調整する。

155~157はS字壺である。155の口縁端部は強いヨコナデでわずかにS字状の痕跡をとどめる程度である。157は口縁端部が肥厚し頸部も丸くなっている。



第42図 SK 15遺物出土状況図 (1:30)

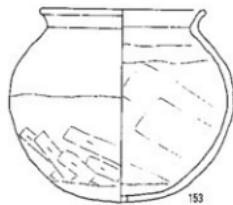
る。脚台部（156）は155とは別個体である。

158は土師器の片口鉢である。器形は韓式系土器の鍋と類似するが、底部が平底であること外面の調整が板ナデである点が異なる。また、口縁端部はS字彫に近いものであることからも、韓式系土器を模倣した在地産と思われる。

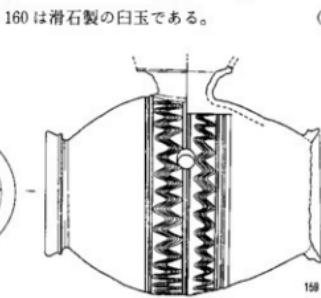
須恵器樽形甌（159）は口縁端部を欠く以外、ほぼ完形である。体部中央は、2条一対3組の沈線によって区切られた中に2条の波状文が施されている。また、図の向かって左側の側面には多角形と×を組み合わせたようなヘラ記号がある。

160は滑石製の臼玉である。

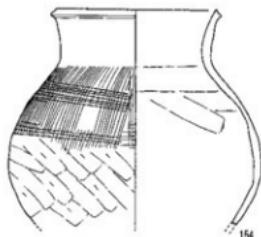
（米山）



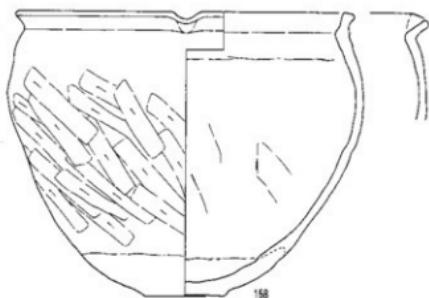
153



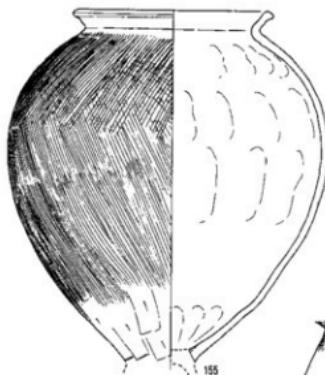
158



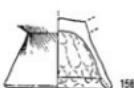
154



159



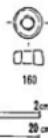
155



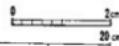
156



157



160



第43図 SK 15出土遺物実測図（1：4、160は1：1）

#### 4 溝、河道・自然流路

この時期の遺構には、溝12条、河道4条・自然流路4条、およびそれに伴う護岸施設・堰・杭列などの施設10基がある。また遺物の中で、河道から出土したS字型および高杯については、第51図および第52図の分類表によって述べることにする。

##### S D 5

B地区中央の西壁から南に湾曲して、南東方向に流れSD 6と合流する南北溝である。幅40cm、深さ6~13cmで、溝幅および深さがほぼ一定している。南側でSD 6に繋がる。

遺物はないが、埋土がSD 8と同じでこの時代と考える。

##### S D 6

B地区中央で検出した北西から直線状に南東方向に流れる南北溝である。幅50cm、深さは10~13cm程度ではほぼ一定している。近・現代のSD 22に切られる。

遺物は上層器細片しかないが、SD 8と埋土が同じでこの時代と考える。

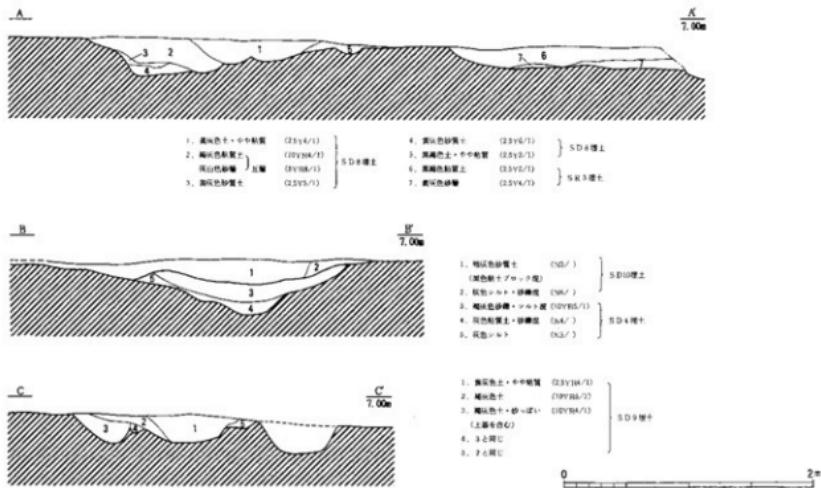
##### S R 3 (第44~49図・P L-26・42・43・54)

B地区からC地区にかけて検出した北西から湾曲して南東方向に流れる自然流路である。幅3.4~11.0m程である。深さは2~93cm程である。流路内

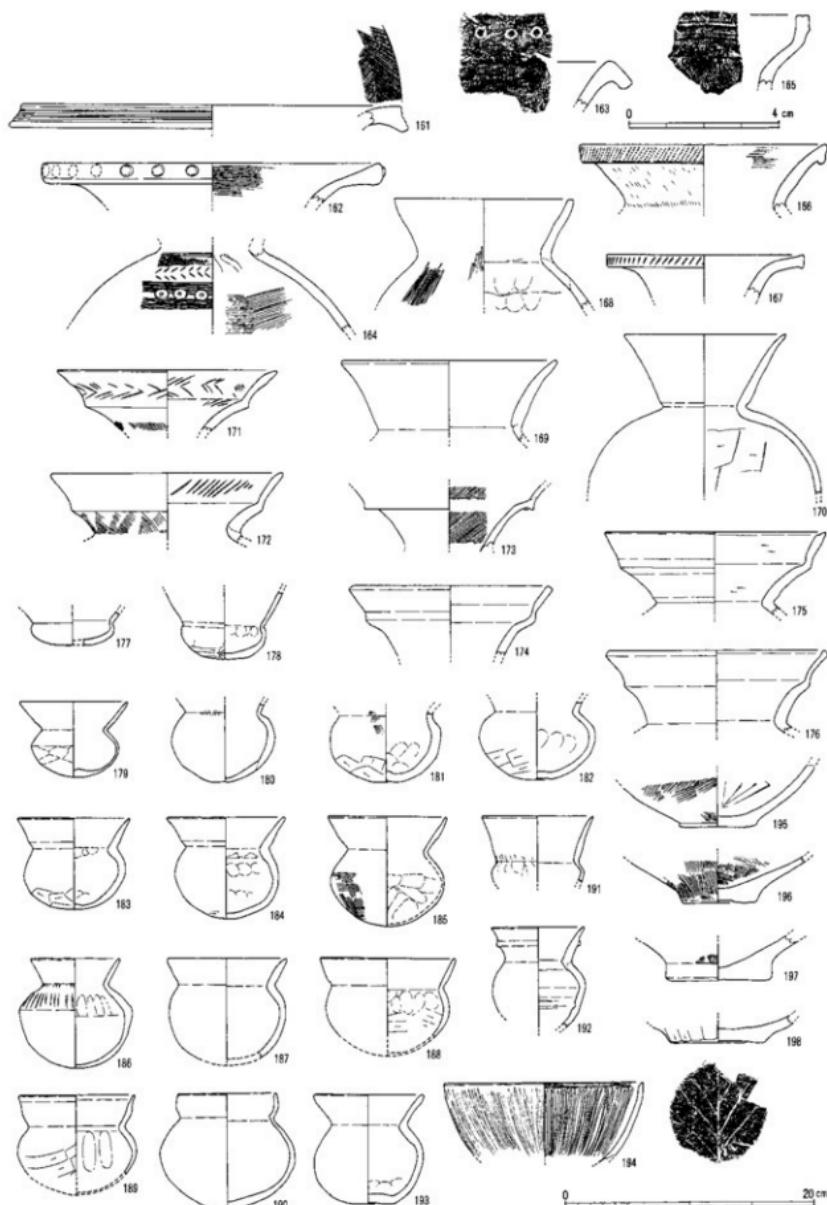
には杭列SZ 3およびその下流にSZ 3が流れたものと考えられる杭の集積を検出した。またSR 3にSD 8が流れ込んでおり、一時は同じ時期に流れていたと考える。

遺物は、コンテナバット48箱で、遺構の中では量的に最も多い。弥生時代後期から古墳時代後期まで出土しているが、古墳時代の中期前半の遺物を中心とする。

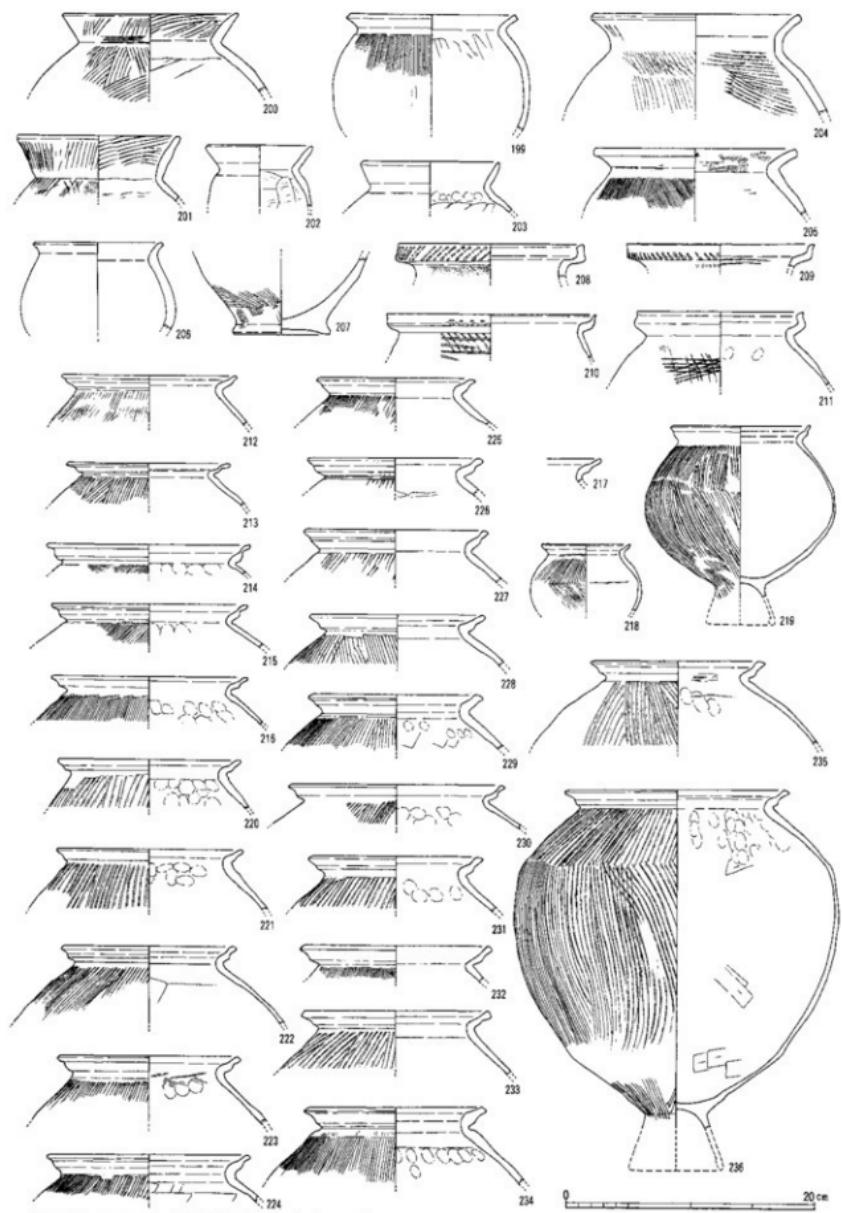
**出土遺物** 壺には、161~198がある。広口壺(161~164、166~167)には、口縁部が外反して開き端部が外下方にのびる161、外反する口縁部から端部が肥厚する162や口縁部が屈曲する163がある。164は壺の体部で、外面に櫛状工具による文様を施した後に、竹管による押圧を加えた円形浮文を3個貼り付ける。166~167は口縁部外面に面をもち刺突文を施す。受口壺(165)は、内湾する口縁上面には面をもつ。直口壺(168~170)は、口縁端部に面をもつ168と尖らせる169~170がある。二重口縁壺(171~176)には、口縁部の内外面を羽状の刺突文で飾る柳ヶ坪型壺(171~172)がある。173は口縁部を二段につくり、段がやや垂下する。また口縁部を平坦にする174、つまみあげる175や外面に面をもつ176がある。小型丸底壺(177~193)は、口径に比



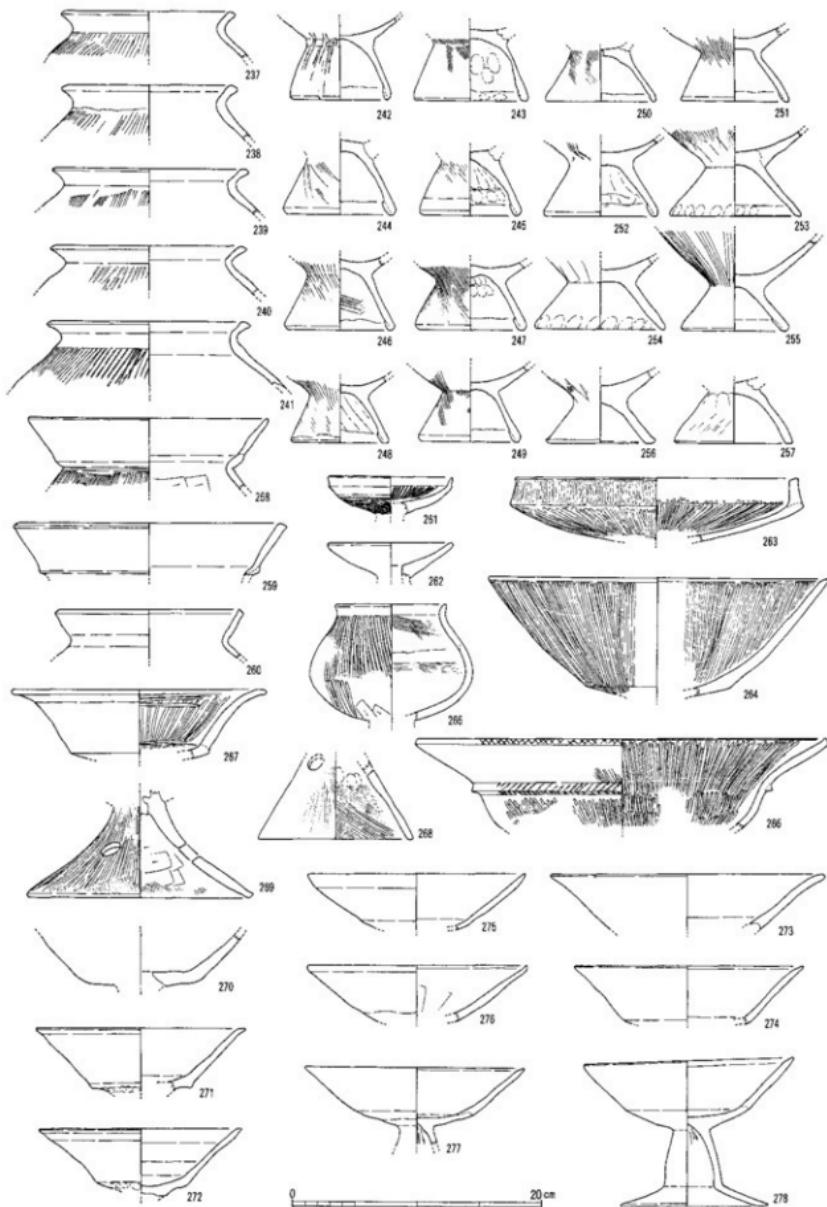
第44図 SR 3、SD 4・8・9・10 土層断面図 (1:80)



第45図 SR 3出土遺物実測図・拓影図(1)(1:4)



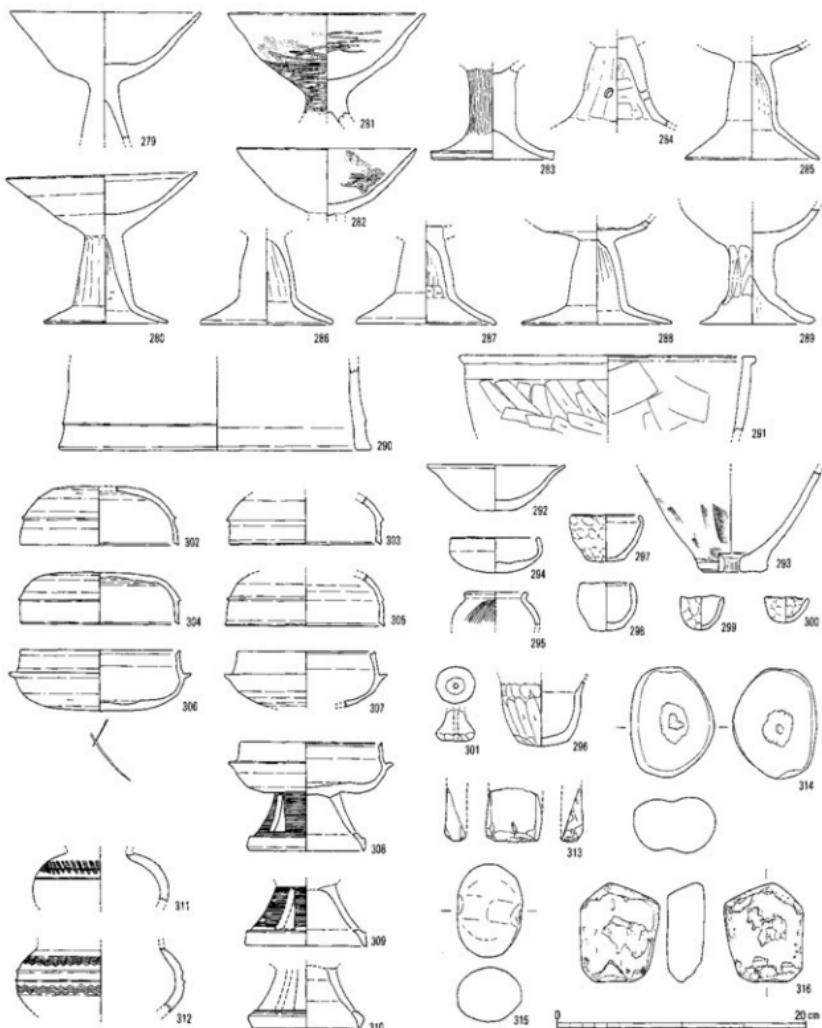
第46図 SR 3出土遺物実測図(2)(1:4)



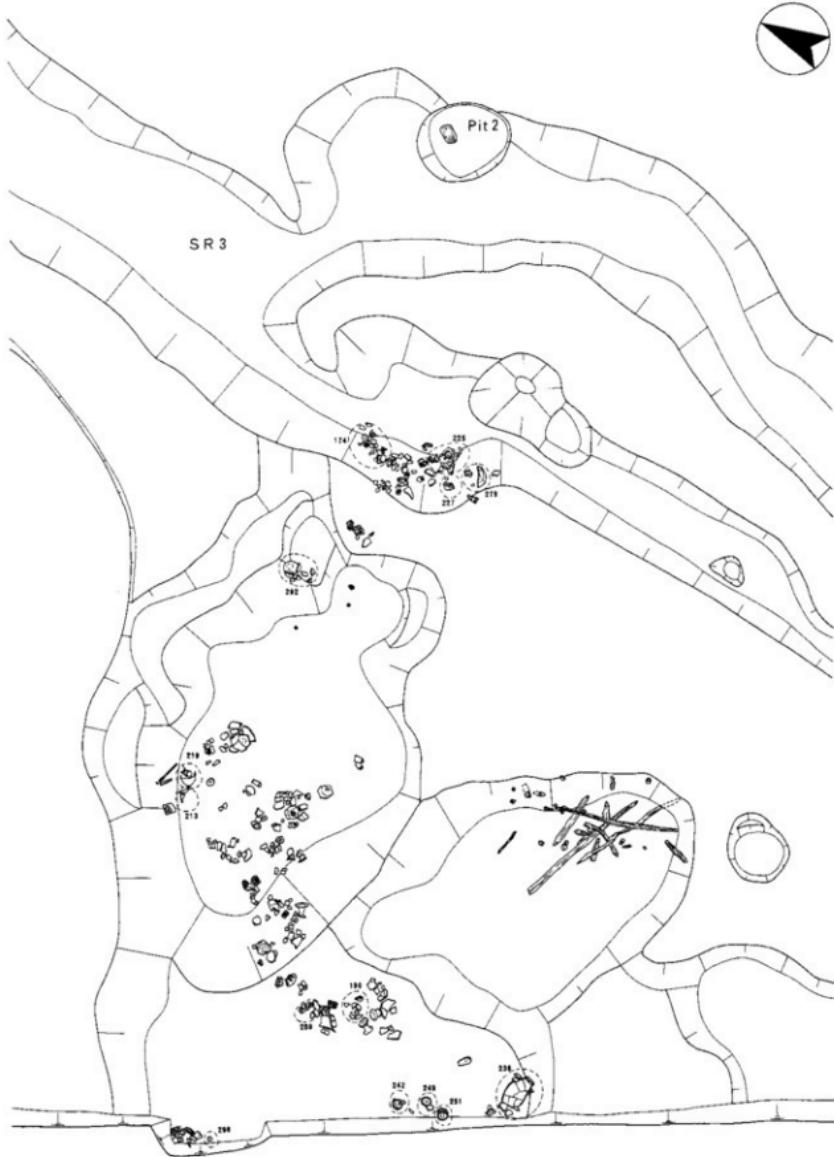
第47図 SR 3出土遺物実測図(3) (1 : 4)

べ体部径が小さく体部が扁平な 177～179、口径に比べ体部径が小さく体部が球形な 180～185 や体部径より口径が小さい 186 がある。また、187～190 は、前述したものより口縁部が短く器形がひとまわり大きい。これらの小型丸底壺に対して 191 や 192 は、

体部上半の肩が張るもので、時期的には口径より体部径が小さいものと同じであろう。192 には、口縁部に突帯がめぐる。これらは平底の可能性がある。193 は小型平底壺である。194 は瓢形壺の口縁部で、内外面をヘラミガキする。195～198 は壺の底部で、



第48図 SR 3出土遺物実測図(4)(1:4)



第49図 SR 3、Pit 2遺物出土状況図 (1:40)

0 2m

198には底部に木葉痕がみられる。

甕には、199～260がある。199は弥生時代後期の所産と考えられる。200～206はく字甕である。200・201は、口縁部の内面を横位に体部の外面を縦位にハケ調整する。202は内面をヘラケズリする小型甕である。203は口縁端部が尖り気味におわる。204・205は口縁部外面に面をもつ器壁が厚い甕である。206は外面をナデで調整する小型の甕である。207は甕の底部である。受口甕(208・209)は、近江系甕で口縁部の下に明瞭な稜をもち、口縁部外面には櫛状工具による刺突文を施す。

S字甕については第51図のように分類<sup>3</sup>する。

A類：口縁部の屈曲部に稜がみられ、直立気味に立ち上り、口縁端部に櫛状工具による刺突文がみられる。

B類：口縁部の屈曲部が弱まり、端部の刺突文や内面のハケメもみられなくなる。

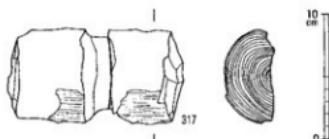
C類：口縁部・体部とも器壁が厚くなり口縁端部が外傾する面をもつ。また体部外面のハケメが粗くなる。

D類：口縁部の屈曲がなくなり、器壁がさらに厚くなる。口縁端部は肥厚し水平方向にのびる傾向をみせる。口径や頸部径が大きくなる。

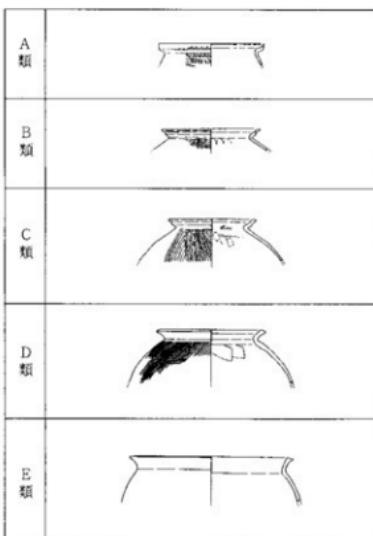
(D類以下は宇田型甕と称されるもの。)

E類：口縁端部が水平にのびて頸部の屈曲が強まる。口径や頸部径はさらに大きくなる。

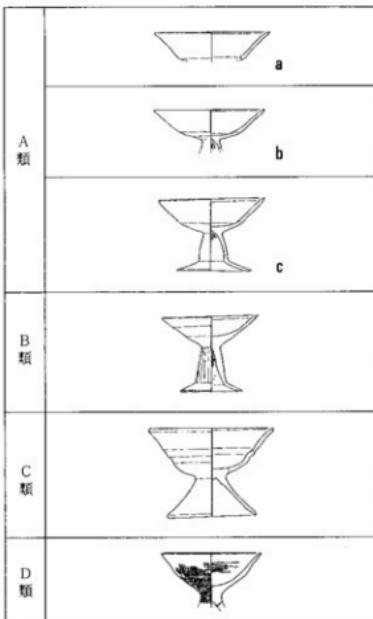
S字甕(210～255・257)には、細片ではあるが口縁部に刺突文がみられるA類(210)や体部に僅かにハケメがのこり、口縁部が内傾する211がある。また口縁端部が外上方にのびるB類(212～219)がある。口縁部がS字状から退化し、器壁も厚い220～236はC類に、口縁部の屈曲がなくなった237～241はD類にあたる。242～255・257はS字甕の脚台部である。256は台付甕の脚台部である。258は山陰系の影響を受けた甕である。259・260は山陰系の



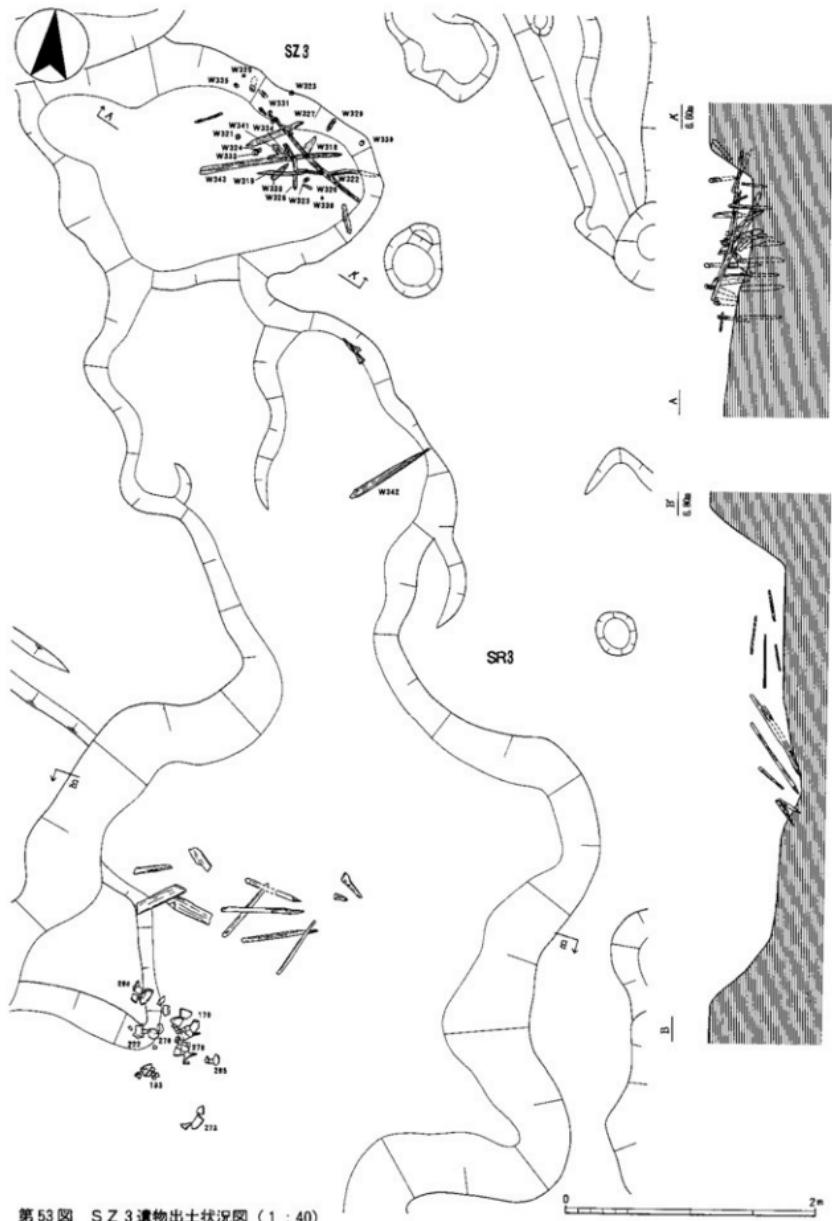
第50図 Pit 2出土木製品実測図 (1 : 4)



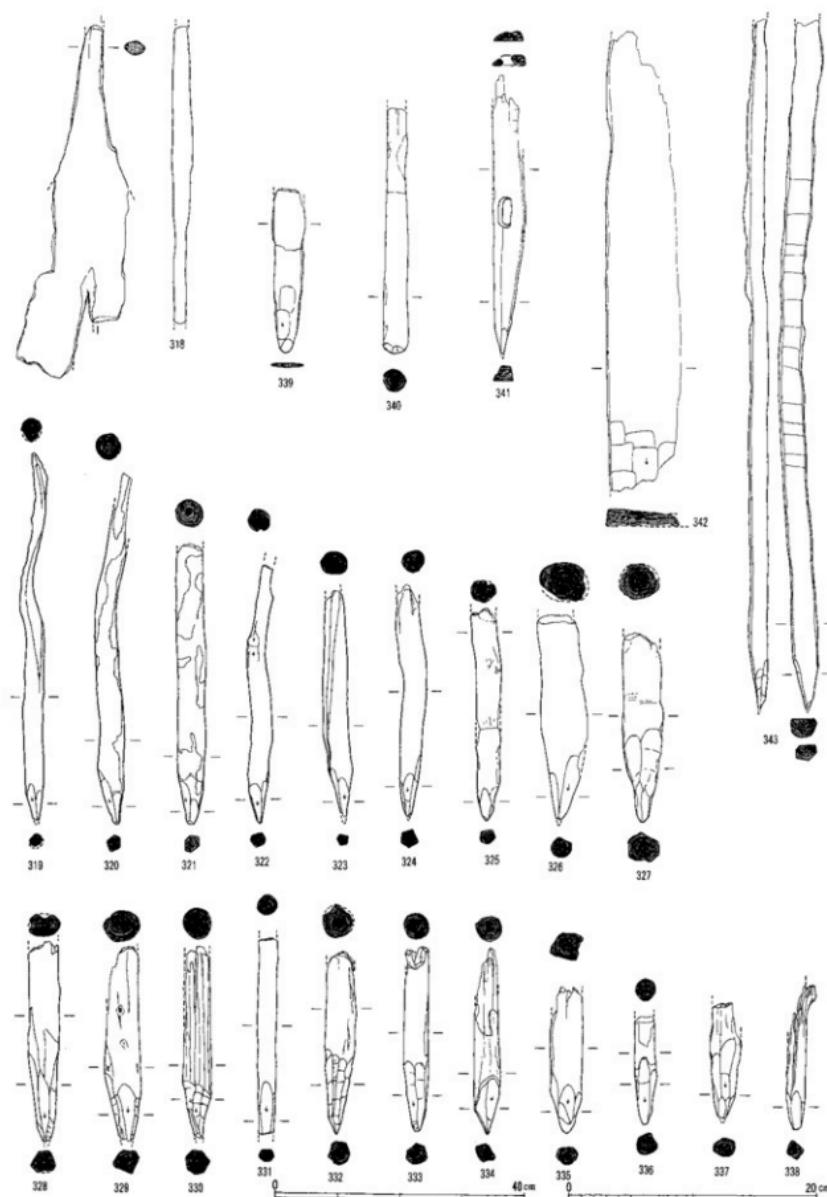
第51図 河道出土S字甕分類図



第52図 河道出土高杯分類図



第53図 SZ 3遺物出土状況図 (1:40)



第54図 S Z 3出土木製品実測図 (1 : 8、318は1 : 4)

臺である。

小型器台（261・262）は、口縁部のヨコナデが強く稜をもち内外面をヘラミガキする261と口縁部が直線的にのびる中空の262がある。

高杯については、第52図のように分類する。

A類：口縁部が外方にのび、杯底部から屈曲して杯部にいたる古墳時代通有の高杯。

a類：口縁部から端部が外反する。口径に比べ杯部が浅い。

b類：杯底部から直線的にのびる口縁部をもち、口径に比べ杯部が浅く、端部が尖り気味におわる。

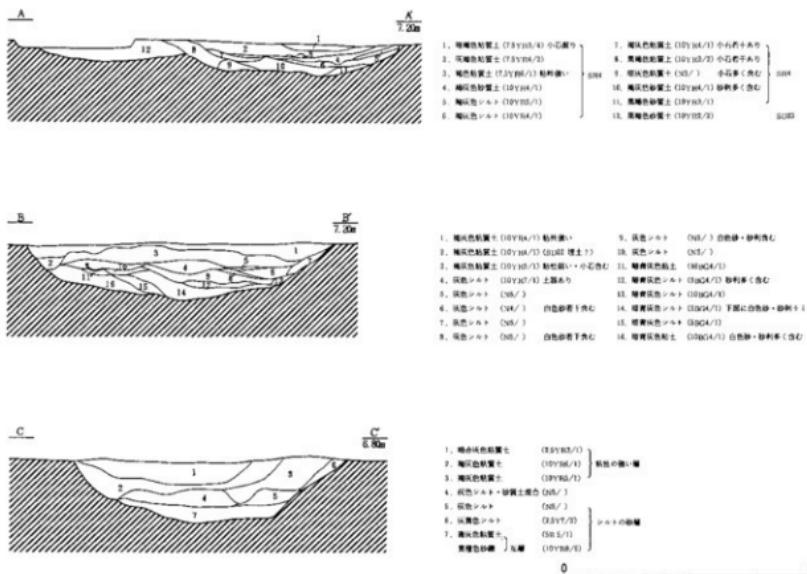
c類：杯底部と杯部の稜が不明瞭になり直線的に口縁部にいたる。

B類：杯底部から口縁部は直線的に開く。

C類：楕状の杯底部から段をもって立ち上がり、脚部はハ字状に直線的に開く。

D類：丸みをおびた杯底部から段をもたず、緩やかに立ち上がる。内面にミガキが見られるものもある。

高杯（263～289）には、口縁端部が受口状に立ち外面にヘラミガキで調整する弥生時代後期の山中式<sup>2</sup>の263がある。264は、杯底部と口縁部との境の稜が下位にあり欠山式でも新段階である。265は口縁部が内湾する杯部をもつ。266は杯底部が球形を呈し口縁部が外反する杯部に断面三角形の突帯がめぐる。また口縁部のクロスする刻目や突帯にみられる刻目から東海地方の影響を受け、北陸系土器をイメージした上器と考えられる<sup>3</sup>。267は杯部が外反する元屋敷式である。脚部（268）は円孔をもち裾部が直線的に開く欠山式に、269は裾部が広がり元屋敷式に属そう。270は平らな底部から直線的にのびる杯部を有する。271は平らな杯底部から口縁部が直線状にのびて端部が水平になる。口縁部と杯底部の境には稜が見られる。272は平らな杯底部から口縁部がややくびれる。273・274は、口縁部が外反する高杯でA a類に、275～277はおむねA b類に、278はAc類に属する。279は口径が小さく杯部が深い高杯である。280は口縁部が真っ直ぐのびるB類に属する。281・282は杯部に稜がなくD類である。



第55図 SR4、SR1土層断面図 (1:80)

283はハの字に聞く脚部から柄部が肥厚し端部が凹面になる。284は脚部に円孔がみられる。285～288は脚部が膨れる。289は手程ねによる高杯である。

鉢（291～293）は、口縁端部が逆し字状に水平に折れる291、丸い底部から口縁部が外反する小型鉢の292、外面にハケメがある有孔鉢の293がある。

ミニチュア土器（294・295）は、口縁部が内湾する椀を形取った294と体部に細かいハケメを施した甕の体部上半の295がある。

手捏ね土器（296～300）は、口縁端部が外反する大型品で、表面には指による調整がみられる296がある。また口縁端部が内傾してユビオサエの痕跡をとどめる297や内湾気味に立ち上がる298がある。299・300は体部が丸い小型の手捏ね土器である。

紡錘車（301）は、土製品である。側面が緩やかに反り円錐形を呈する。径2.9～3.1cmである。

290は図示したが、その上下は確かでない。

須恵器（302～312）には、杯蓋（302～305）、杯身（306・307）、有蓋高杯（308～310）、甕（311）、壺（312）がある。杯身（306）の外面には「×」のヘラ記号が見られる。これら須恵器の時期は田辺編年<sup>8</sup>のTK 23からTK 10型式に比定され、5世紀末から6世紀前半と考えられよう。

石製品（313～316）は、313の扁平片刃石斧片、314の凹石、315の石鍤、石斧を転用したと考えられる敲石または磨石の316がある。314は表面に敲打痕がみられる。313・314は砂岩製である。315は楕円形の礫を使い側縁部をつくる磨製の石鍤である。石英斑岩製である。316は礫岩製である。

#### S Z 3（第53・54図）

B地区の自然流路S R 3の中央で検出した杭列である。杭列は流れに直交するように東西方向に2ないし3列に打ち込まれていた。S Z 3のためにその南側が流れにより土坑状に掘り込んでいる。掘り込みの大きさは東西3.0m×南北1.92mで、東西に長い楕円形を呈している。深さはS R 3の底面から60cm程度である。S Z 3の影響によると考えられる凹地がS Z 3の南側に検出された。長さ11.1m×幅5.1m、深さはS R 3の底面から54cm程度である。

出土遺物 曲柄叉鍬（318）は、いわゆる「ナスビ形鍬先」の身部である。着柄部は断面が楕円形を

呈している。刃部は外側とも削り出さず、柄頭部に柄と身を緊縛するための段や突起はみられない。

杭（319～338）は、自然木の先端を尖らせた丸杭である。丸杭の現存長23～56cmで、径2.6～7.0cmである。

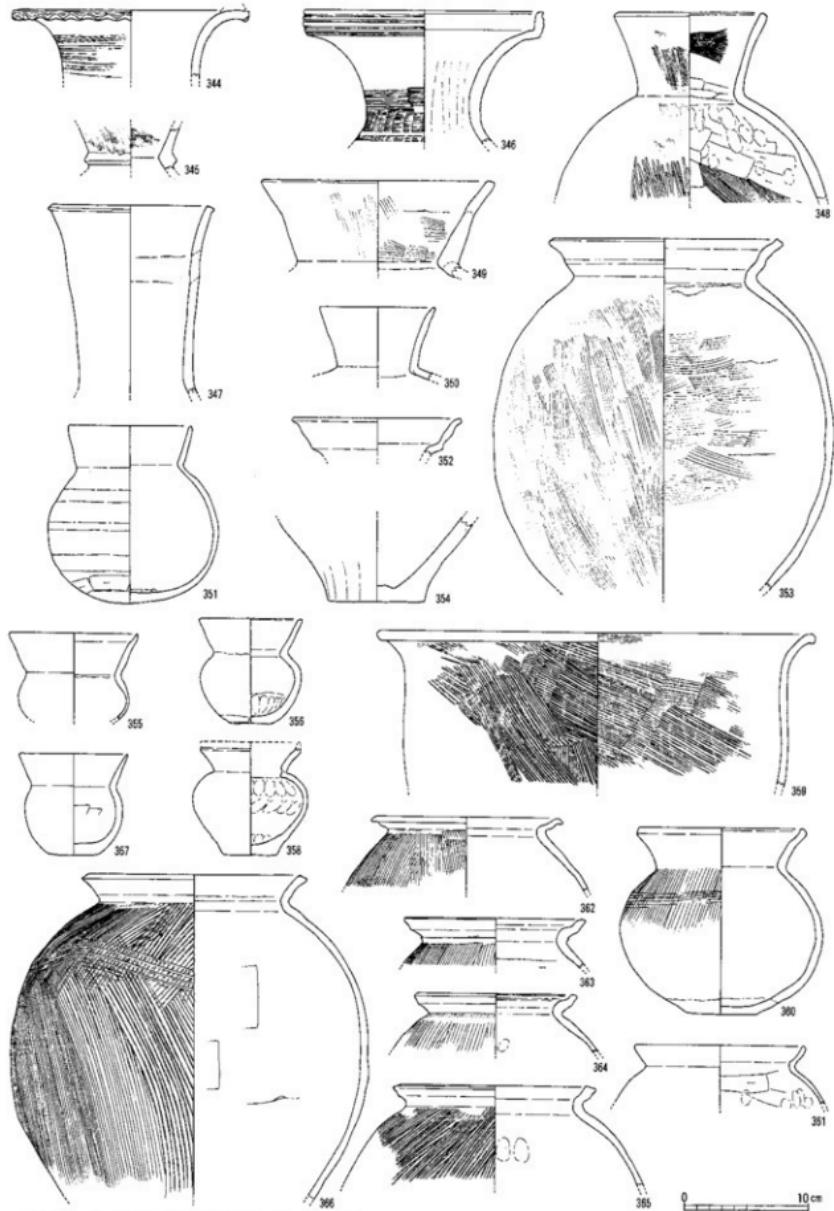
用途不明品（339～343）は、削りを入れた板材の339がある。円孔がみられる341は転用杭と考えられる。また先端を円形に削る340や板材にそって削りをいたれた342、角材の先端を削る343がある。

#### S R 4（第55～60図・PL-26・44・45・54）

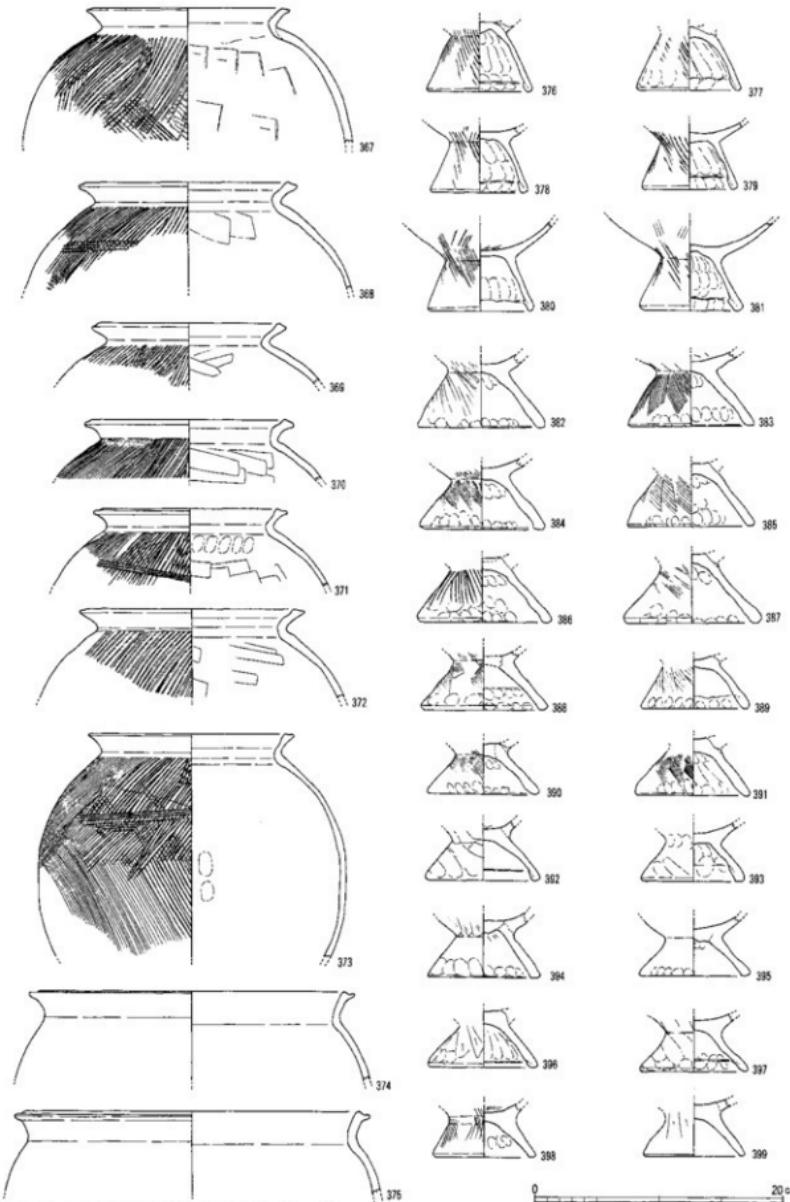
C地区で検出した北西から中央でS字状に蛇行しながら南東に流れる自然流路である。幅2.0～5.0m、深さ35～91cm程度である。その北西端は弥生時代のS R 1を切る。埋土は調査時に褐色粘質土の上層と灰色シルトの中層、青灰色粘質土に粗砂が混入する下層に分層したが、下層からはS字甕や土師器甕とともに須恵器杯蓋・杯身が完形で出土している。各層の遺物の時期差は少ないとと思われる。

遺物は、出土量は遺構の中でもS R 3に次いで多く、コンテナバット37箱になる。土器の中では土師器に対して須恵器の出土量が多い。土師器や須恵器などのほか、管玉や磁石の石製品や流路底の粗砂層から1点であるが木製品の風呂敷（452）が出土している。時期は下層出土の須恵器やS字甕などから古墳時代後期と考える。

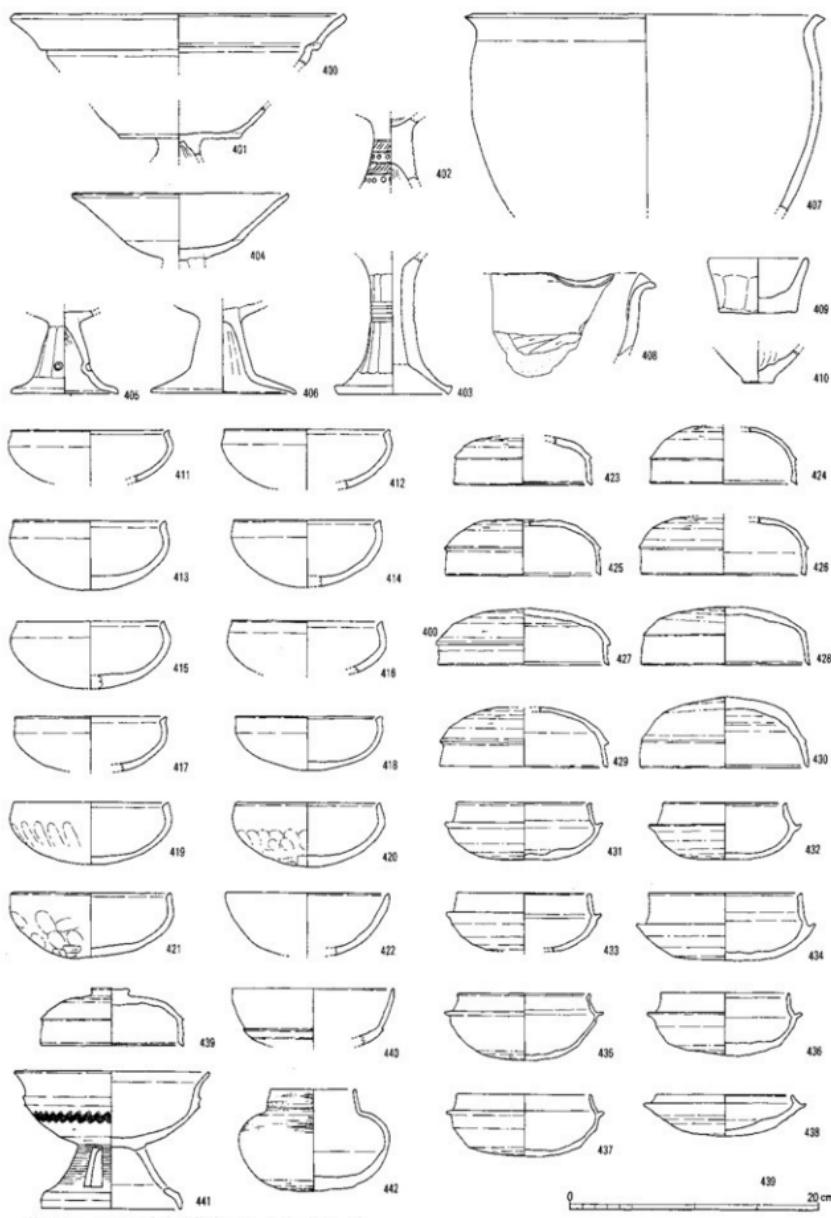
出土遺物 壺（344～358）は、口縁部が緩やかに外反して端部が垂下し、その端部に指による押圧が見られる広口壺（344）がある。時期は弥生時代の中期前葉である。また頸部に突帯がめぐる345は、広口壺であろう。受口壺（346）は、緩やかに外反する頸部から受口状に屈折する口縁部をもち、端部には回線文がめぐる。長頸壺（347）は口縁部が直線的にのび、端部外面に面をつくる。直口壺（348～351）は口縁部から体部にかけてハケメがのこる348、口縁端部に面をもつ大型の349、端部が尖る小型の350や球形の体部をもつ351がある。二重口縁壺（352・353）は、体部内外面をハケ調整する353がある。354は壺の底部である。小型丸底壺には小片であるが、355がある。小型平底壺（356～358）には、口径が体部径より大きい356や357がある。これらは358に比べてやや古い傾向を示す。



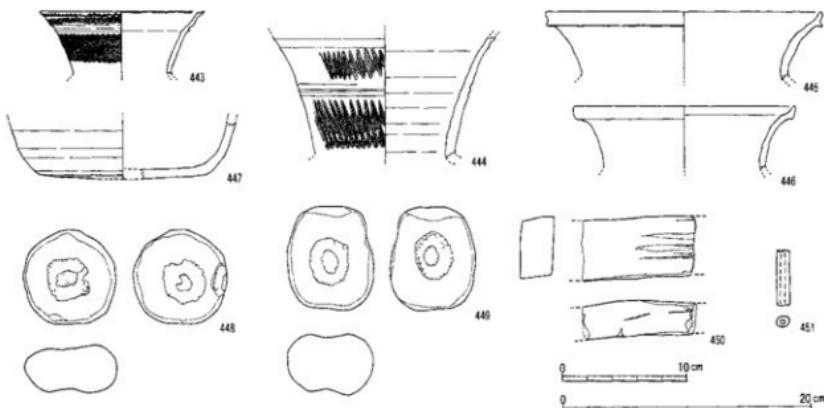
第56図 SR 4 出土遺物実測図 (1) (1 : 4)



第57図 SR 4 出土遺物実測図(2) (1 : 4)



第58図 SR 4出土遺物実測図(3)(1:4)



第59図 SR 4出土石製品実測図 (1:4, 451は1:2)

甕 (359～399) は、口縁部が外反して体部内外面に櫛状工具によるハケメを施す弥生時代の甕 (359) は、混入によるものである。く字甕には、口縁端部を内傾させ、体部の調整技法も S字甕の技法を用い

る 360 や内湾する口縁部をもち内面は横位に削る 361 がある。398・399 はく字甕の脚台部である。S 字甕 (362～397) は、口縁端部が外上方にのびる 362 は B 類に、端部が外傾する面をもつ 363～365 は C 類に、器壁が厚くなり口縁端部が肥厚する 366～37 3 は D 類に、口縁部が水平にのびる 374・375 は E 類に属する。376～397 は S 字甕の脚台部である。

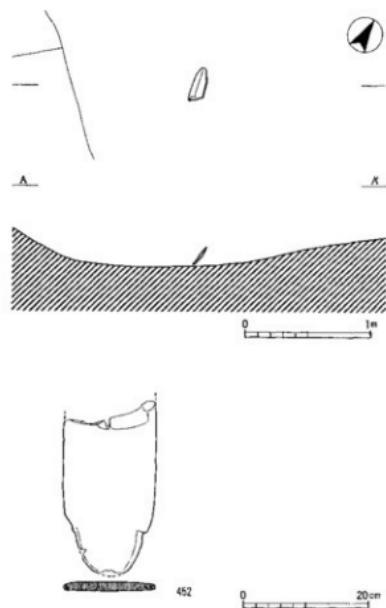
高杯 (400～406) には、椀状の杯底部から段をもって外反する大型の高杯 (400) は、本分類の C 類にあたる。401 は平らな杯底部から稜をもって口縁部がのびる高杯で、脚部が聞くと考えられる。また脚部に沈線を施し沈線間に刺突文と円形浮文がみられる 402 や脚部の裾が上に尖り気味におわる 403 は、弥生時代後期の所産である。404 は杯部で A 類に属す。405 は脚部の中央に棒状工具により押圧痕をとどめる。406 は脚部が折して裾部にいたる。

鉢 (407・408) は片口鉢である。407 の体部はナデ調整をおこなう。408 の体部外面下半はヘラケズリで調整する。

手捏ね上器 (409) は、体部下半を縱位に指で調整する。内面はナデである。

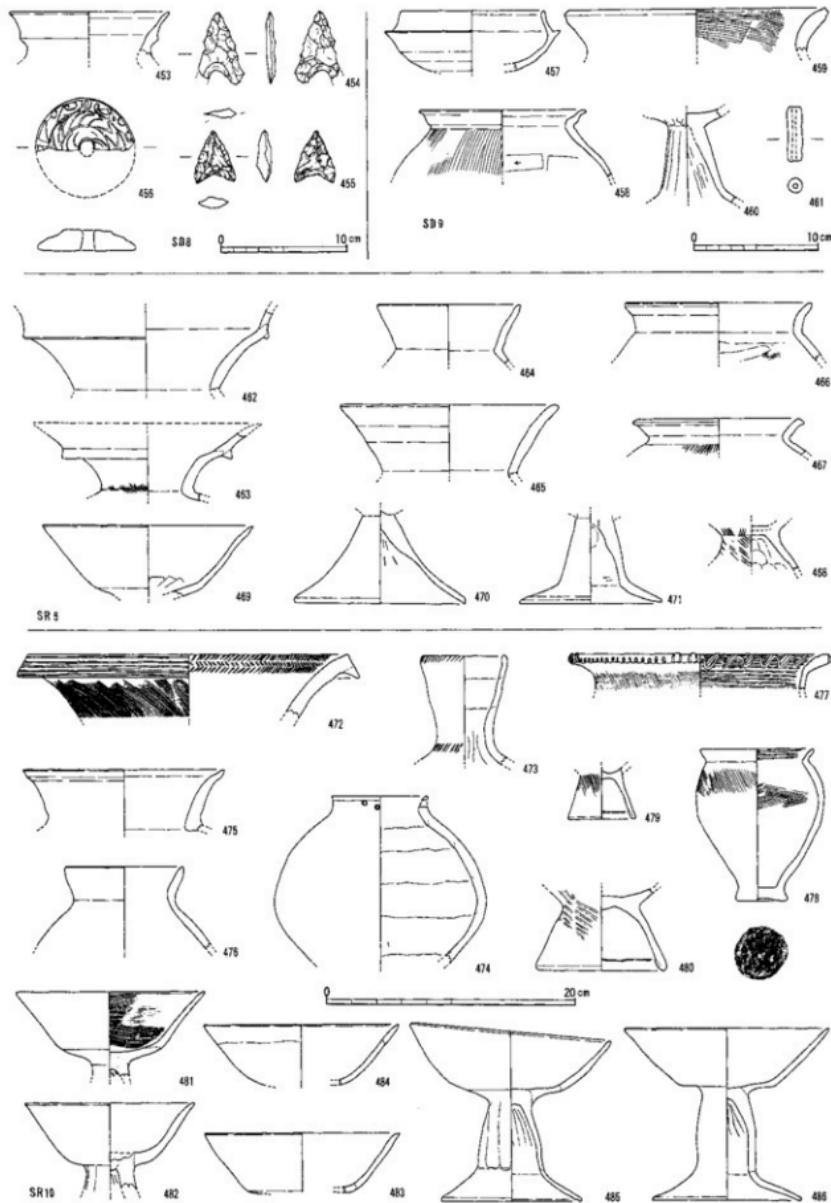
ミニチュア土器 (410) は、壺の体部下半である。体部外面はナデ、内面はユビオサエの後ナデである。

椀 (411～422) は、口縁部のヨコナデにより内傾する面をもち口縁部外面が凹面状になり、外上方に尖り気味におわるもの 411～418 とヨコナデが弱く

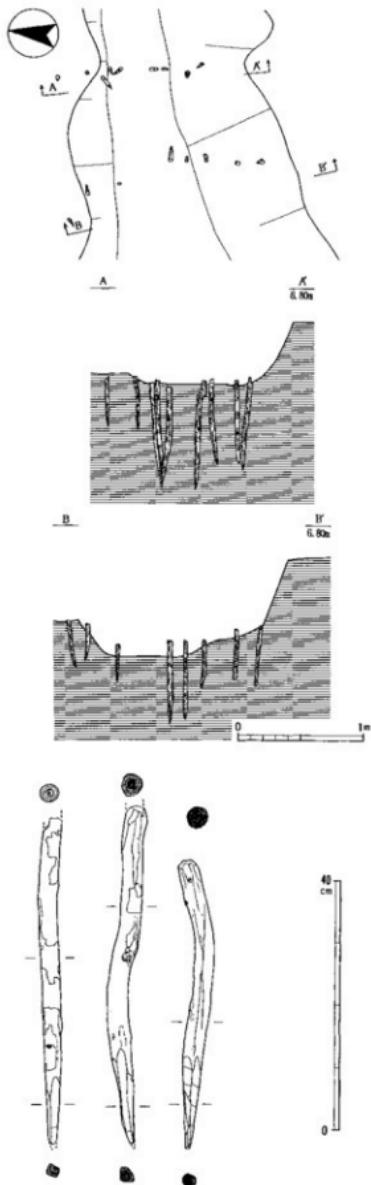


第60図 SR 4木製品出土状況図 (1:40)

・出土木製品実測図 (1:8)



第61図 SR 5、SD 8+9+10出土遺物実測図・拓影図 (1 : 4、454~456・461は1 : 2)



第62図 S Z 4 実測図 (1:40)  
・出土木製品実測図 (1:8)

口縁部に内傾する面をもつだけの419～421がある。422のように口縁部内面が沈線状になるものもある。

須恵器 (423～447) は、杯蓋 (423～430)、杯身 (431～438)、有蓋高杯蓋 (439)、無蓋高杯 (440・441)、短頸壺 (442)、広口壺 (443～447) などが出上している。これらは田辺編年のTK 23型式からTK 48型式に併行し、杯身の446はTK 209型式に併行する。5世紀末から7世紀初めの所産である。

石製品 (448～451) がある。448・449は凹石である。448は円形を呈し偏平な縁を使用する。花崗岩製である。449は梢円形を呈した448よりも厚みのある縁を使用する。閃緑岩製である。ともに表面および裏面ともよく使用され、中央部に敲打による突起がみられる。450は砥石で、表面および裏面と両側面には使用痕がみられる。砂岩製である。451は管玉で、碧玉製である。

木製品には、風呂鋤の鋤身の下半部 (452) がある。河道底の粗砂直上から出土したものである。先端に鉄製のU字形刃先を装着する。

#### S D 7

C地区の西側で検出したSR 4から流れる南北溝である。幅50cm、深さ7～34cm程である。

遺物は土師器甕細片が出土している。

#### S D 8 (第61図・PL-46)

B地区およびC地区で検出した北西からやや東に湾曲して南東に流れる溝である。幅1.2～2.7mである。深さは13～30cm程である。東に向きを変えてSR 3に流れていると考える。

出土遺物 壺 (453) は、短く外反する退化した口縁部をもつ二重口縁壺の口縁部である。

石製品 (454～456) には、無茎凹基式の石鏡 (454・455) や紡錘車 (456) がある。石鏡はともにサヌカイト製である。また紡錘車 (456) は、滑石製で外面に幾何学的な文様を線刻する。

#### S D 9 (第61図・PL-46)

C地区で検出したSD 8から南東にはほぼ直線的に伸びる溝である。幅1.3mではほぼ平均した溝幅である。深さは23～30cm程である。南でSR 3と切り合っているが、SD 9の方が新しい。

出土遺物 須恵器 (457) は、田辺編年のTK 47型式に併行する杯身である。6世紀初頭頃である。

壺（458・459）のうち、S字壺（458）は、口縁端部が外にのびる。また459は口縁部が肥厚し端部を上方につまみ上げる長脚臺である。

高杯（460）は直線的な脚柱部をもつ高杯である。

石製品には、滑石製の管状（461）がある。

#### S R 5 (第61図・PL-46)

C地区東中央で検出したS R 3から東に流れる自然流路で、流路幅はほぼ平均しており約3.0m前後で、深さ10cm程度で幅が広く浅い流路である。

**出土遺物** 二重口縁壺（462・463）は、口縁部が立つ462と外反するパレススタイルの壺（463）がある。直口壺（464・465）は、直線的にのびる464と口縁が外反気味に開く465がある。

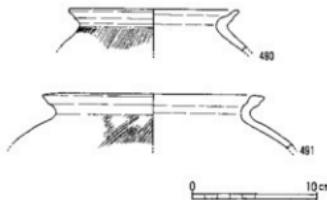
く字壺（466）は、頸部から口縁部にかけて緩やかに外反し口縁端部を丸くおさめる。S字壺（467）は、口縁部の屈曲がなくなりD類に属する。また脚台部（467）は、外面に粗いハケメがみられる。

高杯（469～471）は、口縁部が外反気味にのびる469がある。470は直線的に開き、C類の脚部であろう。471は裾部がく字状に屈折する。

#### S D 10 (第61図)

C地区で検出した北東から南西に直線的にのびる溝で、上層の古墳時代と下層の弥生時代に分かれ。弥生時代のS D 4はS R 3から流れ込んだと考える。幅2.7～4.3m、深さは29～96cm程度である。

**出土遺物** 広口壺（472）は、パレススタイルの壺である。口縁部には端部下に粘土を貼付して下方にのばし外面に擬凹線をめぐらす。内面には羽状の刺突文が見られる。細頸壺（473）は、口縁部が体



第63図 S R 6出土遺物実測図(1:4)

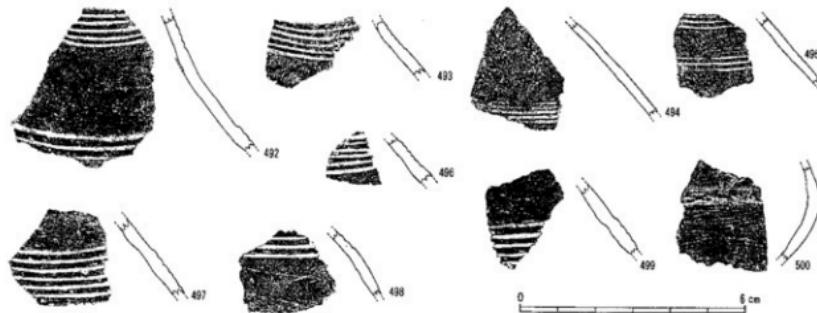
部から緩やかに外方にのびて、端部は内湾気味におわる。口縁部と頸部に刺突文がめぐる。内面には粘土紐の接合痕がのこる。無頸壺（474）は、口縁部が尖り気味におわる。口縁部には2孔一対の円孔が2方向にみられる。直口壺（475・476）は、外反して開く475と短く立ち上がる476がある。

壺（477）は、口縁部が緩やかに外反して端部が肥厚する弥生時代中期の壺で、外面をハケ調整する。く字壺（478）は、口縁部が短く直線的で、底部に木葉痕がみられる。S字壺の脚台部（479・480）には、通行の人大きさの479と小型の480がある。

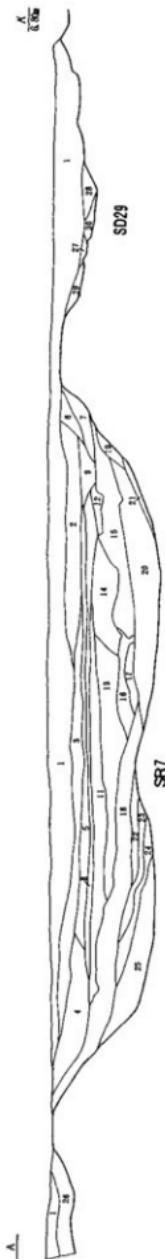
高杯（481～486）は、口縁部が杯底部から直線的にのびるものである。481・482は口径15cm前後で器高に対して杯部がやや小さい高杯である。483～486は口径16cm前後とやや大きく、調整は481・482と同じである。

#### S D 11

C地区南東隅で検出した南西から逆U字形に湾曲する溝で、幅1.5～3.5m、深さ27～75cmである。D地区の河道S R 7に繋がる溝と考える。溝の中央部で杭列S Z 4を検出した。調査区東壁の上層断面か

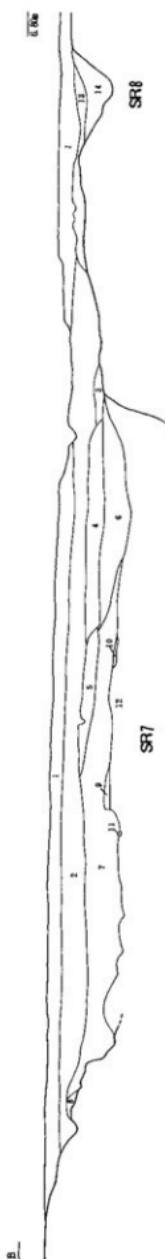


第64図 S R 7出土遺物拓影図(1:3)

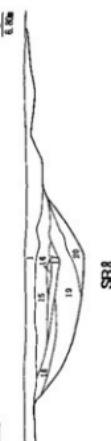


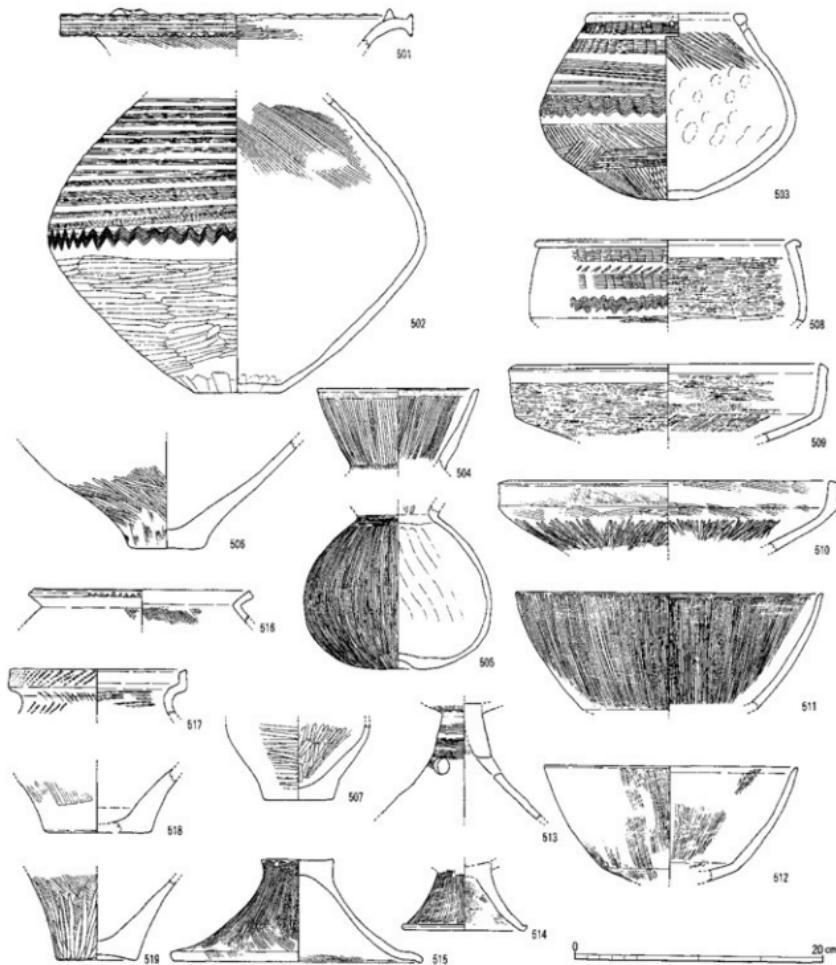
第 65 図 SR7 土層断面図 (1 : 80)

1. 細粒褐色シルト (DTR 6.0) ■ 黄褐色色調シルト (DTR 5.0)  
 2. 黄褐色色調シルト (DTR 5.0)  
 3. 岩礫充填土 (DTR 5.0)  
 4. 黄褐色色調土 (DTR 5.0)  
 5. 砂と同じ  
 6. 黄褐色色調土 (DTR 5.0)  
 7. 黑褐色土 (DTR 5.0) ■ 黒い褐褐色色調土 (DTR 5.0)  
 8. 黑褐色シルト (DTR 5.0) 大理石化  
 9. 黑褐色シルト (DTR 5.0)  
 10. 黑褐色シルト (DTR 5.0)  
 11. 黑褐色シルト (DTR 5.0)  
 12. 黑褐色シルト (DTR 5.0)  
 13. 黑褐色シルト (DTR 5.0)  
 14. 黑褐色シルト (DTR 5.0) ■ 黄褐色色調シルト (DTR 5.0)  
 15. 黑褐色シルト (DTR 5.0)  
 16. 黑褐色色調土 (DTR 5.0)  
 17. 黑褐色土 (DTR 5.0)  
 18. 黑褐色色調土 (DTR 5.0)  
 19. 黑褐色色調土 (DTR 5.0)  
 20. 黑褐色色調土 (DTR 5.0)  
 21. 黑褐色色調土 (DTR 5.0)  
 22. 黑褐色色調土 (DTR 5.0)  
 23. 黑褐色色調土 (DTR 5.0)  
 24. 黑褐色色調土 (DTR 5.0)  
 25. 黑褐色色調土 (DTR 5.0)  
 26. 黑褐色シルト (DTR 5.0)  
 27. 黑褐色シルト (DTR 5.0)  
 28. 黑褐色シルト (DTR 5.0)  
 29. 黑褐色色調土 (DTR 5.0)



1. 黑褐色シルト (DTR 6.0) ■ 黄褐色色調シルト (DTR 6.0)  
 2. 黑褐色色調土 (DTR 6.0)  
 3. 黑褐色シルト (DTR 6.0)  
 4. 黑褐色色調土 (DTR 6.0)  
 5. 黑褐色色調土 (DTR 6.0)  
 6. 黑褐色色調土 (DTR 6.0)  
 7. 黑褐色色調土 (DTR 6.0)  
 8. 黑褐色色調土 (DTR 6.0)  
 9. 黑褐色シルト (DTR 6.0)  
 10. 黑褐色色調土 (DTR 6.0)  
 11. 黑褐色色調土 (DTR 6.0)  
 12. 黑褐色色調土 (DTR 6.0)  
 13. 2. 2. 2.  
 14. 黑褐色シルト (DTR 6.0)  
 15. 黑褐色色調土 (DTR 6.0)  
 16. 黑褐色シルト (DTR 6.0)  
 17. 黑褐色色調土 (DTR 6.0)  
 18. 黑褐色色調土 (DTR 6.0)  
 19. 黑褐色色調土 (DTR 6.0)  
 20. 黑褐色色調土 (DTR 6.0)





第66図 SR7出土弥生時代遺物実測図（1:4）

らSR3より古い溝である。

#### S Z 4 (第62図)

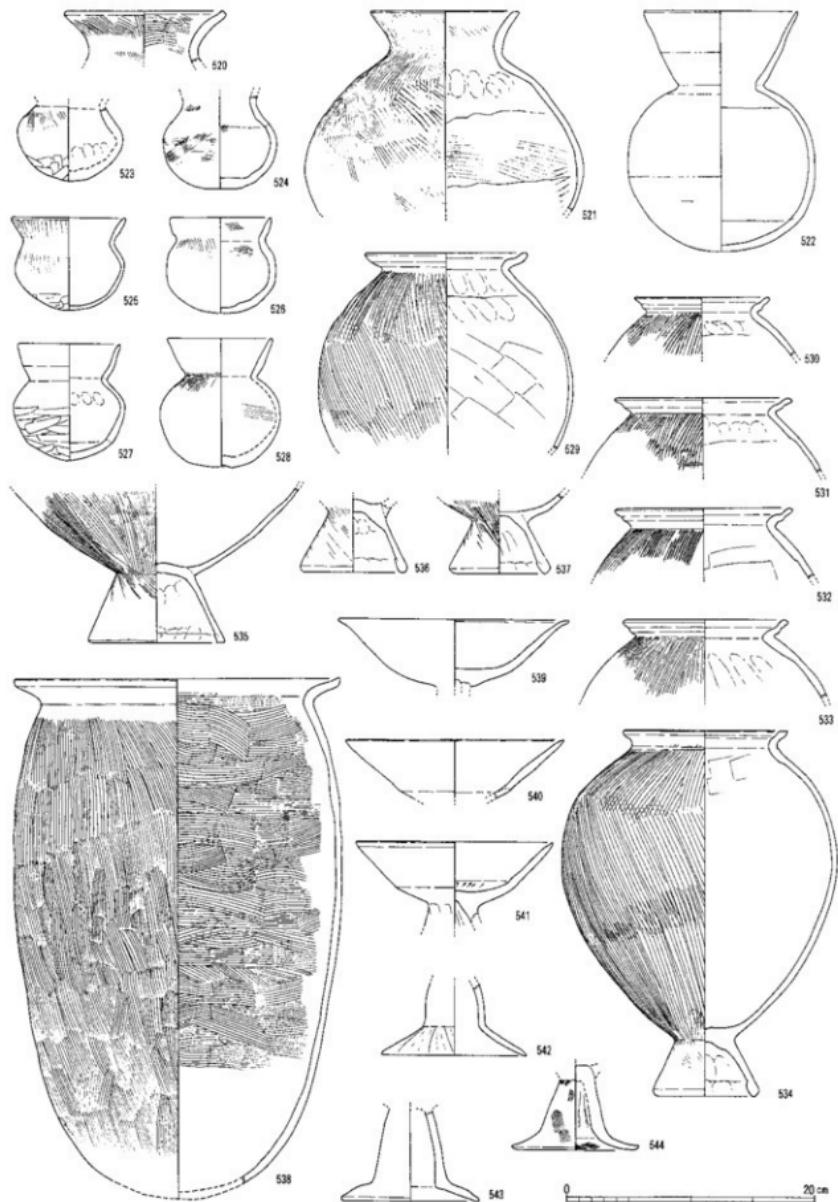
C地区南東隅に位置するS D 11に伴う杭列である。杭列は流れに直交するように東西2列に打ち込まれていた。杭数は東西あわせて17本である。

**出土遺物** 杭(487~489)は、自然木を利用した丸杭である。現存長46~54cm、径2.6~3.4cm。

#### SR 6 (第63図)

D地区北東隅で検出した北西から南東に流れる自然流路である。幅1.9m、深さ35~36cm程ある。SR 6はC地区の自然流路SR 4から続くと考える。遺物には、古墳時代中期のS字甕がある。

**出土遺物** S字甕(490・491)は、口縁部の屈曲が弱まる490はB類に、口縁端部が肥厚する491はC



第67図 S R 7出土古墳時代遺物実測図 (1 : 4)

類にあたる。

S R 7 (第 64~69 図・P L -21・26・46~49・54)

D 地区北中央で検出した東西方向に流れる河道である。幅 5.0~12.4m、深さ 1.27~1.80m 程度で、やや北東に流れ向きを南に変え、さらに東にとる。河道内には北岸に貯水施設 S Z 5、その東の北岸中央には護岸施設 S Z 6、さらに S Z 6 の東側に護岸施設 S Z 7 が作られている。また S Z 7 からは、河道内にのびる杭列 S Z 8 が作られている。

遺物には、北岸の S Z 5~7 やその周辺から出土した弥生時代前期の細片 (492~500)、S Z 6 から出土した弥生時代中期の壺 (506) や北岸際で出土した同じ中期の無頭壺 (503) があるが、これらは河道 S R 7 の流れに取り残されたものと考える。また古墳時代後期の長胴甕 (548) も出土しているが、上層からで、S R 7 の中心となる遺物は、小型丸底壺や S 字甕など古墳時代中期の上器である。また木製品には曲物底板、鋸先、釘柄などが出土している。

**出土遺物** 弥生土器には壺 (492~507)、鉢 (508)、高杯 (509~514)、蓋 (515)、甕 (516~519) がある。

壺 (492~507) には、前期から中期前葉の弥生土器壺の細片 (490~500) がある。492・493、495~499 には削り出し凸帯や沈線が 3 条以上みられる。494 は貝殻腹縁による条痕が、500 には体部に貼り付け凸帯がみられ、凸帯以下をミガキで調整する。広口壺 (501) は口縁端部が上下に肥厚するものである。口縁部内面に瘤状突起が貼り付けられ、口縁端部には凹線文を施している。502 は体部外表面を模状工具による文様で飾る。無頭壺 (503) は、完形品で口縁部に 2 孔一対の円孔が 2 方向にみられる。瓢形壺 (504・505) は口縁部と体部である。506 は壺底部、507 は小型壺の体部下半である。

鉢 (508) は、内湾氣味に立ち上がる体部から口

縁部が外側に折り返す。内面にミガキを施す。弥生時代中期の所産である。

高杯 (509~514) は、杯部が浅く口縁部が直立気味に立ち上がる 509・510 は山中式。杯部が深く稜が下位にある 511・512 は欠山式。脚部 (513) は、ラッパ状に開き 3 方に透孔をもち欠山式の所産である。514 は脚裾端部が上方に屈曲する。

蓋 (515) は、等状で外面を縁位にハケメを施す。大きさから甕の蓋と考える。

甕 (516~519) は、く字甕 (516) や受口甕 (517) がある。516 は体部内外面にハケメを施す。517 は器壁が厚い。518・519 は底部である。

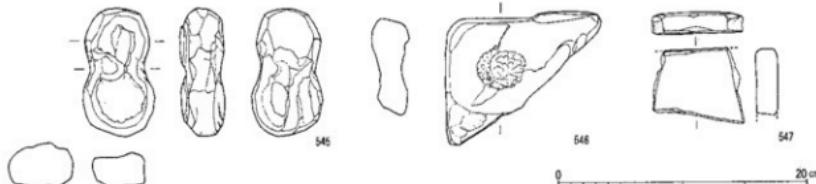
古墳時代の上器には、壺 (520~528)、甕 (529~538)、高杯 (538~543) がある。

壺 (520~528) には、口縁部が頭部から緩やかに開き、口縁部の外面を縁位に内面を横位にハケ調整する広口壺 (520・521) がある。直口壺 (522) は、球形の体部に口縁部が直線的に開く。小型丸底壺 (523~528) は、体部から口縁部が緩やかに開く 523・524 や口縁部が短く口径と体部径がほぼ同じ 525・526 がある。527・528 は、口径が体部径より小さいものである。

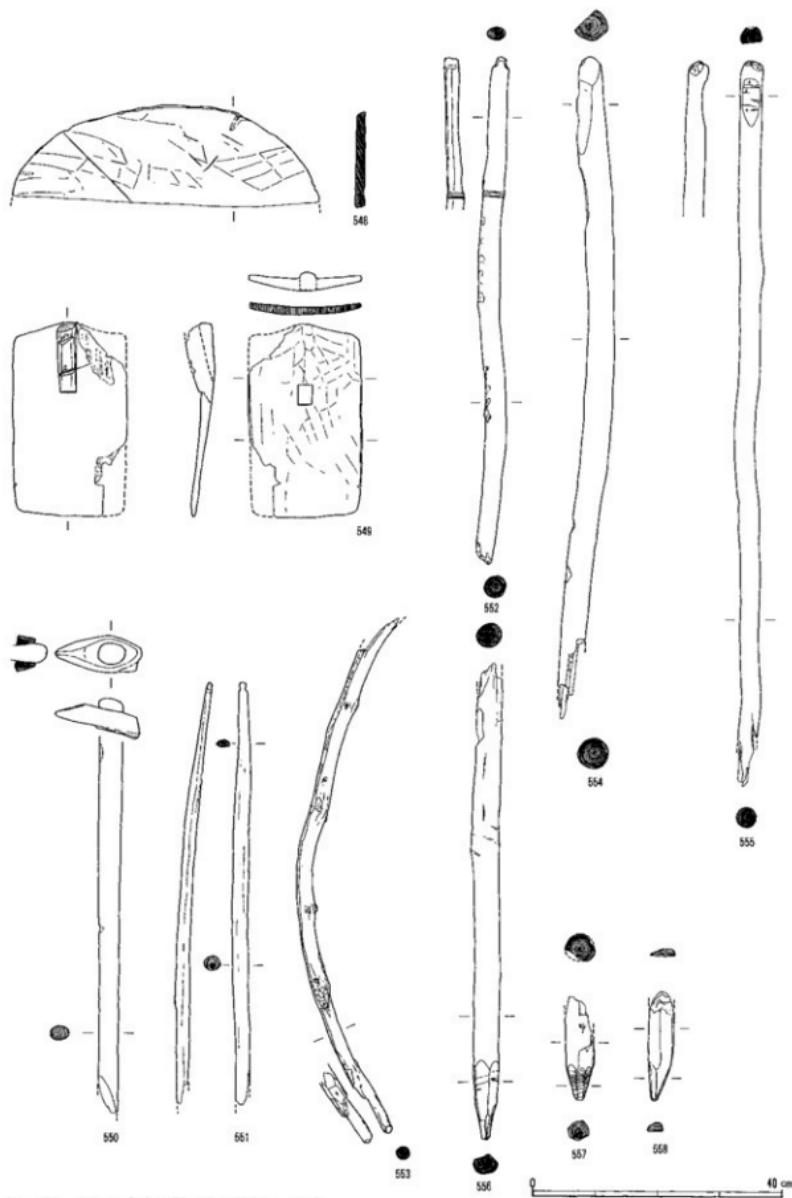
甕 (529~538) には、口縁部が上方に内湾氣味にのびる 529 と I 線端部が丸みをおびる 530、口縁部が肥厚する 531~534 がある。いずれも C 類に属す S 字甕である。535~537 は脚裾部を折り返す脚台部である。長胴甕 (538) は、く字状に強く屈曲する頭部から口縁端部を外上方にのばす。

高杯 (539~544) は、杯部が内湾氣味にのびて口縁端部が外反する 539 は A a 類に、口縁部が直線的にのびる 540 は A b 類に属する。541 は口径が小さい高杯である。542~544 は高杯の脚部である。

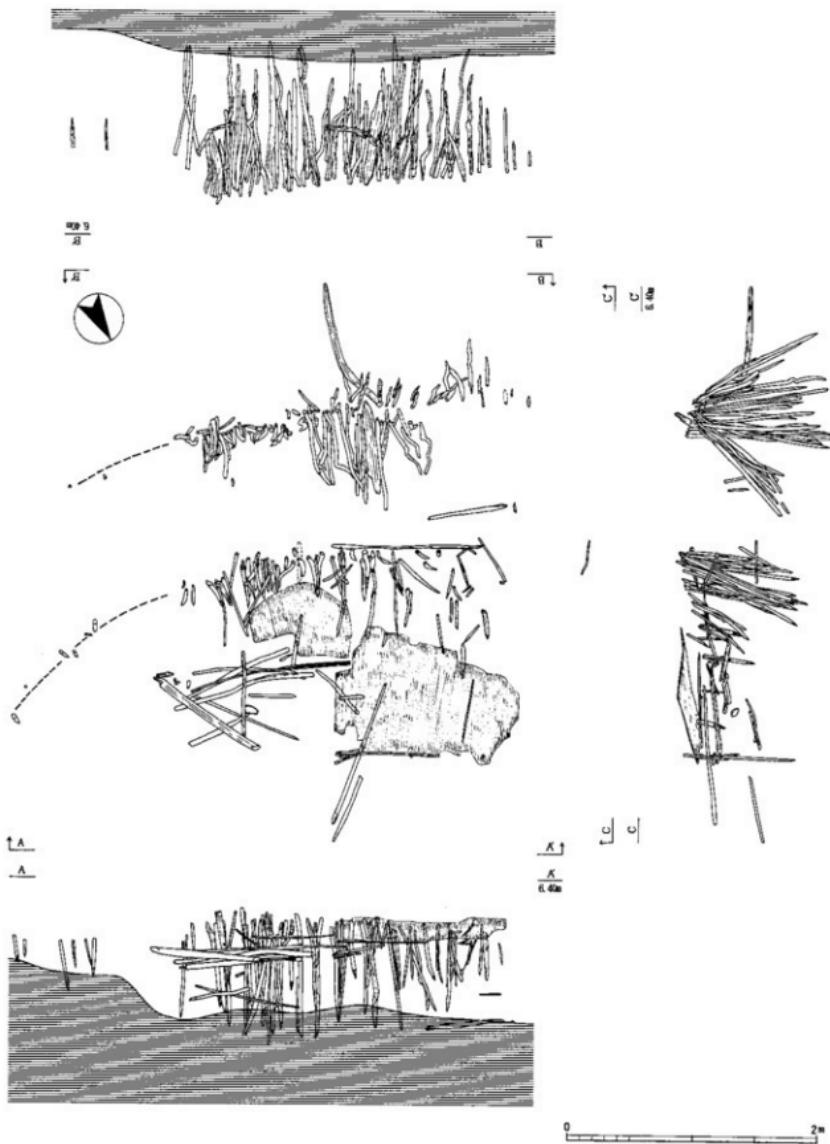
石製品には、(545~547) がある。545 は石鉗で、



第 68 図 SR 7 出土石製品実測図 (1 : 4)



第69図 SR 7出土木製品実測図 (1 : 8)



第70図 SZ 5実測図 (1 : 40)

長楕円形の縁を使用したものである。中央部の周囲に打ち欠きにより窪んでいる。表面の片側には敲打による痕跡がみられ、敲石に使われた可能性がある。砂岩製である。546は凹石で、方形の縁を打ち欠き、表面および裏面に敲打による窪みが見られる。547は砥石で、両面が使用されて平滑である。砂岩製である。

木製品には、548～558がある。548は曲物底板で、縁辺には2か所に木釘の痕跡がみられる。表面には不定方向にケズリ痕がみられる。549は組合せ鋤の鋤身の部分で、柄の一部を装着したままで出土した。身には方形の納孔が穿たれている。柄と身の着柄角度は鈍角をなしている。550は直柄鋤の柄で、柄には鋤身の隆起部をともなって出土した。鋤身自体は欠落している。551は破損した丸木弓である。先端

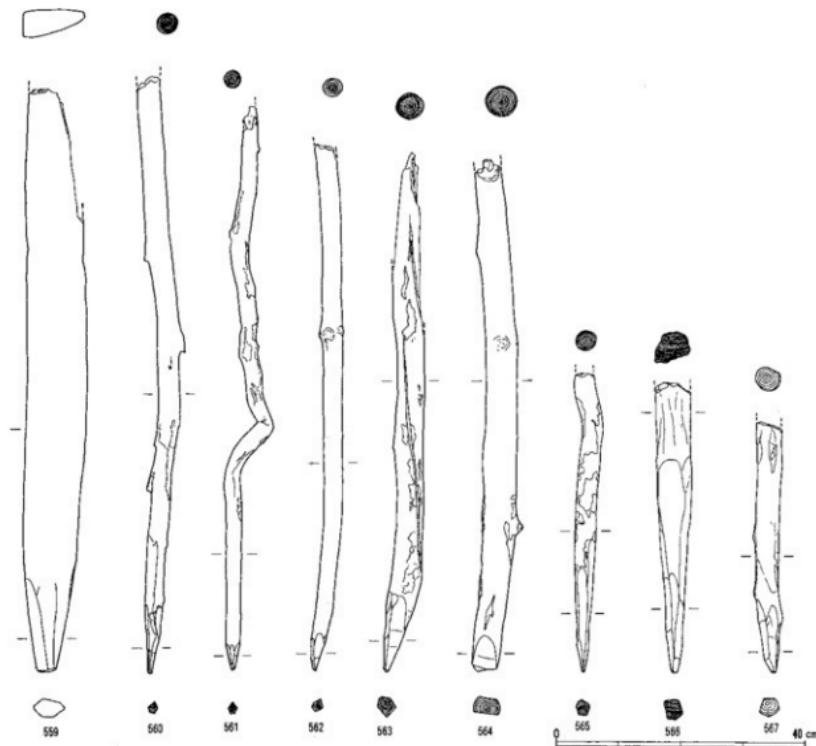
部の両側を削り弓ハズを作る。554・555は建築部材である。554は先端を削る垂木である。555はともに垂木である。

杭(556～558)は、自然木を利用した丸杭である。

用途不明品(552・553)は、先端部の両側を削り出す552は、弓の弓ハズかと思われるが、断定できない。また553は先端部を削る弓状の木製品である。

#### SZ 5 (第70・71図・PL-22)

河道SR7の北岸側に作られた貯水施設である。この施設の北側が袋状に窪んでおり、施設を作ることによって一定の水量を溜めていたと考える。窪みの規模は東西3.65m×南北3.3m程度である。施設は北側の草木質の敷物状遺構と、それを保護するようアーチ状に構築された北側の杭列と南側の杭列か



第71図 SZ 5出土木製品実測図 (1 : 8)

らなる。敷物状遺構の残存規模は、東西 2.2m × 南北 1.4m 程である。敷物状遺構を固定するために径約 2cm、長さ 29~65cm の細い縦杭を北辺部に打ち込み、同様の細い横木で止めている。北側の杭列は、東西の長さ 2.5m 程で、縦杭を打った後に北側に斜杭を打っている。杭径 2~3cm、長さ 0.8~0.9m 程でほぼ揃っている。南側の杭列は東西の長さ 2.8m 程で、縦杭を打った後に北と南に斜杭を打って補強している。杭径 2~4cm、長さ 1.0~1.2m 程で、南

側の杭列は、河道の深さに応じた長い杭を打ち込んでいる。この 2 つの杭列間は、約 1.1m 程で平行しており、東辺部を緩やかに北側に曲げている。

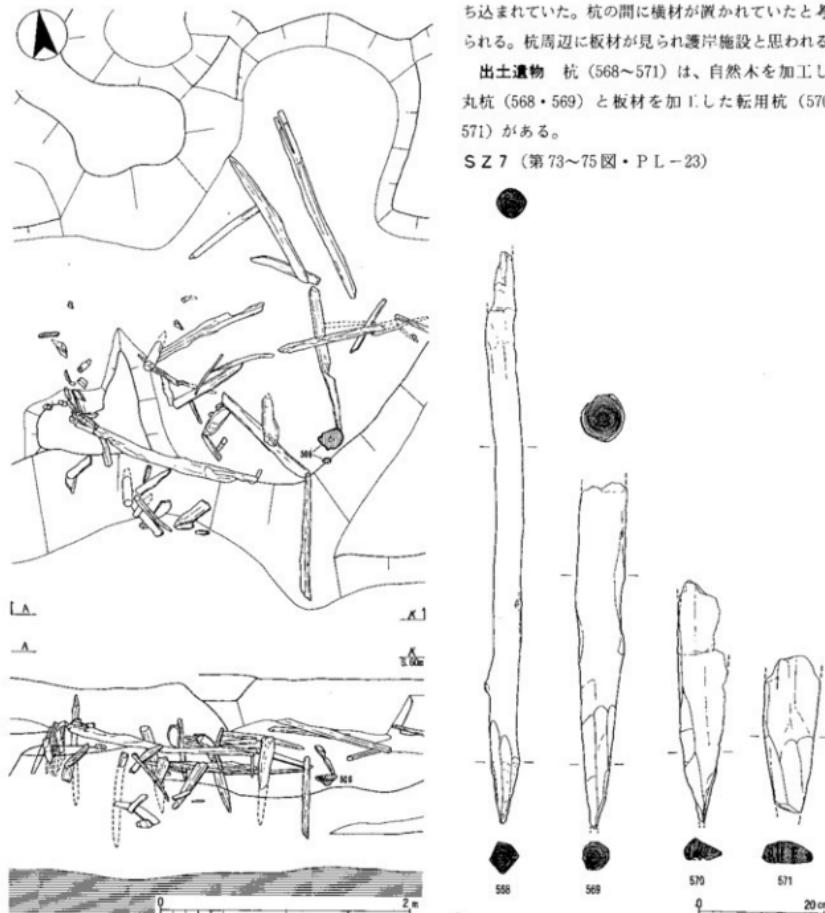
**出土遺物** 杭 (559~567) は、板材を加工した転用杭 (559) や自然木を利用した丸杭 (560~567) である。

#### S Z 6 (第 72 図・P L - 23)

河道 S R 7 の北岸側で、貯水施設 S Z 5 の東側に位置する。杭径 5~10cm、長さ 70~90cm 程の杭が打ち込まれていた。杭の間に横材が置かれていたと考えられる。杭周辺に板材が見られ護岸施設と思われる。

**出土遺物** 杭 (568~571) は、自然木を加工した丸杭 (568~569) と板材を加工した転用杭 (570~571) がある。

#### S Z 7 (第 73~75 図・P L - 23)



第 72 図 S Z 6 実測図 (1 : 40)・出土木製品実測図 (1 : 8)

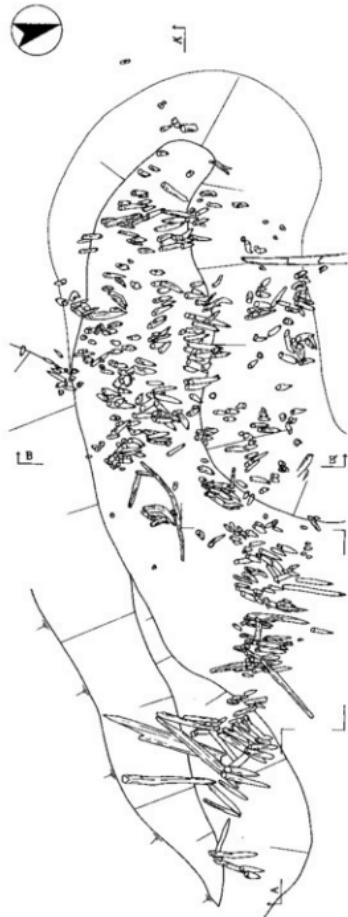
河道 S R 7 の北岸側で、S Z 6 の東側に位置する護岸施設である。400 本以上を数える夥しい杭が打ち込まれていた。杭が打ち込まれた範囲は東西 6.5 m × 南北 2.2 m である。杭径 4 ~ 6 cm で、残存長 0.6 ~ 0.8 m 程のほぼ均質な杭を使用している。S R 7 から水を引き込むために基盤が粗砂層であるため集中的に打たれたようである。

**出土遺物** 杭 (572~578) は、板材を加工した転用杭 (572・574) や自然木の先端を削った丸杭 (573・

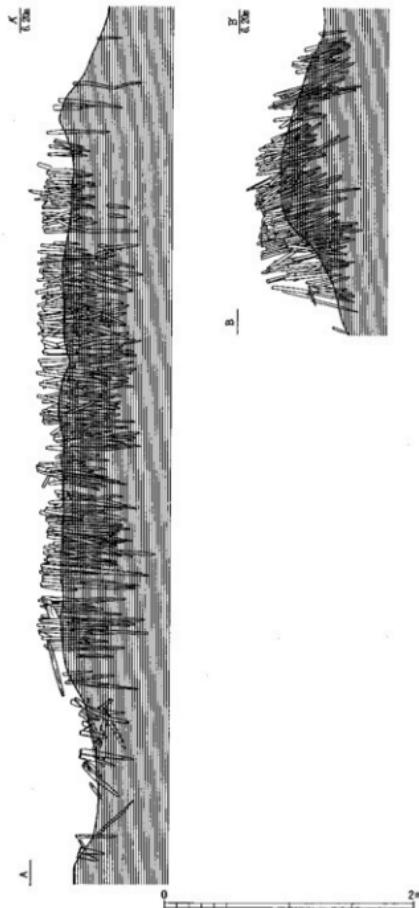
575・577・578) のほか、576 は自然木を四分割した面に抉り込みがみられる。

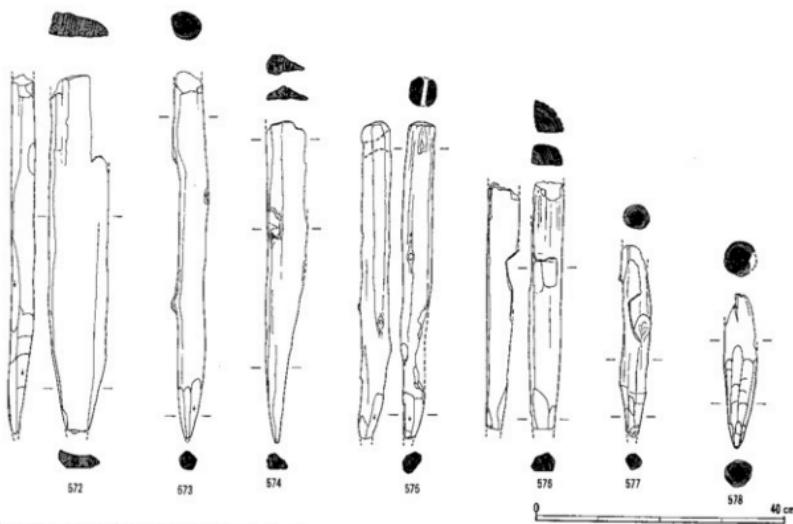
#### S Z 8 (第 75・76 図・P L - 24)

河道 S R 7 の中央部に河道に直交するように打たれた杭列である。護岸施設 S Z 7 の西から続く河道内に作られた一連の施設で、河道 S R 7 から水を取り入れるために河道内に打たれた堰のような施設であったと考える。杭列は河道内に一列のみであった。その検出した高さは河床から 1 m 程浮いた状態 (標高



第 73 図 S Z 7 実測図 (1 : 40)



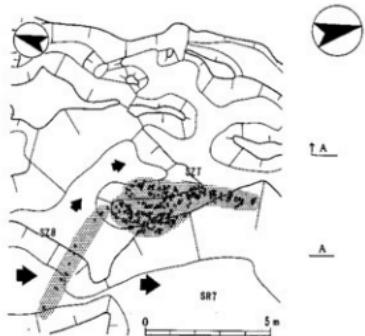


第74図 S Z 7 出土木製品実測図 (1 : 8)

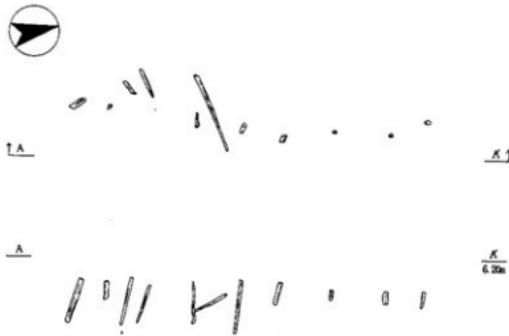
6.0m程)であった。杭径3~8cm、残存長0.2~0.9m程である。

S R 8 (第77~83図・P L - 21・54)

D地区中央で検出した河道である。河道幅7.0~14.0m、深さ27~130cm程である。東側でS R 8とS R 9に分流する。分流するところに南北12.0m



第75図 S Z 7 + 8 位置図 (1 : 200)



第76図 S Z 8 実測図 (1 : 40)

×東西13.6m程の広さをもつ部分がある。この部分を以後、「溜り」と呼ぶ。この「溜り」で古墳時代中期前半を中心とする多量の古式土器と木製品が出土した。また「溜り」には、東側に杭列S Z 9 が作られ、南西側には構肩を補強する施設と考える S Z 10 が作られている。

遺物には、二重口縁壺や直口壺などの壺やく字甕、S字甕のほか高杯などが出土しており、その中でも高杯の出土が際立って多い。また一本鋤、堅作、曲柄又鋤などの木製品なども出土している。

**出土遺物** 壺 (579~585) は、球形な体部をもつて口縁部が直線的に開く直口壺 (579) や小型の壺 (580) がある。二重口縁壺 (581~583) は、口縁部の上段が下段より短い 581・582 と上段が長い 583 がある。583 は外面をナデ調整して内面は横位に削る。小型丸底壺 (584・585) は、とともに扁平な体部をもち、585 は口縁部が上方にのびる。

燒 (586~597) は、頸部を屈折させ口縁部を丸くおさめるく字甕 (586) や山陰系の影響と思われる甕 (587) がある。S字甕 (588~597) は、口縁部が肥厚する 588~592・594・595 は C類に属す。593 は C類ないし D類であろう。596・597 は脚台部で、脚

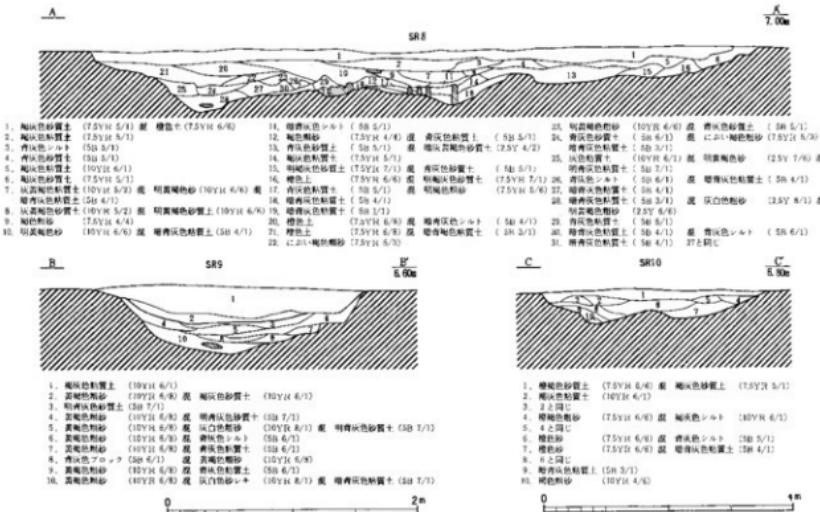
端部を折り返して、粗いハケメをほどこす。

高杯 (598~610) では、脚部の裾端部を上方にまげ円孔がみられる 598 や直線的に開き外面はヘラミガキ、内面はハケ調整をおこなう 599 がある。600~604 は杯底部と口縁部の棱が明瞭で、脚部が屈折する高杯である。また 605~607 は杯底部と口縁部の境は不明瞭で緩やかに口縁部にいたり、脚部も緩やかに開く。609・610 は丸い杯底部から段をもつて口縁部が外反気味にのび、脚部はハの字に開き C類に属す。

手握ね土器 (611) は、内外面にユビオサエの痕跡をのこす。口径 4.3cm、器高 3.6cm である。

本製品には (612~614・617・618、620~624、627・628) がある。612 は一本鋤で、鐵身のみで柄部を欠く。身の肩は方形につくり、刃先は U 字形をなすと思われる。613 は堅作で、一方の搗部と握部のみである。搗部と握部とは段をなさず、搗部の断面形は梢円形を呈している。件に伴う臼は出土していない。614 は曲柄又鋤で、着柄部は断面半月状を呈している。着柄部の頭部には柄を緊縛するための段がみられる。617・618 は、建築部材である。617 は先端に抉り欠きを 2 か所つくる。618 は垂木である。

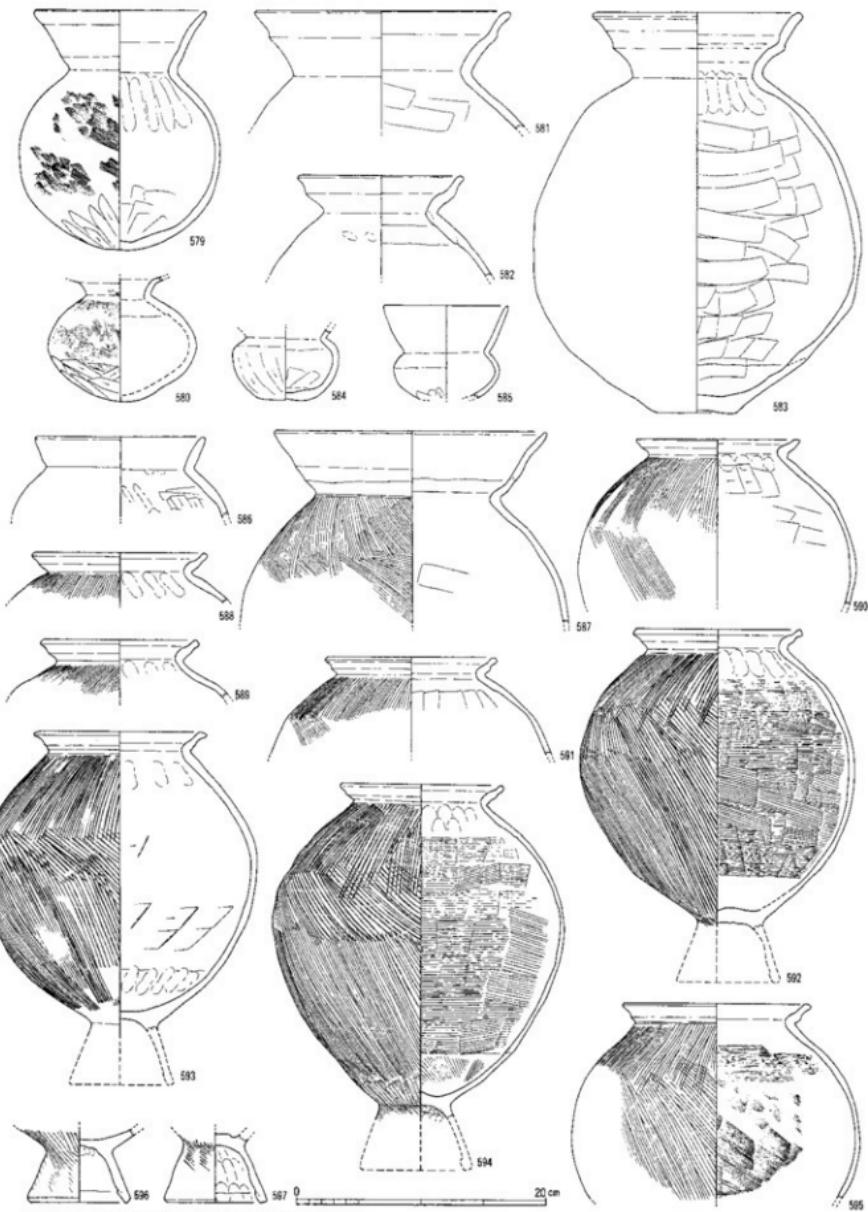
杭 (627・628) は、板材を杭に加工した転用杭



第77図 SR 8・9・10 土層断面図 (1:80)



第78図 SR 8 遺物出土状況図 (1 : 40)、SZ 9 桁列実測図 (1 : 40)



第79図 SR 8出土遺物実測図(1)(1:4)

(627・627) がある。

用途不明品 (620~624) には、全面に削りをほどこす 620 や円孔をもつ板材 (621・623・624) がある。621 は建築部材であろうか。622 は頭部を削り出したもので、天秤棒であろうか。

#### S Z 9 (第 78・82・83 図・P L - 24)

河道 S R 8 の S R 20 側に 2 列に作られた杭列である。長さ 1.4m 程、幅 0.8m 程である。杭列は前述 8 本程がのこる。S R 10 への流れを保護するための護岸施設と考えられる。

**出土遺物** 杭 (625・629~635) は、625 は自然木を加工した杭で、629~635 は角材の先端を加工して転用杭として利用したものである。

#### S Z 10 (第 81・82・84 図)

河道 S R 8 中央「溜り」の南西で検出したものである。草木質の敷物状遺構で、この敷物状遺構を 4 ~ 5 本の杭で敷物の下に打ち込んで固定している。敷物状遺構の残存する範囲は 1.6m × 1.1 ~ 0.6m である。この遺構の河道側で杭や板材などが多く出土したが、敷物状遺構を保護するためにこれらの杭あるいは板材を利用していたとも考えられる。S R 8

の南から流れていた溝に伴うと考えられ、その「溜り」側に作られた溝肩を補強する施設と考える。

**出土遺物** 杭 (615・616・619・626) は、先端部に出ホゾをつくる 615 がある。616 は、先端部とその下位に抉り欠きをつくる。626 は、自然木を加工した丸杭である。

用途不明品 (619) は、木口の隅に出ホゾをつくり扉板とみられるが、厚く円孔があるべき箇所を欠損し確かにない。

#### S R 9 (第 77・85 図・P L - 21・50)

D 地区の中央東より検出した S R 8 の「溜り」から分流する河道である。幅 2.2m、深さ 54 ~ 68cm 程である。幅および深さはほぼ平均している。

遺物には古墳時代中期の小型丸底壺などの土器や図示していないが杭もある。

**出土遺物** 小型丸底壺 (636) は、口径が体部径より大きいもので体部下半をヘラケズリする。637 は小型平底壺で、扁平な体部から口縁部は直線的にのび端部外面に面をもつ。

高杯 (638・639) は、杯部の外面をヘラケズリして内面を板ナデで調整する 638 や脚柱部が膨らみ裾

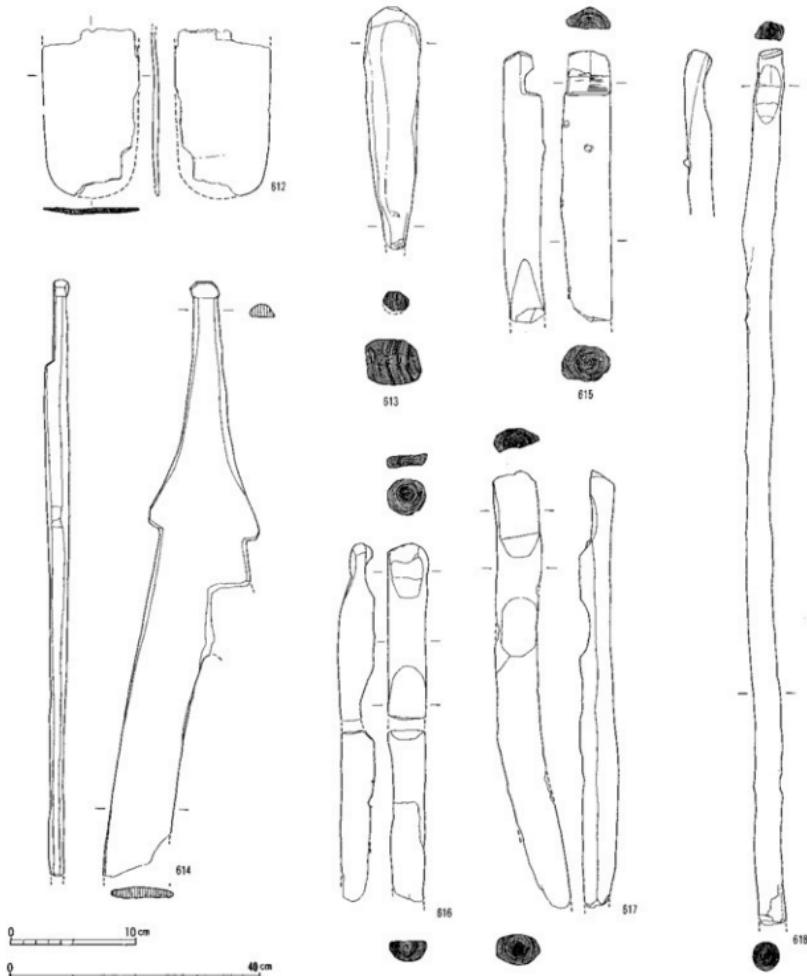


第 80 図 S R 8 出土遺物実測図 (2) (1 : 4)

部との屈折が弱い脚部(639)がある。

甕(640~644)には、口縁部が水平近く屈曲する小型のく字甕(640)がある。また口縁部が退化して器壁が厚く粗いハケメを施すS字甕(641・642)はC類に属する。脚台部(643・644)は、脚端部を折り返し、外面に粗いハケメがみられる。

S R 10 (第 77 図・P L -21)



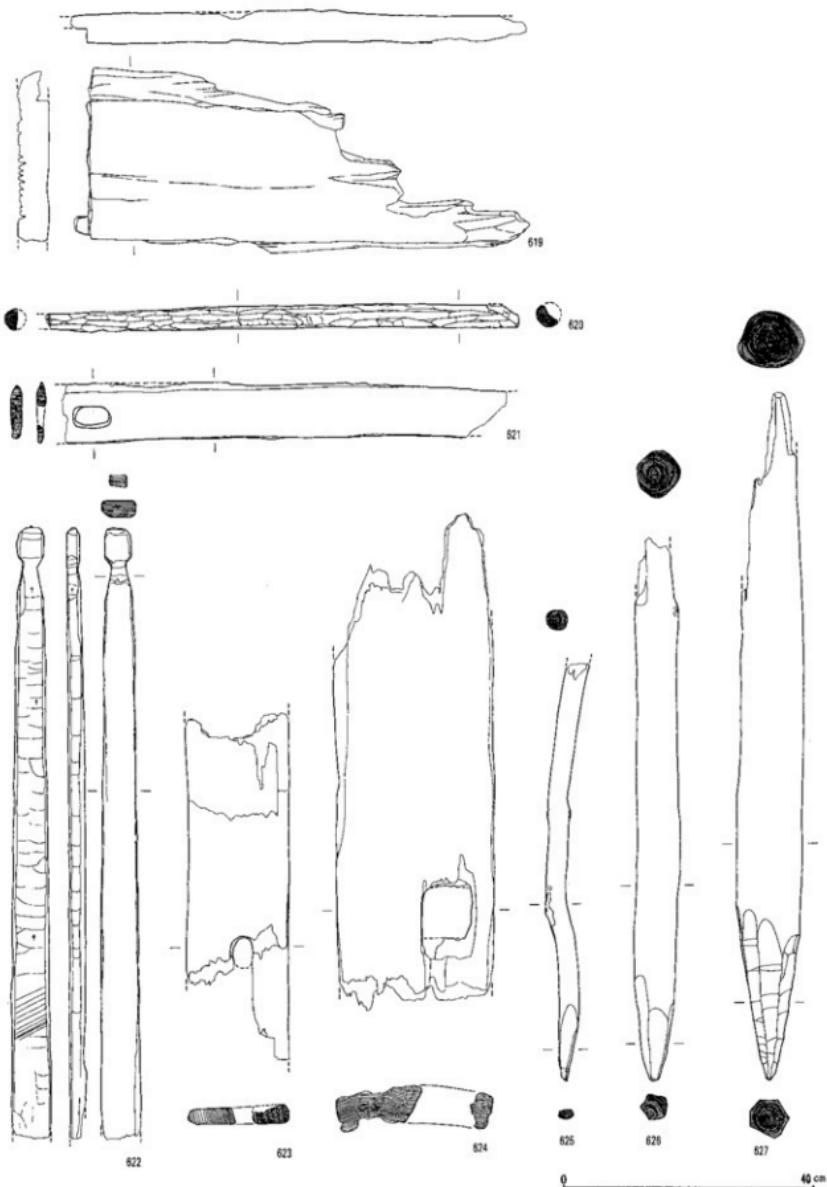
第 81 図 SR 8、SZ 10 出土木製品実測図 (1 : 8、614 は 1 : 4、618 は 1 : 16、615・616 は SZ 10、その他は SR 8)

D 地区の中央東より検出した河道で、S R 8 の「瀬り」から S R 9 とともに分流する。幅 90cm 程でほぼ平均している。深さは 38~98cm 程である。

遺物には古墳時代の土師器壺や甕がある。

S D 12

D 地区から E 地区にかけて検出した南北溝である。北西から東に湾曲して流れ、南端は飛鳥・奈良時代



第82図 SR 8、SZ 9・10出土木製品実測図 (1 : 8、625はSZ 9、619・626はSZ 10、その他はSR 8)

の河道 S R 11 に切られる。幅 0.5~1.9m、深さ 4~59cm 程である。

遺物には古墳時代後期の土師器高杯や須恵器片などが出土している。

#### S D 13・14 (第 86 図)

E 地区北で検出した東西溝である。S D 13・14 は重複する溝で、切り合い関係から S D 13 の方が新しい溝と考えられる。ともに西壁から 10m 程で流れを南東から東に変える。S D 13 は溝幅 90cm の

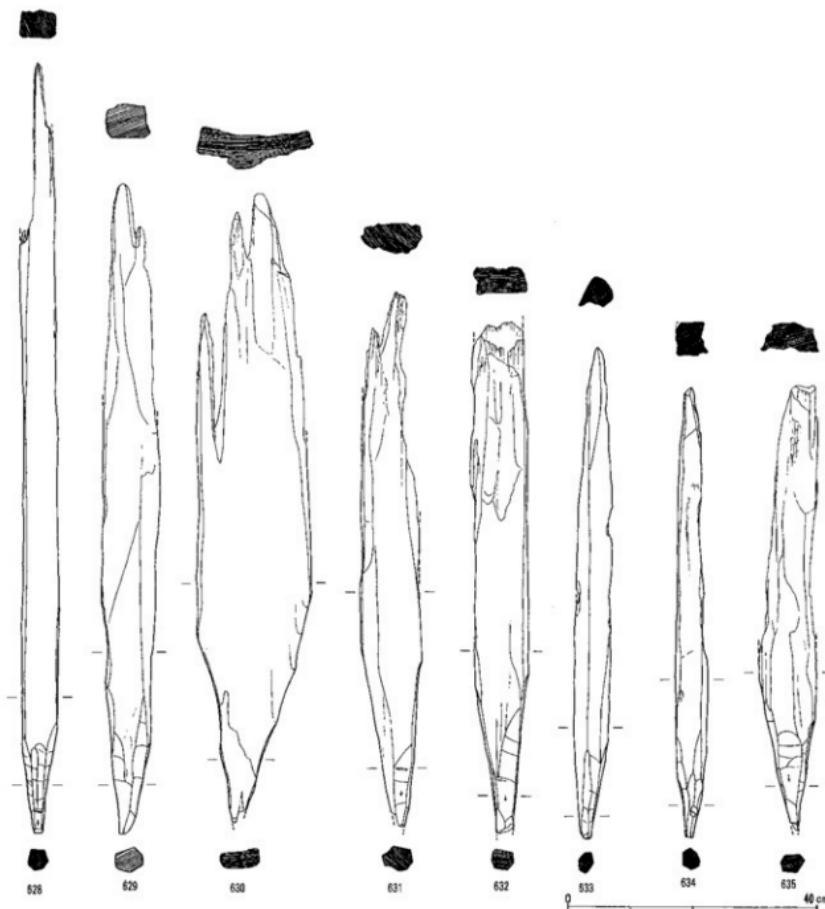
ほぼ平均した溝幅である。深さは 16~29cm 程である。また S D 14 は溝幅 40cm、深さ 30cm 程である。

遺物には S D 13 から土師器甕などが出土している。

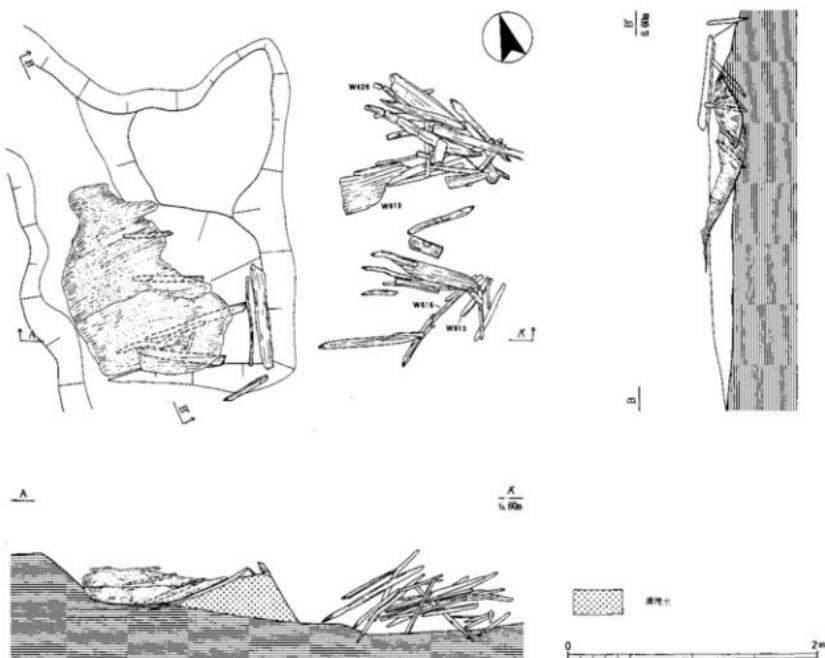
#### S D 15 (第 86 図)

E 地区北で検出した東西溝である。幅 40~50cm、深さ 13~27cm 程である。S D 13・14 と切り合い関係をもち S D 15 の方が古い溝である。

遺物には古墳時代後期の土師器壺や高杯などが出土している。



第 83 図 SR 8、SZ 9 出土木製品実測図 (1 : 8、628 は SR 8、その他は SZ 9)



第84図 S Z 10 遺物出土状況図 (1:40)

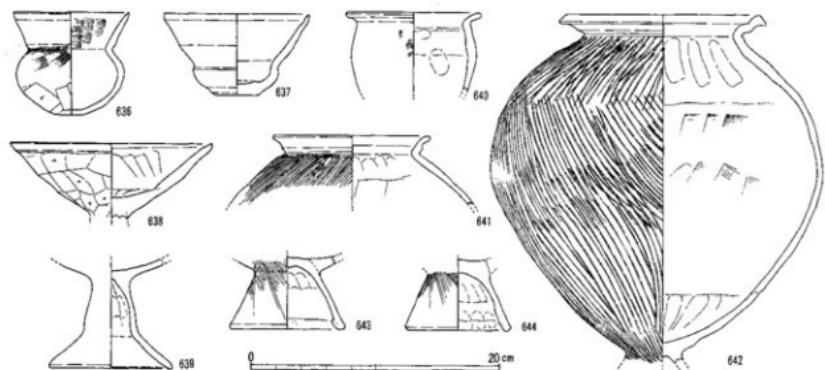
#### S D 16

E地区南西で検出した弥生時代の土坑S K 11と切り合い関係をもつ東西溝で、幅30cmの平均した溝である。深さは16~23cm程である。

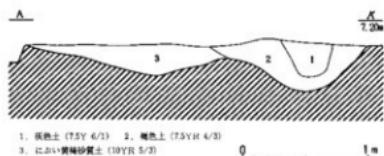
遺物には土師器壺や須恵器壺などがある。

#### S D 17

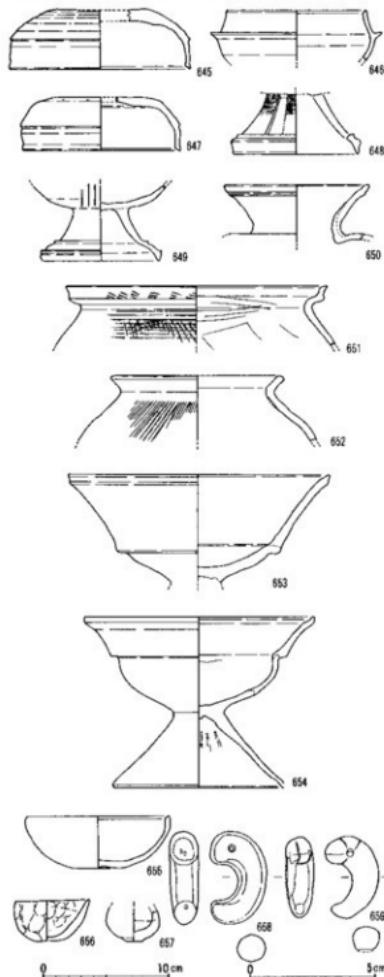
F地区中央で検出した湾曲する東西溝で、幅60~90cm、深さは7~11cm前後である。



第85図 SR 9 出土遺物実測図 (1:4)



第86図 SD 13・14・15 土層断面図 (1 : 40)



第87図 古墳時代包含層出土遺物実測図  
(1 : 4, 658・659は1 : 2)

遺物には上器高杯などがある。

#### 5 小穴 (第49・50図・PL-54)

Pit 2 B地区 S R 3 の北辺で検出した径 70 cm、深さ 51 cm の小穴である。小穴からは底から浮いた状態で木鍤 (317) が出土した。また小穴の上からはほぼ完形の小型丸底壺 (185) が出土しており、祭祀に関係するものと思われる。

**出土遺物** 木鍤 (317) は、防禦具で縦に半裁されているが、丸太材の中央部を割り鼓状にして両端部を削ぎ落としている。

#### 6 包含層出土遺物 (第87図・PL-50)

須恵器 (645~650) には、杯蓋 (645)、杯身 (646)、短頸蓋 (647)、高杯 (648・649)、甌 (650) がある。これらは田辺編年のTK 47型式からMT 15ないしTK 10型式併行期に相当しよう。

土師器には、(651~658) がある。

S字壺 (651・652) は、口縁端部に刺突文がみられ、体部に斜めハケメで調整した後に横線をほどこす 651 は、A類である。652 は口縁部が退化して体部外面を粗いハケメで調整する。

高杯 (653・654) は、丸みをもつ杯底部から段をもって立ち上がり、外反して端部外面に凹面をつくる 653、丸みが大きい杯底部から段をもって外反する 654 がある。ともにC類に属する。

椀 (655) は、内湾する体部から口縁端部の内面に面をもつものである。底部には木葉痕がみられる。

手捏ね上器 (656) は、内外面にユビオサエの痕跡をとどめる。また底部に黒斑がみられる。

ミニチュア上器 (657) は、壺を型取ったもので、壺の体部下半である。

石製品には、瑪瑙製の勾玉 (658) や滑石製の勾玉 (659) がある。659 には線刻が施されている。

(宮田)

#### [註]

① S字壺の分類については、山田猛『山城遺跡・北瀬古遺跡』・重県埋蔵文化財センター 1994 をもとにして、赤塚次郎「土器・土器群の形成」「閉間遺跡」・御愛知県埋蔵文化財センター 1994 および同氏赤塚次郎「松川戸様式の設定」「松川戸遺跡」・御愛知県埋蔵文化財センター 1994 を参考にした。

② 「欠山式」「元屋敷式」などの時期区分については、山田猛『山城遺跡・北瀬古遺跡』・重県埋蔵文化財センター 1994による。

③ 一重県埋蔵文化財センター技師 伊藤眞裕氏の御教示による。

④ 須恵器については、次の文献による。

田辺昭二『須恵器大成』角川書店 1981

## VII. 飛鳥・奈良時代

この時期の遺構はE地区に集中し、主な遺構としては掘立柱建物2棟、井戸1基、溝1条がある。遺構および遺物の出土状況は中央より西部に遍在し、この時期の集落は調査区の西侧にその中心があると考えられる。

### 1 掘立柱建物

S B 27 (第89図・PL-27)

E地区の南東部で検出された建物である。西側は部分的に搅乱や後世の遺構に切られているが、桁行3間、梁行2間で南北棟 ( $N 22^{\circ} W$ ) の側柱建物と考えられる。内部には東柱と思われる小穴があり、床張りであった可能性がある。桁行は3.6mで柱間は1.2mの等間、梁行は3.0mで柱間は1.5mの等間である。柱振形は径40~60cm、深さ9~36cmで径20cmの柱痕跡を確認したものもある。

切り合いからSR 11より古く、柱穴からは7世纪代の杯身が出土していることから飛鳥時代の建物と考えられる。

S B 28 (第89図・PL-27)

S B 27の南側で南北2間、東西1間分が検出された。柱穴の配置から東西棟 ( $E 34^{\circ} S$ ) の建物の可能性が高いが、東側妻柱は検出できなかった。桁行は2.1m以上、梁行は4.2mで柱間は2.1mの等間である。柱穴は径50cm、深さ21~42cmほどで、径15~20cmの柱痕跡がほとんどの柱穴で確認できた。

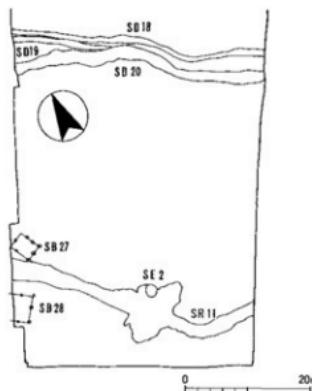
柱穴出土遺物は少なく、土師器・須恵器の細片のみで時期決定根拠を欠くが、SR 11との位置関係や柱穴の形態などからこの時期と考えた。

### 2 井戸

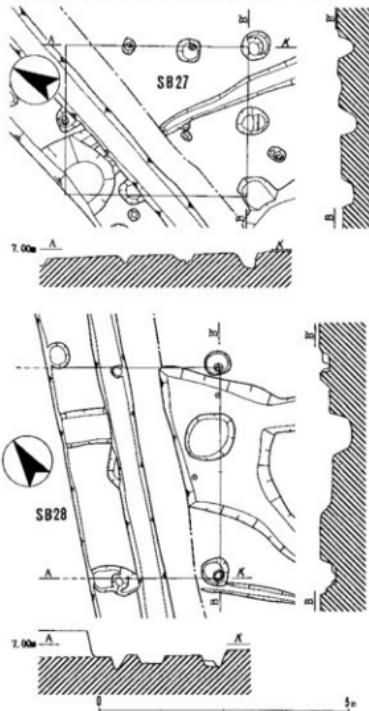
S E 2 (第90図・PL-28・51・55)

E地区の南部、SR 11の北岸で検出された。掘形は、長径2.1m、短径1.7m、検出面からの深さ0.7mである。断面は逆台形で、中央には内法で一辺0.6mの井桁組の井戸枠が1段遺存していた。

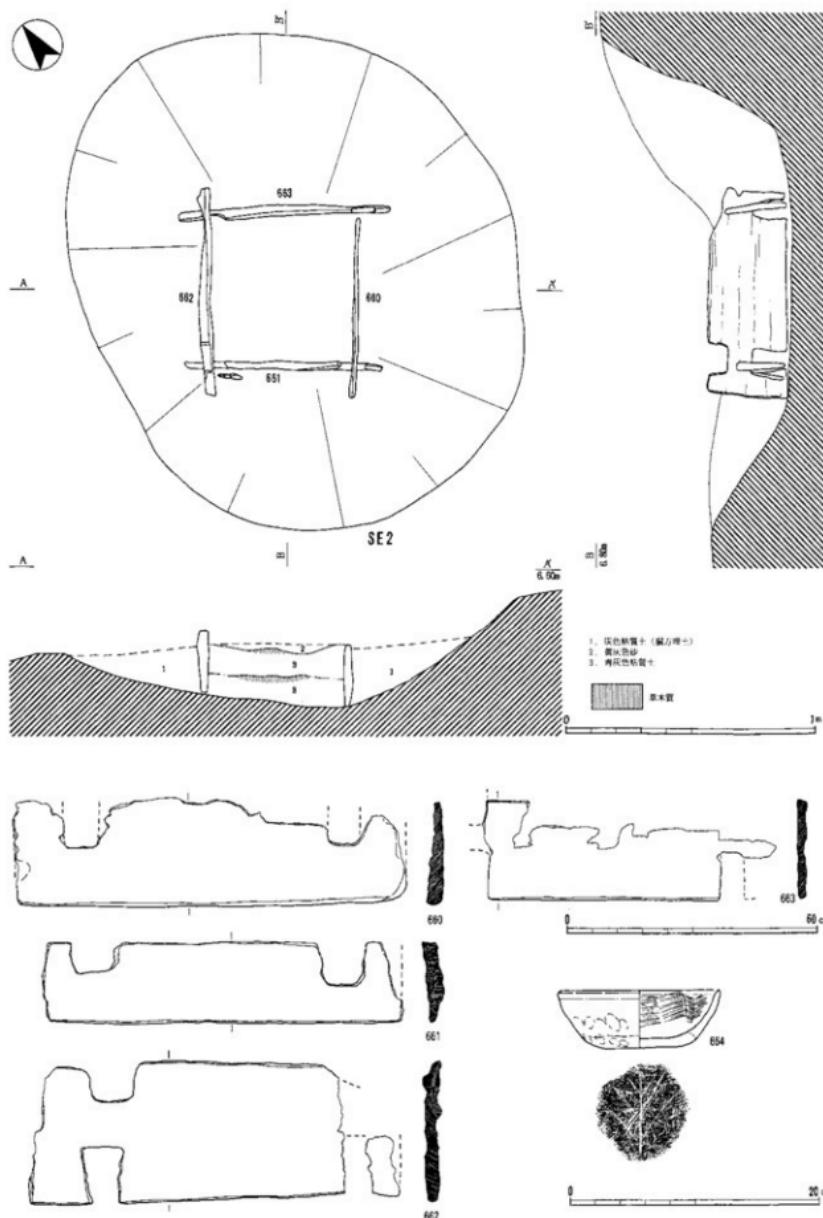
井戸枠は腐蝕が進んで不明な部分もあるが、南北材は両端近くの上端のみを切り込み、東・西材は上下端を切り込んでいると思われる。南北材・東西材の順で組み上げていて、掘形の深さからして本来は更に2、3段はあったと考えられる。



第88図 飛鳥・奈良時代遺構略図 (1:800)



第89図 S B 27・28 実測図 (1:100)



第90図 SE 2 実測図 (1 : 20)・出土遺物実測図 (660～663は1 : 12、664は1 : 4)

井戸枠内埋上中には草木質が面的にあったが、自然の堆積と思われる。また、切り合いから S R 11 中央部北岸の窪地より新しい。

**出土遺物** 遺物には土師器椀・須恵器などがあるが、量は少なく、図示できたのは土師器椀 1 点だけである。664 は茶褐色の粗製の椀で、底部には木葉痕が残り、内面はヨコハケ調整されている。

井戸枠 (660~663) は全長 85~93cm、幅 19~34 と大きさは一定しない。厚さは最大で 4 cm である。切り込みの心々距離は 61~63cm とほぼ揃っているが、その深さは一定せず、切断面は粗さが目立つ。いずれも腐蝕が進み、表面の加工痕は確認できない。なお、樹種は 662 がヒノキ科以外は全てスギである。

### 3 自然流路

#### S R 11 (第 91・92 図・P L-29・51)

E 地区の南部で検出された。緩やかに蛇行し、西から東に流れる自然流路である。幅 2.1 ~ 3.5m、深さ 0.5 ~ 0.9m で約 41m 認証され、東西端の比高差は 0.4m である。中央部は基盤層が軟弱な砂層のため、雨水などの流入により浅い窪地状をとっている。

切り合い関係からは S B 27・S D 12 より新しい。S E 2 との関係は微妙で、S E 2 は北岸の窪地の埋土を切って作っているものの、その存続時期は出土遺物からはかなり重複するものと思われる。

遺物は、飛鳥時代から奈良時代の土師器・須恵器を中心であり、西側ほど多く出土して東側ではほとんどみられない。また、古墳時代後期の須恵器も散見され、古墳時代前期の土師器・弥生時代の石器も混入している。

**出土遺物** 665 は、打製の凹基無茎式の三角形鐵で、重さは 5 g、サヌカイト製である。666 は、断面三角形の中空の不明品である。一面に剥離痕があり、何かの付属品と考えられる。667 は、土師器 S 字甌である。口縁部は鋭く屈曲し、肩部外面にはヨコハケが残るが、頸部内面のヨコハケはない。668 は、精製の小型丸底甌をもとにした注口上器である。体部下方に円孔を開け、円筒を貼り付け注口部としている。基部の直径は 2.8cm である。注口部はその多くを欠くが、大きく反り上がるものと考えられる。体部外面にタテハケ調整の後へラ磨きを施す精製品である。669 は須恵器杯蓋で天井部と口縁部の境の稜は弱く、口縁端

部は丸く仕上げる。また、図示できなかったが、他にも 6 世紀代と考えられる須恵器が散見される。

土師器椀 (670~674) には、内湾する口縁部をもつもの (670・671) と直立する口縁部のもの (672・673) がある。後者は T K 217 型式期の須恵器杯蓋と形が類似する。胎土は全体的に粗く、底部には木葉痕が残るものが多い。土師器杯 (676・677) は精良な胎土のものである。口縁部は底部から緩やかに立ち上がり、端部が内側に丸く肥厚する。外面は底部をヘラ削りし、内面には螺旋状暗文や 1 段の放射状暗文が施されている。

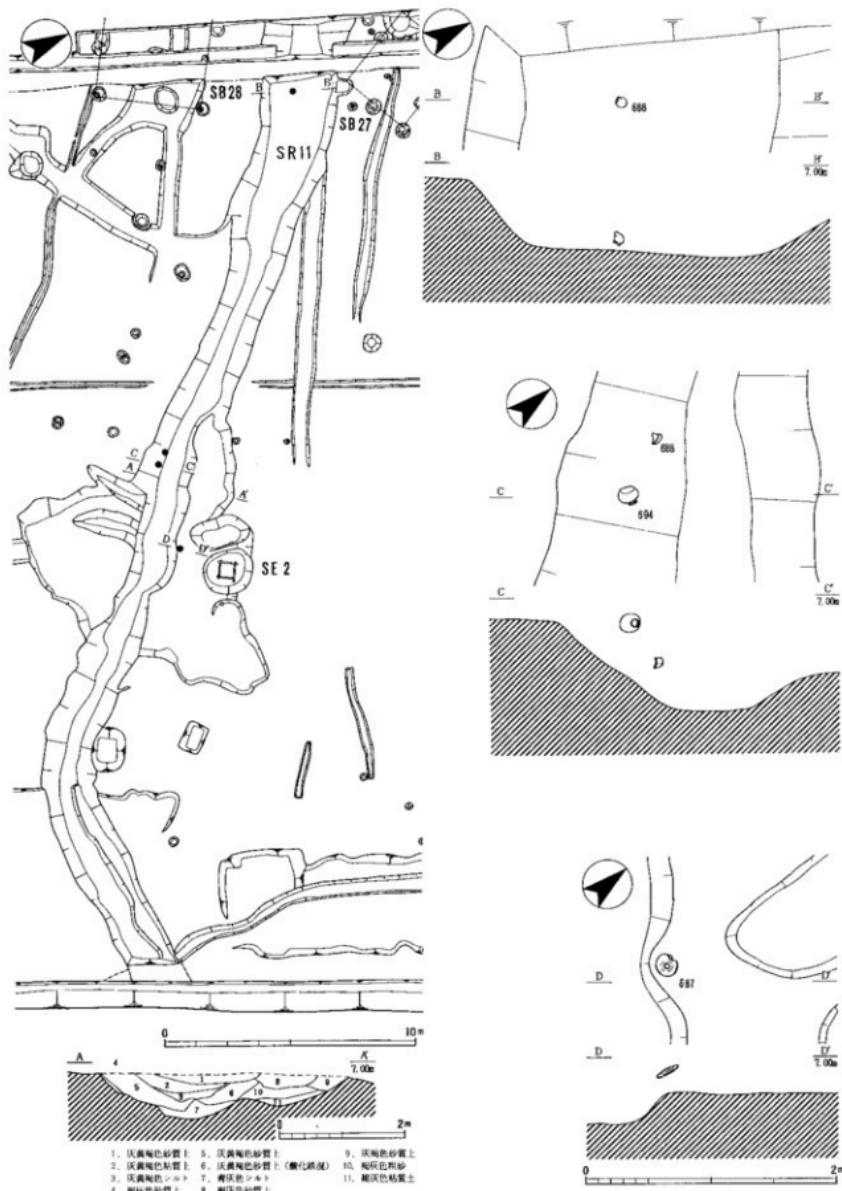
土師器甌は小型のもの (679・680)、と大型のもの (681~683) がある。口縁端部をつまみ上げて面をもつものがほとんどで、口縁部内面の肥厚するもの (681) もある。684 は県内では類例の少ない平底の甌である。底部外面をヘラ削りし、他はハケ調整である。胎土などが在地のものとは異なり、濃尾方面からの搬入品の可能性がある。土師器高杯 (678) の浅い杯部外面には粘土巻き上げ痕が残る。脚部は筒状でタテ方向のヘラ削りを施しているが、面取りは明確でない。土師器甌 (675) は底部の小片であるが、径約 2 cm の円孔が認められる。

須恵器杯蓋 (685~687) は、いずれも口縁端部は屈曲し端部に面をもつものであるが、685 は口縁端部の屈曲が弱い。685・687 のつまみは、断面逆台形状を呈する。687 の口縁部内面には「井」と墨書きされている。須恵器杯身のうち無高台の 688 は、直線的に開く口縁部と回転ヘラ削り調整の底部からなる。高台の付く 689~691 の底部は、いずれも回転ヘラ削り調整している。

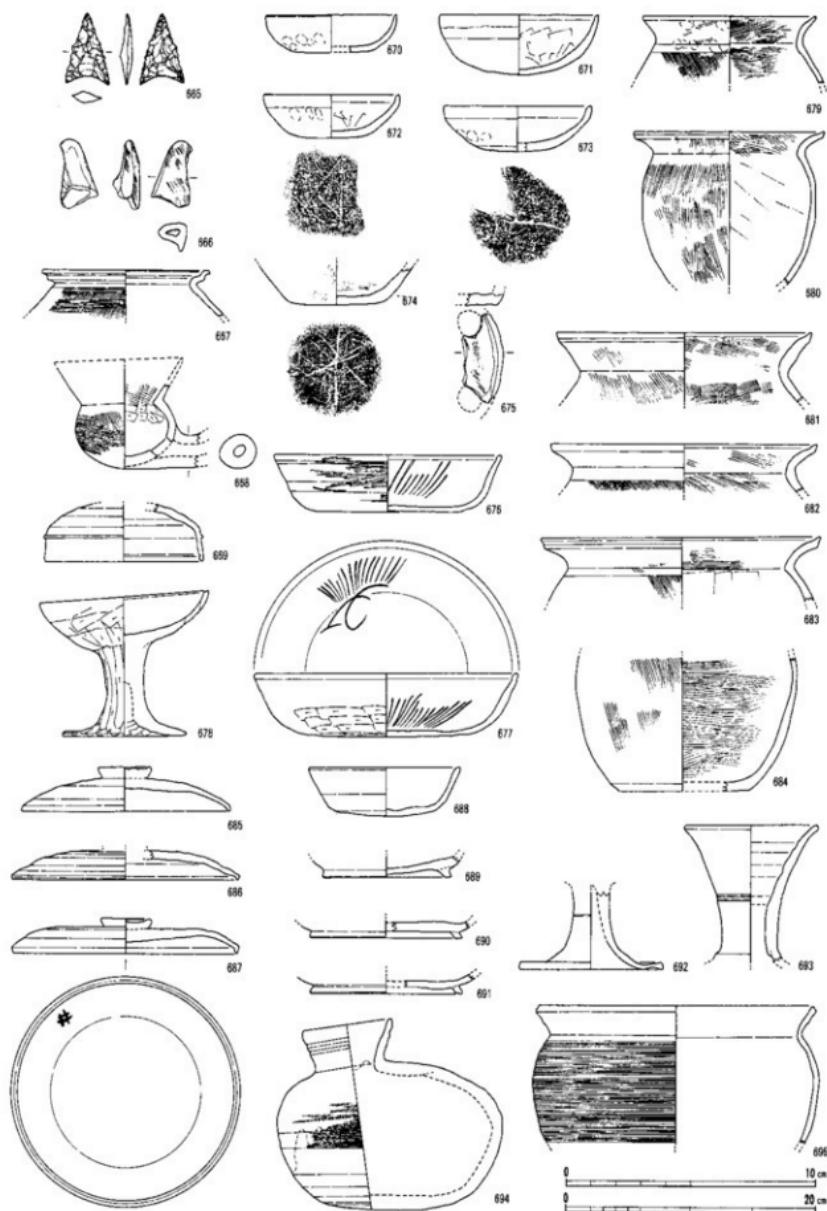
須恵器高杯 (692) の脚部は、細い基部から端部が大きく広がり、中位に浅い沈線が巡る。須恵器長頸甌 (693) は、頸部中位に浅い沈線が 2 条通り、口縁端部はわずかに面をもつ。須恵器平瓶 (694) は完形である。短い口縁部には外面に浅い沈線が 2 条巡る。底部は回転ヘラ削り調整・体部は自然軸が掛かり不明瞭であるが、カキ目調整している。須恵器鉢 (695) は短く屈曲する口頸部からなり、体部外面はカキ目調整している。

#### S D 18~20 (第 93・94 図)

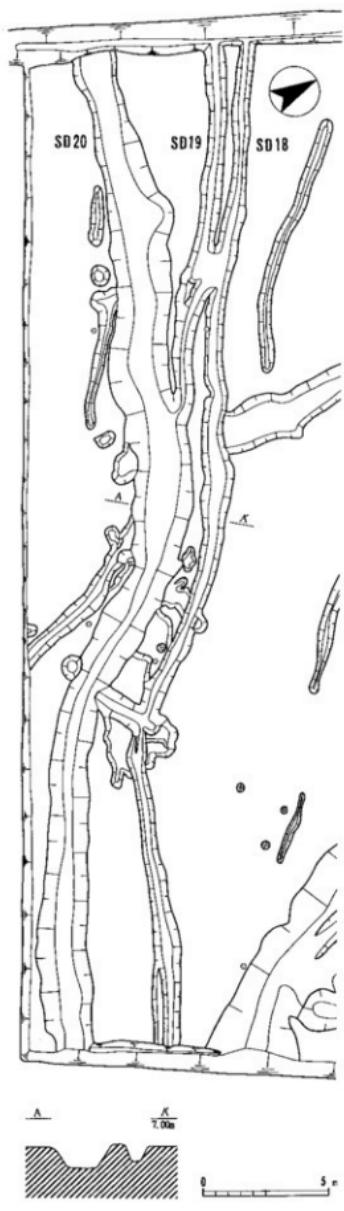
いずれも D 地区の南部で検出した溝で、緩やかに



第91図 SR 11実測図 (1:200)・遺物出土状況図 (1:40)



第92図 SR 11出土遺物実測図 (1 : 4)、665は(1 : 2)



第93図 SD 18~20 実測図 (1:200)・  
出土遺物実測図 (1:4) (696~701)

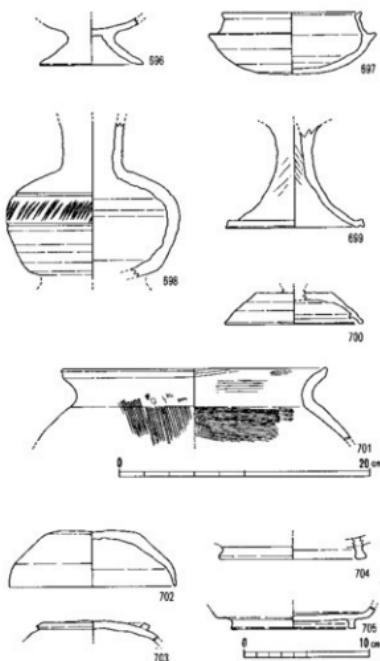
蛇行し、東方向に流下すると思われる。SD 18・20の延長は、その規模などから隣接する津市教育委員会の調査区で検出されている溝23・24と考えられる。いずれもその規模がほぼ一定であることから地形に合わせて掘削された人工の溝と思われ、水路などの用途が推定される。

出土遺物 SD 18から696~699が、SD 20からは700・701が出土している。697はMT 15型式に比定でき、長頸壺(698)は肩部に刺突列文がある。須恵器高杯(699)には、透孔はない。須恵器杯蓋(700)は内面の返りは短い。土師器壺(701)は頭部の肥厚は顕著でない。

#### 4 包含層出土遺物

702は須恵器杯蓋で、天井部はヘラ切り未調整である。703は底部外面に墨痕が残り、転用硯と考えられる。704の高台は分厚く、705の底部はヘラ削り調整される。

(米山)



第94図 飛鳥・奈良時代包含層出土遺物実測図 (1:4)

## VIII. 平安時代以降

この時代の遺構には、掘立柱建物5棟、井戸2基  
土坑1基、溝19条がある。そのうち掘立柱建物4  
棟、井戸2基および上坑1基は平安時代末期から鎌  
倉時代初頭頃で、掘立柱建物1棟は鎌倉時代である。  
このほかに近・現代の溝1条がある。

建物は、安濃川流域に施行された条里地割の方向  
にはほぼ沿っている。またこの時代の溝も条里の方向  
やそれに直交するように流れている。

### 1 掘立柱建物

#### S B 29 (第96図・P L-30)

B・C地区にまたがって検出された東西棟の建物  
である。桁行3間(6.45m)×梁行2間(2.1m)  
の身舎と考え<sup>2</sup>、北面に3間(6.45m)×1間(2.25  
m)の北庇と東面に2間(3.75m)×1間(2.25m)  
の東庇をもつと考える。身舎および庇の架行・桁行  
ともに不等間である。棟方向はN 66° Wである。柱  
掘形は円形を呈しており、径20~70cm、深さ11~50  
cm程度でともに不揃いである。柱穴には根石はない。

遺物は土師器細片にとどまるが、棟方向からこの  
時代とした。

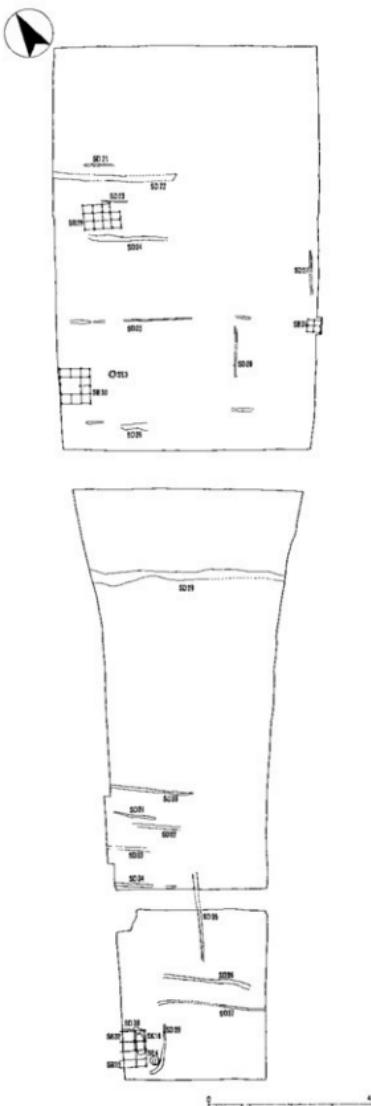
#### S B 30 (第97・100図・P L-30)

C地区の西壁際で検出した南北棟の建物である。  
桁行4間(8.35m)×梁行3間(7.17m)で架行・  
桁行ともに不等間である。架行きの東から3列目、  
桁行きの北から3列目の東柱はみられない。棟方向  
はE 26.5° Sである。柱掘形は円形を呈しており、  
径20~30cm、深さ10~38cm程度で不揃いである。柱  
穴には検出した19か所のうち8か所に根石が認めら  
れた。根石の大きさは、9cm×23cm、6cm×11cm、  
12cm×20cmほどで、根石には1~2個の縫が使用さ  
れていた。

遺物は土師器細片のほかに陶器腕片がある。

#### S B 31 (第98図・P L-31)

C地区的東壁際で検出した建物である。桁行2間  
(3.3m)×梁行2間(3.0m)で、桁行(1.65m)・  
梁行(1.5m)とともに等間である。しかし桁行と桁  
行の柱筋は直交せず86°の鋭角である。棟方向は  
桁行を基準にするとN 62° Wである。柱掘形は円  
形を中心とするが方形を呈するものもあり、径15



第95図 平安時代以降遺構略図 (1:1,200)

~30cm、深さ15~61cm程である。根石はない。中央と西の柱列には重複する柱穴もあり、西側が調査区外であるが建替えの可能性がある。

重複する柱穴からは、鎌倉時代前期と考えられる土師器小皿や山茶碗が出土しているため、SB 31は他の建物より新しいと考える。

#### SB 32 (第99図・PL-31)

F地区の南西壁際で検出した東西棟の建物である。西側は調査区外であるため建物の東部分を検出した。桁行1間(2.4m)以上×梁行2間(4.65m)で梁行は不等間である。東側2間×1間に拡げる前の土坑SK 16を伴う。土坑は建物の東側に位置するもののいわゆる南東隅土坑と考えられる。棟方向はN 66°Wである。柱掘形は円形を呈しており、径25~50cm、深さ19~48cm程である。柱穴には根石はない。

遺物はないが、SK 16からの出土遺物から平安

時代末期から鎌倉時代初頭とした。

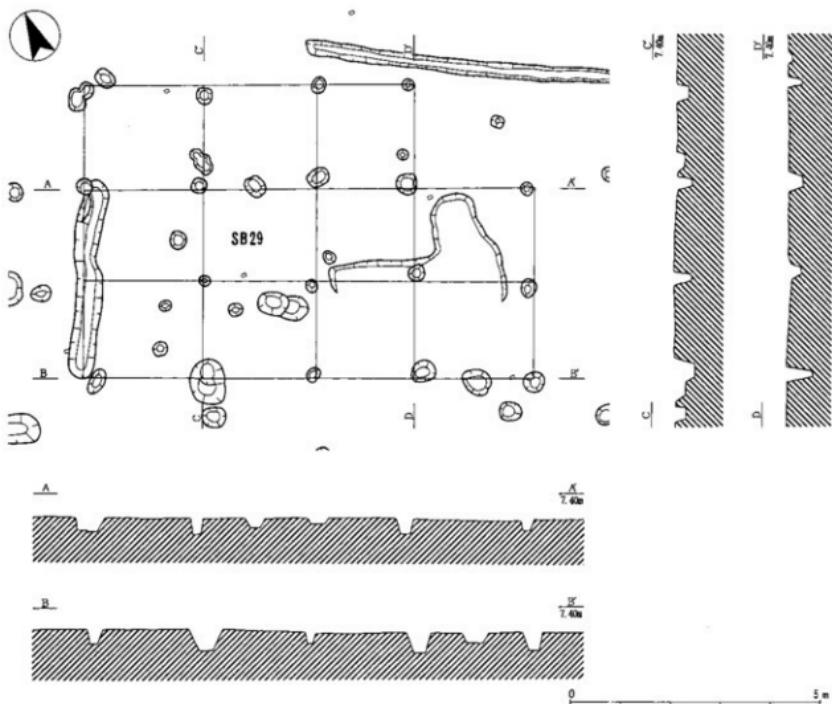
#### SB 33 (第99図・PL-31)

F地区の西壁際で検出したSB 32を2間分を南側に拡げて建替えた東西棟の建物である。西側は調査区外であるため未掘部分である。桁行1間(2.4m)以上×梁行4間(8.7m)で梁行は不等間である。梁行は北から2.4m+2.4m+2.1m+1.8mと考えられ、最も南の1間は柱間が狭く、また、柱掘形も小さいため底と考える。東側1間分に建物に合わせて南に1分間拡げた3間×1間に土坑SK 16を伴う。棟方向はN 65.5°Wである。柱掘形は円形で径20~45cm、深さ2~51cmを測る。柱穴には根石はない。

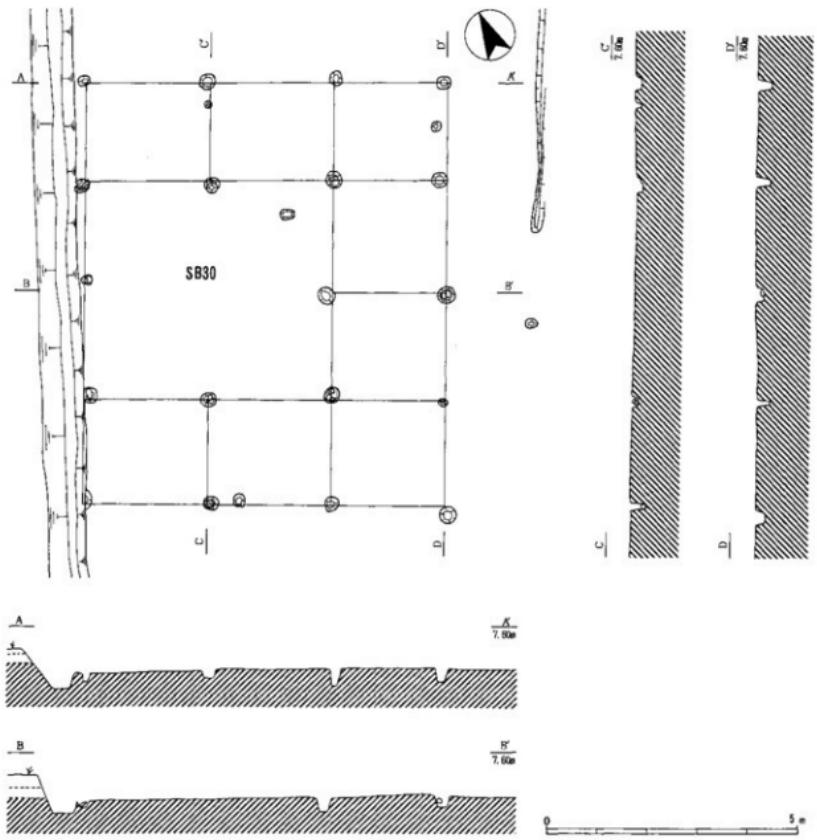
遺物はないが、土坑からの出土遺物には時期幅が少なく平安時代末期から鎌倉時代初頭と考える。

#### 2 井戸

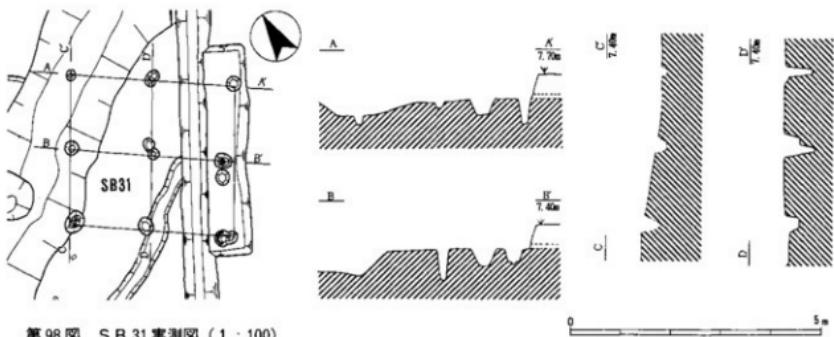
#### SE 3 (第101・102図・PL-32・51・54)



第96図 SB 29実測図 (1:100)



第97図 SB 30実測図 (1 : 100)



第98図 SB 31実測図 (1 : 100)

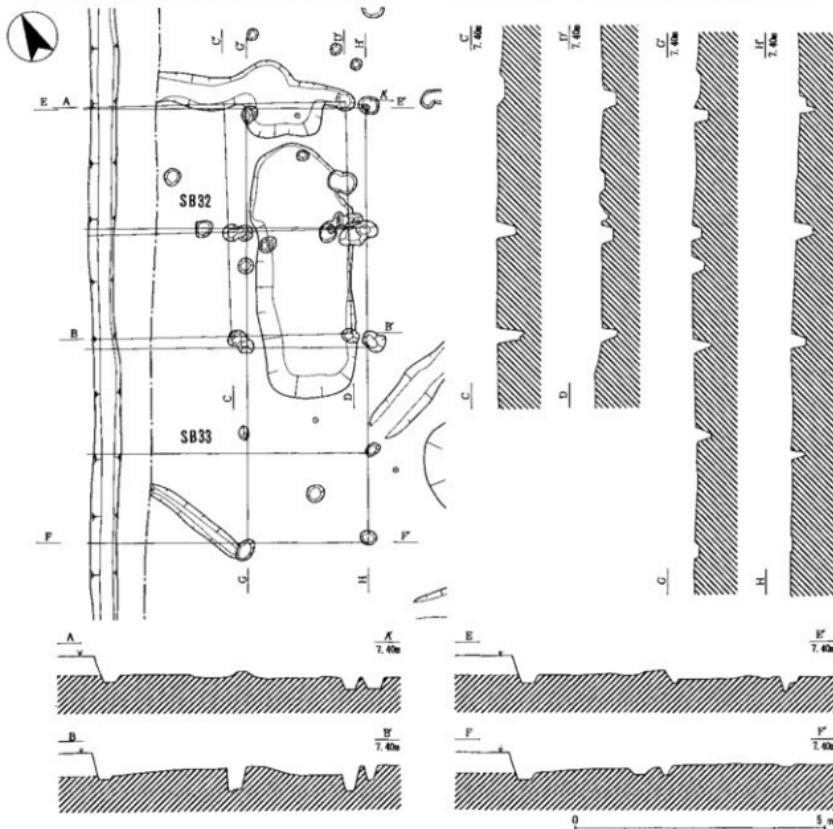
C地区の南西で検出した素掘りの井戸である。S B 30に伴う井戸と考える。平面形態はやや橢円形である。規模は1.7m×1.6m、深さは1.1mを測る。井戸底中央は径65cm、深さ40cm程度の済みになっていた。井戸内には曲物が3段に組まれていた。上段の曲物はその上部が腐食が著しくかなり歪んでいた。径は92～98cm、幅50cm程度であった。曲物の間には11cm×11cm、21cm×11cm、9cm×7cm等のヘギ板が縦に数枚挟まれていた。また曲物には厚さ0.5cm程度のタガが3段に巡っていた。タガの幅は上位は腐食のため不明。中位の幅が13.5cm、下位が10.0cmであった。

遺物には、掘形から底より60cm程度浮いた状態で陶

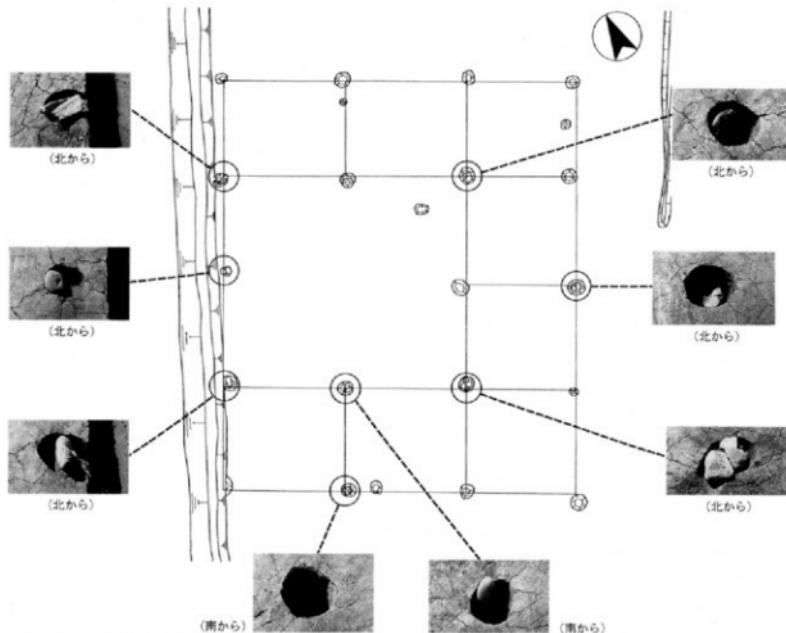
器碗(708)、いわゆる山茶碗がほぼ完形で出土した。椀は転倒した状態で出土しており、井戸祭祀の際に投げ込まれた可能性がある。また曲物内からは土師器小皿や陶器碗片などが出土している。平安時代末期から鎌倉時代初頭と考える。

土師器小皿(706)は、口径7.5cm、器高1.5cmで、口縁部はヨコナデ、内面はナデ、底部外面はユビオサエのみである。

陶器碗(707・708)は、口径15cm程度で、口縁部のヨコナデが弱い707がある。708は口径17cm程度で底部は回転糸切りの後に断面逆台形の高台を貼り付ける。口縁部は強いヨコナデにより外反する。ともに済美・



第99図 S B 32・33 実測図 (1 : 100)



第100図 S B 30 積石出土状況

湖西型の第5型式<sup>3)</sup>に相当しよう。

曲物(709・710)は曲物の側板である。709が中段、710が下段出土の曲物である。ともに下半部を欠いているために釘痕跡は不明である。709は径47.5cm、710の径は40.4cmである。709の上部には高さ8.7cm、厚さ0.3~0.4cmのタガをめぐらせ、タガと側板をそれぞれ棒縫で閉じた後に二つを合わせて1カ所で閉じる。

#### S E 4 (第103・104図・P L -33・52)

F地区の南西で検出した素振りの井戸である。平面形態はほぼ円形で、規模は2.1m×2.4m、検出面から0.8m程度で湧水が激しくなり調査をやめざるをえなかったが、断割りの結果、検出面から1.1m程度下で底になることが判明した。井戸中央には円形を呈する径約0.9m、深さ80cm程の棒痕跡が認められた。

遺物には、掘形からロクロ土師器小皿(711)、井戸枠内から土師器鍋(715)・陶器椀(712)などが出土している。平安時代末期から鎌倉時代初頭と考

える。

ロクロ土師器小皿(711)は、口径9.2cm、器高1.8cm、無高台で底部には回転糸切り痕がみられる。ほぼ完形で平安時代末期頃の所産である。

土師器鍋(715)は、口縁部を内側に折り返し端部上面に面をもつ。体部外面はナデで調整し、体部内面には粗いハケメをほどこす。

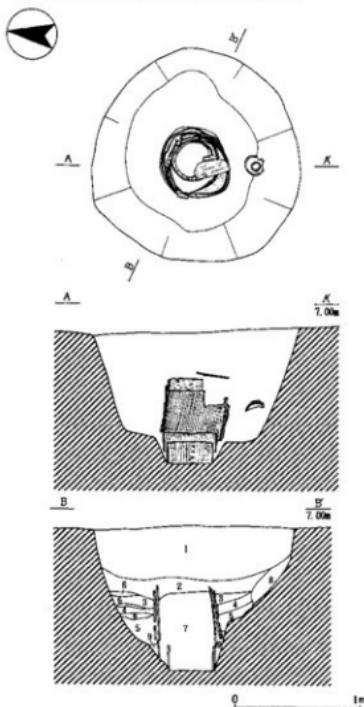
陶器椀(712~714)は、外反する口縁部をもち器高に対して口径が大きく渥美・湖西型の第4型式から第5型式に相当する。

#### 3 土坑

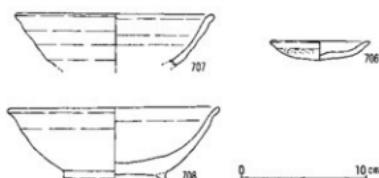
##### S K 16 (第105・106図)

建物S B 32・33に伴ういわゆる南東隅土坑である。建物S B 32の建替えとともに土坑も南へ1間分拡張されている。平面形は北辺は楕円形状、南辺は隅丸方形を呈しており、規模は長軸5.1m×短軸1.9m、深さ4~18cm程度である。旧・新土坑ともに中央部がやや窪む。旧土坑には炭化物を含む層が

見られ、新土坑には中央や北側に焼土が見られた。遺物には土師器小皿・鍋、陶器碗などがある。これらから平安時代末期から鎌倉時代初頭と考える。土師器小皿(716)は、口径10.0cm、器高1.9cmで、底部はユビオサエでのみである。外面に煤が付着する。ほぼ完形で井戸掘形から出土した。



第101図 SE 3実測図・土層断面図 (1 : 40)

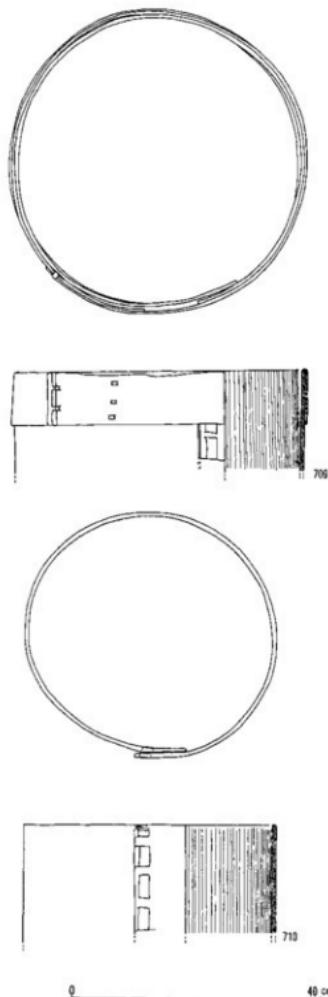


第102図 SE 3出土遺物実測図 (1 : 4, 709・710は1 : 8)

土師器盤(717)は、口縁部の細片であるが、口縁端部を折り返して内傾する面をもつ。

陶器碗(718~720)は、口縁部が緩く外反して丸くおさめる720がある。これらは渥美・湖西型の第4型式から第5型式に相当する。

#### 4 溝



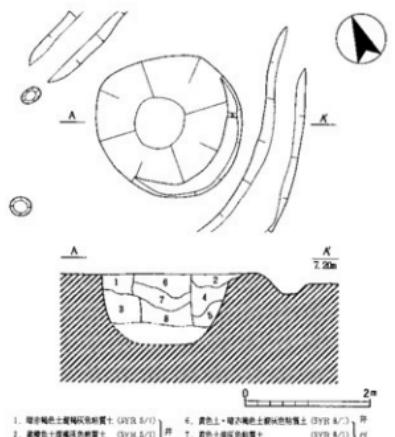
S D 29・36の2条の溝は、条里の境界溝と考える。これらの溝からは平安時代末期から鎌倉時代初期頃の遺物が多く出土しているが、中には時代を週る遺物も出土している。S D 22は近・現代の溝である。

#### S D 21

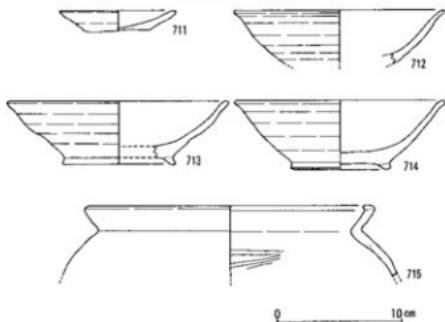
B地区南西で検出した東西溝で、幅0.5m、深さ8~10cm程度である。溝方向はN 64° Wである。

遺物は土師器細片のみであるが、溝方向からこの時期とした。

#### S D 22



第103図 SE 4 実測図・土層断面図 (1:40)



第104図 SE 4 出土遺物実測図 (1:4)

B地区中央で検出した東西溝で、幅1.2m、溝の深さ1~31cm程度である。直線的に東西にのびる溝幅が均一な溝である。溝方向はN 63° W前後を測り、現在の畦畔の方向に合う。

遺物には天目茶碗、陶器鉢、瀬戸・美濃窯丸碗・皿、近世末の徳利などがあるが、細片のみで図示できるものはない。出土遺物は中世末から近世以降のもので、近・現代の溝と考える。

#### S D 23

B地区S D 1の北で検出した東西溝で、幅0.3m、深さ5~10cm程度である。溝方向はN 62° Wである。

遺物はないが、溝方向からこの時期とした。

#### S D 24

C地区の北で検出した東西溝である。幅1.0~1.6m、深さ9~21cm程度である。調査区を直線的に東西にのびる。溝方向はN 65° Wである。

遺物は当該時期のものはないが、埋土からこの時期とした。

#### S D 25

C地区の中央で検出した東西溝である。幅0.3m程度ではほぼ同じ溝幅である。深さ4~15cm程度である。ほぼ直線的に東西方向にのびる。溝方向はN 65° W前後である。

遺物には土師器小皿、陶器鉢などがある。

#### S D 26

C地区の南で検出した東西溝である。幅0.3~1.9m、深さ2~48cm程度である。溝方向はN 63° W前後である。

遺物には土師器細片のみであるが、埋土からこの時期と判断した。

#### S D 27

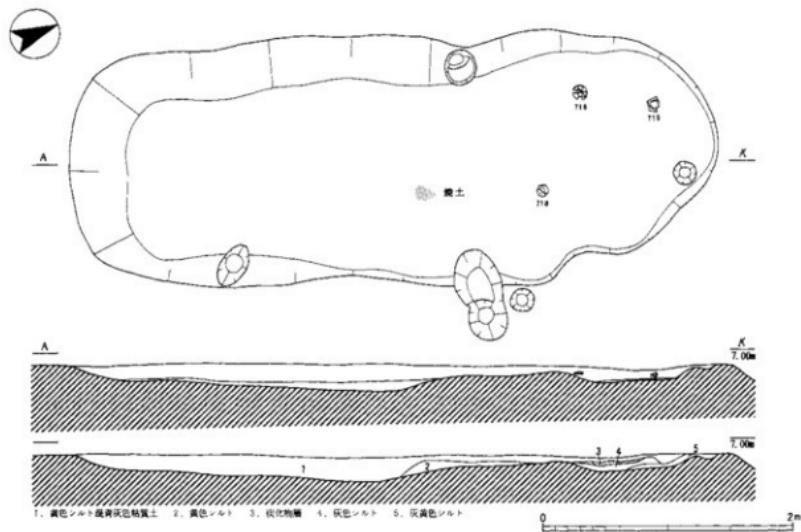
C地区の北東で検出した南北溝である。幅0.3~1.9m、深さ5~9cm程度である。溝方向はE 27° S前後である。

遺物はないが、溝の方向からこの時期とした。

#### S D 28

C地区の中央で検出した南北溝である。幅0.4m、深さ2~28cm程度である。溝方向はE 28.5° S前後である。

遺物は土師器細片のみで時期をきめることは困難であるが、東西溝S D 25とはほぼ直交することから



第105図 SK 16 遺物出土状況図・土層断面図（1：20）

この時期とした。

#### S D 29 (第107図・P L-52)

D地区中央で検出した東西溝である。東西方向の条里の坪境溝である。調査区で検出した溝幅は1.0~2.4mで、深さ9~17cm程である。溝方向はN 63°W前後である。検出したのは下層の溝であるが、東壁土層断面には検出したS D 29の左上に溝の重なりがみられ、また右上の溝は場整備前に使われていた水路である(第9図)。S D 29の断面は逆台形を呈している。溝底の幅1.92m程で、溝の上幅は2.28m程になる。深さは盛上下から52cmである。

遺物には灰釉陶器碗、陶器碗、青磁碗、銭貨などがある。このほか図示していないが奈良時代の須恵器無台杯・壺が出土している。遺物の中では特に陶器碗や皿、いわゆる山皿の出土量が多い。

灰釉陶器碗(721)は、碗底部で断面三角形の高台を貼り付ける。

陶器碗・皿(722~732)は、底部回転糸切りの後に断面逆台形または三角形の高台を貼り付ける。732の底部には「の」の墨書きがみられる。渥美・湖西型の第5型式ないし第6型式に相当しよう。730・731はやや偏平で口縁端部は方形に近い。731の底

部外面には墨書きが認められる。

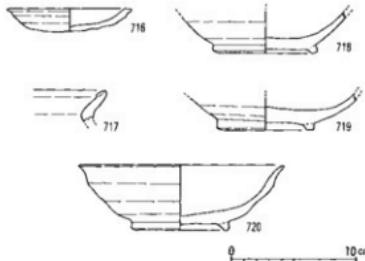
青磁碗(733)は、龍泉窯系で口縁部のみであるが蓮弁文が施されている。太宰府編年のI-5a類に相当しよう。

銭貨(734)は、左半部を欠くものの行書体で「元祐通□」と読める。元祐通寶は初鑄年1086年。

#### S D 30

E地区の北やや西側で検出した東西溝である。幅60~80cm、深さ11~17cm程である。南東に流れて調査区中央で向きをやや東に変える。溝方向はN 56°W前後である。

遺物には上師器小皿・鍋、陶器碗などがある。



第106図 SK 16 出土遺物実測図（1：4）

### S D 31

E地区のS D 30の南で検出した東西溝である。幅30~70cm、深さ9~12cm程である。S D 30とはほぼ同じ方向に流れ、溝方向はN 54° W前後である。遺物には陶器碗などがある。

### S D 32 (第108図)

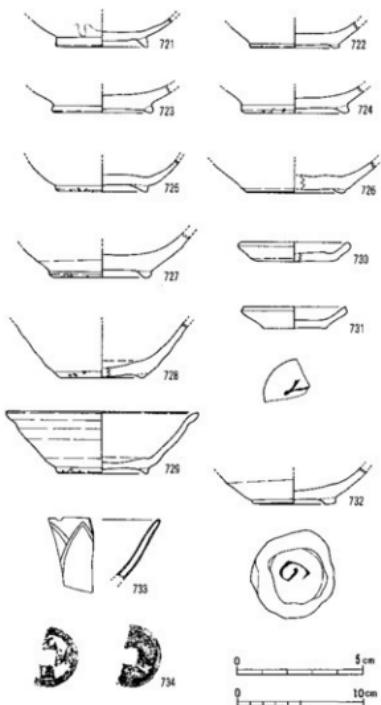
E地区の飛鳥・奈良時代のS R 11の北で検出した東西溝である。幅0.8mで平均しており、深さ8~20cm程である。S D 30よりや向きは北に流れている。溝方向はN 60° W前後である。

遺物は陶器碗・皿などがある。

陶器碗(735)は、底部片であるが回転糸切りの底部に断面逆台形の高台が付く。内面には煤が付着している。渥美・湖西型の第5型式に相当しよう。

### S D 33

E地区の南西で検出した東西溝である。幅0.8m、



第107図 S D 29出土遺物実測図 (1:4、734は1:2)

深さ7~16cm程である。溝方向はN 58° W前後である。

遺物は陶器碗などがある。

### S D 34

E地区の南西隅で検出した東西溝である。幅0.8m、深さ3~24cm程である。溝方向はN 60° W前後である。

遺物は土師器細片があるのみであるが、溝方向からこの時期とした。

### S D 35

E地区からF地区にかけて調査区の中央で検出した南北溝である。幅1.0m、深さ8~20cm程である。溝方向はE 24° S前後である。

遺物は土師器小皿、陶器碗などがある。

### S D 36 (第109図・P L - 52)

F地区中央で検出した東西溝である。条里の坪塙溝と考える。幅0.6~0.8m、深さ10~15cm程である。溝方向はN 57.5° W前後である。東壁土層には3条ほどの溝の重なりがみられ、最も新しい溝はほ場整備前に使用されていた水路である(第10図)。

遺物は須恵器壺のほか、陶器碗・皿、天目茶碗、陶磁器類、瓦などがある。S D 5と同様に陶器碗・皿の出土量が多い。

須恵器壺(736)は、頸部外面の沈線間に波状文を巡らす。

陶器碗・皿(737~740)は、回転糸切りの後に断面逆台形の高台を貼り付ける737がある。740は皿で高台がなく方形の口縁端部がつく。

天目茶碗(745~746)は、口縁部のみであるが、745は瀬戸・美濃産で17世紀後半頃の所産であろう。746は瀬戸・美濃産の大日茶碗の底部を円形に打ち欠いた円形加工陶磁製品である。

そのほかの陶器類(741~744)は、741が灯明皿、742は釜と考えられる。743は壺であろう。744は行平の底部である。

磁器類(747~750)は、747は瀬戸・美濃産碗の口縁部。748は肥前産の所謂「くらわんか手」の碗である。749は肥前産の皿である。750は瀬戸・美



第108図 S D 32出土遺物実測図 (1:4)

濃産の仏飯具である。

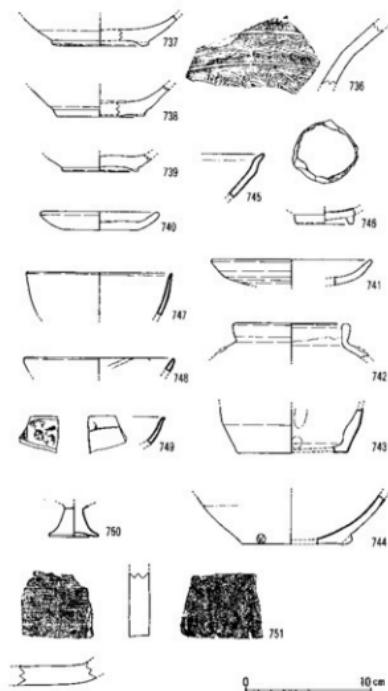
瓦(751)は焼成き半瓦である。

#### S D 37

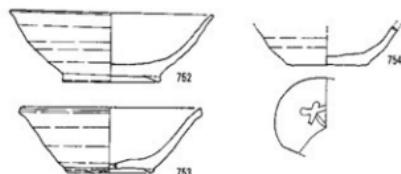
E地区中央で検出した東西溝である。幅0.7m前後、深さ1~14cm程である。溝方向はN 55°~72°W前後である。

遺物はないが、溝方向からこの時代とした。

#### S D 38



第109図 S D 36出土遺物実測図 (1 : 4)



第110図 平安時代以降包含層出土遺物実測図 (1 : 4)

E地区南西で検出した東西溝である。S B 32およびS B 33の雨落ち溝と考える。幅0.7~1.6m程、深さ11~57cm程である。溝方向はN 61.5°W前後である。

遺物には上師器鍋、陶器碗などがある。

#### S D 39

F地区の南西隅で検出した溝である。南北から東西に曲がる。S B 32・33およびS E 4に伴う屋敷地を区画する溝と考えられる。幅0.4~0.8m、深さ7~21cm程である。溝方向は南北方向がN 25°~30°S前後、東西方向がE 9°S前後である。

遺物には上師器片がある。

#### 5 包含層出土遺物

陶器碗(752~755)は、内湾する体部から口縁部が外反気味におわり、貼り付け高台はハの字状にひらく752がある。753は体部が直線的にひらき、低い逆台形状の高台を貼り付ける。754・755の底部は回転糸切りのままで、底部外面には墨書が見られる。754は「大」で、755は「米」であろうか。750は涙美・湖西型の第5型式、753は尾張型の第6型式、754・755は尾張型の第8型式に相当しよう。

青磁碗(756)は、口縁部の細片で確実でないが外面に蓮弁文をほどこす。

白磁碗(757)は、体部がやや内湾気味にたち上がり玉縁の口縁部を有する。

磁器碗(758)は体部下半から高台部である。

#### [註]

- ① 小坂宣法「獨立柱建物に関する一考察」『Mie history』vol. 5 三重歴史文化研究会 1993を参考した。
- ② 渡辺誠「長岡宮跡の曲物井戸」『古代文化』第30巻第8号 古代学協会 1979
- ③ 濱澤良祐「瀬戸古窯址群I」『瀬戸市民俗資料館研究紀要I』瀬戸市民俗資料館 1982
- ④ 濱澤良祐「山茶窯の現状と課題」『研究紀要 第3号』三重県埋蔵文化財センター 1994
- ⑤ 横田賢一郎・森田勉「太宰府出土の中國輸入陶器について」『九州歴史資料館研究紀要4』九州歴史資料館 1987

## IX. その他の遺構

その他の遺構には、A地区で検出した畦畔状遺構、A地区およびD地区で検出した牛の足跡とB地区で検出した噴砂がある。

### 1 畦畔状遺構（第112図）

A地区東壁トレーナーの土層断面から耕作土上面より約80cm程下で厚さ約5cm前後の橙色土混り暗灰色粘土層を検出した。平面掘削をおこなったが、畦畔は検出されなかった。この層はA地区の東半、北微高地の北東部に広がりをみせていることが判明した。

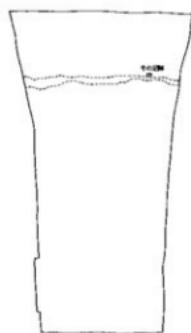
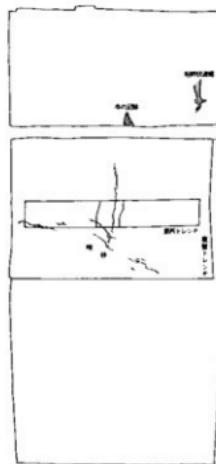
畦畔状遺構は、A地区東壁面の層序の中で暗灰色粘土を基盤とする畦畔らしき立ち上がりが認められたため、高まり上面まで掘削した。検出した遺構の標高は約6.2m程である。畦畔と考えられる遺構の両側はマンガン粒を含みアシやヨシ科の葦苔状斑文がはいる暗青灰色シルト層である。検出した範囲は東西約2m×南北約4mで、畦畔との比高差は6cm程である。畦畔状遺構に伴う遺物はなく時期不明であるが、おそらく中世であろう。

### 2 牛の足跡（第113・114図）

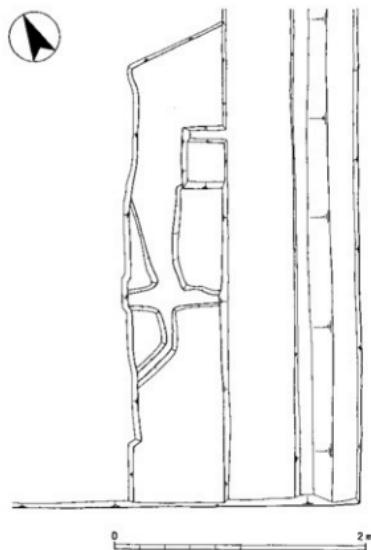
A地区中央の南で検出した牛の足跡は、ヒズメ形やそれ以外ものまで含めると44個になる<sup>⑤</sup>。検出した高さは標高約6.2m程で、畦畔状遺構とはほぼ同じレベルである。層位的には東壁土層断面の暗灰色粘土上面で検出した。足跡の大きさは大小あるように考えられ、大きいもので13.5cm×12.0cm前後、小さいもので10.0×9.0cm前後である。検出面からの深さは2.0cm前後である。ヒトの足跡らしき痕跡は検出されなかった。

D地区で検出した牛の足跡は2個である。足跡を検出した面は、同地区的遺構基盤層の上層である褐色粘土層で、遺構検出面より13~15cm程高い。足跡の標高は約6.5m程である。足跡の埋土はともに黄橙色粗砂であった。大きさは東側が10cm×7cm、西側が10cm×8cm、深さは東側が1.8cm、西側が2cmである。A地区で検出した足跡に比べると数値的には小さいものに近い。

A・D地区的足跡とともに伴う遺物がなく時期不明である。D地区的足跡を検出した層は古墳・飛鳥時代の遺構基盤層の上層であり、中世以降であろう。



第111図 その他遺構配置図 (1:1, 500)



第112図 蛙畠状遺構実測図（1:40）

3 噴砂（第116・117図・PL-34）

噴砂を検出したのは、遺構基盤層である灰褐色砂質土（便宜的にこの層を下層第1層とし、以下を下層第2層と呼ぶ。）を掘削した下層第2層の暗青灰色粘質土の上面である。

噴砂は、B地区南中央から北方向に直線状にのび



第113図 A地区牛の足跡実測図（1:40）

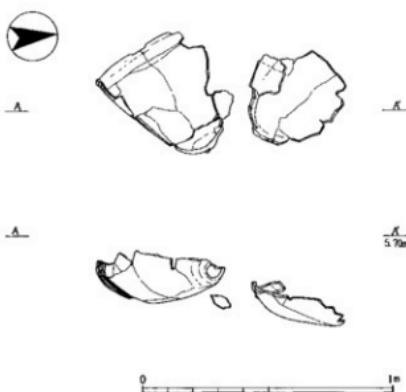


第114図 D地区牛の足跡実測図（1:40）

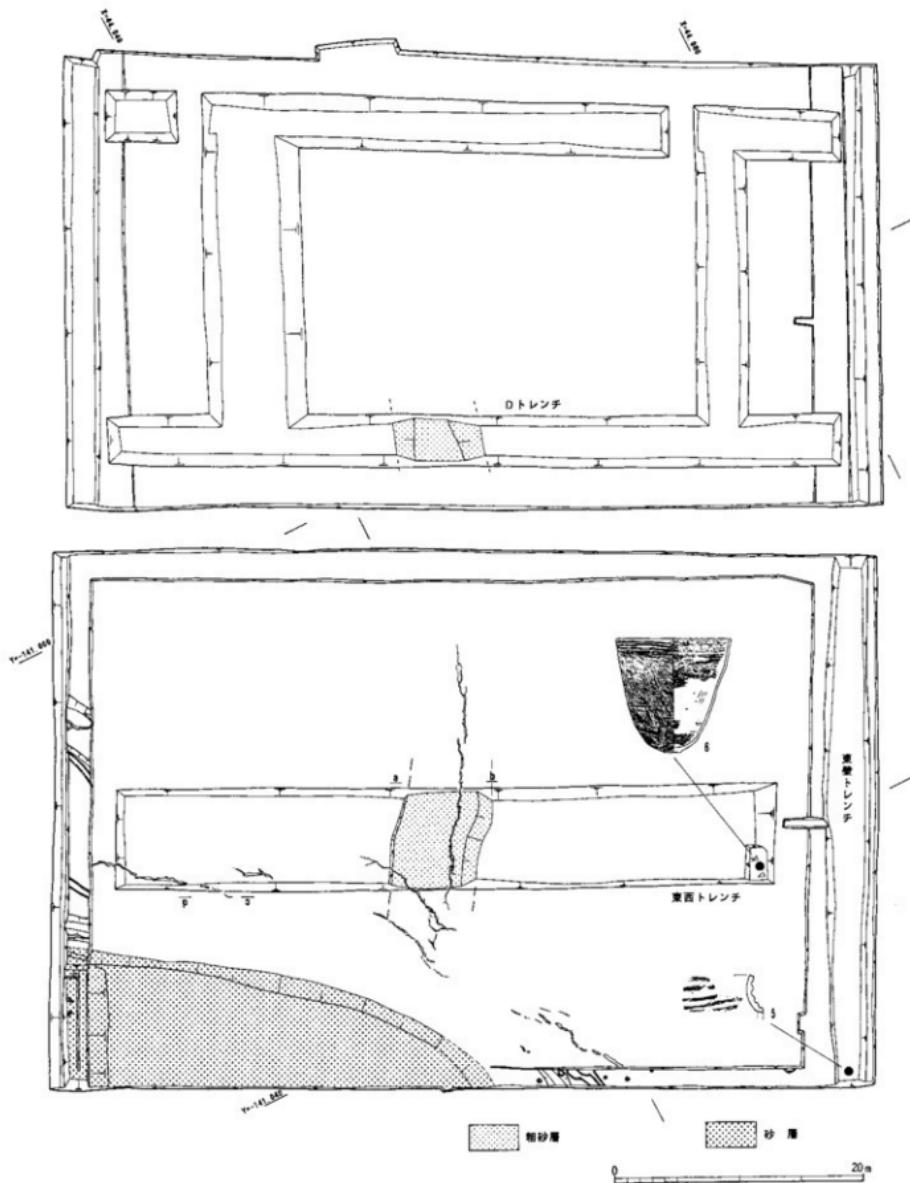
る噴砂と南東から湾曲しながら北西にむかう2方向の噴砂を検出した。

北方向にのびる噴砂は、検出した長さ21.1m、幅3cmから20cm程度ではば直線的であり、方向はN $28^{\circ}$ E前後である。南東から湾曲しながら北西方向に向かう噴砂は、5条から6条ほどを単位として大きく3つの群に分かれ、雁行状に走っている。検出した長さは、3.4mから12.1m程、噴砂の幅は2cmから20cmで、方向はN $14^{\circ}$ WからN $54^{\circ}$ W前後である。

北にのびる噴砂に直交するように、また下層確認のために長さ53m、幅8mの東西トレントを設定した。その結果、東西トレント北壁面の土層観察から、噴砂は検出した暗青灰色粘質土の上面から4cm下で幅約3.8m、高さ約1.4mの丘状の砂層から上昇していることが判明した。丘状の砂層は櫻原Ⅶで



第115図 窓文土器出土状況図（1:20）



第116図 噴砂実測図 (1 : 400、上図: A地区、下図: B地区)

「粗砂丘」としたが<sup>②</sup>、自然に水平堆積した層が削られたと考えた方がより妥当性があるとされ<sup>③</sup>、以後この語をもっている。このトレンチ調査では東南隅で下層第3層の青灰色シルトから縄文時代後期末の宮窓式の深鉢（6）が縦に半壊した状態で1個体出土した。また同地区の東壁トレンチで同じ青灰色シルト層から出土したと考えられる後期末の宮窓式の口縁部片（5）が出土しており、青灰色シルト層が形成されたのは縄文時代後期頃と考えられる。また丘状の砂層は、北にのびておりA地区のDトレンチで見つかった幅約8.9m、高さ約1.7m程の丘状の砂層に続くものと考えられる。丘状の砂層ののびる方向に北に向かう噴砂は走っているが、A地区では噴砂は検出していない。

南東から北西方向の噴砂は、B地区の南西部にみられる灰褐色粗砂層に沿うように湾曲する。この粗砂層は、「Ⅲ、縄文時代」および「XI、遺構・遺物のまとめと考察」で記したように縄文時代晚期頃に河川の氾濫により形成されたと考えられる。

噴砂は、下層第3層の青灰色シルト層および下層

第2層の暗青灰色粘質上層を破って噴出しているが、上層で検出した旧河道や溝の底からは噴砂を検出しておらず、上層の遺構には影響されていない。

検出した噴砂は、丘状の砂層およびその下の砂疊・粗砂層が地震により液化現象を起こして噴出したものである。

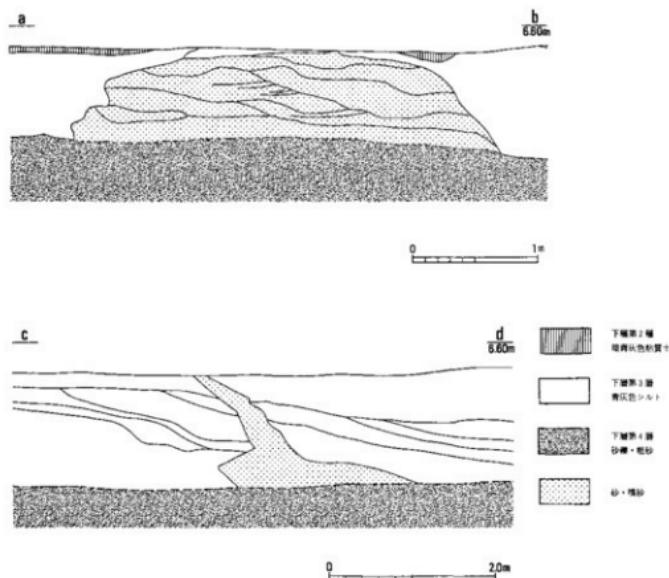
（宮田）

#### [註]

① A地区的足跡については、13個の足跡を足型を取っている。足型を三重県農業技術センターに見ていたところ、牛の足跡または馬の足跡とも考えられ、その基本的な差異は、牛は偶蹄目に属し、2本の指が発達した2蹄で、馬は奇蹄目ウマ科に属し、1本の指が発達した1蹄である。つまり、U字形の足型は馬の足跡のようであり、「字形の足型は牛の足跡と考えられるということであった。（加藤嘉太郎・山内昭二共著『家畜比較解剖図説』養賢堂 1996）の御教示を得た。

② 三重県埋蔵文化財センター『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概要VI』1995

③ 通産省工業技術院地質調査所 寒川 旭氏の御教示による。



第117図 B地区東西トレンチ土層断面図（上図は北壁面1:80、下図は南壁面1:60）

## X. 自然科学分析

### 1. 放射性炭素<sup>14</sup>C 年代測定

パリノ・サーヴェイ株式会社

#### はじめに

藏田遺跡は、安濃川左岸の微高地～谷状の低地部に立地し、微高地からは弥生時代から古墳時代の集落、鎌倉時代の屋敷地、低地部からは同時代の自然流路、溝などが検出されている。また、縄文時代、弥生時代、古墳時代、鎌倉時代の遺物が検出されている。

今回の自然科学分析では、遺跡の土層の堆積年代および遺跡周辺の地形変遷を検討する資料とするために、自然堆積層から検出された材を対象として、放射性炭素年代測定を行う。

#### 1. 試料

藏田遺跡D地区は、2つの微高地に挟まれた谷状低地部にあたる。試料はいずれも自然木と考えられる材で、南北トレンチから検出された試料番号1・2・3の合計3点である。試料が検出された層はいずれも洪水平積物と考えられ、試料番号1は淡灰褐色粗～中砂の6層、試料番号2は淡灰褐色粗～中砂の21層、試料番号3は淡褐色沙礫の26層から検出されたものである。

#### 2. 分析方法

測定は、学習院大学放射性炭素年代測定研究室の協力を得た。なお、年代値の算出には、半減期としてLIBBYの半減期5,570を使用している。

#### 3. 結果

結果を第4表に示す。

#### 4. 考察

今回得られた年代値は、これまでのデータからみて、試料番号1は、縄文時代中期後半、試料番号2は縄文時代後期初頭、試料番号3は縄文時代後期後半頃にあたると考えられている（日本第四紀学会ほか、1992）。各試料が検出された土層の上下関係は、試料番号2が検出された南北トレンチの21層が最上位で、試料番号1が検出された6層が下位にあたる。また、試料番号3が検出された26層は、6層よりさらに下位にあたる。一方、今回の分析結果では、試料番号3の年代値が最も新しい。したがって、試料番号1・2は安濃川の洪水などにより古い年代の材が堆積物中に混入した可能性がある。試料番号3で得られた年代から、洪水は古くとも縄文時代後期後半頃以降に起こった可能性がある。ただし、下位の26層から上位の21層までが、同時期の堆積物であるか、異なった年代の堆積物であるか現時点ではわからない。今後は、各層の分布や堆積構造、堆積環境の調査などのデータを併せ、遺跡周辺の微地形および地形変遷を検討することが望まれる。

#### 引用文献

日本第四紀学会・小野 昭・春成秀爾・小田静夫（1992） 国解・日本の人類遺跡、242p.、東京大学出版会。

### 2. 土壌分析および種実同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

#### はじめに

藏田遺跡は、安濃川左岸の沖積地に位置する。今回の調査により、縄文時代・弥生時代・古墳時代・鎌倉時代の遺構・遺物が検出されている。

今回の分析では、鎌倉時代の掘立柱建物に東南隅で検出された土坑について、覆土中に残留している成分を測定し、遺構用途に関する情報を得る。発掘調査所見等から、この土坑は家畜小屋の排泄物をためる場所

であることが指摘されている。したがって、今回はトイレ遺構などの排泄物が存在した場所に富化される可能性がある成分のうち、土壤中で濃集状況が比較的確認しやすい有機炭素、リン酸、及び重金属類（銅・亜鉛）を測定することにした。そのほか、E地区の溝S D 15から出土した種実遺体について、その種類を明らかにする。

## 1. 用途不明遺構の成分分析

### 1. 試料

試料は、F地区の土坑SK 16埋土サンプルA～Dの4点と、対照試料であるE地区の井戸SE 2の井桁内草木質土壤1点である。

### 2. 分析方法

有機炭素はチューリン法、リン酸、亜鉛、銅は共に硝酸・過塩素酸で分解し、リン酸はバナドモリブデン酸比色法、亜鉛、銅は原子吸光光度法（土壤標準分析・測定法委員会、1986；渋谷ほか、1978）でそれぞれ行った。以下に各項目の分析方法を示す。

#### （1）有機炭素（Org-C）

微粉碎試料0.100～0.500gを100ml三角フラスコに確認に秤りとり、0.4Nクロム酸・硫酸混液10mlを正確に加え、約200°Cの砂浴上で正確に5分間煮沸する。冷却後、0.2%フェニルアントラニル酸液を指示薬に、0.2N硫酸第1鉄アンモニウム液で滴定値および加熱減量法で求めた水分量から、乾土あたりの有機炭素量（Org-C乾土%）を求める。

#### （2）全リン酸（T-P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>）

風乾細土試料5.00gをケルダールフラスコに秤りとり、はじめに硝酸（HNO<sub>3</sub>）10mlを加えて加熱分解した。放冷後、過塩素酸（HClO<sub>4</sub>）20mlを加えて加熱分解を行った。分解終了後、蒸留水で100mlに定容し、ろ過した。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液（バナドモリブデン酸・硝酸液）を加えて分光光度計によりリン酸（P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>）濃度を測定した。この測定値と加熱減量法で求めた水分量から、乾土あたりのリン酸含量（P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>mg/g）を求める。

#### （3）亜鉛（Zn）、銅（Cu）

リン酸測定用分解液について、原子吸光光度計により亜鉛（Zn）、銅（Cu）の濃度を測定した。これら測

定値と加熱減量法で求めた水分量から、乾土あたりの亜鉛、銅（mg/kg）含量を求める。

### 3. 分析結果

分析結果を第5表に示す。以下、各成分別に結果を記す。

#### （1）有機炭素（Org-C）

F地区のSK 16の埋土サンプルは全体的に腐植含量が低く、1.0%前後である。また、対照試料のE地区のSE 2の井桁内草木質土壤では腐植含量7.96%と高い値をしめす。

#### （2）全リン酸（T-P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>）

リン酸含量は、F地区のSK 16埋土サンプルAの2.35mg/gが最も高いが、他は2.0mg/g以下である。また、E地区のSE 2の井桁内草木質土壤では、比較的高い腐植含量を示しているのにに対し、リン酸含有量は1.37P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>mg/gと最も低い値が得られた。

#### （3）銅・亜鉛（Cu・Zn）

銅・亜鉛とも対照試料が最も高い値を示す。F地区的SK 16埋土では、サンプルCで銅の含有量が対照試料に近い値が得られたが、他は対照試料よりも8.0mg/kg程低い。また亜鉛の含有量は、対照試料に比較していずれも60mg/kg前後の低い値となっている。

### 4. 考察

排泄物は食物として摂取された動植物遺体に由来すると考えられるので、かつて排泄物の存在した場所には有機物が濃集していると考えられる。一般に有機物の主成分は有機成分であり、その他に無機成分が少量含まれる。有機成分の中でも炭素は多量に含まれる成分であるが、有機物が土壤中に埋設されるとその殆どは微生物によって分解され、やがて炭酸ガスとして系外に放出される。しかし、トイレ遺構などのように有機物が局所的に多量に蓄積された場所には、有機成分由来の炭素が腐植として濃集すると考えられる。また有機物中の少量な無機成分も局所的な供給によって濃集することもあるが、有機成分に比べて元々含量が少なく、しかもこれら無機成分は土壤中に多く存在する。したがって、濃集後の経年変化によって拡散移動してしまうと、濃集の判断がしにくい。

その中でリン酸は生物にとって主要な構成元素であ

り、特に人や動物の骨や歯には多量に含まれている。生物体内に蓄積されたリンはやがて土壤中に還元され、土壤有機物や土壤中の鉄やアルミニウムと難溶性の化合物を形成することから、無機成分の中でも土壤中を比較的移動しにくい成分である。特に活性アルミニウムの多い火山灰土壤ではリンの保持能力が高い。現在の耕地のリン含量に関する調査例（Bowen, 1983； Bolt & Bruggenwert, 1980；川嶋ほか, 1991；天野ほか、1991）等から推定される天然賦存量の上限は0.3%程度であるが、動物遺体起源の残留物があれば、それを上回る含有量が確認できる可能性がある。実際に、竹迫ほか（1980）、竹迫（1981）、坂上（1984）、竹迫（1985）等で、リン酸含量から動物遺体の痕跡が確認されている。

この他の無機成分としては重金属があるが、これら元素の土壤中における自然含有量、いわゆる天然賦存量はきわめて微量である。銅、亜鉛の土壤中における天然賦存量は、銅で中央値30mg/kg、亜鉛で中央値90mg/kg（Bowen, 1983）との報告がある。しかし重金属類を含む施設物などを土壤に投棄すると、その重金属は濃集してなかなか拡散移動しないことは、わが国の土壤汚染問題などからも明らかである。すなわち、人間の生活行為によって自然界に微量であった重金属類元素が土壤中に蓄積し、濃集している現象は、人間の生活行為によって起こったものと解釈できる。これら重金属類元素の中で、亜鉛は現在の下水污泥や家畜糞などの排泄物に多量に含まれており、汚染指標元素にもなっている。また銅なども昔から人間がよく使用した元素と言われており、これら元素はリン酸とともに人の生活行為の痕跡指標となる可能性が高い。

このような観点で有機炭素、リン酸および重金属の含量をみてみると、F地区のS K 16の埋土サンプルはいずれの項目においても天然賦存量を下回る値である。また、リン酸含有量については、対照試料であるE地区のS E 2の井桁内草本質土壤より若干高い値を示すものの、有意な差があるとは考えにくい。これらの点を考慮すると、今回の分析結果は各成分が富化した状態とはいはず、家畜などの排泄物の蓄積があった場所とは考えにくい。一方、対照試料であるE地区的S E 2の井桁内草本質土壤では、リン酸含量は低いものの、腐植、亜鉛含量が高い値であり、井戸内へ生活

残渣が流入あるいは投入された可能性もある。

## II. 種実の種類

### 1. 試料

試料はE地区の溝 S D 15から検出された1点である。

### 2. 方法

双眼実体顕微鏡下で観察し、種実遺体の同定を行った。

### 3. 結果

同定の結果、種実はモモであった。以下に形態的特徴を記す。

#### ・モモ (*Prunus persica* Batsch) バラ科サクラ属

核（内果皮）が検出された。褐色～黒褐色で大きさは2cm程度。核の形は球形に近い。基部は丸く大きな臍点がありへこんでおり、先端部は丸く、あまり尖らない。一方の側面にのみ、縫合線が顕著にみられる。表面は、不規則な洗浄のくぼみがあり、全体としてあるいはわ状に見える。

### 4. 考察

モモは、栽培植物として人種から渡来した種族とされる。その渡来時期の詳細は明らかではないが、長崎伊木力遺跡の調査例（南木・粉川、1990）等から、繩文時代にはすでに渡来していたと考えられている（粉川、1988）。弥生時代以降は各地で種実が出土しており広く栽培されていたことが推定される。

#### 引用文献

- 天野洋司・太田健・草場敬・中井信（1991）中部日本以北の土壤型別  
蓄積リンの形態別計量、農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壤蓄積リンの再生循環利用技術の開発」、p. 28-36.  
Bolt, G. H., & Bruggenwert, M. G. M. (1980) 土壤の化学、岩田進  
牛・三輪齊太郎・井上隆弘・隔捷行訳、309p., 学会出版センター  
〔Bolt, G. H. and Bruggenwert, M. G. M. (1976) SOIL  
CHEMISTRY〕、p. 235-236.  
Bowen, H. J. M. (1983) 土壌無機化学-元素の循環と生化学-、浅  
見輝男・茅野充男訳、369p., 博友社〔Bowen, H. J. M. (1979)  
Environmental Chemistry of Elements〕.  
土壤標準分析・測定法委員会編（1986）土壤標準分析・測定法 354  
p., 博友社。  
土壤養分測定法委員会編（1986）土壤養分分析法、440p., 養育堂。  
南木聰彦・粉川昭平（1990）伊木力遺跡の大型植物化石群集、「伊木

力遺跡 長崎県大村湾沿岸における萬文時代低湿地遺跡の調査、  
p. 642~659、多良見町教育委員会・同志社大学考古学研究室。

農林省農林水産技術会議事務局監修 (1967) 新版標準土色帖。

川崎弘・吉田鶴・井上恒久 (1991) 九州地域の土壤型別蓄積リンの形  
態別蓄積量、農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壤蓄積リンの

再生循環利用技術の開発」、p. 23~27。

粉川昭平 (1988) 腐物以外の植物食、全閑 恵・佐原 真「劣生文化  
の研究2 生業」、p. 112~115、雄山閣。

熊田恭一 (1981) 腐食酸の科学的性質 (2)、「土壤有機物の科学 第  
2版」、p43~79、学会出版センター。

試料名	採取層準	試料	年代値 (1950年よりの年数)	Code No
南北トレーンNo.1	6層	材	4,240±70y. B.P. (2,290 B.C.)	Gak-19830
南北トレーンNo.2	21層	材	3,920±70y. B.P. (1,970 B.C.)	Gak-19829
南北トレーンNo.3	26層	材	3,290±90y. B.P. (1,340 B.C.)	Gak-19828

第4表 蔵田遺跡D地区放射性炭素年代測定結果

試料名	土性	土色	P205 (mg/g)	Cu (mg/g)	Zn (mg/g)	腐植 (%)
F地区 SK 16 埋土サンプルA	LiC	2.5Y 4/2 暗灰黄	2.35	16.7	112.5	1.11
F地区 SK 16 埋土サンプルB	LiC	2.5Y 4/2 暗灰黄	1.91	16.2	115.1	1.01
F地区 SK 16 埋土サンプルC	HC	2.5Y 3/3 暗オリーブ褐	1.76	23.9	106.3	1.19
F地区 SK 16 埋土サンプルD	LiC	2.5Y 4/2 暗灰黄	1.67	16.1	115.3	0.71
E地区 SE 2 井桁内草本質	HC	2.5Y 3/1 黒褐	1.37	24.8	173.7	7.96

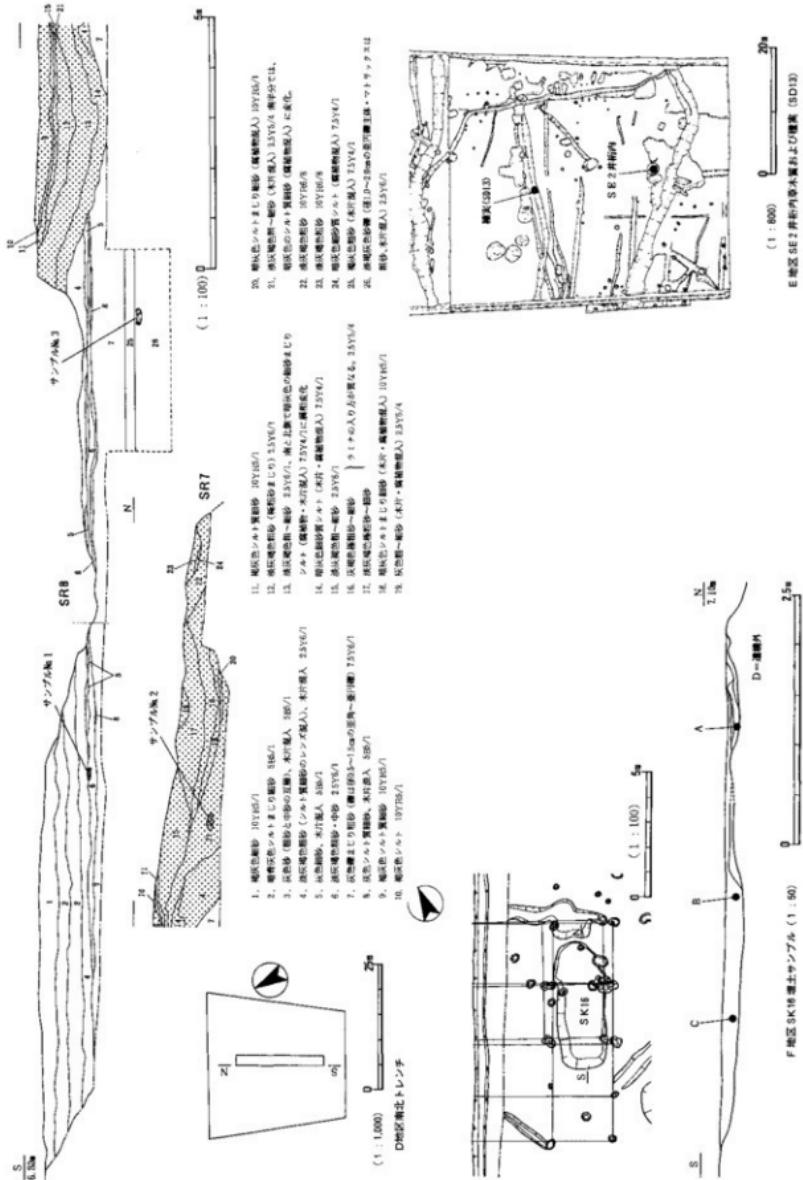
注. (1) 土色: マンセル表色系に準じた新版標準土色帖(農林省農林水産技術会議監修、1967)による。

(2) 土性: 土壌調査ハンドブック(ペドロジスト懇談会編、1984)の野外土性による。

LiC …… 軽塙土(粘土 25~45%、シルト 0~45%、砂 10~55%)

HC …… 重塙土(粘土 45~100%、シルト 0~55%、砂 0~55%)

第5表 土壤理科学分析結果



第118図 分析試料採取地点

遺構	規模 (間)	柱方向	床面積 (m <sup>2</sup> )	桁 行 (m)	梁 行 (m)	柱 間 寸 法		柱 基 形	備 考
						桁 行 (m)	梁 行 (m)		
SB 1	2 × 1	側柱建物 N 15° W 南北棟	5.44	3.2	1.7	1.6等間	1.7	円形 径 20~40cm 深さ 7~30cm	柱痕跡 (径10cm)
SB 2	3 × 2	側柱建物 E 25° N 東西棟	16.96	5.3	3.2	西から 1.6+1.6+2.1	1.6等間	円形 径 30~60cm 深さ 15~60cm	西側 底の出は60cm 柱板(14×15)遺存
SB 3	3 × 1	側柱建物 N 19° W 南北棟	10.44	3.6	2.9	1.2等間	2.9	円形 径 20~30cm 深さ 40cm前後	南側に独立棟持柱 棟持柱の出は50cm、深さ 20cm
SB 4	3 × 2	側柱建物 N 42° W 南北棟	24.57	6.3	3.9	2.1等間	1.95 等間	円形 径 20~30cm 深さ 20cm前後	切り合い関係はSB 2より新しい
SB 5	4 × 1	側柱建物 E 12° N 東西棟	15.84	4.8	3.3	1.2等間	3.3	円形 径 20~40cm 深さ 6~20cm	西側に独立棟持柱 棟持柱の径60cm
SB 6	3 × 1	側柱建物 E 16° N 東西棟	13.44	4.8	2.8	西から 1.5+1.5+1.8	2.8	円形 径 20~40cm 深さ 7~24cm	西側にある2つの小穴も建物 にともなう可能性あり 柱痕跡 (径10~15cm)
SB 7	4 × 1	側柱建物 E 22° N 東西棟	20.16	5.6	3.6	1.4等間	3.6	円形 径 20~50cm 深さ 6~45cm	近接棟持柱 柱痕跡 (径10cm)
SB 8	1 × 1	側柱建物 N 37° W 南北棟	7.02	2.7	2.6	2.7	2.6	円形 径 25~40cm 深さ 23~27cm	ほぼ同一地点、同一規模での 建替え
SB 9	1 × 1	側柱建物 N 37° W 南北棟	8.37	3.1	2.7	3.1	2.7	円形 径 25~40cm 深さ 23~28cm	
SB 10	3 × 2	側柱建物 N 9° E 南北棟	15.96	4.2	3.8	1.4等間	1.9等間	円形 径 20~30cm 深さ 7~26cm	
SB 11	2 × 2	純柱建物 N 13° E	3.20	3.6	3.6	1.8等間	1.8等間	円形 径 20~40cm 深さ 6~25cm	柱痕跡 (径20cm)
SB 12	1 × 1	側柱建物 E 36° N 東西棟	19.20	2.0	1.6	2.0	1.6	円形 径 20~30cm 深さ 2~18cm	
SB 13	3 × 1	側柱建物 N 29° E 南北棟	19.20	6.0	3.2	2.0等間	3.2	円形 径 30cm 深さ 22~29cm	同一地点、同一規模の建替え 平面形は平行四辺形状 柱痕跡 (径10~20cm)
SB 14	3 × 1	側柱建物 N 29° E 南北棟	6.90	6.0	3.2	2.0等間	3.2	円形 径 30cm 深さ 22~29cm	
SB 15	3 × 1	側柱建物 N 18° E 南北棟	6.90	3.0	2.3	1.0等間	2.3	円形 径 25~30cm 深さ 13~18cm	同一地点、同一規模の建替え
SB 16	3 × 1	側柱建物 N 18° E 南北棟	6.90	3.0	2.3	1.0等間	2.3	円形 径 25~30cm 深さ 13~18cm	
SA 1	1 間	EW 0°	全長 7.3		西から 4.0+3.3			円形 径 20~30cm 深さ 18~34cm	
SA 2	2 間	E 3° S	全長 7.2		西から 4.0+3.3			円形 径 25~40cm 深さ 22~34cm	
SA 3	3 間	E 2° S	全長 9.4		西から 3.6+3.4+2.4			円形 径 20~40cm 深さ 15~19cm	柱痕跡 (径10~15cm)
SA 4	3 間	E 41° N	全長 10.3		西から 2.5+2.5+2.5+2.8			円形 径 20~30cm 深さ 4~21cm	

第6表 弥生時代掘立柱建物・柱列一覧表

遺構	規模(間)	棟方向	床面積(m <sup>2</sup> )	桁行(m)	梁行(m)	柱間寸法		柱基形	備考
						桁行(m)	梁行(m)		
SB 17	2×1以上	側柱建物 E 5° S 東西棟	(8.28)	1.8以上	4.6	1.8以上	2.3等間	円形 径30cm 深さ15~21cm	
SB 18	3×2	側柱建物 N 1° W 南北棟	21.42	5.1	4.2	1.7等間	2.1等間	円形 径30~40cm 深さ10~19cm	
SB 19	3×2	總柱建物 N 1° W 南北棟	31.32	5.4	5.8	1.8等間	2.9等間	円形 径30~70cm 深さ10~28cm	ほぼ同一地点、同一規模の建替え
SB 20	3×2	總柱建物 N 1° W 南北棟	31.32	5.4	5.8	1.8等間	2.9等間	円形 径40~70cm 深さ10~28cm	
SB 21	2×1	側柱建物 N S 0° 南北棟	13.44	4.2	3.2	北から 2.3+1.9	3.2	円形 径20~30cm 深さ11~24cm	
SB 22	4×1	側柱建物 E 4° S 東西棟	17.28	6.4	2.7	1.6等間	2.7	円形 径30~50cm 深さ12~29cm	柱痕跡(径10~15cm)
SB 23	1×1	側柱建物 N 10° W 南北棟	7.56	2.8	2.7	2.8	2.7	円形 径20~40cm 深さ15~20cm	
SB 24	1×1	側柱建物 N 3° W 南北棟	7.54	2.9	2.6	2.9	2.6	円形 径20~40cm 深さ30~44cm	切り合い関係よりSB 23が SB 24・25より新しい
SB 25	1×1	側柱建物 N 16° W 東西棟	4.37	2.3	1.9	2.3	1.9	円形 径25~35cm 深さ20~35cm	
SB 26	1×1	側柱建物 N 5° W	4.00	2.0	2.0	2.1	2.0	円形 径25~40cm 深さ10~30cm	

第7表 古墳時代据立柱建物一覧表

遺構	規模(間)	棟方向	床面積(m <sup>2</sup> )	桁行(m)	梁行(m)	柱間寸法		柱基形	備考
						桁行(m)	梁行(m)		
SB 27	3×2	側柱建物 N 22° W 南北棟	10.80	3.6	3.0	1.2等間	1.5等間	円形 径40~60cm 深さ9~36cm	東柱あり、床張りか
SB 28	2×1以上	側柱建物 E 34° S 東西棟	(8.82)	2.1以上	4.2	2.1以上	2.1等間	円形 径50cm 深さ21~42cm	柱痕跡(径15~20cm)

第8表 飛鳥・奈良時代据立柱建物一覧表

遺構	規模(間)	棟方向	床面積(m <sup>2</sup> )	桁行(m)	梁行(m)	柱間寸法		柱基形	備考
						桁行(m)	梁行(m)		
SB 29	4×3	總柱建物 N 66° E 南北棟	46.85	8.7	5.85	西から 2.4+2.25+1.8+2.25 2.1+2.25+2.1+2.25	北から 2.1+1.8+1.95	円形 径20~70cm 深さ11~60cm	身寄3間×2間 北寄3間×1間 東寄2間×1間
SB 30	4×3	總柱建物 E 36.5° S 南北棟	59.87	8.35	7.17	北から 1.95+2.15+2.15+ 2.1	西から 2.46+2.46+2.25	円形 径20~35cm 深さ10~38cm	一部の柱穴に根石あり 束柱なし
SB 31	2×2	總柱建物 N 62° E 南北棟	9.88	3.3	3.0	1.65等間	1.5等間	円形、方形 径15~30cm 深さ11~50cm	桁行と梁行が直交しない 倉庫と考えられる 他の建物よりもやや新しい
SB 32	1以上×2	總柱建物 N 66° E 南北棟	(11.16)	2.4	4.65	2.4以上	北から 2.55+2.1	円形 径25~50cm 深さ19~48cm	東側2間×1間に土炕
SB 33	1以上×3	總柱建物 N 65.5° E 南北棟	(16.56)	2.4	8.7	2.4以上	北から 2.4+2.4+2.1+1.8	円形 径20~45cm 深さ2~51cm	S B 32の建替え 東側3間×1間に土炕 南側1間は庇か

第9表 平安・鎌倉時代据立柱建物一覧表

道 構	規 模		溝 方 向	時 期	出 土 道 物	備 考
	幅 (m)	深さ (cm)				
S D 21	0.5	8~10	N 64° W		土師器細片	
S D 22	1.2	1~31	N 63° W	中世末・近世以降	天目茶碗、丸碗、徳利	
S D 23	0.3	5~10	N 62° W			
S D 24	1.0~1.6	9~21	N 65° W			
S D 25	0.3	4~15	N 65° W	平安末~鎌倉初	土師器小皿、陶器碗	
S D 26	0.3~1.9	2~48	N 63° W	平安末~鎌倉初	土師器細片	
S D 27	0.5	5~9	E 27° S			
S D 28	0.4	2~28	E 28.5° S		土師器細片	
S D 29	1.0~2.4	9~17	N 63° W	平安末以降	灰釉陶器碗、陶器碗・皿、青磁碗、須恵器杯・壺	条里坪界溝
S D 30	0.6~0.8	11~17	N 56° W	平安末~鎌倉初	土師器小皿・鍋、陶器碗	
S D 31	0.3~0.7	9~12	N 54° W	平安末~鎌倉初	陶器碗	
S D 32	0.8	8~20	N 60° W	平安末~鎌倉初	陶器碗・皿	
S D 33	0.8	7~16	N 58° W	平安末~鎌倉初	陶器碗	
S D 34	0.8	3~24	N 60° W		土師器細片	
S D 35	1.0	8~20	E 24° S	平安末~鎌倉初	土師器小皿、陶器碗	
S D 36	0.6~0.8	10~15	N 57.5° W	平安末以降	陶器碗・皿、大口茶碗 陶磁器類、須恵器壺	条里坪界溝
S D 37	0.7	1~14	N 55° ~72° W			
S D 38	0.7~1.6	11~57	N 61.5° W	平安末~鎌倉初	土師器碗、陶器碗	
S D 39	0.4~0.8	7~21	E 25° ~30° S E 9° S	平安末~鎌倉初	土師器細片	S B 32・33 の区 溝

第 10 表 平安時代以降 溝一覧表

発見場所	管所番号	種類	品種	出土場所	(位置)(x,y)			測量・注記の特徴	形状	地城	色調	純度	備考	
					x	y	z							
1 265-03	出土土器	直鉢	C型(△) 直鉢トシナ	—	—	—	—	底板が厚い 内面に浅縁	板 ~3mm厚板	R	灰白色	織目	中期	
2 265-03	出土土器	直鉢	A型(△) △トシナ	—	—	—	—	底板が厚い 外面に浅縁	板や板 ~1mm厚板	R	灰褐色	口縁部付近	中期～後期	
3 265-03	出土土器	直鉢	A型(△) △トシナ	(39.2)	—	—	外周に各部溝窪	板や板 ~1mm厚板	R	灰褐色	口縁部付近	中期～後期		
4 262-04	出土土器	直鉢	直鉢 直鉢トシナ	—	—	—	外周に各部溝窪	板	板	灰褐色	口縁部1/3	後期		
5 263-03	出土土器	直鉢	直鉢 直鉢トシナ	—	—	—	外周に各部溝窪	板	板	灰褐色	口縁部1/3	後期		
6 261-03	出土土器	直鉢	直鉢 直鉢トシナ	45.0	—	45.5	—	口縁部に巻き唇による3つの凹縫 内面に各部溝窪	板 ~1mm厚板	R	灰褐色	口縁部1/3	後期	直縁に大きな凹縫 内面
7 265-03	出土土器	小平鉢	C型(△) 直鉢トシナ	—	15.41	—	底板が厚い	板 ~3mm厚板	板	灰褐色	織目1/2	織目		
8 167-10	出土土器	直鉢	S型	—	—	—	口縁部に船形分合腰窪所 外周に各部溝窪	板 ~1mm厚板	R	灰褐色	口縁部1/3	後期		
9 210-03	出土土器	直鉢	直鉢 直鉢トシナ	—	—	—	口縁部に船形分合腰窪所	板	板	灰白色	口縁部1/3	後期		
10 227-03	出土土器	直鉢	直鉢 直鉢トシナ	—	—	—	口縁部に船形分合腰窪所	板	板	灰褐色	口縁部1/3	後期		
11 069-04	出土土器	直鉢	S型	—	—	—	口縁部を折り曲げる 舟底サビリ	板	板	灰褐色	口縁部1/3	後期		
12 064-03	出土土器	直鉢	S型	SD-1	23.0	—	—	口縁部に2重上締縫式による浅縁 内面に各部溝窪	板	板	灰褐色	口縁部1/3	後期	
13 265-03	出土土器	直鉢	C型(△) 直鉢トシナ	23.6	—	—	口縁部ナメ 勝手小字	板 ~2mm厚板	R	灰色	口縁部1/3	後期		
14 162-03	本製品	柱	S-B2	(長さ 幅)	15.5	12.7	—	円柱断面	—	—	—	上部端丸	新規未記	
15 162-02	本製品	柱	S-B2	長さ 幅	15.0	12.3	—	四つ断面	—	—	—	上部端丸	新規未記	
16 211-03	出土土器	空巣型	S-X1	(11.0)	—	—	口縁部外側ハチ形切欠文 鏡面ナメ	板 ~1mm厚板	R	灰褐色	口縁部5cm 部分			
17 121-03	出土土器	空巣型	S-X1	(17.0)	—	—	口縁部外側ハチ形切欠文による浅縁 内面に2重上締縫式による浅縁	板 ~1mm厚板	R	灰褐色 明褐色	口縁部1/4	後期		
18 119-02	出土土器	空巣型	S-X1	(21.0)	—	—	口縁部外側ハチ形切欠文による浅縁	板 ~1mm厚板	R	灰褐色	口縁部1/3	後期		
19 119-02	出土土器	空巣型	S-X1	(20.0)	—	—	口縁部外側ハチ形切欠文による浅縁	板 ~1mm厚板	R	灰褐色	口縁部1/3	後期		
20 122-03	出土土器	直C	S-X1	—	—	—	口縁部内側に舟底サビリによる浅縁 内面に舟底サビリによる浅縁	板	板	灰褐色	口縁部の5cm 部分			
21 120-03	出土土器	直C	S-X1	—	—	—	鏡面ナメによる舟底サビリによる浅縁	板	板	灰褐色	口縁部の7cm 部分			
22 121-03	出土土器	直C	S-X1	(25.0)	—	—	外周ハケ?	板 ~2mm厚板	R	褐色	口縁部1/3			
23 119-02	出土土器	直A	S-X1	(29.0)	—	—	内面ヨコナメ 内面ヨコカムナメナメハケ	板 ~2mm厚板	R	灰褐色	口縁部1/3			
24 121-03	出土土器	直A	S-X1	(24.0)	—	—	口縁部ナメ 鏡面ナメ 鏡面内側ナメ	板 ~2mm厚板	R	褐色	口縁部1/3			
25 119-02	出土土器	直A	S-X1	(40.0)	—	—	内面各部溝窪 内面ナメナメハケ	板 ~2mm厚板	R	灰褐色	口縁部1/3	後期		
26 121-03	本製品	石斧	S-X1	—	—	—	表面全て剥離 内孔1.5cm程孔	—	—	—	—	表面ぼくす痕跡		
27 128-03	出土土器	空A	S-F1	(16.7)	—	—	口縁部に舟底サビリによる浅縁	板 ~2mm厚板	R	灰褐色	口縁部1/3付近			
28 128-03	出土土器	空C	S-F1	—	—	—	鏡面ナメによる舟底サビリによる浅縁	板	板	灰褐色	口縁部1/3付近			
29 125-03	出土土器	空A	S-F1	20.6	5.3	—	口縁部ヨコナメ 内面ヨコナメハケ 内面内側ヨコナメハケ 係縫ナメハケ 内面内側ヨコナメハケ	板 ~2mm厚板	R	褐色	全周1/3	外周にスヌケ縫		
30 128-03	出土土器	空A	S-F1	(43.7)	—	—	内面ナメハケ 内面ハサフ	板 ~4mm厚板	R	灰褐色	口縁部1/3			
31 121-03	出土土器	空A	S-F1	—	(14.0)	—	内面ナメナメ	板 ~2mm厚板	R	褐色	口縁部1/3			
32 124-03	出土土器	空A	S-F1	—	(7.1)	—	内面ナメナメ	板 ~2mm厚板	R	褐色	口縁部1/3			
33 124-03	出土土器	空A	S-F1	—	(7.4)	—	内面ナメ溝窪不明	板 ~2mm厚板	R	褐色	口縁部1/3			
34 124-03	出土土器	空A	S-F1	—	(3.3)	—	内面ナメハケ 内面剥離で赤茶	板 ~2mm厚板	R	褐色	口縁部1/3			
35 125-03	本製品	磨平石刀	S-F1	長さ 幅	3.7	幅 2.5	厚さ 0.7	—	—	—	—	表面凹凸	重量2.7g 重約	

第11表 遺物観察表(1)

発見番号	種類	器種	出土場所	法面(± cm)			測定	目法の概要	新土	地成	色調	保存度	備考	
				上端	底端	幅								
36	128-01	衛生土器	Ⅲ A	SK1	(28.1)	—	—	口縁部コナギ 壁面に波状文 内面無波状	厚~2mm砂粒	A	赤色	口縫部L/6		
37	128-02	衛生土器	Ⅲ A	SK1	(39.0)	—	—	口縁部コナギ 脱落した内面無波状ハサク 陶器表面による剥離文	厚~2mm砂粒	A	褐灰色	口縫部L/3		
38	131-02	衛生土器	Ⅲ A	SK1	(9.2)	—	—	口縁部コナギ 波状文と内面無波状 3箇所剥離による内面無波状 陶器表面による剥離文	厚~1mm砂粒	A	褐灰色	口縫部L/2		
39	130-01	衛生土器	Ⅲ B	SK1	(20.8)	—	—	口縁部コナギ 波状文 陶器表面による剥離文	厚~2mm砂粒	A	褐色	口縫部L/4		
40	130-04	衛生土器	Ⅲ C	SK1	(23.2)	—	—	口縁部コナギ 上部ハサク剥離による 陶器表面による剥離文	厚~2mm砂粒	A	(内) 暗褐色 (外) 褐色	口縫部L/5		
41	131-01	衛生土器	Ⅲ C	SK1	(30.6)	—	—	口縁部コナギ 口縁部波状文と内面無波状 陶器表面による剥離文	厚~2mm砂粒	A	褐灰色	口縫部L/7		
42	129-01	衛生土器	Ⅲ C	SK1	(42.0)	—	—	口縁部コナギ 口縁部波状文と内面無波状 陶器表面による剥離文 2箇所の内側	厚~2mm砂粒	A	褐灰色	口縫部L/4 L/5		
43	130-02	衛生土器	Ⅲ A	SK1	(34.0)	—	—	口縁部コナギ 四周にハサク剥離による 陶器表面による剥離文	厚~2mm砂粒	A	褐灰色	口縫部L/12	口縫部内面に穴付有	
44	131-02	衛生土器	Ⅲ B	SK1	(26.0)	—	—	口縁部コナギ 陶器表面による内面無波状	厚~2mm砂粒	A	赤色	口縫部L/7		
45	128-02	衛生土器	Ⅲ C	SK1	(32.1)	—	—	口縁部コナギ 陶器表面による内面無波状 陶器表面による内面無波状	厚~1mm砂粒	A	赤褐色	口縫部L/2		
46	132-02	衛生土器	Ⅲ B	SK1	(28.0)	—	—	口縁部内面に波状文 陶器表面による内面無波状ハサク 陶器表面による内面無波状	厚~2mm砂粒	A	赤褐色	口縫部L/3		
47	130-03	衛生土器	Ⅲ E	SK1	(36.0)	—	—	口縁部ナガ 体形外観ナガ 内面ヨコハサ	厚~2mm砂粒	A	赤褐色	口縫部L/7		
48	130-07	衛生土器	Ⅲ E	SK1	(—)	(6.0)	—	内面ヨコハサ 不明	厚~2mm砂粒	A	褐色	口縫部L/4		
49	130-05	衛生土器	Ⅲ E	SK1	(—)	(7.2)	—	内面ヨコハサナギ 内面ヨコハサナギ	厚~2mm砂粒	A	赤褐色	口縫部L/2		
50	132-01	衛生土器	Ⅲ E	SK1	(—)	10.4	—	内面ナガ 内面ヨコハサ 多量不明	厚~2mm砂粒	A	赤褐色	口縫部L/2		
51	131-01	衛生土器	Ⅲ E	SK1	(—)	8.0	—	内面ヨコハサ 内面不明	厚~2mm砂粒	A	赤色	口縫部L/2		
52	130-06	衛生土器	Ⅲ E	SK1	(—)	(8.0)	—	内面ヨコハサ 不明	厚~2mm砂粒	A	褐色	口縫部L/2		
53	134-01	衛生土器	Ⅲ C	SK3	(33.3)	—	—	口縁部コナギ 波状下部に剥離文 陶器表面による内面無波状	厚~3mm砂粒	++~不規	(内) 深褐色 (外) 深褐色	口縫部L/0		
54	133-02	衛生土器	Ⅲ A	SK3	(38.4)	—	—	口縁部コナギ 内面剥離による 剥離文ヨコハサク後 二枚瓦層による内面無波状 陶器表面による内面無波状	厚~3mm砂粒	A	深褐色	口縫部L/5		
55	137-01	衛生土器	Ⅲ B	SK3	(39.1)	(3.7)	—	口縁部ナガ ハサク後内面無波状	厚~2mm砂粒	やや不規	濃褐色	口縫部L/3		
56	130-03	衛生土器	Ⅲ E	SK3	(—)	—	—	口縁部ナガ 陶器表面による内面無波状	厚~2mm砂粒	A	褐色	口縫部の糞 小片		
57	156-06	石器類	石器	SK3	(2.2)	1.6	0.4	標記はギザギザをいたたき作り	—	—	—	—	—	重量 (0.5g) セラカイ
58	133-01	衛生土器	Ⅲ C	SK4	(24.0)	—	—	口縁部コナギ 波状上部に剥離文 陶器表面による内面無波状	厚~2mm砂粒	A	褐灰色	口縫部L/4		
59	133-02	衛生土器	Ⅲ B	SK4	(36.0)	—	—	口縁部コナギ 体形外観ナガ 内面ナガ	厚~2mm砂粒	A	赤褐色	口縫部保存		
60	133-03	衛生土器	Ⅲ B	SK4	(27.8)	—	—	口縁部内面ヨコハサ 体形外観ナガ 内面ナガ	厚~2mm砂粒	A	褐色	口縫部L/2		
61	133-04	衛生土器	Ⅲ E	SK4	(—)	(3.4)	—	内面ヨコハサ 陶器表面による内面無波状	厚~2mm砂粒	A	赤褐色	口縫部L/2		
62	127-04	衛生土器	Ⅲ A	SK9	(20.6)	—	—	口縁部ナガ 内面ヨコハサ 4箇所の内面無波状	厚~1mm砂粒	不規	褐色	口縫部保存		
63	164-02	衛生土器	Ⅲ B	SK2	(23.6)	—	—	口縁部コナギ 波状文と内面ヨコハサ 陶器表面による内面無波状	厚~2mm砂粒	A	赤褐色	口縫部L/0		
64	123-05	衛生土器	Ⅲ B	SK6	(20.0)	—	—	口縁部内面ヨコハサ 陶器表面による内面無波状	厚~2mm砂粒	A	赤褐色	口縫部L/1		
65	127-03	衛生土器	Ⅲ B	SK9	(27.4)	—	—	口縁部内面ヨコハサ 波状不規	厚~2mm砂粒	A	赤色	口縫部L/4		
66	127-02	衛生土器	Ⅲ B	SK8	(—)	—	—	口縁部内面ヨコハサ 陶器表面による内面無波状	厚~1mm砂粒	A	赤褐色	口縫部L/0 cm		
67	162-04	衛生土器	空筒	SK10	(16.3)	—	—	口縁部内面ヨコハサの工具による剥離文 陶器表面による内面無波状	厚~2mm砂粒	A	赤褐色	口縫部L/5		
68	161-01	衛生土器	小型器	SK10	(5.0)	—	—	口縁部コナギ 体形外観ナガ 陶器表面による内面無波状	厚~2mm砂粒	A	灰白色	口縫部L/2		
69	160-01	衛生土器	空筒	SK10	(—)	(12.0)	—	標記はヨコハサナギ ハサクナギ 内面無波状	厚~2mm砂粒	A	赤褐色	口縫部保存		
70	134-01	衛生土器	Ⅲ E	SK1	(20.0)	—	—	口縁部コナギ 陶器表面による内面無波状	厚~2mm砂粒	A	赤褐色	口縫部L/5		

第12表 遺物観察表（2）

発見番号	発見場所	種類	石種	出土場所	法面 (cm)			調査・技法の特徴	船上	潮流	色調	成育度	備考	
					日付	月付	鉛直							
71	131-01 頭生上層	骨	S R 1	—	(6.4)	—	外露ナカハリ 内面ナガ	中等 —3mm鉛直 —2mm横幅	良	灰褐色	成熟L/2			
72	131-02 頭生土層	骨	S R 1	—	(6.2)	—	外露ナカハリ 内面ナガ	中等 —3mm鉛直 —2mm横幅	良	灰褐色	成熟L/3			
73	134-02 頭生土層	骨	S R 1	—	(5.6)	—	内面法面調査 不同	中等 —3mm鉛直 —2mm横幅	良	白色	成熟L/3	最大化		
74	134-03 頭生土層	人骨	骨石英岩	S R 1	員 2 (4.6)	幅 3 (3.7)	厚 5 (4.3)	全表面打抜き調査	—	—	—	頭部・肩部欠		
75	134-05 頭生土層	骨	S D 4	—	(15.6)	—	調整不明	中等強 —3mm鉛直 —2mm横幅	良	本色	成熟D/4	最大化		
76	134-06 頭生土層	骨	S D 4	—	19.4	—	—	口縫合コリニア 外露ナカハリ 内面ナガ	良	良	浅褐色	成熟D/5		
77	137-02 頭生土層	骨	S D 4	—	5.0	—	外露内面ヘタリ付き 内面ナガ	良	良	褐色	未記入			
78	137-03 頭生土層	骨	S D 4	—	6.6	—	外露内面ヘタリ付き 内面ナガ	良	良	褐色	未記入			
79	135-03 頭生土層	皮肉骨	S D 4	(17.2)	—	—	口縫合コリニア 特異的骨質変化 骨頭部骨片 疊積状態 骨頭部内面	良	良	灰白色	成熟D/2			
80	137-03 頭生土層	皮肉骨	S D 4	(22.2)	—	—	口縫合コリニア 外露側骨片 疊積状態 内面ナカハリ	良	良	浅褐色	成熟D/2			
81	135-05 頭生土層	骨	S D 4	(23.8)	—	—	口縫合コリニア 新規内面ヘタリ付き	良	良	灰褐色	成熟D/5			
82	135-06 頭生土層	骨	S D 4	—	9.4	—	外露ナカハリヘタリ付き 内面ナガ 口縫合孔 (3列4孔 + 1列2孔 + 1列2孔)	良	良	褐色	頭部は未定			
83	135-07 頭生土層	骨	S D 4	—	9.2	—	調整不明 2列 口縫合が4方向	良	良	褐色	新規定存	最大化		
84	135-08 頭生土層	骨	S D 4	—	(2.1)	—	外露ナカハリヘタリ付き 上端へ3列5孔下端へ5孔 舟底化に伴う	良	良	灰褐色	成熟D/5	最大化		
85	137-02 頭生土層	皮肉骨	S R 2	(3.6)	—	—	口縫合コリニア 疊積状態 ヘタリ付き 骨頭部内面	良	良	褐色	成熟D/2			
86	133-03 頭生土層	骨	S R 2	—	16.0	—	外露ナカハリヘタリ付き 口縫合孔 - 鏡面に平行斜切込込み	良	良	深褐色	未記入	未記入		
87	133-03 頭生土層	皮肉骨	S R 2	(14.9)	—	—	口縫合コリニア 疊積状態 内面ナカハリ オサエ	良 —3mm鉛直 —2mm横幅	良	灰褐色	成熟D/4	表面にスミ跡		
88	133-03 頭生土層	骨	S R 2	—	5.4	—	外露ナカハリ 内面ナガ オサエ	良 —3mm鉛直 —2mm横幅	良	褐色	成熟D/4	新規定存		
89	w124-01 本製品	人丸	S Z 2	員 5 (51.5)	幅 8.3	厚 2 (4.9)	外露表面を平行に加工 工具跡	—	—	—	—	—		
90	w124-01 本製品	人丸	S Z 2	員 6 (66.4)	幅 8	厚 8.3-8.0	—工具材	—	—	—	—	—	標本取扱により致難	
91	w124-01 本製品	丸	S Z 2	員 6 (66.5)	幅 8.0	厚 4.9-4.2	—工具材	—	—	—	—	—		
92	w124-01 本製品	丸	S Z 2	員 5 (66.5)	幅 5.9	厚 5.9-5.1	—工具材 芯鋸材	—	—	—	—	—		
93	w124-01 本製品	丸	S Z 2	員 5 (61.9)	幅 4.3	—	—工具材	—	—	—	—	—		
94	w124-02 本製品	丸	S Z 2	員 5 (24.0)	幅 5.7	厚 2.6-2.4	標本表面に加工 約2列の方孔2つ 芯鋸材	—	—	—	—	—	標本取扱による 表面に擦れ斑	
95	w125-01 本製品	丸	S Z 1	員 5 (19.5)	幅 4.3	—	—工具材	—	—	—	—	—		
96	w125-01 本製品	丸	S Z 1	員 5 (21.2)	幅 3.9	厚 5.9-5.0	—工具材	—	—	—	—	—		
97	202-01 頭生土層	骨 C	P 1	(10.40)	—	—	口縫合コリニア 丁寧な削除仕上げ 表面の凹凸を削除 且其後端に よる擦れ斑 内面ナカハリ	中等強 —3mm鉛直 —2mm横幅	良	灰褐色	成熟D/4			
98	052-06 頭生土層	骨 A	口縫合 遺物	(21.3)	—	—	口縫合者部に削除仕上げ 内面ナカハリ 内面ナカハリ	良	良	浅褐色	成熟D/5			
99	052-12 頭生土層	骨 A	口縫合 遺物	(19.6)	—	—	口縫合者部に削除仕上げ 内面ナカハリ	良	良	灰褐色	成熟D/5			
100	205-01 本製品	骨 A	地質 遺物	員 5 (21.2)	幅 4.0	厚 2.0	—	—	—	—	—	先端欠失	標本質地	
101	201-01 上断層	萬利	S B 25	—	—	—	外露ナカハリ 内面ナカハリ ヨコナガ	良	良	灰褐色	未記入			
102	201-01 上断層	萬利	S B 25	—	—	—	外露ナカハリ 内面ナカハリ ヨコナガ	良	良	灰褐色	未記入	新規定存		
103	201-01 上断層	萬利	S B 25	—	8.4	—	外露ナカハリ 褐縫合コリニア 縫合部に凹凸	良 やや不均	良	灰褐色	未記入	新規定存		
104	w121-01 本製品	骨 A	S R 1	(15.4)	—	45.1	(52.3)	直角に削り落とす 工具跡	—	—	—	上部欠失	標本用 クヌク	
105	122-02 土壁層	S 材	S E 1	(15.4)	—	—	口縫合コリニア 内面ナカハリ	中等強 —3mm鉛直 —2mm横幅	良	灰褐色	成熟D/5			

第13表 遺物観察表(3)

機器番号	機器種別	種類	品種	当社登録	送電(電力)			測定部位	測定部位の特徴	測定	測定	色調	純白度	備考	
					出力	出力	露点								
100	138-07	上部器具	S字型	S-E1	—	7.6	—	表面ヨコナタメナタマタケ 内面ナタマタケ 露點測定不可	黒	真	乳白色	純白度定有			
101	138-01	上部器具	直形	S-E1	017.29	10.4	12.4	表面ヨコナタメナタマタケ 内面ナタマタケ 露點測定不可	黒	やや青	灰黑色	純白度			
102	138-01	上部器具	直形	S-E1	—	(11.21)	—	表面ヨコナタメナタマタケ 内面ナタマタケ 露點測定不可	黒	真	乳白色	純白度定有	露點/3		
103	w126-01	下部器具	標準形	S-E1	15.5 (21.50)	■ 16.3	15.0-17.7	表面ヨコナタメナタマタケ 内面ナタマタケ 露點測定不可	黒	—	—	—	—		
110	w123-01	下部器具	標準形	S-E1	15.5 (23.50)	■ 16.0	15.5-18.5	表面ヨコナタメナタマタケ 内面ナタマタケ 露點測定不可	黒	—	—	—	—		
111	w123-01	下部器具	標準形	S-E1	15.5 (22.50)	■ 16.7	15.5-17.5	表面ヨコナタメナタマタケ 内面ナタマタケ 露點測定不可	黒	—	—	—	—		
112	w123-02	下部器具	標準形	S-E1	15.5 (23.50)	■ (18.5)	15.5	表面ヨコナタメナタマタケ 内面ナタマタケ 露點測定不可	黒	—	—	—	—		
113	w123-01	下部器具	標準形	S-E1	15.5 (38.50)	■ 25.0	15.5	表面ヨコナタメナタマタケ 内面ナタマタケ 露點測定不可	黒	—	—	—	—		
114	202-01	下部器具	直形	S-E1	15.5 (12.5)	■ 21.4	■ 2.5	表面ヨコナタメナタマタケ 内面ナタマタケ 露點測定不可	黒	—	—	—	—	露點	
115	215-01	上部器具	直形	S-K10	25.3	—	—	表面ヨコナタメナタマタケ 内面ナタマタケ 露點測定不可	黒	真	粉紅	純白度定有			
116	258-01	上部器具	直形	S-K11	013.19	—	—	表面ヨコナタメナタマタケ 内面ナタマタケ 露點測定不可	黒	真	灰黑色	純白度/2			
117	215-01	上部器具	直形	S-K10	9.8	—	—	表面ヨコナタメナタマタケ 内面ナタマタケ 露點測定不可	黒	真	粉色	純白度定有			
118	215-01	上部器具	小型形	S-K10	—	—	—	表面ヨコナタメナタマタケ 内面ナタマタケ 露點測定不可	黒	真	粉色	純白度/4			
119	037-02	上部器具	直形	S-K14	018.47	—	—	表面ヨコナタメナタマタケ 内面ナタマタケ 露點測定不可	黒	— 3mm露點	真 ■ 露點	■ 露點	■ 露點		
120	025-01	上部器具	S字型	S-K18	014.50	—	—	表面ヨコナタメナタマタケ 内面ナタマタケ 露點測定不可	黒	— 3mm露點	真 ■ 露點	■ 露點	■ 露點		
121	021-01	上部器具	C字型	S-K16	016.39	—	—	表面ヨコナタメナタマタケ 内面ナタマタケ 露點測定不可	黒	— 3mm露點	真 ■ 露點	■ 露點	■ 露點		
122	008-01	上部器具	小型丸底座	S-K14	011.27	—	9.4	表面ヨコナタメナタマタケ 内面ナタマタケ 露點測定不可	■ 4mm露點	A	粉色 ■ 露點	■ 露點	■ 露點	■ 露點	
123	011-01	上部器具	S字型	S-K14	—	(7.8)	—	表面ヨコナタメナタマタケ 内面ナタマタケ 露點測定不可	■ 4mm露點	A	浅粉色	■ 露點	■ 露點	■ 露點	
124	037-02	上部器具	S字型	S-K14	—	9.2	—	表面ヨコナタメナタマタケ 内面ナタマタケ 露點測定不可	■ 5mm露點	A	浅粉色	■ 露點	■ 露點	■ 露點	
125	037-01	上部器具	S字型	S-K14	—	12.6	—	表面ヨコナタメナタマタケ 内面ナタマタケ 露點測定不可	■ 5mm露點	A	粉色	■ 露點	■ 露點	■ 露點	
126	006-01	上部器具	直形	S-K18	013.30	—	—	表面ヨコナタメナタマタケ 内面ナタマタケ 露點測定不可	■ 5mm露點	A	粉色 ■ 露點	■ 露點	■ 露點	■ 露點	
127	008-01	上部器具	直形	S-K18	010.31	—	—	表面ヨコナタメナタマタケ 内面ナタマタケ 露點測定不可	■ 7mm露點	A	粉色	■ 露點	■ 露點	■ 露點	
128	008-01	上部器具	直形	S-K18	018.71	—	—	表面ヨコナタメナタマタケ 内面ナタマタケ 露點測定不可	■ 7mm露點	A	粉色	■ 露點	■ 露點	■ 露點	
129	007-01	上部器具	直形	S-K18	22.5	25.4	13.0	表面ヨコナタメナタマタケ 内面ナタマタケ 露點測定不可	■ 7mm露點	A	粉色 ■ 露點	■ 露點	■ 露點	■ 露點	■ 露點
130	002-01	上部器具	小型丸底座	S-K13	—	9.7	—	表面ヨコナタメナタマタケ 内面ナタマタケ 露點測定不可	■ 7mm露點	A	粉色 ■ 露點	■ 露點	■ 露點	■ 露點	
131	003-01	上部器具	小型丸底座	S-K13	—	9.8	—	表面ヨコナタメナタマタケ 内面ナタマタケ 露點測定不可	■ 7mm露點	A	粉色	■ 露點	■ 露點	■ 露點	
132	004-01	上部器具	直形	S-K13	12.7	—	11.7	表面ヨコナタメナタマタケ 内面ナタマタケ 露點測定不可	■ 7mm露點	A	浅粉色	■ 露點	■ 露點	■ 露點	■ 露點
133	002-01	上部器具	直形	S-K13	011.21	—	—	表面ヨコナタメナタマタケ 内面ナタマタケ 露點測定不可	■ 7mm露點	A	浅粉色	■ 露點	■ 露點	■ 露點	
134	002-01	上部器具	直形	S-K13	012.11	—	—	表面ヨコナタメナタマタケ 内面ナタマタケ 露點測定不可	■ 7mm露點	A	浅粉色	■ 露點	■ 露點	■ 露點	
135	020-01	上部器具	直形	S-K13	011.21	—	—	表面ヨコナタメナタマタケ 内面ナタマタケ 露點測定不可	■ 7mm露點	A	粉色	■ 露點	■ 露點	■ 露點	■ 露點
136	001-01	上部器具	C字型	S-K13	014.71	—	—	表面ヨコナタメナタマタケ 内面ナタマタケ 露點測定不可	■ 7mm露點	A	浅粉色	■ 露點	■ 露點	■ 露點	■ 露點
137	027-01	上部器具	S字型	S-K13	(7.8)	—	—	表面ヨコナタメナタマタケ 内面ナタマタケ 露點測定不可	■ 7mm露點	A	粉色	■ 露點	■ 露點	■ 露點	
138	026-01	上部器具	S字型	S-K13	016.41	—	—	表面ヨコナタメナタマタケ 内面ナタマタケ 露點測定不可	■ 7mm露點	A	粉色	■ 露點	■ 露點	■ 露點	
139	021-01	上部器具	S字型	S-K13	014.81	—	—	表面ヨコナタメナタマタケ 内面ナタマタケ 露點測定不可	■ 7mm露點	A	浅粉色	■ 露點	■ 露點	■ 露點	
140	005-01	上部器具	S字型	S-K13	014.91	—	—	表面ヨコナタメナタマタケ 内面ナタマタケ 露點測定不可	■ 4mm露點	A	深灰色	■ 露點	■ 露點	■ 露點	

第14表 遺物観察表(4)

品目番号	管理番号	種類	器種	出土遺物	法量(cm)			測量・目次の内容	地土	地表	色調	存在度	備考	
					口径	高さ	鉢底							
141	020-01	土瓶器	S字型	S.K13	16.4	—	—	口縁部コナゲ 体部内面ノリ、外底モサレ、ナデ	砂 砂質粘土	黄褐色 淡褐色	全層3/4	表面にスカ村		
142	020-01	土瓶器	S字型	S.K13	(13.7)	—	—	口縁部コナゲ 体部内面ノリ、内底ナデ 縁付内面オキニ	砂 —1mm砂粒付	黄 黄褐色	門限部1/4 砂層1/2			
143	020-01	土瓶器	丸型	S.K13	(18.8)	—	—	口縁部コナゲ 体部内面ナデ	砂 —1mm砂粒付	黄 褐色	門限部1/4			
144	020-01	土瓶器	丸型	S.K13	(23.2)	—	—	口縁部コナゲ 体部内面ナデ	砂 —1mm砂粒付	黄 褐色	門限部1/4			
145	020-01	土瓶器	丸型	S.K13	(21.5)	—	—	口縁部コナゲ 体部内面ナデ	砂 —1mm砂粒付	黄 淡褐色	門限部1/2			
146	020-01	土瓶器	丸型	S.K13	(18.4)	—	—	口縁部コナゲ 体部内面ナデ 縁付ナデ、ミコナゲ	砂 砂質粘土	黄 灰白色	門限部1/2			
147	020-01	土瓶器	丸型	S.K13	—	(14.4)	—	口縁部コナゲ 体部内面ナリによるナデ 体部内面ナデ	砂 砂質粘土	黄 褐色	門限部1/2			
148	020-01	土瓶器	丸型	S.K13	—	(11.0)	—	口縁部コナゲ 体部内面工具によるナデ 縁付ナデ	砂 —1mm砂粒付	黄 灰白色	門限部1/2			
149	020-01	土瓶器	丸型	S.K13	—	(12.6)	—	口縁部コナゲによるナデ 縁付ナデ 内底ナリ	砂 —1mm砂粒付	黄 褐色	門限部1/2			
150	020-01	土瓶器	丸型	S.K13	—	(11.6)	—	口縁部コナゲ 縁付内面ナデ 内底ナリ	砂 —1mm砂粒付	黄 褐色	門限部1/2			
151	020-01	土瓶器	丸型	S.K13	—	(13.1)	—	内底ナデ、内底ヨハケ、ナデ	砂 —1mm砂粒付	黄 褐色	門限部1/2			
152	020-01	石瓶器	丸型	S.K13	—	1.4	0.4	—	—	—	—	定期	黒褐色1/2 褐色1/2	
153	130-01	土瓶器	丸型	S.K13	12.4	—	15.3	口縁部コナゲ 内底ヨハケ、内底ナカズリ 内底内面ナリによるナデ	砂 —1mm砂粒付	黄 灰白色	全層3/4			
154	140-05	土瓶器	丸型	S.K15	(12.6)	—	—	口縁部コナゲ 体部内面ナリナコナゲ 内底ナリ、ナカズリ、内底ナゲ	砂 砂質粘土	黄 灰白色	門限部1/2 門限部1/2			
155	142-01	土瓶器	S字型	S.K45	15.6	—	—	口縁部コナゲ 体部内面ナリ、内底ナリナデ	砂 —1mm砂粒付	黄 褐色	門限部2/3 砂層1/3			
156	140-04	土瓶器	S字型	S.K45	—	8.0	—	内底ナリ、内底モサレ 内底内面ナリ	砂 —1mm砂粒付	黄 褐色	門限部1/2 褐色1/2			
157	143-01	土瓶器	S字型	S.K45	(25.0)	—	—	口縁部コナゲ 体部内面ナリ、内底ナゲ	砂 —1mm砂粒付	黄 乳白色	全層3/4	表面にスカ村		
158	144-01	土瓶器	丸型	S.K45	27.0	6.5	22.5	口縁部コナゲ 体部内面ナリナヘラナリ 内底内面ナリナヘラナリ 内底内面ナリナヘラナリ	砂 —1mm砂粒付	黄 —1mm黃褐色	門限部1/2			
159	144-01	土瓶器	丸型	S.K45	—	高部 9.8	体高 16.0	體部内面ナリ、縁部内面ナリ 内底ナリ、内底内面ナリ 内底内面ナリ	砂 —1mm砂粒付	黄 灰色	門限部以外 砂層1/2			
160	145-01	心臓器	丸型	S.K15	0.5	0.5	0.2	—	—	—	—	定期	黒褐色1/2 褐色1/2	
161	170-01	衛生土器	ロゴ型	S.R3	(30.0)	—	—	口縁部内面に錐状工具による被削文 内底ナリ	砂 —1mm砂粒付	黄 黃褐色	門限部1/2			
162	180-04	衛生土器	ロゴ型	S.R3	(26.6)	—	—	口縁部内面に円形削文 内底ナリ	砂 —1mm砂粒付	黄 灰白色	門限部1/2			
163	190-03	衛生土器	ロゴ型	S.R3	—	—	—	口縁部内面に管状文	砂 —1mm砂粒付	黄 灰白色	門限部1/2			
164	210-01	衛生土器	管	S.R3	—	—	—	縫隙部内面に錐状工具による被削文 被削文、縫隙文、内底ナリ	砂 —1mm砂粒付	黄 黃褐色	体部1/2			
165	207-05	衛生土器	縫隙型	S.R3	—	—	—	外底に波状	砂 —1mm砂粒付	黄 褐色	門限部1/2			
166	205-05	衛生土器	ロゴ型	S.R3	(19.6)	—	—	口縁部内面に錐状工具による被削文 内底ナリ	砂 —1mm砂粒付	黄 黃褐色	門限部1/2			
167	207-04	衛生土器	ロゴ型	S.R3	(35.0)	—	—	口縁部内面に錐状工具による被削文 内底ナリ	砂 —1mm砂粒付	黄 褐色	門限部1/2			
168	177-02	土瓶器	丸型	S.R3	(34.2)	—	—	口縁部コナゲ 外底ナリ 内底スビナリ	砂 —1mm砂粒付	黄 褐色	門限部1/4	結合度		
169	190-06	土瓶器	丸型	S.R3	(17.0)	—	—	口縁部コナゲ	砂 —1mm砂粒付	黄 黃褐色	門限部1/4			
170	177-02	土瓶器	丸型	S.R3	12.8	—	—	口縁部コナゲ 外底ナリ 内底ナリ	砂 —1mm砂粒付	黄 褐色	門限部1/5 表面に黒斑			
171	010-02	土瓶器	二重口縁型	S.R3	(17.4)	—	—	口縁部内面に波状文、外底ナリ 内底ナリ	砂 —1mm砂粒付	黄 褐色	門限部1/4			
172	020-03	土瓶器	二重口縁型	S.R3	(18.2)	—	—	口縁部内面に波状文、外底ナリ	砂 砂質粘土	黄 褐色	門限部1/5	表面に黒斑		
173	010-01	土瓶器	二重口縁型	S.R3	—	—	—	内底ナリモナギ	砂 砂質粘土	黄 褐色	門限部1/5	黒斑が著しい		
174	010-01	土瓶器	二重口縁型	S.R3	15.4	—	—	口縁部コナゲ 内底ナリ	砂 —1mm砂粒付	黄 黃褐色	門限部1/3			
175	170-02	土瓶器	二重口縁型	S.R3	(17.8)	—	—	口縁部コナゲ 内底ナリ	砂 砂質粘土	黄 褐色	門限部1/6			

第15表 遺物観察表(5)

展示番号	登録番号	種類	基準	出土遺物	法量(±cm)			調査・目次用箇所	期	地層	色調	保存度	備考
					口径	底径	高さ						
176	013-02	土師器	重山焼	S.R.2	(17.8)	—	—	口縁部ココリナ 内面両ナタ	Ⅲ	やや不均 底面削れ	上縁部1/3		
177	007-05	土師器	小型丸底壺	S.R.3	—	—	—	内斜面ナタ?	Ⅲ	良	灰白色	保存4/3	
178	019-06	土師器	小型丸底壺	S.R.3	—	—	—	内底部ココリナ 内面底部裏ナタ? ハラカメラ	Ⅲ	良	灰白色	口縫部~底部1/3	
179	018-05	土師器	小型丸底壺	S.R.3	8.6	—	6.0	口縁部ココリナ 外底部裏ナタ?	Ⅲ	良 底粘合	灰白色	保存4/3	
180	019-05	土師器	小型丸底壺	S.R.3	—	—	—	無縁ハケ	Ⅲ	良 —6mm鉛粒付	灰白色	上縁部大 底面に黒斑	
181	181-06	土師器	小型丸底壺	S.R.3	—	—	—	外底部裏ナタ? ハラカメラ 内底部ココリナ? ナタ 底面裏ナタ?	Ⅲ	良 底粘合	灰白色	口縫部	
182	181-05	土師器	小型丸底壺	S.R.3	—	—	—	底面裏ナタ? ハラカメラ 内底部ココリナ? ナタ	Ⅲ	良	灰白色	口縫部 全体大	
183	181-02	土師器	小型丸底壺	S.R.3	9.0	—	7.3	口縁部ココリナ 外底部裏ナタ? ナタ	Ⅲ	良 —6mm鉛粒付	灰白色	保存4/3	
184	181-01	土師器	小型丸底壺	S.R.3	9.4	—	8.1	口縁部ココリナ 外底部裏ナタ? ハラカメラ 内底部ココリナ?	Ⅲ	良 底粘合	灰白色	保存4/3	
185	002-01	土師器	小型丸底壺	S.R.3	9.4	—	8.8	口縁部ココリナ 外底部裏ナタ? ナタ	Ⅲ	良 底粘合	良	保存	
186	004-05	土師器	小型丸底壺	S.R.3	(7.6)	—	6.7	口縁部ココリナ 外底部裏ナタ? ナタ	Ⅲ	やや粗 良	灰白色	11縫隙3/4欠	
187	013-01	土師器	小型丸底壺	S.R.3	5.6	—	6.3	口縁部ココリナ	Ⅲ	良	良	口縫部4/5	
188	013-02	土師器	小型丸底壺	S.R.3	(9.8)	—	—	口縁部ココリナ 外底部裏ナタ?	Ⅲ	良	灰白色	口縫部~全体1/2	
189	013-01	土師器	小型丸底壺	S.R.3	9.3	—	—	口縁部ココリナ 外底部裏ナタ? ナタ	Ⅲ	良	良	口縫部~全体1/3	
190	011-01	土師器	小型丸底壺	S.R.3	(7.8)	—	9.3	口縁部ココリナ 内面ナタ	Ⅲ	良	良	保存	変形大
191	013-01	土師器	小型丸底壺	S.R.3	(8.9)	—	—	口縁部ココリナ 内底部ココリナ? ナタ	Ⅲ	良	灰白色	口縫部~全体2/3 平底?	
192	181-05	土師器	小型丸底壺	S.R.3	7.4	—	—	口縁部ココリナ 外底部裏面に突出 内底部ナタ?	Ⅲ	良	灰白色	口縫部~全体2/3 平底?	
193	181-04	土師器	小型平底壺	S.R.2	8.8	—	8.7	口縁部ココリナ 外底ナタ? 内面ナタ? ピオオナシ	Ⅲ	良	灰白色	全体2/3	変形大
194	181-03	土師器	無縁壺	S.R.3	15.8	—	—	口縁部内底部ハラカメ	Ⅲ	良	灰白色	口縫部1/2	
195	080-05	漆生土器	漆	S.R.3	—	—	6.2	底面裏ナタ? ナタ 内底部ココリナ?	Ⅲ	良 —5mm鉛粒付	良	底粘合 底部のみ	保存に大き目
196	179-00	漆生土器	漆	S.R.3	—	—	5.6	内斜面ハケ	Ⅲ	良	良	口縫部 底部のみ	
197	181-07	漆生土器	漆	S.R.3	—	—	8.0	内斜面ハケナタ?	Ⅲ	底粘合	良	口縫部 底部のみ	変形大
198	181-05	漆生土器	漆	S.R.3	—	—	7.5	内底部ココリナ? 内ナタ	Ⅲ	やや粗 —5mm鉛粒付	良	灰白色	底部のみ 底面斜面に本漆膜
199	180-05	漆生土器	漆	S.R.3	(3.7)	—	—	口縁部ココリナ 体部内底部? 内面ナタ	Ⅲ	やや粗 —5mm鉛粒付	良	口縫部~全体1/4	X.X材質
200	008-02	土師器	漆	S.R.3	(3.6)	—	—	11縫隙から体部外側ハナ 口縫部内底部ハラカメ	Ⅲ	良 —5mm鉛粒付	良	底粘合	11縫隙1/3 X.X材質
201	013-01	土師器	漆	S.R.3	(32.4)	—	—	11縫隙から体部外側ハナ 口縫部内底部ハラカメ	Ⅲ	良 —5mm鉛粒付	良	口縫部 底部のみ	底面斜面
202	017-05	土師器	漆	S.R.3	(8.2)	—	—	口縁部ココリナ 内底部ココリナ?	Ⅲ	良	灰白色	口縫部~底部1/3	
203	017-04	土師器	漆	S.R.2	(10.9)	—	—	口縁部ココリナ 体部内底部ナタ?	Ⅲ	良	底粘合	口縫部1/3	
204	177-04	土師器	漆	S.R.3	(34.4)	—	—	口縁部ココリナ 内底部ハラカメ	Ⅲ	良 —5mm鉛粒付	良	口縫部 底部1/2	変形大 X.X材質
205	181-06	土師器	漆	S.R.3	(16.0)	—	—	口縁部ココリナ 内底部ハラカメ	Ⅲ	良 —5mm鉛粒付	良	底粘合	口縫部1/4
206	181-04	土師器	漆	S.R.3	(9.8)	—	—	口縁部ココリナ 体部内底ナタ?	Ⅲ	良 —5mm鉛粒付	良	灰白色	口縫部~全体1/3 底部
207	181-01	土師器	漆	S.R.3	—	2.6	—	体部内面ハケ —2mm鉛粒付	Ⅲ	良	灰白色	底部のみ	
208	178-05	漆生土器	漆	S.R.3	14.8	—	—	口縁部ココリナ 漆面裏面に漆工具による剥落剥離 底面裏面にココリナ	Ⅲ	やや粗 —5mm鉛粒付	良	口縫部1/3	
209	448-04	漆生土器	漆	S.R.3	15.6	—	—	口縁部ココリナ 漆面裏面に漆工具による剥落剥離 底面裏面にココリナ	Ⅲ	良 —5mm鉛粒付	良	口縫部1/3	
210	015-03	土師器	S.9型 A	S.R.3	16.5	—	—	11縫隙ココリナ? 内底部外側ハラカメ 底面裏面にココリナ	Ⅲ	やや粗 —5mm鉛粒付	良	灰白色	口縫部1/3

第16表 遺物観察表（6）

断面番号	地質番号	種類	岩種	出土遺構	法面 (cm)			調査・目次表の位置	助土	堆積	色調	既存度	備考	
					左端	中央	右端							
211	190-05	土壌層	S字型	SR3	13.2	—	—	口縫隙コナラテ 体側外葉ハケ 内葉ビニラシナテ	やや粗 ~3mm粒状	良	灰褐色	口縫隙1/4		
212	192-07	土壌層	S字型	B	SR3	(13.8)	—	口縫隙コナラテ 体側外葉ハケ 内葉ビニラ	粗	不良	灰褐色	口縫隙1/2	口縫隙1/スズ材	
213	195-04	土壌層	S字型	B	SR3	(13.0)	—	口縫隙コナラテ 体側外葉ハケ 内葉ビニラ	粗	A	灰褐色	口縫隙1/2		
214	197-09	土壌層	S字型	B	SR3	(18.0)	—	口縫隙コナラテ 体側外葉ハケ 内葉ビニラ	粗 縫隙粒合	良	灰褐色	口縫隙1/5		
215	202-04	土壌層	S字型	B	SR3	(15.4)	—	口縫隙コナラテ 体側外葉ハケ 内葉ビニラシナ	粗 ~1mm粒状	良	灰褐色	口縫隙1/4		
216	213-02	土壌層	S字型	B	SR3	(15.4)	—	口縫隙コナラテ 体側外葉ハケ 内葉ビニラシナ	粗 ~2mm粒状	良	灰褐色	口縫隙1/3		
217	216-05	土壌層	S字型	B	SR3	—	—	口縫隙コナラテ 体側外葉ハケ 内葉ビニラ	粗 縫隙粒合	やや不良	灰褐色	口縫隙1/6		
218	217-07	土壌層	S字型	B	SR3	7.9	—	口縫隙コナラテ 体側外葉ハケ 内葉ビニラ	粗	A	灰褐色	口縫隙1/6		
219	218-01	土壌層	S字型	B	SR3	(11.2)	—	口縫隙コナラテ 体側外葉ハケ 内葉ビニラ	粗 ~2mm粒状	良	灰褐色	口縫隙1/3	既存にスズ材	
220	217-05	土壌層	S字型	C	SR3	(14.3)	—	口縫隙コナラテ 体側外葉ハケ 内葉ビニラシナ	粗 縫隙粒合	良	灰褐色	口縫隙1/5		
221	218-03	土壌層	S字型	C	SR3	(14.0)	—	口縫隙コナラテ 体側外葉ハケ 内葉ビニラ	やや粗 ~4mm粒状	良	灰褐色	口縫隙1/6		
222	218-07	土壌層	S字型	C	SR3	(12.4)	—	口縫隙コナラテ 体側外葉ハケ 内葉ビニラ	粗 縫隙粒合	不良	灰褐色	口縫隙1/4	内葉骨	
223	226-02	土壌層	S字型	C	SR3	(11.0)	—	口縫隙コナラテ 体側外葉ナメハケ 内葉ビニラシナテ	粗	良	灰褐色	口縫隙1/2	既存にスズ材	
224	228-04	土壌層	S字型	C	SR3	(12.7)	—	口縫隙コナラテ 体側外葉ナメハケ 内葉ナメ	粗 縫隙粒合	良	灰褐色	口縫隙1/2		
225	229-07	土壌層	S字型	C	SR3	(12.8)	—	口縫隙コナラテ 体側外葉ナメハケ 内葉ナメ	粗 ~2mm粒状	良	灰褐色	口縫隙1/1		
226	235-03	土壌層	S字型	C	SR3	(14.0)	—	口縫隙コナラテ 体側外葉ナメハケ 内葉ビニラシナ	粗 ~3mm粒状	やや不良	灰褐色	口縫隙1/3		
227	236-06	土壌層	S字型	C	SR3	(14.8)	—	口縫隙コナラテ 体側外葉ナメハケ 内葉ビニラシナ	粗 ~3mm粒状	良	灰褐色	口縫隙1/4		
228	242-02	土壌層	S字型	C	SR3	(12.7)	—	口縫隙コナラテ 体側外葉ナメハケ 内葉ビニラシナ	やや粗 ~4mm粒状	良	灰褐色	口縫隙1/1	既存にスズ材	
229	248-07	土壌層	S字型	C	SR3	(13.6)	—	口縫隙コナラテ 体側外葉ナメハケ 内葉ビニラシナ	粗 ~2mm粒状	不良	灰褐色	口縫隙1/4		
230	251-04	土壌層	S字型	C	SR3	(16.0)	—	口縫隙コナラテ 体側外葉ナメハケ 内葉ビニラシナ	粗 縫隙粒合	良	灰褐色	口縫隙1/5		
231	256-03	土壌層	S字型	C	SR3	(14.0)	—	口縫隙コナラテ 体側外葉ナメハケ 内葉ビニラシナ	やや粗 ~4mm粒状	良	灰褐色	口縫隙1/2	既存にスズ材	
232	262-02	土壌層	S字型	C	SR3	(14.6)	—	口縫隙コナラテ 体側外葉ナメハケ 内葉ナメ	やや粗	良	灰褐色	口縫隙のみ		
233	261-01	土壌層	S字型	C	SR3	(14.8)	—	口縫隙コナラテ 体側外葉ナメハケ 内葉ビニラシナ	粗 ~2mm粒状	良	灰褐色	口縫隙1/4		
234	268-01	土壌層	S字型	C	SR2	(13.8)	—	口縫隙コナラテ 体側外葉ナメハケ 内葉ビニラシナ	やや粗	良	灰褐色	口縫隙1/2	既存にスズ材	
235	269-01	土壌層	S字型	C	SR3	(14.0)	—	口縫隙コナラテ 体側外葉ナメハケ 内葉ビニラシナ	粗 ~3mm粒状	良	灰褐色	口縫隙1/4	既存にスズ材	
236	269-02	土壌層	S字型	C	SR3	(17.4)	—	口縫隙コナラテ 体側外葉ナメハケ 内葉ビニラシナ	粗 ~3mm粒状	良	灰褐色	口縫隙1/3	既存にスズ材	
237	269-01	土壌層	S字型	D	SR3	(14.0)	—	口縫隙コナラテ 体側外葉ナメハケ 内葉ナメ	粗	良	灰褐色	口縫隙1/4	内葉にスズ材	
238	269-01	土壌層	S字型	D	SR3	(14.0)	—	口縫隙コナラテ 体側外葉ナメハケ 内葉ナメ	粗 ~4mm粒状	良	灰褐色	口縫隙1/2		
239	270-04	土壌層	S字型	D	SR3	(15.4)	—	口縫隙コナラテ 体側外葉ナメハケ 内葉ナメ	粗 ~5mm粒状	やや不良	灰褐色	口縫隙1/4	内葉にスズ材	
240	293-02	土壌層	S字型	D	SR3	(14.4)	—	口縫隙コナラテ 体側外葉ナメハケ 内葉ナメ	粗	良	灰褐色	口縫隙のみ		
241	288-01	土壌層	S字型	D	SR3	(14.0)	—	口縫隙コナラテ 体側外葉ナメハケ 内葉ナメ	粗 ~5mm粒状	良	灰褐色	口縫隙1/2		
242	299-05	土壌層	S字型	D	SR3	—	8.9	—	瘤状根コナラテ 瘤状外葉ナメハケ 内葉ナメ	粗 縫隙粒合	良	灰褐色	瘤状根存在	
243	303-01	土壌層	S字型	D	SR2	—	(8.5)	—	瘤状根コナラテ 瘤状外葉ナメハケ 内葉ビニラシナ	やや粗 ~3mm粒状	良	灰褐色	瘤状根存在	
244	309-01	土壌層	S字型	D	SR3	—	8.4	—	瘤状根外葉ナメハケ 瘤状外葉ナメハケ 内葉ビニラシナ	粗 縫隙粒合	良	灰褐色	瘤状根存在	
245	310-06	土壌層	S字型	D	SR3	—	(7.5)	—	瘤状根外葉ナメハケ 瘤状外葉ナメハケ 内葉ビニラシナ	やや粗	良	灰褐色	瘤状根存在	

第17表 遺物観察表(7)

標示番号	使用番号	種類	計測	計量 (cm)			調査-法の特徴	點寸	度数	色調	判定度	備考
				口径	幅	高さ						
245	012-05	土瓶器	S字型	S.R.2	—	8.9	—	輪廓面内斜面をなし、輪廓面外斜面あり。内底ビザンテニアード	直 横	灰褐色 灰白色	黑白相交点	内底にスリット有
247	189-06	土瓶器	S字型	S.R.3	—	8.3	—	輪廓面内斜面をなし、輪廓面外斜面あり。内底ビザンテニアード	直 横	淡黃褐色	黑白相交点	—
248	189-04	土瓶器	S字型	S.R.3	—	7.6	—	輪廓面内斜面をなし、輪廓面外斜面あり。内底ビザンテニアード	直 横	灰白色	黑白相交点	—
249	009-03	土瓶器	S字型	S.R.3	—	4.2	—	輪廓面外斜面あり。輪廓面内斜面をなし。輪廓面外斜面あり。内底ビザンテニアード	直 横 —2mm斜面	灰 灰褐色 灰白色	黑白相交点	—
250	016-01	土瓶器	S字型	S.R.3	—	(8.5)	—	輪廓面内斜面をなし。輪廓面外斜面あり。	直 横 —2mm斜面	灰 灰褐色 灰白色	黑白相交点/2	—
251	011-03	土瓶器	S字型	S.R.3	—	8.6	—	輪廓面内斜面をなし。輪廓面外斜面あり。内底ビザンテニアード	直 横 —2mm斜面	灰 灰褐色	黑白相交点	—
252	010-04	土瓶器	S字型	S.R.2	—	8.9	—	輪廓面内斜面をなし。内底ビザンテニアード	直 横 —2mm斜面	灰 灰褐色	黑白相交点	—
253	189-02	土瓶器	S字型	S.R.3	—	(10.4)	—	輪廓面内斜面をなし。輪廓面外斜面あり。内底ビザンテニアード	直 横	灰白色	黑白相交点/4	—
254	189-01	土瓶器	S字型	S.R.3	—	10.2	—	輪廓面内斜面をなし。輪廓面外斜面あり。内底ビザンテニアード	直 横	不灰 灰白色	黑白相交点	—
255	189-03	土瓶器	S字型	S.R.3	—	8.2	—	輪廓面内斜面をなし。輪廓面外斜面あり。内底ビザンテニアード	直 横	不灰 灰白色	黑白相交点	—
256	189-05	土瓶器	台付型	S.R.3	—	(8.3)	—	輪廓面外斜面	直 横	灰白色	黑白相交点/5	氧化大
257	012-07	土瓶器	S字型	S.R.3	—	9.5	—	輪廓面外斜面あり。内底ビザンテニアード	直 横 —2mm斜面	灰 灰褐色	黑白相交点	—
258	177-01	土瓶器	台付型	S.R.3	(19.0)	—	—	山根部ヨコナギ	直 横 —2mm斜面	灰 灰白色	黑白相交点/1	—
259	035-02	土瓶器	台付型	S.R.3	(22.6)	—	—	白練部ヨコナギ	直 横 —2mm斜面	灰 灰白色	山根部小	—
260	017-01	土瓶器	台付型	S.R.3	(14.2)	—	—	口縁部ヨコナギ	直 横 —2mm斜面	灰 灰白色	山根部/2	—
261	191-02	土瓶器	小型器	S.R.3	(9.8)	—	—	口縁部ヨコナギ 斜面内斜面ヘアリガキ	直 横	灰 灰褐色	斜面/3	スル付着
262	191-04	土瓶器	小型器	S.R.3	9.7	—	—	内斜面ナガ	直 横	褐色	斜面/4	—
263	185-01	赤生土器	高杯	S.R.3	11.3	—	—	山根部ヨコナギ 斜面内斜面ヘアリガキ	直 横	灰 灰褐色	斜面/5	—
264	009-01	赤生土器	高杯	S.R.3	(22.0)	—	—	斜面内斜面ヘアリガキ	直 横	深黃褐色	斜面/6	—
265	190-05	土瓶器	高杯	S.R.3	(8.6)	—	—	山根部ヨコナギ 斜面内斜面ヘアリガキ 内底ビザンテニアード	直 横 —2mm斜面	灰 灰褐色 灰白色	斜面/7	—
266	179-01	土瓶器	高杯	S.R.3	(22.4)	—	—	山根部ヨコナギ 斜面内斜面ヘアリガキ 内底ビザンテニアード	直 横 —2mm斜面	灰 灰褐色	斜面/8	氧化大
267	185-02	土瓶器	高杯	S.R.3	(20.4)	—	—	口縁部ヨコナギ 斜面内斜面ヘアリガキ	直 横	灰 灰褐色	斜面/9	粘土層含積
268	186-02	土瓶器	高杯	S.R.3	—	(12.2)	—	斜面外斜面ナガ 内底ナガナハマ	直 横 —2mm斜面	灰 灰褐色 灰白色	斜面/10	透孔
269	186-01	土瓶器	高杯	S.R.3	—	17.6	—	斜面外斜面ナガ 内底ナガナハマ	直 横	灰白色	斜面/11	3透孔
270	183-04	土瓶器	高杯	S.R.3	—	—	—	輪廓部ヨコナギ 斜面内斜面ナガ 斜面外斜面ナガ 内底ナガナハマ	直 横 —2mm斜面	灰 灰褐色	斜面/12	氧化大
271	182-01	土瓶器	高杯	S.R.3	(16.8)	—	—	斜面内斜面ナガ 斜面外斜面の組合せにヨコナギ	直 横 —2mm斜面	灰 灰褐色	斜面/13	—
272	184-01	土瓶器	高杯	S.R.3	16.2	—	—	口縁部ヨコナギ 斜面内斜面ヘアリガキ 内底ビザンテニアード	直 横 —2mm斜面	灰 灰褐色	斜面/14	灰分有
273	183-03	土瓶器	高杯 Aa	S.R.3	(22.0)	—	—	口縁部ヨコナギ 斜面内斜面ナガ	直 横 —2mm斜面	灰 灰褐色	斜面/15	氧化大
274	184-03	土瓶器	高杯 Aa	S.R.3	(18.4)	—	—	口縁部ヨコナギ 斜面内斜面ナガ	直 横 —2mm斜面	灰 灰褐色	斜面/16	—
275	184-02	土瓶器	高杯 Aa	S.R.3	(17.6)	—	—	口縁部ヨコナギ 斜面内斜面ナガ	直 横 —2mm斜面	灰 灰褐色	斜面/17	—
276	182-01	土瓶器	高杯 Ab	S.R.3	(17.4)	—	—	口縁部ヨコナギ 斜面内斜面ナガ	直 横 —2mm斜面	灰 灰褐色	斜面/18	メタ付着
277	182-03	土瓶器	高杯 Ab	S.R.3	(17.3)	—	—	口縁部ヨコナギ 斜面内斜面ナガ	直 横	灰 灰褐色	斜面/19	外壁にスリット 粘土層含積
278	181-01	土瓶器	高杯 Ac	S.R.3	16.7	11.4	11.5	口縁部ヨコナギ 斜面内斜面ナガ	直 横 —2mm斜面	灰 灰褐色	全體/4	氧化大
279	008-01	土瓶器	高杯 B	S.R.2	15.4	—	—	山根部ヨコナギ 斜面内斜面ナガ	直 横 —2mm斜面	灰 灰褐色	斜面/5	氧化大
280	183-02	土瓶器	高杯 B	S.R.3	15.0	9.6	11.8	口縁部ヨコナギ 斜面内斜面ナガ 斜面内斜面ナガ	直 横 —2mm斜面	灰 灰褐色	斜面/6	—

第18表 遺物観察表(8)

発見番号	管理番号	種類	品種	古文書標	法量(cm)			調査・目次件数	軸上	横幅	色調	既存目録	備考	
					口幅	奥幅	高さ							
251	182-05	土師器	高杯	S.R.3	(15.8)	—	—	□縦底ヨコナギ 横底内面ナギ	やや幅 ~1mm均等	黄	に赤い黄褐色	横幅1/5		
262	019-07	土師器	高杯	S.R.3	(14.5)	—	—	□縦底ヨコナギ 横底内面ナギ	やや幅 ~3mm均等	黄	淡黃褐色	横幅1/5		
263	186-05	土師器	高杯	S.R.3	—	(9.6)	—	横底内面ナギ 横底ヨコナギ	やや幅	黄	淡黃褐色	横幅1/2		
264	184-05	土師器	高杯	S.R.3	—	—	—	横底内面ナギ	—	黄	灰白色	横幅1/2 ただし、輪状灰	1万通孔	
265	187-07	土師器	高杯	S.R.3	—	19.8	—	横底内面シラフ	やや幅 ~4mm均等	黄	淡黃褐色	横幅1/3	横幅大	
266	013-08	土師器	高杯	S.R.3	—	(10.6)	—	横底ヨコナギ 横底内面シラフ	やや幅 ~1mm均等	黄	淡黃褐色	横幅1/3		
267	182-07	土師器	高杯	S.R.3	—	11.2	—	□縦底ヨコナギ 横底内面ナギ	—	黄	に赤い黄褐色	横幅1/2		
268	184-04	土師器	高杯	S.R.3	—	(12.6)	—	横底ヨコナギ 横底内面作成ナギ 内面ナギ	やや幅 ~2mm均等	黄	に赤い黄褐色	横幅1/4		
269	009-05	土師器	高杯	S.R.3	—	9.2	—	横底ヨコナギ 横底外表面ハ工工具によるナギ	—	黄	に赤い黄褐色	横幅1/2		
270	007-05	土師器	不明	S.R.3	—	(25.0)	—	横底ヨコナギ 外表面ビオサニ・ナギ 内面ナギ	やや幅 ~1mm均等	黄	淡黃褐色	小判1/4A	上手不明	
271	179-06	土師器	杯	S.R.3	(23.4)	—	—	□縦底ヨコナギ 体側内面ナギ	—	黄	—	横幅1/3		
272	011-04	土師器	小型鉢	S.R.3	16.8	—	—	□縦底ヨコナギ 内面ナギ	やや幅 ~1mm均等	黄	灰黄色	豊幅1/3		
273	151-06	土師器	丸鉢	S.R.3	—	3.1	—	横底ヨコナギ 内面ナギ	—	黄	灰黄色	直幅1/3		
274	004-01	土師器	瓶	S.R.3	(3.9)	—	2.8	□縦底ヨコナギ 体側内面ビオサニナギ 内面ナギ	—	やや白	淡黃色	半幅1/2		
275	187-05	土師器	ミニコマ葉	S.R.3	(4.6)	—	—	□縦底ヨコナギ 体側内面ハナ 内面ナギ	—	黄	灰白色	横幅1/6		
276	187-05	土師器	手押土器	S.R.3	—	—	—	内面ビオサニ・下ナギ	やや幅 ~2mm均等	黄	灰白色	半幅1/3 上端1/2		
277	187-05	土師器	手押土器	S.R.3	3.5	—	3.4	内面ビオサニ 内面ナギ	やや白	A	淡黃色	半幅1/2		
278	009-04	土師器	手押土器	S.R.3	4.3	3.8	—	内面ナギ 内面ビオサニナギ	—	黄	—	定形		
279	003-06	土師器	手押土器	S.R.3	3.3	2.6	—	内面ビオサニ 内面ナギ	—	黄	灰白色	江戸切形		
280	187-06	土師器	手押土器	S.R.3	3.5	2.2	—	内面ヨコナギ	やや幅	黄	淡黃色	江戸切形		
281	187-05	土師器	手押土器	S.R.3	3.1	—	—	内面ナギ・ビオサニ	—	黄	淡黃色	はば穴形	上端大	
282	182-03	土師器	手盆	S.R.3	12.5	—	4.5	□縦底ヨコナギ 外表面内面ナギ	—	黄 ~2mm均等	黄	灰白色	豊幅1/4	
283	016-06	土師器	手盆	S.R.3	(12.0)	—	—	□縦底ヨコナギ 外表面内面ナギ	—	黄	青褐色	横幅1/5		
284	182-01	土師器	手盆	S.R.3	12.8	—	4.1	□縦底ヨコナギ 外表面内面ナギ	—	黄 ~2mm均等	黄	灰白色	豊幅1/2	
285	013-06	土師器	手盆	S.R.3	(12.0)	—	—	□縦底ヨコナギ	—	黄	灰白色	口縦幅1/3		
286	192-04	土師器	手盆	S.R.3	(12.6)	4.8	—	□縦底ヨコナギ 外表面内面ナギ	—	黄 ~2mm均等	黄	灰白色	全幅1/4	
287	016-05	土師器	手盆	S.R.3	(10.9)	—	—	□縦底ヨコナギ 外表面内面ナギ	—	黄 ~2mm均等	黄	灰白色	口縦幅1/3	
288	182-02	土師器	高杯	S.R.3	(11.2)	8.6	9.3	□縦底ヨコナギ 外表面内面ナギ	—	黄 ~4mm均等	黄	灰白色	全幅2/4	3万通孔
289	182-02	土師器	高杯	S.R.3	—	(9.5)	—	横底外側ヨコナギ 横底内面ナギ	—	黄 ~1mm均等	黄	灰白色	横幅1/4	4万通孔
290	182-02	土師器	高杯	S.R.3	—	(9.6)	—	横底外側ヨコナギ 横底内面ナギ	—	黄 ~4mm均等	黄	灰白色	横幅1/4	5万通孔
291	003-07	土師器	瓶	S.R.3	—	—	—	横底外側ヨコナギ 江戸	—	黄	白	全体のみ		
292	014-02	土師器	瓶	S.R.3	—	—	—	横底外側ヨコナギ 宝荷	—	黄 ~1mm均等	黄	灰白色	半幅1/4	
293	002-02	土師器	平底豆型	S.R.3	長さ (4.2)	幅2 4.1	厚さ 1.2	—	—	—	—	—	物質	
294	193-02	石製品	円筒	S.R.3	長さ 6.5	幅2 6.5	厚さ 4.4	表面に敲打痕	—	—	—	—	重量361.5g 石	
295	187-03	石製品	円筒	S.R.3	長さ 7.4	幅2 5.1	厚さ 5.1	—	—	—	—	—	重量440.4g 石	

第19表 遺物観察表(9)

担当者番号	登録番号	種類	品種	出工連携	法面 (cm)			調査・柱法の所用	範囲	被覆	色調	残存度	備考
					上層	中層	下層						
286	195-04	木製品	樹木小物石	SR3	高さ 7.9	幅 4.3	厚さ 3.3	緑多色有	—	—	—	—	緑多色(0.8 緑色 灰色から緑色)
287	w-001-01	木製品	木鉢	SR3	高さ 13.6	幅 7.6	厚さ 3.7	丸太材	—	—	—	—	緑多色 セミナ
319	w-055-03	木製品	樹木立彫	SR3	高さ (38.4)	幅 (38.4)	厚さ (38.4)	緑多色有	—	—	—	—	—
319	w-056-03	木製品	机	SR3	高さ (58.5)	幅 (58.5)	厚さ (58.5)	丸太材	—	—	—	—	—
320	w-064-02	木製品	机	SR3	高さ (55.6)	幅 (55.6)	厚さ (55.6)	丸太材	—	—	—	—	緑多色
321	w-064-01	木製品	机	SR3	高さ (48.5)	幅 (48.5)	厚さ (48.5)	丸太材	—	—	—	—	—
322	w-064-03	木製品	机	SR3	高さ (41.1)	幅 (41.1)	厚さ (41.1)	丸太材	—	—	—	—	—
325	w-053-02	木製品	机	SR3	高さ (38.6)	幅 (38.6)	厚さ (38.6)	丸太材	—	—	—	—	—
326	w-053-01	木製品	机	SR3	高さ (38.6)	幅 (38.6)	厚さ (38.6)	丸太材	—	—	—	—	緑多色
325	w-055-01	木製品	机	SR3	高さ (38.1)	幅 (38.1)	厚さ (38.1)	丸太材	—	—	—	—	—
326	w-063-05	木製品	机	SR3	高さ (21.1)	幅 (21.1)	厚さ (21.1)	丸太材	—	—	—	—	—
327	w-065-02	木製品	机	SR3	高さ (20.1)	幅 (20.1)	厚さ (20.1)	丸太材	—	—	—	—	—
328	w-052-02	木製品	机	SR3	高さ (31.7)	幅 (31.7)	厚さ (31.7)	丸太材	—	—	—	—	—
329	w-052-03	木製品	机	SR3	高さ (30.9)	幅 (30.9)	厚さ (30.9)	丸太材	—	—	—	—	—
330	w-052-01	木製品	机	SR3	高さ (20.3)	幅 (20.3)	厚さ (20.3)	丸太材	—	—	—	—	—
331	w-055-04	木製品	机	SR3	高さ (30.8)	幅 (30.8)	厚さ (30.8)	丸太材	—	—	—	—	—
332	w-057-02	木製品	机	SR3	高さ (28.9)	幅 (28.9)	厚さ (28.9)	丸太材	—	—	—	—	—
333	w-062-05	木製品	机	SR3	高さ (29.3)	幅 (29.3)	厚さ (29.3)	丸太材	—	—	—	—	—
334	w-063-04	木製品	机	SR3	高さ (29.5)	幅 (29.5)	厚さ (29.5)	丸太材	—	—	—	—	緑多色
335	w-066-04	木製品	机	SR3	高さ (27.6)	幅 (27.6)	厚さ (27.6)	丸太材	—	—	—	—	—
336	w-055-05	木製品	机	SR3	高さ (11.8)	幅 (11.8)	厚さ (11.8)	丸太材	—	—	—	—	緑多色
337	w-055-06	木製品	机	SR3	高さ (15.4)	幅 (15.4)	厚さ (15.4)	丸太材	—	—	—	—	—
338	w-055-06	木製品	机	SR3	高さ (22.5)	幅 (22.5)	厚さ (22.5)	丸太材	—	—	—	—	—
339	w-055-08	木製品	机	SR3	高さ (25.7)	幅 (25.7)	厚さ (25.7)	緑多色有	—	—	—	—	—
340	w-057-01	木製品	机	SR3	高さ (28.5)	幅 (28.5)	厚さ (28.5)	丸太材	—	—	—	—	緑多色
341	w-053-03	木製品	内装板	SR3	高さ (41.0)	幅 (3.2)	厚さ (2.3)	緑多色有	—	—	—	—	—
342	w-055-02	木製品	加工機	SR3	高さ (32.0)	幅 (4.0)	厚さ (2.7)	緑多色有	—	—	—	—	—
343	w-056-04	木製品	机	SR3	高さ (10.0)	幅 (4.5)	厚さ (3.8)	丸太材	—	—	—	—	—
344	180-02	油生土器	壺	SR4	(8.4)	—	—	口縁部ヨコナガ 体部内面に凹凸状の変形 内面に白色の変色	直 横 ~2mm厚板合	直 横 ~2mm厚板合	口縁部直 口縁部横	口縁部3/4	—
345	153-04	油生土器	壺	SR4	—	—	—	無	直	灰白色	無	無	無
346	145-01	油生土器	壺	SR4	19.2	—	—	口縁部ヨコナガ 体部内面に凹凸状の変形 内面に白色の変色	直 横 ~4mm厚板合	直 横 ~4mm厚板合	口縁部直 口縁部横	口縁部1/10灰	—
347	146-05	土器	壺	SR4	12.5	—	—	口縁部ヨコナガ 内面に白色の変色	直 横 ~4mm厚板合	直 横 ~4mm厚板合	口縁部直 口縁部横	口縁部1/2灰	内面に結合痕
348	151-04	土器	壺	SR4	(11.6)	—	—	口縁部ヨコナガ 内面に白色の変色	直 横 ~4mm厚板合	直 横 ~4mm厚板合	口縁部直 口縁部横	口縁部直 口縁部横	—
349	151-05	土器	壺	SR4	(17.6)	—	—	口縁部ヨコナガ 内面に白色の変色	直 横 ~4mm厚板合	直 横 ~4mm厚板合	口縁部直 口縁部横	口縁部3/4	緑多色
350	151-02	土器	壺	SR4	9.2	—	—	口縁部ヨコナガ 内面に白色の変色	直 横 ~3mm厚板合	直 横 ~3mm厚板合	口縁部直 口縁部横	口縁部直 口縁部横	灰白色

第2表 遺物観察表 (10)

組合番号	登録番号	種類	目録	出土遺物	(表記: cm)		測量・既往の指標	和文	漢文	色調	保存状況	備考
					口径	底径						
351	150-03	土師器	中	S.R.4	9.6	—	14.2 口横幅ヨコナメ 底周シヨウナメ 内面ハラキナリ	青 — 直	同白色	口縁部充実 適合度		
352	162-09	土師器	中	S.R.4	(13.2)	—	— 口横幅ヨコナメ 底周シヨウナメ 内面ハラキナリ	青 — 2.5mm厚板古	真 同白色	口縁部3/4		
353	159-01	土師器	中	S.R.4	18.2	—	— 口横幅ヨコナメ 底周シヨウナメ 内面ハラキナリ	青 — 2.5mm厚板古	真 同白色	口縁部・体部3/5 適合度		
354	153-02	土師器	中	S.R.4	—	2.6	— 底周ヨコナメ 内面スビサナメ	青 — 2.5mm厚板古	真 同白色	底部充実		
355	152-06	土師器	小型子貝器	S.R.4	(10.0)	—	— 口横幅ヨコナメ 底周シヨウナメ 内面スビサナメ	青 — 1.5mm厚板古	真 同白色	口縁部・体部4/3		
356	152-01	土師器	小型子貝器	S.R.4	(8.0)	2.2	8.5 口横幅ヨコナメ 底周シヨウナメ 内面スビサナメ	青 — 1.5mm厚板古	真 同白色	口縁部1/2X		
357	152-02	土師器	小型子貝器	S.R.4	(8.6)	4.9	8.1 口横幅ヨコナメ 底周シヨウナメ 内面スビサナメ	青 — 2.5mm厚板古	真 不真 同白色	全周1/2		
358	150-01	土師器	小型子貝器	S.R.4	—	4.0	— 底周ヨコナメ 内面スビサナメ	青 — 1.5mm厚板古	真 同白色	全周3/4		
359	149-01	土師器	中	S.R.4	(34.4)	—	— 口横幅ヨコナメ 底周シヨウナメ 内面スビサナメ	青 — 1.5mm厚板古	真 同白色	口縁部1/4		
360	150-01	土師器	中	S.R.4	13.2	5.6	14.9 口横幅ヨコナメ 底周シヨウナメ 内面スビサナメ	青 — 1.5mm厚板古	真 同白色	口縁部充実		
361	151-02	土師器	中	S.R.4	(13.6)	—	— 口横幅ヨコナメ 底周シヨウナメ 内面スビサナメ・ツブ	青 — 1.5mm厚板古	真 同白色	口縁部・体上部4/		
362	161-01	土師器	S字型	S.R.4	(14.5)	—	— 口横幅ヨコナメ 底周シヨウナメ 内面スビサナメ	青 — 2.5mm厚板古	真 同白色	口縁部1/4		
363	162-01	土師器	S字型	C.S.R.4	14.4	—	— 口横幅ヨコナメ 底周シヨウナメ 内面スビサナメ	青 — 2.5mm厚板古	真 同白色	口縁部5/8		
364	164-01	土師器	S字型	C.S.R.4	(13.0)	—	— 口横幅ヨコナメ 底周シヨウナメ 内面スビサナメ・ツブ	青 — 2.5mm厚板古	真 同白色	口縁部1/2		
365	161-01	土師器	S字型	C.S.R.4	16.2	—	— 口横幅ヨコナメ 底周シヨウナメ 内面スビサナメ	青 — 2.5mm厚板古	真 同白色	口縁部3/4		
366	160-01	土師器	S字型	D.S.R.4	16.8	—	— 口横幅ヨコナメ 底周シヨウナメ 内面スビサナメ	青 — 2.5mm厚板古	真 同白色	口縁部・體右斜		
367	145-02	土師器	S字型	D.S.R.4	11.8	—	— 口横幅ヨコナメ 底周シヨウナメ 内面スビサナメ	青 — 1.5mm厚板古	真 同白色	口縁部充実		
368	163-01	土師器	S字型	D.S.R.4	17.2	—	— 口横幅ヨコナメ 底周シヨウナメ 内面スビサナメ・ツブ	青 — 2.5mm厚板古	真 同白色	口縁部1/2		
369	162-02	土師器	S字型	D.S.R.4	(14.2)	—	— 口横幅ヨコナメ 底周シヨウナメ 内面スビサナメ・ツブ	青 — 2.5mm厚板古	真 同白色	口縁部1/4		
370	163-01	土師器	S字型	D.S.R.4	(16.4)	—	— 口横幅ヨコナメ 底周シヨウナメ 内面スビサナメ・ツブ	青 — 2.5mm厚板古	真 同白色	口縁部1/2		
371	161-01	土師器	S字型	D.S.R.4	(15.2)	—	— 口横幅ヨコナメ 底周シヨウナメ 内面スビサナメ	青 — 2.5mm厚板古	真 同白色	口縁部2/3		
372	162-01	土師器	S字型	D.S.R.4	(16.3)	—	— 口横幅ヨコナメ 底周シヨウナメ 内面スビサナメ	青 — 2.5mm厚板古	真 同白色	口縁部1/3		
373	161-01	土師器	S字型	D.S.R.4	(16.4)	—	— 口横幅ヨコナメ 底周シヨウナメ 内面スビサナメ・ツブ	青 — 2.5mm厚板古	真 同白色	口縁部1/4 表面剥落		
374	161-01	土師器	S字型	D.S.R.4	(16.4)	—	— 口横幅ヨコナメ 底周シヨウナメ 内面スビサナメ・ツブ	青 — 2.5mm厚板古	真 同白色	口縁部1/4 表面剥落		
375	161-01	土師器	S字型	E.S.R.4	(26.0)	—	— 口横幅ヨコナメ 底周シヨウナメ 内面スビサナメ	青 — 2.5mm厚板古	真 同白色	口縁部1/6		
376	164-01	土師器	S字型	E.S.R.4	(26.0)	—	— 口横幅ヨコナメ 底周シヨウナメ 内面スビサナメ	青 — 2.5mm厚板古	真 同白色	口縁部1/3		
377	162-01	土師器	S字型	E.S.R.4	(26.0)	—	— 口横幅ヨコナメ 底周シヨウナメ 内面スビサナメ	青 — 2.5mm厚板古	真 同白色	口縁部1/3		
378	161-01	土師器	S字型	E.S.R.4	(26.0)	—	— 口横幅ヨコナメ 底周シヨウナメ 内面スビサナメ	青 — 2.5mm厚板古	真 同白色	口縁部1/6		
379	164-01	土師器	S字型	E.S.R.4	(26.0)	—	— 口横幅ヨコナメ 底周シヨウナメ 内面スビサナメ	青 — 2.5mm厚板古	真 同白色	口縁部1/6		
380	164-01	土師器	S字型	E.S.R.4	(26.0)	—	— 口横幅ヨコナメ 底周シヨウナメ 内面スビサナメ	青 — 2.5mm厚板古	真 同白色	口縁部1/6		
381	164-01	土師器	S字型	E.S.R.4	(26.0)	—	— 口横幅ヨコナメ 底周シヨウナメ 内面スビサナメ	青 — 2.5mm厚板古	真 同白色	口縁部1/6		
382	165-01	土師器	S字型	F.S.R.4	—	9.9	— 口横幅ヨコナメ 底周シヨウナメ 内面スビサナメ	青 — 2.5mm厚板古	真 同白色	口縁部充実		
383	166-01	土師器	S字型	F.S.R.4	—	9.9	— 口横幅ヨコナメ 底周シヨウナメ 内面スビサナメ	青 — 2.5mm厚板古	真 同白色	口縁部充実		
384	165-01	土師器	S字型	F.S.R.4	—	9.9	— 口横幅ヨコナメ 底周シヨウナメ 内面スビサナメ	青 — 2.5mm厚板古	真 同白色	口縁部充実		
385	165-01	土師器	S字型	F.S.R.4	—	9.9	— 口横幅ヨコナメ 底周シヨウナメ 内面スビサナメ	青 — 2.5mm厚板古	真 同白色	口縁部充実		
386	165-01	土師器	S字型	F.S.R.4	—	9.9	— 口横幅ヨコナメ 底周シヨウナメ 内面スビサナメ	青 — 2.5mm厚板古	真 同白色	口縁部充実		
387	165-01	土師器	S字型	F.S.R.4	—	9.9	— 口横幅ヨコナメ 底周シヨウナメ 内面スビサナメ	青 — 2.5mm厚板古	真 同白色	口縁部充実		

第21表 遺物観察表(11)

発見番号	発見場所	種類	基準	出土遺物	寸法(cm)		調査・技術的特徴	加工	焼成	色調	保存状況	備考
					口径	高さ						
386	145-01 土器部	S字型	SR4	—	30.1	—	輪廻形S字型 外底ナメ 内底スビササ根ナメ	磨	— 2mm粒粒	良	に赤い黄褐色	輪台部保存
387	145-02 土器部	S字型	SR4	—	30.3	—	輪廻形S字型 外底ナメ 内底スビササ根ナメ	磨	— 2mm粒粒	良	に赤い黄褐色	輪台部保存
388	145-06 土器部	S字型	SR4	—	(9.4)	—	輪廻形S字型 外底ナメ 内底スビササ根ナメ	やや磨	— 2mm粒粒	良	に赤い黄褐色	輪台部保存
389	145-07 土器部	S字型	SR4	—	3.4	—	輪廻形S字型 外底ナメ 内底スビササ根ナメ	磨	— 1mm粒粒	良	に赤い黄褐色	輪台部保存
390	145-01 土器部	S字型	SR4	—	8.5	—	輪廻形S字型 外底ナメ 内底スビササ根ナメ	やや磨	— 1mm粒粒	良	に赤い黄褐色	輪台部保存
391	145-02 土器部	S字型	SR4	—	8.8	—	輪廻形S字型 外底ナメ 内底スビササ根ナメ	磨	— 1mm粒粒	良	に赤い褐色	輪台部保存
392	145-07 土器部	S字型	SR4	—	8.1	—	輪廻形S字型 外底ナメ 内底スビササ根ナメ	磨	— 2mm粒粒	A	灰白色	輪台部保存
393	145-07 土器部	S字型	SR4	—	8.0	—	輪廻形S字型 外底ナメ 内底スビササ根ナメ	やや磨	— 2mm粒粒	良	に赤い黄褐色	輪台部保存
394	145-03 土器部	S字型	SR4	—	2.6	—	輪廻形S字型 外底ナメ 内底スビササ根ナメ	やや磨	— 2mm粒粒	良	灰白色	輪台部1412文部
395	145-02 土器部	S字型	SR4	—	8.1	—	輪廻形S字型 外底ナメ 内底スビササ根ナメ	磨	— 3mm粒粒	良	灰白色	輪台部保存
396	145-07 土器部	S字型	SR4	—	9.9	—	輪廻形S字型 外底ナメ 内底スビササ根ナメ	磨	— 2mm粒粒	良	に赤い黄褐色	輪台部保存
397	145-07 土器部	S字型	SR4	—	8.3	—	輪廻形S字型 外底ナメ 内底スビササ根ナメ	磨	— 1mm粒粒	良	灰白色	輪台部保存
398	145-04 土器部	台付型	SR4	—	7.4	—	輪廻形ナメ 外底ナメ 内底スビササ根ナメ	やや磨	— 2mm粒粒	良	灰白色	輪台部3/4
399	145-01 土器部	台付型	SR4	—	8.2	—	輪廻形ナメ 外底ナメ 内底スビササ根ナメ	やや磨	— 2mm粒粒	良	に赤い黄褐色	輪台部保存
400	155-02 土器部	高杯 C	SR4	(26.4)	—	—	口縁部ヨコナメ カバ内面内底ナメ	磨	—	良	灰白色	口縁部3/10
401	155-02 土器部	高杯	SR4	—	—	—	杯内内底ナメ	やや磨	—	不規	褐色	杯下部2/2
402	145-04 土器部	高杯	SR4	—	—	—	外底に削文、竹管足、底縁 内底シザリ	磨	—	良	灰白色	輪台部
403	155-05 土器部	高杯	SR4	—	9.0	—	輪廻形S字型 外底ナメ	— 3mm粒粒	良	黑	輪台部1/2	
404	155-01 土器部	高杯 Ab	SR4	(37.0)	—	—	口縁部ヨコナメ 杯内内底ナメ	磨	— 3mm粒粒	良	に赤い褐色	口縁部1/2
405	155-01 土器部	高杯	SR4	—	8.6	—	輪廻形ヨコナメ	磨	—	不規	褐色	輪台部1/2
406	155-01 土器部	高杯	SR4	—	(11.4)	—	輪廻形ヨコナメ 外底ナメ 内底シザリ	磨	—	良	灰白色	輪台部3/2
407	155-01 土器部	口付盤	SR4	(27.6)	—	—	口縁部ヨコナメ 外底シザリ	磨	—	良	灰白色	口縁部3/2
408	155-04 土器部	口付盤	SR4	—	—	—	口縁部ヨコナメ 外底シザリ	磨	—	良	灰白色	口縁部3/2
409	145-03 土器部	平底盤	SR4	7.7	8.2	4.4	口縁部ヨコナメ 外底スビサス	磨	— 2mm粒粒	A	灰白色	口縁部1/2
410	155-04 土器部	平底盤	SR4	—	2.2	—	体側部S字型 外底スビサス後ナメ	磨	—	良	に赤い黄褐色	輪台部保存
411	145-01 土器部	瓶	SR4	12.6	—	—	口縁部ヨコナメ 外底スビサス後ナメ	磨	— 2mm粒粒	A	褐色	輪台部1/2
412	145-07 土器部	瓶	SR4	(13.2)	—	—	口縁部ヨコナメ 体側内外底ナメ	磨	—	良	褐色	口縁部1/2
413	145-01 土器部	瓶	SR4	(12.0)	—	(5.5)	口縁部ヨコナメ 体側内外底ナメ	磨	—	良	褐色	全體1/2
414	145-04 土器部	瓶	SR4	(11.6)	—	—	口縁部ヨコナメ 体側内外底ナメ	磨	— 2mm粒粒	不規	褐色	全體1/2
415	145-05 土器部	瓶	SR4	(10.8)	—	(5.4)	口縁部ヨコナメ 体側内外底ナメ	磨	—	良	褐色	全體1/2
416	145-02 土器部	瓶	SR4	(11.8)	—	—	口縁部ヨコナメ 体側内外底ナメ	磨	— 4mm粒粒	良	褐色	口縁部1/2
417	145-01 土器部	瓶	SR4	(12.0)	—	—	口縁部ヨコナメ 体側内外底ナメ 内底シザリ	磨	—	良	灰白色	全體1/2
418	145-04 土器部	瓶	SR4	11.4	—	4.3	口縁部ヨコナメ 体側内外底ナメ	磨	—	不規	褐色	全體
419	174-06 土器部	瓶	SR4	(12.3)	—	(5.0)	口縁部ヨコナメ 体側内外底ナメ	磨	— 2mm粒粒	良	灰白色	全體1/2
420	145-01 土器部	瓶	SR4	10.5	—	5.1	口縁部ヨコナメ 体側内外底ナメ 底縁ケツリ	磨	— 2mm粒粒	不規	褐色	全體

第22表 遺物観察表(12)

器物番号	種類	名稱	出土遺物	法面 (cm)			測量・柱位の特徴	動力	機械	色調	保存度	備考	
				口径	直径	高さ							
421	149-02	土師器	■	S.R.4	12.6	—	5.2 口輪部ヨコナギ 体部外側ヨコササ 底部ヨコササ	—2mm砂粒付	A	褐色	定期		
422	147-02	土師器	■	S.R.4	(13.0)	—	— 口輪部ヨコナギ 体部外側ヨコササ 底部ヨコササ	—	A	褐色	全体1/4		
423	174-05	土師器	■	S.R.4	(11.0)	—	— 口輪部ヨコナギ 体部外側ヨコササ 底部ヨコササ	—	A	褐色灰化	口輪部～天井部 1/5		
424	169-05	土師器	■	S.R.4	(11.0)	—	— 口輪部ヨコナギ 体部外側ヨコササ 底部ヨコササ	—1mm砂粒付	A	褐色灰化	口輪部～天井部 2/5		
425	174-01	土師器	■	S.R.4	(11.4)	—	(4.4) 口輪部ヨコナギ 体部外側ヨコササ 底部ヨコササ	—	A	褐色灰化	全体1/2		
426	169-05	土師器	■	S.R.4	(13.2)	—	— 口輪部ヨコナギ 体部外側ヨコササ 底部ヨコササ	—2mm砂粒付	A	褐色灰化	口輪部～天井部 2/5		
427	168-05	土師器	■	S.R.4	13.6	—	4.5 口輪部ヨコナギ 体部外側ヨコササ 底部ヨコササ	—2mm砂粒付	A	褐色灰化	口輪部～天井部 2/5		
428	168-05	土師器	■	S.R.4	13.4	—	4.7 口輪部ヨコナギ 体部外側ヨコササ 底部ヨコササ	—4mm砂粒付	A	褐色	定期		
429	169-05	土師器	■	S.R.4	(13.0)	—	(4.7) 口輪部ヨコナギ 体部外側ヨコササ 底部ヨコササ	—	A	褐色	口輪部～天井部 1/2		
430	168-05	土師器	■	S.R.4	14.7	—	5.6 口輪部ヨコナギ 体部外側ヨコササ 底部ヨコササ	—2mm砂粒付	A	褐色灰化	定期	歪み	
431	170-05	土師器	■	S.R.4	(18.0)	—	4.6 口輪部ヨコナギ 体部外側ヨコササ 底部ヨコササ	—2mm砂粒付	A	褐色灰化	全体1/2		
432	173-06	土師器	■	S.R.4	9.7	—	4.5 口輪部ヨコナギ 体部外側ヨコササ 底部ヨコササ	—	A	褐色灰化	定期		
433	171-06	土師器	■	S.R.4	(18.0)	—	— 口輪部ヨコナギ 体部外側ヨコササ 底部ヨコササ	—1mm砂粒付	A	褐色	全体1/10		
434	170-05	土師器	■	S.R.4	12.1	—	5.3 口輪部ヨコナギ 体部外側ヨコササ 底部ヨコササ	—1mm砂粒付	A	褐色	定期		
435	170-06	土師器	■	S.R.4	10.4	—	5.3 口輪部ヨコナギ 体部外側ヨコササ 底部ヨコササ	—1mm砂粒付	A	褐色灰化	定期		
436	170-05	土師器	■	S.R.4	10.2	—	5.0 口輪部ヨコナギ 体部外側ヨコササ 底部ヨコササ	—1mm砂粒付	A	褐色	口輪部定期		
437	171-04	土師器	■	S.R.4	10.6	—	4.9 口輪部ヨコナギ 体部外側ヨコササ 底部ヨコササ	—1mm砂粒付	A	褐色灰化	定期		
438	173-05	土師器	■	S.R.4	11.0	—	3.3 口輪部ヨコナギ 体部外側ヨコササ 底部ヨコササ	—1mm砂粒付	A	褐色	定期		
439	169-05	土師器	■	S.R.4	(11.0)	—	4.5 口輪部ヨコナギ 体部外側ヨコササ 底部ヨコササ	—1mm砂粒付	A	褐色灰化	全体1/2		
440	174-02	土師器	■	S.R.4	(11.0)	—	— 口輪部ヨコナギ 体部外側ヨコササ 底部ヨコササ	—	A	褐色灰化	口輪部1/4		
441	169-01	土師器	■	S.R.4	(15.0)	10.0	11.0 口輪部ヨコナギ 体部外側ヨコササ 底部ヨコササ	—2mm砂粒付	A	褐色灰化	定期		
442	173-05	土師器	■	S.R.4	6.8	—	8.1 口輪部ヨコナギ 体部外側ヨコササ 底部ヨコササ	—3mm砂粒付	A	褐色灰化	定期		
443	173-03	土師器	■	S.R.4	(13.0)	—	— 口輪部ヨコナギ 体部外側ヨコササ 底部ヨコササ	—4mm砂粒付	A	褐色	口輪部1/3		
444	173-05	土師器	■	S.R.4	—	—	— 口輪部ヨコナギ 体部外側ヨコササ 底部ヨコササ	—	A	褐色	口輪部定期		
445	171-02	土師器	■	S.R.4	(22.0)	—	— 口輪部ヨコナギ 体部外側ヨコササ 底部ヨコササ	—3mm砂粒付	A	褐色	口輪部1/5		
446	171-01	土師器	■	S.R.4	(17.0)	—	— 口輪部ヨコナギ 体部外側ヨコササ 底部ヨコササ	—4mm砂粒付	A	褐色	口輪部定期		
447	171-01	土師器	■	S.R.4	—	(13.2)	— 口輪部ヨコナギ 体部外側ヨコササ 底部ヨコササ	—4mm砂粒付	A	褐色	定期1/3		
448	176-02	石製品	四石	S.R.4	員 5.1 5.35	幅 3.4 3.62	厚 2.0 2.02	表面に敲打痕	—	—	—	重量19.5g 10.5g	
449	176-01	石製品	四石	S.R.4	員 5.1 5.22	幅 3.4 3.58	厚 2.0 2.02	表面に敲打痕	—	—	—	重量17.6g 7.6g	
450	145-01	石製品	四石	S.R.4	(4.50)	2.50	厚 2.0 2.02	表面に敲打痕	—	—	—	重量12.4g 4.9g	
451	149-04	石製品	四石	S.R.4	員 5.1 5.2	幅 3.4 3.55	厚 2.0 2.02	表面に敲打痕	—	—	—	重量10.6g 4.9g	
452	w103-02	石製品	馬蹄鉢	S.R.4	(27.0)	14.5	厚 2.0 2.02	口底付	—	—	—	重量7.0g 4.2g	
453	902-05	土師器	■	S.D.8	(12.4)	—	— 口輪部ヨコナギ	—1mm砂粒付	A	褐色灰化	口輪部1/3 内面に斑斑		
454	056-01	石製品	四石	S.D.8	員 5.1 5.2	幅 3.4 3.55	厚 2.0 2.02	表面無加工	—	—	—	重量1.3g 0.7g	
455	056-02	石製品	四石	S.D.8	員 5.1 5.2	幅 3.4 3.55	厚 2.0 2.02	表面無加工	—	—	—	重量1.0g 0.5g	

第23表 遺物観察表(13)

発見場所	遺物番号	種類	基準	出土遺物	測量 (cm)			測量・状況の特徴	形状	地質	色調	保存状態	備考
					口径	底径	高さ						
156	105-02 木製品	漆器	SD 1.8	漆	1.9	内底径 4.6	厚さ 0.7	無何文の文様	一	一	一	一	重量 (0.3g) 重石
157	200-01 木製品	漆器	SD 1.9	(11.3)	—	—	—	漆器ナガ 内部表面黒タマゴ	セサ —漆器ナガ	白	SGO集	丁寧削り	
158	200-01 木製品	漆器	SD 1.9	(11.3)	—	—	—	漆器ナガタマゴ 漆器表面ナガ 内底面ナガ	セサ —漆器ナガ	白	淡褐色	丁寧削り	
159	200-02 木製品	漆器	SD 1.9	(20.6)	—	—	—	漆器ナガタマゴ 丁寧削り裏ハタ	漆 —漆器ナガ	白	淡褐色	丁寧削り	
160	200-03 木製品	漆器	SD 1.9	—	—	—	—	漆器表面ナガ 内底面ナガ	漆 —漆器ナガ	白	淡褐色	漆削り	
161	200-03 木製品	漆器	SD 1.9	16.2	底 3.5	内底径 0.2	—	—	—	—	—	—	重量 (0.4g) 重石
162	109-06 木製品	漆器	SD 5	—	—	—	—	内底面ナガ	漆	白	淡白色	LNG集/6	
163	109-06 木製品	漆器	SD 5	—	—	—	—	漆器ナガタマゴ 漆器表面ナガと下ハタ	漆 —漆器ナガ	白	淡褐色	丁寧削り	
164	109-06 木製品	漆器	SD 5	(11.6)	—	—	—	漆器ナガタマゴ 漆器表面ナガ 内底面ナガ	漆 —漆器ナガ	白	淡褐色	丁寧削り	
165	109-01 木製品	漆器	SD 5	(17.2)	—	—	—	漆器ナガタマゴ 漆器表面ナガ	セサ 和松皮	白	淡褐色	丁寧削り	
166	109-02 木製品	漆器	SD 5	(11.7)	—	—	—	漆器ナガタマゴ 漆器表面ナガ 内底ナガハタ	漆 —漆器ナガ	白	淡褐色	LNG集/4	
167	109-02 木製品	漆器	SD 5	(22.8)	—	—	—	漆器ナガタマゴ 漆器表面ナガ ハタナガナ	漆 —漆器ナガ	白	淡褐色	丁寧削り	
168	109-02 木製品	漆器	SD 5	—	—	—	—	漆器ナガタマゴ 漆器表面ナガ	漆 —漆器ナガ	白	淡褐色	丁寧削り	
169	109-02 木製品	漆器	SD 5	(16.8)	—	—	—	漆器ナガタマゴ 漆器表面ナガ 内底ナガハタ	漆 —漆器ナガ	白	淡褐色	丁寧削り	
170	109-02 木製品	漆器	SD 5	—	—	—	—	漆器ナガタマゴ 漆器表面ナガ	漆 —漆器ナガ	白	淡褐色	丁寧削り	
171	109-02 木製品	漆器	SD 5	—	—	—	—	漆器ナガタマゴ 漆器表面ナガ	漆 —漆器ナガ	白	淡褐色	丁寧削り	
172	104-02 木製品	漆器	SD 1.0	(25.4)	—	—	—	漆器表面に凹凸 漆器表面に凹凸 漆器表面に凹凸 漆器表面ナガ	漆	白	深褐色	LNG集/5	
173	104-02 木製品	漆器	SD 1.0	(8.6)	—	—	—	漆器表面に凹凸 漆器表面に凹凸 漆器表面ナガ	漆	白	深褐色	LNG集/3	
174	105-01 木製品	漆器	SD 1.0	(7.6)	—	—	—	漆器表面に凹凸 漆器表面に凹凸 漆器表面に凹凸 漆器表面ナガ	漆	白	深褐色	LNG集/2/2	重石
175	102-02 木製品	漆器	SD 1.0	(46.0)	—	—	—	漆器ナガタマゴ 漆器表面ナガ	セサ —漆器ナガ	白	淡褐色	LNG集/3	重石
176	104-02 木製品	漆器	SD 1.0	(9.2)	—	—	—	漆器ナガタマゴ 漆器表面ナガ 内底スビキナガ ハタ	漆 —漆器ナガ	白	淡褐色	LNG集/5	
177	109-06 木製品	漆器	SD 1.0	(20.4)	—	—	—	漆器表面に凹凸 漆器表面に凹凸 漆器表面に凹凸 漆器表面ナガ	漆 —漆器ナガ	白	淡褐色	丁寧削り	
178	101-01 木製品	漆器	SD 1.0	(12.1)	—	—	—	漆器ナガタマゴ 漆器表面ナガ 漆器表面ナガ 漆器表面ナガ	セサ 和松皮	白	淡褐色	漆削りはげ	重石
179	104-01 木製品	漆器	SD 1.0	—	—	—	—	漆器表面に凹凸 漆器表面に凹凸 漆器表面に凹凸 漆器表面ナガ	漆 —漆器ナガ	白	淡褐色	漆削りはげ	重石
180	104-01 木製品	漆器	SD 1.0	—	—	—	—	漆器表面に凹凸 漆器表面に凹凸 漆器表面に凹凸 漆器表面ナガ	漆 —漆器ナガ	白	淡褐色	漆削りはげ	重石
181	105-02 木製品	漆器	SD 1.0	(15.0)	—	—	—	漆器表面に凹凸 漆器表面に凹凸 漆器表面に凹凸 漆器表面ナガ	漆 —漆器ナガ	白	淡褐色	和松皮/5	
182	105-01 木製品	漆器	SD 1.0	(13.4)	—	—	—	漆器ナガタマゴ 漆器表面ナガ	漆 —漆器ナガ	白	淡白色	和松皮/5	
183	106-01 木製品	漆器	SD 1.0	(33.0)	—	—	—	漆器ナガタマゴ 漆器表面ナガ	漆 —漆器ナガ	白	淡白色	和松皮/5	
184	105-06 木製品	漆器	SD 1.0	(15.6)	—	—	—	漆器ナガタマゴ 漆器表面ナガ	漆 —漆器ナガ	白	淡褐色	和松皮/5	
185	104-01 木製品	漆器	SD 1.0	(16.0)	11.0	14.2	—	漆器ナガタマゴ 漆器表面ナガ	漆 —漆器ナガ	白	淡白色	和松皮/5	
186	104-01 木製品	漆器	SD 1.0	(16.4)	11.9	13.7	—	漆器ナガタマゴ 漆器表面ナガ	漆 —漆器ナガ	白	淡褐色	和松皮/5	
187	w105-02 木製品	漆器	SZ 4	(21.3)	—	—	大3 (22.9)	漆器ナガ	—	—	—	—	
188	w104-01 木製品	漆器	SZ 4	(23.3)	—	—	大3 (23.4)	漆器ナガ	—	—	—	—	
189	w105-01 木製品	漆器	SZ 4	(25.5)	—	—	大3 (25.2)	漆器ナガ	—	—	—	—	
190	101-01 木製品	漆器	SZ 4	(26.6)	13.2	—	—	漆器ナガタマゴ 漆器表面ナガ	漆 —漆器ナガ	白	淡褐色	丁寧削り	

第24表 遺物観察表(14)

発行番号	登録番号	種類	基盤	出土場所	計量(7.6)			属性・技術の特徴	駆上	底面	色調	残存率	備考
					口径	底径	高さ						
491	101-07	土器部	S字型	C	S.R.6	15.7	—	ハラ模様コナガ 内部サクナマハケ 内面ナガ	直	直	淡褐色	口縁部1/4	
492	065-06	陶生土器	直		S.R.5	—	—	ハラ模様コナガ、斜出し火災痕3箇	横 ~2mm斜径合	直	褐褐色	底部焼付	S.Z.から出土
493	065-05	陶生土器	直		S.R.5	—	—	ハラ模様コナガ	横 ~4mm斜径合	直	淡褐色	底部焼付	S.Z.から出土
494	065-03	陶生土器	直		S.R.7	—	—	貝殻各個6箇	横 ~3mm斜径合	直	褐色	底部焼付	S.Z.7から出土
495	065-02	陶生土器	直		S.R.7	—	—	ハラ模様コナガ、ハラ模様3箇	直	直	褐褐色	底部焼付	S.Z.2から出土
496	065-01	陶生土器	直		S.R.7	—	—	ハラ模様6箇	横 ~2mm斜径合	直	淡褐色	底部焼付	S.Z.7から出土
497	071-02	陶生土器	直		S.R.7	—	—	ハラ模様6箇	横 ~2mm斜径合	直	灰褐色	底部焼付	
498	071-01	陶生土器	直		S.R.7	—	—	ハラ模様3箇	横 ~3mm斜径合	直	褐褐色	底部焼付	
499	071-05	陶生土器	直		S.R.7	—	—	網毛出し火災痕の上にハラ模様3箇	横 ~3mm斜径合	直	淡褐色	底部焼付	
500	065-07	陶生土器	直		S.R.6	—	—	網毛出し火災痕の上にハラ模様3箇	横 ~3mm斜径合	直	淡褐色	底部焼付	S.Z.6から出土
501	070-02	陶生土器	直		S.R.7	(28.2)	—	ハラ模様内側に網毛出し火災痕、火炎部に網毛出し火災痕	横 ~5mm斜径合	直	褐褐色	口縁部1/4	
502	067-01	陶生土器	直		S.R.7	—	(2.0)	網毛出し火災痕、火炎部、火災痕 外壁にホコリ	横 ~3mm斜径合	直	灰褐色	底部1/2 底部1/3	
503	068-02	土器部	片唇器		S.R.7	(12.4)	(4.7)	ハラ模様に火炎部の火災痕 外壁にホコリ、火炎部に火災痕	中横 ~2mm斜径合	中横 ~2mm斜径合	中や不良	淡褐色	口縁部、体部
504	073-04	土器部	直		S.R.7	(12.3)	—	ハラ模様コナガ 口縁部内側に網毛出し火災痕	直	直	淡褐色	口縁部1/2	
505	074-02	土器部	直		S.R.7	—	3.2	網毛コナガ 外壁にホコリ	直	直	褐褐色	口縁部欠	
506	064-01	陶生土器	直		S.R.7	—	6.2	底面凹凸ナハケ 内面ナガ	横 4mm斜径合	直	灰褐色	底部定形	S.Z.2から出土
507	071-02	土器部	小型直		S.R.7	—	5.5	体部の網毛コナガ 内面ナガ	横 4mm斜径合	直	褐褐色	底部定形	
508	069-02	陶生土器	直		S.R.7	(20.8)	—	体部外表面火災痕による火災痕 火炎部に火災痕	横 4mm斜径合	直	褐褐色	口縁部1/2	
509	069-02	陶生土器	直		S.R.7	(24.4)	—	ハラ模様コナガ 口縁部内側に網毛コナガ 火炎部内側に網毛コナガ	横 4mm斜径合	直	褐褐色	口縁部1/2	変化大
510	069-01	陶生土器	直		S.R.7	(25.8)	—	ハラ模様コナガ 口縁部内側に網毛コナガ 火炎部内側に網毛コナガ	横 4mm斜径合	直	褐褐色	口縁部1/2	
511	075-01	陶生土器	直		S.R.7	(24.4)	—	ハラ模様コナガ 外壁にホコリ	直	直	淡褐色	外壁1/2	
512	076-04	陶生土器	直		S.R.7	(20.4)	—	ハラ模様コナガ 外壁にホコリ	中横 4mm斜径合	直	中や不良	外壁1/4	変化大
513	077-04	陶生土器	直		S.R.7	—	—	網毛外表面火災痕による火災痕	中横 4mm斜径合	直	浅褐色	外壁1/2	主火邊丸
514	077-02	陶生土器	直		S.R.7	—	9.5	網毛外表面火災痕による火災痕	直	直	浅褐色	外壁1/2	
515	068-01	陶生土器	直		S.R.7	(19.9)	(5.7)	内面ナハケ 外壁にホコリ	直	直	灰褐色	全体1/2	火炎部分 基本
516	075-05	陶生土器	直		S.R.7	(17.3)	—	ハラ模様コナガ 外壁にホコリ	中横 4mm斜径合	直	中や不良	口縁部1/2	
517	075-06	陶生土器	直		S.R.7	(14.0)	—	門縁部内側に火炎による火災痕 火炎部に火災痕	中横 ~7mm斜径合	直	明褐褐色	口縁部1/2	
518	070-02	陶生土器	直		S.R.7	—	(3.2)	内面ナハメナハ 内面ナガ	中横 ~4mm斜径合	直	中や不良	外壁1/2	変化大
519	070-01	陶生土器	直		S.R.7	—	6.3	内面ナハメナハ 内面ナガ	中横 ~1mm斜径合	直	(内) (外) 褐褐色 灰白色	底部定形	
520	075-02	土器部	直		S.R.7	13.4	—	ハラ模様コナガ 内面ナハメナハ 内面ナガ	直	直	褐褐色	口縁部1/2	
521	074-01	土器部	直		S.R.7	11.6	—	ハラ模様コナガ 内面ナハメナハ 内面ナガ	直	直	中や不良	口縁部 容器 底部1/2	
522	073-05	土器部	直		S.R.7	(12.4)	—	ハラ模様コナガ 火炎部外表面火炎による火炎 火炎部内側に火炎	直	直	褐褐色	口縁部1/4 底部1/2次	
523	072-04	土器部	小丸足直		S.R.7	—	—	ハラ模様コナガ 火炎部外表面火炎による火炎 火炎部内側に火炎	直 ~2mm斜径合	直	中や不良	口縁部欠	
524	072-05	土器部	小型丸足直		S.R.7	—	—	ハラ模様コナガ 内面ナハメナハ 内面ナガ	直 ~4mm斜径合	直	(内) (外) 淡褐色 灰白色	底部1/2	
525	063-02	土器部	小型丸足直		S.R.7	10.4	—	ハラ模様コナガ 内面ナハメナハ 内面ナガ	直 ~1mm斜径合	不直	米白色	足部	

第25表 遺物観察表(15)

編番号	登録番号	種類	基準	出土遺物	法面( cm)			備考-技術的特徴	加工	焼成	色調	保存状	備考	
					上寸	中寸	下寸							
526	072-00-1	陶器	小型丸壺	S.R.T	8.6	—	7.6	口縁部ヨコリダ 側面直角面ナマヘタ・ドネイド 内底ナマヘタ	削 —2mmの削り 直	浅黄褐色 淡青褐色	少部分			
527	072-00-1	陶器	小型丸壺	S.R.T	8.1	—	9.3	口縁部ヨコリダ 側面直角面ナマヘタ・ドネイド 内底ナマヘタ	やや削 —1mmの削り 直	浅黄褐色 淡青褐色	1mm底面欠			
528	072-00-1	陶器	小型丸壺	S.R.T	8.2	—	10.3	口縁部ヨコリダ 側面直角面ナマヘタ・ドネイド 内底ナマヘタ・ナマ	削 直	浅黄褐色 淡青褐色	1mm底面欠			
529	080-00-1	陶器	S字壺	S.R.T	12.8	—	—	口縁部ヨコリダ 側面直角面ナマヘタ・ドネイド 内底ナマヘタ・ナマ	削 直	浅黄褐色 淡青褐色	1mm底面有 堆積土			
530	078-00-1	陶器	S字壺	C	S.R.T	10.8	—	—	口縁部ヨコリダ 側面直角面ナマヘタ・ドネイド 内底ナマヘタ・ナマ	削 直	浅黄褐色 淡青褐色	1mm底面2/		
531	078-00-1	陶器	S字壺	C	S.R.T	11.6	—	—	口縁部ヨコリダ 側面直角面ナマヘタ・ドネイド 内底ナマヘタ・ナマ	削 直	浅黄褐色 淡青褐色	1mm底面2/		
532	078-00-1	陶器	S字壺	C	S.R.T	11.8	—	—	口縁部ヨコリダ 側面直角面ナマヘタ・ドネイド 内底ナマヘタ・ナマ	やや削 直	浅黄褐色 淡青褐色	1mm底面1/		
533	078-00-1	陶器	S字壺	C	S.R.T	12.6	—	—	口縁部ヨコリダ 側面直角面ナマヘタ・ドネイド 内底ナマヘタ・ナマ	削 直	浅黄褐色 淡青褐色	1mm底面2/		
534	079-00-1	陶器	S字壺	C	S.R.T	11.0	2.8	29.2	口縁部ヨコリダ 側面直角面ナマヘタ・ドネイド 内底ナマヘタ・ナマ	やや削 直	浅黄褐色 淡青褐色	1mm底面2/定 量焼成元完		
535	080-00-1	陶器	S字壺	S.R.T	—	10.7	—	口縁部ヨコリダ 側面直角面ナマヘタ・ドネイド 内底ナマヘタ・ナマ	削 直	浅黄褐色 淡青褐色	1mm底面1/定 量焼成元完			
536	078-00-1	陶器	S字壺	S.R.T	—	8.2	—	口縁部削り直し 外底ナマヘタ・ドネイド	削 直	やや青 淡青褐色	輪郭部定形			
537	078-00-1	陶器	S字壺	S.R.T	—	2.3	—	口縁部削り直し 外底ナマヘタ・ドネイド	削 直	淡青褐色 淡青褐色	輪郭部定形			
538	082-00-1	陶器	小彫像	S.R.T	21.7	—	—	口縁部ヨコリダ 側面直角面ナマヘタ・ドネイド 内底ナマヘタ・ナマ	削 直	浅黄褐色 淡青褐色	1mm底面 底面欠			
539	082-00-1	陶器	高杯	A.b	S.R.T	18.2	—	—	口縁部ヨコリダ 側面直角面ナマヘタ・ドネイド 内底ナマヘタ・ナマ	削 直	浅青褐色 淡青褐色	1mm底面2/		
540	073-00-1	土器	高杯	A.b	S.R.T	17.4	—	—	口縁部ヨコリダ 側面直角面ナマヘタ・ドネイド 内底ナマヘタ・ナマ	削 直	浅青褐色 淡青褐色	1mm底面2/		良質
541	076-00-1	土器	高杯	S.R.T	15.6	—	—	口縁部ヨコリダ 側面直角面ナマヘタ・ドネイド 内底ナマヘタ・ナマ	やや削 直	浅黄褐色 淡青褐色	1mm底面2/			
542	075-00-1	土器	高杯	S.R.T	—	(11.3)	—	口縁部ヨコリダ 側面直角面ナマヘタ・ドネイド 内底ナマヘタ・ナマ	削 直	浅青褐色 淡青褐色	1mm底面2/			
543	077-00-1	土器	高杯	S.R.T	—	(11.0)	—	口縁部ヨコリダ 側面直角面ナマヘタ・ドネイド 内底ナマヘタ・ナマ	やや削 直	浅青褐色 淡青褐色	1mm底面2/			
544	077-00-1	土器	高杯	S.R.T	—	10.2	—	口縁部ヨコリダ 側面直角面ナマヘタ・ドネイド 内底ナマヘタ・ナマ	やや削 直	浅青褐色 淡青褐色	1mm底面2/			
545	071-00-1	石製品	A.3	S.R.T	16.3	5.7	3.5	中央面部に内凹による埋込み	—	—	—	重量20.0g 好石		
546	w000-00-1	石製品	円石	S.R.T	12.3	—	9.6	表面に粗粒感	—	—	—	重量45.0g 好石		
547	w004-00-1	石製品	丸石	S.R.T	—	(7.2)	—	表面に使用痕	—	—	—	重量33.5g 好石		
548	w003-00-1	石製品	砂岩	S.R.T	12.3	—	9.9	表面目材・表面有・キズ有	—	—	—			
549	w005-00-1	石製品	砂岩	S.R.T	12.1	—	12.8	厚さ2.2 表面有	—	—	—	材不明・アカゼン質 アラカギ・カラシ イライシ等		
550	w000-00-1	石製品	砂岩	S.R.T	12.5	(5.8)	9.6	厚さ2.2 表面有	—	—	—	サルキ		
551	w000-00-1	石製品	—	S.R.T	—	(6.7)	—	表面有	—	—	—	サルキ		
552	w000-00-1	石製品	砂岩	S.R.T	10.0	—	10.3	二峰丸村 ニホンガキリ所	—	—	—	封筒標(カセ?) あて財(財)		
553	w002-00-1	石製品	河川木質品	S.R.T	10.9	—	10.2	大字2 表面有	—	—	—			
554	w000-00-1	石製品	木本	S.R.T	10.0	—	10.2	大字2 表面有	—	—	—			
555	w001-00-1	石製品	木本	S.R.T	10.3	—	10.2	大字2 表面有	—	—	—			
556	w001-00-1	石製品	木本	S.R.T	10.3	—	10.2	大字2 表面有	—	—	—			
557	w001-00-1	石製品	木本	S.R.T	10.5	—	10.2	大字2 表面有	—	—	—			
558	w001-00-1	石製品	木本	S.R.T	10.2	—	9.9	厚さ1.1 表面有	—	—	—			
559	w000-00-1	石製品	木本	S.R.T	10.2	—	9.5	厚さ1.1 表面有	—	—	—			
560	w000-00-1	石製品	木本	S.R.T	10.1	—	9.4	表面有	—	—	—			
561	w000-00-1	石製品	木本	S.R.T	10.1	—	9.4	表面有	—	—	—			

第26表 遺物観察表(16)

品目番号	登録番号	種類	品種	内土産物	計量(㌘ ± 0.1)			測定・注記の外観	動土	地図	色調	純度度	備考	
					口徑	底径	高さ							
561	w009-07	本製品	丸	S Z 5	員 5 (46.0)			丸平底 2.7	丸丸材	—	—	—	—	新近地 現存
562	w009-07	本製品	丸	S Z 5	員 5 (43.8)	—		丸平底 3.0	丸丸材	—	—	—	—	
563	w009-08	本製品	丸	S Z 5	員 5 (41.6)			丸平底 4.3	丸丸材	—	—	—	—	新近地 現存
564	w009-08	本製品	丸	S Z 5	員 5 (41.5)	—		丸平底 5.0	丸丸材	—	—	—	—	新近地 現存
565	w017-03	本製品	丸	S Z 5	員 5 (43.5)	—		丸平底 5.3	丸丸材	—	—	—	—	新近地 現存
566	w017-03	本製品	丸	S Z 5	員 5 (43.5)	—		丸平底 5.5	丸材	—	—	—	—	
567	w117-02	本製品	丸	S Z 5	員 5 (43.3)	—		丸平底 5.6	丸丸材	—	—	—	—	新近地 現存
568	w220-09	本製品	丸	S Z 6	員 5 (40.7)	—		丸平底 6.4	丸丸材	—	—	—	—	新近地 現存
569	w220-09	本製品	丸	S Z 6	員 5 (44.6)	—		丸平底 7.5	丸丸材	—	—	—	—	新近地 現存
570	w220-09	本製品	丸	S Z 6	員 5 (43.0)	—		員 5 2.5	圓材	—	—	—	—	
571	w220-02	本製品	丸	S Z 6	員 5 (25.0)	員 5 2.8	3.4	圓材	—	—	—	—		
572	w153-06	本製品	丸	S Z 7	員 5 (56.0)	員 5 3.5	3.7	圓材	—	—	—	—		
573	w153-02	本製品	丸	S Z 7	員 5 (57.5)	—		員 5 3.0	丸丸材	—	—	—	—	新近地 現存
574	w225-02	本製品	丸	S Z 7	員 5 (50.0)	員 5 4.4	3.0	圓材	—	—	—	—		
575	w152-01	本製品	丸	S Z 7	員 5 (50.0)	—		員 5 5.0	丸丸材	—	—	—	—	新近地 現存
576	w124-04	本製品	丸	S Z 7	員 5 (57.0)	員 5 5.0	3.7	圓材	—	—	—	—	軸用子	
577	w173-02	本製品	丸	S Z 7	員 5 (39.2)	—		員 5 4.0	丸丸材	—	—	—	—	新近地 現存
578	w126-02	本製品	丸	S Z 7	員 5 (21.0)	—		員 5 5.5	丸丸材	—	—	—	—	新近地 現存
579	089-01	木輪器	木	S R 8	13.4	—	10.3	口縫合コナラ 側面内面にサナギマーク・下キケズ 内面にシミサム・横ナジ	口縫合 側面 内面	良	口木い裏面赤	2年4月		
580	089-02	木輪器	木	S R 8	—	—	—	口縫合コナラ 側面内面にサナギマーク・下キケズ 内面にシミサム・横ナジ	口縫合 側面 内面	良	褐色	口縫合・側面		
581	089-03	木輪器	二重口縫合	S R 8	20.0	—	—	口縫合コナラ 側面内面にサナギマーク・内面ナジ	口縫合 側面 内面	良	口木い裏面赤	口縫合・側面		
582	089-03	木輪器	二重口縫合	S R 8	(12.4)	—	—	口縫合コナラ 側面内面にサナギマーク・内面シミサム・ナジ	口縫合 側面 内面	良	浅褐色	口縫合		
583	089-01	木輪器	二重口縫合	S R 8	16.1	6.2	32.0	口縫合コナラ 側面内面にサナギマーク・内面シミサム・ナジ	口縫合 側面 内面	良	褐色	口縫合		
584	089-06	木輪器	小型丸板	S R 8	—	—	—	口縫合コナラ 側面内面にサナギマーク・内面シミサム・ナジ	口縫合 側面 内面	良	口木い裏面赤	口縫合		
585	089-02	木輪器	小型丸板	S R 8	(10.6)	—	—	口縫合コナラ 側面内面にサナギマーク・内面シミサム	口縫合 側面 内面	良	口木い裏面赤	口縫合		
586	089-04	木輪器	木	S R 8	(13.2)	—	—	口縫合コナラ 側面内面にサナギマーク・内面シミサム	口縫合 側面 内面	良	口木い裏面赤	口縫合		
587	089-01	土輪器	木	S R 8	21.6	—	—	口縫合コナラ 側面内面にサナギマーク・内面ナジ・横ナジ	口縫合 側面 内面	良	浅褐色	口縫合・側面		
588	089-02	土輪器	S字形 C	S R 8	(13.5)	—	—	口縫合コナラ 側面内面にサナギマーク・内面シミサム	口縫合 側面 内面	良	浅褐色	口縫合		
589	089-04	土輪器	S字形 C	S R 8	(12.2)	—	—	口縫合コナラ 側面内面にサナギマーク・内面シミサム	口縫合 側面 内面	良	褐色	口縫合		
590	089-01	土輪器	S字形 C	S R 8	13.0	—	—	口縫合コナラ 側面内面にサナギマーク・内面シミサム	口縫合 側面 内面	良	浅褐色	口縫合		
591	089-03	土輪器	S字形 C	S R 8	(13.3)	—	—	口縫合コナラ 側面内面にサナギマーク・内面シミサム	口縫合 側面 内面	良	口木い裏面赤	口縫合		
592	089-01	土輪器	S字形 C	S R 8	13.1	—	—	口縫合コナラ 側面内面にサナギマーク・内面シミサム・横ナジ	口縫合 側面 内面	良	浅褐色	口縫合		
593	089-01	土輪器	S字形 C - D S R 8	S R 8	12.7	—	—	口縫合コナラ 側面内面にサナギマーク・内面シミサム	口縫合 側面 内面	良	浅褐色	口縫合		
594	089-02	土輪器	S字形 C	S R 8	12.7	—	—	口縫合コナラ 側面内面にサナギマーク・内面シミサム	口縫合 側面 内面	良	浅褐色	口縫合		
595	089-04	土輪器	S字形 C	S R 8	(14.6)	—	—	口縫合コナラ 側面内面にサナギマーク・内面シミサム	口縫合 側面 内面	良	褐色	口縫合		

第27表 遺物観察表(17)

新丸番号	登録番号	種類	基準	高さ(直標)	法面( cm )			調査・計測の内容	點上	地盤	色調	調査度	備考	
					右側	左側	基底							
396	080-06	土被覆	S字型	S.R.B	—	8.2	—	樹根露出なし 外表面ナメキナ 内面ナメキナ、ナメ	中等	良	にじい褐色	軽微定在		
397	080-07	土被覆	S字型	S.R.B	—	7.8	—	樹根露出なし 外表面ナメキナ 内面ナメキナ、ナメ	良	良	浅褐色 淡黄色	軽微定在		
398	080-08	土被覆	高杯	S.R.B	—	(8.2)	—	樹根露出なし 2箇所の内面ルメ面	良	良	にじい褐色	軽微定在		
399	080-09	土被覆	高杯	S.R.B	—	11.8	—	樹根露出なし 外表面ナメキナ 内面ナメキナ	良	良	にじい褐色	軽微定在	△有透孔	
400	081-01	土被覆	高杯	S.R.B	16.3	11.2	12.3	1)樹根露出なし 外表面ナメキナ 内面ナメキナ ナメキナ	良	不良	淡白色	△有透孔△有		
401	081-02	土被覆	高杯	S.R.B	16.4	11.2	12.4	1)樹根露出なし 外表面ナメキナ 内面ナメキナ	良	良	淡白色	△有透孔△有		
402	081-03	土被覆	高杯	S.R.B	16.3	11.8	12.6	1)樹根露出なし 外表面ナメキナ 内面ナメキナ	良	良	浅褐色 淡黄色	△有透孔△有		
403	081-04	土被覆	高杯	S.R.B	15.6	11.6	12.4	1)樹根露出なし 外表面ナメキナ 内面ナメキナ	やや悪	A	黄褐色	全調査		
404	081-05	土被覆	高杯	S.R.B	17.0	11.4	12.5	1)樹根露出なし 外表面ナメキナ 内面ナメキナ	やや悪	— 2)樹根露出 外表面ナメキナ 内面ナメキナ	良	淡白色	△有透孔	
405	082-01	土被覆	高杯	S.R.B	16.0	12.5	12.5	1)樹根露出なし 外表面ナメキナ 内面ナメキナ	良	不良	にじい褐色	全調査		
406	081-06	土被覆	高杯	S.R.B	16.7	11.4	12.4	1)樹根露出なし 外表面ナメキナ 内面ナメキナ	良	不良	淡白色	全調査	△有	
407	082-02	土被覆	高杯	S.R.B	(16.4)	—	—	1)樹根露出なし 外表面ナメキナ 内面ナメキナ	やや悪	— 2)樹根露出 外表面ナメキナ 内面ナメキナ	良	淡褐色 淡黄色	△有透孔	
408	080-01	土被覆	高杯	S.R.B	—	10.7	—	樹根露出なし 外表面ナメキナ 内面ナメキナ	良	良	にじい褐色	全調査		
409	081-01	土被覆	高杯 C	S.R.B	22.0	15.1	15.3	1)樹根露出なし 外表面ナメキナ 内面ナメキナ	良	不良	褐色	△有透孔		
410	081-02	土被覆	高杯 C	S.R.B	19.9	15.7	14.1	1)樹根露出なし 外表面ナメキナ 内面ナメキナ	良	良	淡褐色 淡黄色	全調査		
411	080-04	土被覆	下端土壁	S.R.B	4.3	—	5.6	樹根露出なし 外表面ナメキナ 内面ナメキナ	やや悪	良	黄褐色	△有透孔		
412	w082-01	木製品	木柵	S.R.B	高さ 5 (35.5)	幅 15.0	厚さ 1.0	柱用材	—	—	—	—	アカギー葉茎(アカギー ノリタケ)アカギー ノリタケアカギー ノリタケ	
413	w082-02	木製品	木柵	S.R.B	高さ 2 (35.2)	幅 19.2	厚さ 2	柱用材	—	—	—	—	無透孔	
414	w082-03	木製品	木柵又脚	S.R.B	高さ 5 (47.4)	幅 22.0	厚さ 0.9	柱用材	—	—	—	—		
415	w082-01	木製品	木柵又脚	S.Z.10	高さ 5 (42.4)	幅 7.6	厚さ 1.6	立脚材	—	—	—	—	無透孔	
416	w082-04	木製品	木柵又脚	S.Z.10	高さ 5 (35.3)	幅 6.0	厚さ 1.6	立脚材	—	—	—	—		
417	w082-01	木製品	木柵又脚	S.R.B	高さ 5 (49.0)	—	—	立脚材	—	—	—	—		
418	w082-01	木製品	木柵	S.R.B	高さ 5 (39.7)	—	—	立脚材	—	—	—	—		
419	w082-02	木製品	木柵	S.Z.10	高さ 5 (71.0)	幅 7.6	厚さ 1.6	柱用材	—	—	—	—		
420	w082-05	木製品	木柵又脚	S.R.B	高さ 5 (25.1)	—	—	立脚材	—	—	—	—		
421	w082-02	木製品	木柵又脚	S.R.B	高さ 5 (40.9)	幅 5.3	厚さ 1.6	柱用材	—	—	—	—		
422	w082-01	木製品	合板脚	S.R.B	高さ 5 (39.7)	幅 6.0	厚さ 2.7	柱用材	—	—	—	—	無透孔	
423	w082-03	木製品	木柵脚	S.R.B	高さ 5 (34.0)	幅 26.0	厚さ 3.0	柱用材	—	—	—	—	孔有	
424	w082-02	木製品	木柵脚	S.R.B	高さ 5 (39.4)	幅 25.2	厚さ 6.0	柱用材	—	—	—	—		
425	w082-03	木製品	木柵脚	S.Z.9	高さ 5 (66.1)	幅 3.4	厚さ 3.4	立脚材	—	—	—	—	無透孔	
426	w082-01	木製品	木柵脚	S.R.B	高さ 5 (66.1)	幅 3.4	厚さ 3.4	立脚材	—	—	—	—	無透孔	
427	w082-01	木製品	木柵脚	S.R.B	高さ 5 (69.7)	幅 3.4	厚さ 3.4	立脚材	—	—	—	—	無透孔	
428	w082-01	木製品	木柵脚	S.R.B	高さ 5 (71.0)	幅 3.4	厚さ 3.4	立脚材	—	—	—	—	無透孔	
429	w082-03	木製品	木柵脚	S.Z.9	高さ 5 (101.3)	幅 6.5	厚さ 6.5	柱用材	—	—	—	—		
430	w082-04	木製品	木柵脚	S.Z.9	高さ 5 (84.6)	幅 18.3	厚さ 6.5	柱用材	—	—	—	—	無透孔	

第28表 遺物観察表(18)

物語番号	整理番号	種類	器種	出土遺構	(計量: cm)			測定・目次の摘要	目次	測定	色調	保存度	備考
					口径	底径	高さ						
431-w031-01	木製品	丸	SZ 9	直5 (55.0)	幅5 3.5	厚5 4.7	通底村	—	—	—	—	—	無破損
432-w031-02	木製品	丸	SZ 9	直5 (51.0)	幅5 8.4	厚5 3.6	通底村	—	—	—	—	—	無破損
433-w032-04	木製品	丸	SZ 9	直5 (56.8)	—	厚5 4.9	通村	—	—	—	—	—	
434-w032-05	木製品	丸	SZ 9	直5 (51.3)	—	厚5 4.9	通村	—	—	—	—	—	
435-w031-05	木製品	丸	SZ 9	直5 (59.5)	幅5 8.2	厚5 4.5	通村	—	—	—	—	—	無破損
436-w035-01	木製品	小型円筒	SR 9	9.2	2.1	8.2	木製筒コロゾー 内面ヨコハケ 外側に縦溝あり ナラ	無 漆経粉合	A	灰白色	はげ形		
437-w035-02	木製品	小型平底器	SZ 9	11.5	2.4	6.5	木製筒コロゾー 内面ヨコハケ 外側に縦溝あり	無 漆経粉合	A	灰白色	口縁部1/2 底部ほぼ完全		
438-w035-04	木製品	丸	SZ 9	16.2	—	—	木製筒コロゾー 内面ヨコハケ 外側に縦溝あり 内面ヨコハケ	無 漆経粉合	A	灰白色	軽微欠損		
439-w035-04	木製品	丸	SZ 9	19.8	—	—	木製筒コロゾー 内面ヨコハケ 外側に縦溝あり 内面ヨコハケ	無 漆経粉合	A	灰白色	輕微欠損		
440-w035-05	木製品	丸	SZ 9	(11.5)	—	—	木製筒コロゾー 内面ヨコハケ 外側に縦溝あり ナラ 漆経粉合	やや黒 —漆経粉合	A	灰黑色	口縁部・全体1/4 底部	変化大	
441-w037-01	木製品	S字型 C	SZ 9	(12.4)	—	—	木製筒コロゾー 漆経粉合ナメハケ 外側に縦溝あり ナラ	無	A	灰白色	口縁部1/4		
442-w037-01	木製品	S字型 C	SZ 9	15.6	—	—	木製筒コロゾー 漆経粉合ナメハケ 外側に縦溝あり ハサ	無	A	灰黑色	軽微欠損		
443-w037-01	木製品	S字型	SZ 9	(9.0)	—	—	木製筒コロゾー 漆経粉合ナメハケ 外側に縦溝あり ナラ	無 漆経粉合	A	灰白色	軽微欠損1/2		
444-w037-01	木製品	S字型	SZ 9	—	2.9	—	木製筒コロゾー 漆経粉合ナメハケ 外側に縦溝あり ナラ	無 漆経粉合	A	灰白色	口縁部・全体1/4 底部	変化大	
445-w037-01	木製品	S字型	SZ 9	(14.2)	—	—	木製筒コロゾー 漆経粉合ナメハケ 外側に縦溝あり ナラ	無 漆経粉合	A	灰白色	口縁部～大半部 1/4		
446-w038-01	漆器	丸	CZ 6	11.0	—	2.6	木製筒コロゾー 漆経粉合ナメハケ 外側に縦溝あり	無 漆経粉合	A	灰白色	口縁部		
447-w038-02	漆器	丸	CZ 6	12.3	—	5.3	木製筒コロゾー 漆経粉合ナメハケ 外側に縦溝あり	無 漆経粉合	A	灰白色	口縁部～大半部 1/2		
448-w038-02	漆器	丸	CZ 6	—	8.8	—	木製筒コロゾー 漆経粉合ナメハケ 外側に縦溝あり	無 漆経粉合	A	灰白色	軽微欠損	内部に多くの穴を有して いる 主に縫孔	
449-w039-01	漆器	丸	CZ 6	—	18.2	—	木製筒コロゾー 漆経粉合ナメハケ 外側に縦溝あり	無 漆経粉合	A	灰白色	無	漆経粉/5 ヘラ起毛印	
450-w039-02	漆器	丸	CZ 6	(11.0)	—	—	木製筒コロゾー 漆経粉合ナメハケ 外側に縦溝あり	無 漆経粉合	A	灰白色	口縁部1/2		
451-w039-03	漆器	S字型 A	CZ 6	(20.8)	—	—	木製筒コロゾー 漆経粉合ナメハケ 外側に縦溝あり	やや黒 —漆経粉合	A	灰白色	口縁部1/4 底部		
452-w039-03	漆器	S字型 D	CZ 6	(22.6)	—	—	木製筒コロゾー 漆経粉合ナメハケ	無 漆経粉合	A	灰白色	口縁部1/8		
453-w039-03	漆器	丸	CZ 6	(20.6)	—	—	木製筒コロゾー 漆経粉合ナメハケ 外側に縦溝あり	やや黒	A	灰白色	軽微欠損		
454-w214-01	漆器	丸	CZ 6	(18.2)	13.4	13.6	木製筒コロゾー 漆経粉合ナメハケ 外側に縦溝あり	無 漆経粉合	A	灰白色	口縁部1/4 底部	変化大	
455-w040-01	漆器	丸	CZ 6	(11.0)	—	4.4	木製筒コロゾー 漆経粉合ナメハケ 外側に縦溝あり	無 —漆経粉合	A	灰白色	全体1/3	底部に木質感	
456-w227-01	漆器	手付土器	CH 6	5.8	—	3.3	木製筒コロゾー 漆経粉合ナメハケ 外側に縦溝あり	無	A	灰白色	はげ形		
457-w046-01	漆器	手付土器	CH 6	—	1.2	—	漆経粉合ナメハケ 外側に縦溝あり	無 B	オリーブ黒色	底部～全体1/3			
458-w114-01	木製品	丸	CH 6	直5 (55.4)	幅5 3.7	厚5 2.2	厚5 1.1	—	—	—	—	—	無 直5 2.8 幅5
459-w056-01	木製品	丸	CH 6	直5 (55.4)	幅5 3.2	厚5 2.1	厚5 1.1	—	—	—	—	—	無 (5.6)
460-w057-01	木製品	丸	SE 2	直5 (52.8)	幅5 3.5	厚5 3.5	漆経粉合材 上縁に縫孔に切込	無 漆経粉合材	—	—	—	—	上縁破損 スギ
461-w057-01	木製品	丸	SE 2	直5 (55.2)	幅5 (56.9)	厚5 3.5	漆経粉合材 上縁に縫孔に切込	無 漆経粉合材	—	—	—	—	はげ形
462-w058-01	木製品	丸	SE 2	直5 (57.1)	幅5 33.0	厚5 3.5	漆経粉合材 上縁に縫孔に切込	無 漆経粉合材	—	—	—	—	一端黒色のため取り立てる 漆経粉合材 ヒノキ
463-w058-01	木製品	丸	SE 2	直5 (58.3)	幅5 23.3	厚5 2.1	漆経粉合材 上縁に縫孔に切込	無 漆経粉合材	—	—	—	—	黒色美しい スギ
464-w224-01	木製品	丸	SE 2	直5 (58.3)	幅5 1.7	厚5 0.5	漆経粉合材	無 漆経粉合材	—	—	—	—	黒色美しい スギ
465-w217-01	木製品	石塗	SK 11	直5 (5.8)	幅5 3.5	厚5 0.5	漆経粉合材	無 漆経粉合材	—	—	—	—	黒色り スギ

第29表 遺物観察表(19)

船の番号	荷物番号	種別	品種	出土遺物	状態(±)			調査・手作の状態	出土	地図	色調	既存度	備考
					口径	底径	高さ						
664	218-06	土器類	不明器	SRIII	直径 3.5	底径 2.2	—	口縁コリナダ 内側は丸形で、側面はカーブ、表面はハサ 形は楕円形 中生	直 —1mm弱程度	A	朱赤褐色	回1.1場所	特殊小品
665	229-02	土器類	S字型	SRIII	(13.2)	—	—	口縁コリナダ 内側は楕円形でカーブ、表面はハサ 形は楕円形 中生	中や白 —1mm弱程度	B	淡黄色	回1.2場所	内面にS字形
666	217-02	土器類	口付器	SRIII	—	—	—	口縁外側コリナダ、内部はヨコカーブ 体部外側はドロップ、内部はヨコカーブ、表面はハサ 形は楕円形 中生	直 —2mm弱程度	A	褐褐色	体部蛇形	ベースは小切丸形
668	221-04	土器類	口付器	SRIII	(12.3)	—	—	口縁外側コリナダ 内部はヨコカーブ 体部外側はドロップ、内部はヨコカーブ	中や白 —1mm弱程度	A	褐褐色	回1.3場所	—
670	218-03	土器類	口付器	SRIII	(10.4)	—	2.9	口縁外側コリナダ 内部はヨコカーブ	直 —1mm弱程度	B	淡黄色	回1.4場所	—
671	222-02	土器類	口付器	SRIII	12.8	—	4.7	口縁外側コリナダ 体部外側はドロップ、内部はヨコカーブ	直 —1mm弱程度	B	淡黄色	回1.5場所	—
672	218-04	土器類	口付器	SRIII	10.6	—	3.4	口縁外側コリナダ 体部外側はドロップ、内部はヨコカーブ	直 —1mm弱程度	B	褐褐色	回1.6場所	内面外側に本漆模
673	218-01	土器類	口付器	SRIII	11.6	—	3.6	口縁外側コリナダ 体部外側はヨコカーブ 内面はナダ	直 —1mm弱程度	B	淡白色	体部蛇形	内面外側に本漆模
674	221-03	土器類	口付器	SRIII	—	—	—	外周部一面 内側ハナナダ	中や白 —1mm弱程度	B	淡褐色	表記完全	近面外側に本漆模
675	218-05	土器類	口付器	SRIII	—	—	—	底部に付2cm程円孔を有し上より 直 —2mm弱程度	直 —2mm弱程度	B	淡褐色	2×8cmの穴	—
676	219-03	土器類	口付器	SRIII	10.1	—	4.5	口縁外側コリナダ 体部外側ヨコカーブへ 内側はヨコカーブ、表面はハサ 形は楕円形 中生	直 —1mm弱程度	B	褐色	回1.7場所	—
677	219-04	土器類	口付器	SRIII	(26.8)	—	5.0	口縁外側コリナダ 底部一面ヨコカーブ ハナナダ 内面はヨコカーブ	直 —1mm弱程度	B	淡黄色	全体蛇形	—
678	219-02	土器類	口付器	SRIII	(13.4)	8.8	11.6	口縁外側コリナダ 内部はヨコカーブ	直 —1mm弱程度	B	淡褐色	全体1/2	—
679	220-06	土器類	口付器	SRIII	(13.8)	—	—	口縁外側コリナダコリナダ 体部外側はドロップ 内面はヨコカーブ	直 —1mm弱程度	B	淡褐色	回1.8場所	—
680	219-01	土器類	口付器	SRIII	(15.2)	—	—	口縁外側コリナダ 底部一面ヨコカーブヨコカーブ 内面ハナ 体部外側はドロップ 内面はヨコカーブ	直 —1mm弱程度	B	淡褐色	全体1/2	内面下竿にS字形
681	220-01	土器類	口付器	SRIII	(25.1)	—	—	口縁外側コリナダ 内面はヨコカーブ 体部外側はドロップ 内面はヨコカーブ	直 —1mm弱程度	B	淡白色	回1.9場所	—
682	220-02	土器類	口付器	SRIII	(21.2)	—	—	口縁外側コリナダ 底部一面ヨコカーブ ハナナダヨコカーブ	直 —1mm弱程度	B	淡褐色	回1.1場所	内面外側に大穴付
683	220-03	土器類	口付器	SRIII	(22.4)	—	—	口縁外側コリナダコリナダ 内面はヨコカーブ	直 —1mm弱程度	B	淡褐色	回1.2場所	内面外側に大穴付
684	218-04	土器類	口付器	SRIII	—	(10.2)	—	体部外側はドロップ、内面ヨコカーブ 底部一面ヨコカーブ ハナナダヨコカーブ	中や白 —1mm弱程度	B	淡褐色	全体4/5	表記全面に大穴付
685	221-02	土器類	口付器	SRIII	16.5	—	3.5	天井部内側はカーブで、内面ナダ	直 —5mm弱程度	B	灰白	回1.3場所	—
686	221-05	土器類	口付器	SRIII	(17.9)	—	—	天井部内側はカーブで、内面ナダ	直 —1mm弱程度	B	灰白色	回1.4場所	—
687	221-01	土器類	口付器	SRIII	17.8	—	3.8	天井部内側はカーブで、内面ナダ	直 —1mm弱程度	B	灰白色	回1.5場所	内面全面に大穴付
688	221-05	土器類	口付器	SRIII	12.1	—	4.3	口縁外側コリナダ 底部一面ヨコカーブ	直 —2mm弱程度	B	灰白色	全体4/5	表記全面に大穴付
689	223-02	土器類	口付器	SRIII	—	(10.1)	—	底部一面ヨコカーブ 内面ナダ	直 —2mm弱程度	B	灰白色	直1/4	—
690	223-06	土器類	口付器	SRIII	—	(12.1)	—	底部一面ヨコカーブ 内面ナダ	直 —2mm弱程度	B	灰白色	直1/4	—
691	223-04	土器類	口付器	SRIII	—	(12.2)	—	底部一面ヨコカーブ カリナダ	直 —2mm弱程度	B	灰白色	直1/4	—
692	224-04	土器類	口付器	SRIII	—	(11.4)	—	内面表面ナダ	直 —1mm弱程度	B	淡褐色	内面全面	—
693	223-04	土器類	瓦片器	SRIII	—	(10.3)	—	内面表面ナダ 底部一面ヨコカーブ	直 —1mm弱程度	B	黄褐色	回1.5場所	—
694	222-01	土器類	瓦片器	SRIII	—	7.7	—	口縁外側コリナダ 底部一面ヨコカーブ	直 —2mm弱程度	B	淡褐色	直1/2場所 上部に黒帯	—
695	223-01	土器類	瓦片器	SRIII	—	(21.9)	—	口縁外側コリナダ 底部一面ヨコカーブ	直 —2mm弱程度	B	灰白色	全体4/5	—
696	223-02	土器類	瓦片器	SRIII	—	(8.2)	—	壁面コリナダ 底部一面ヨコカーブ	直 —2mm弱程度	B	灰白色	直1/2場所	—
697	223-05	土器類	瓦片器	SRIII	—	11.0	—	口縁外側コリナダ 内面表面ナダ	直 —2mm弱程度	B	灰白色	回1.6場所	—
698	223-04	土器類	瓦片器	SRIII	—	11.2	—	壁面一層付内側 内面表面ナダ	直 —2mm弱程度	B	淡褐色	全体4/5	内面全面に大穴付
699	222-03	土器類	瓦片器	SRIII	—	(11.0)	—	口縁外側コリナダ 内面表面ナダ	直 —2mm弱程度	B	灰白色	直1/2場所	—
700	222-01	土器類	瓦片器	SRIII	—	(11.4)	—	口縁外側コリナダ 内面表面ナダ	直 —2mm弱程度	B	灰白色	直1/2場所	—

第30表 遺物観察表(20)

発見番号	遺物番号	種類	器種	出土遺物	法面 (cm)			調査・技術の履歴	跡土	地式	色調	保存度	備考	
					口径	直径	高さ							
701	104-01	土器部	器	S D20	(30.8)	—	—	口縁部ヨコナギ 底面部ヨコナギ 内面ヨコナギ	土	良	灰白色	口縁部S/7		
702	267-02	土器部	杯	C 地区 底面部	13.4	—	4.4	天井部内面ヨコナギ 天井部内面ヨコナギ 口縁部ヨコナギ	土	良	黄褐色	全体S/2		
703	212-05	土器部	杯	C 地区 底面部	—	8.2	—	底面部内面ヨコナギ 底面部内面ヨコナギ 底面部ヨコナギ	土	良	灰白色	底面部S/2	底面部を削断して削成	
704	267-03	土器部	杯	C 地区 底面部	—	(11.6)	—	—	土	良	明褐色	高台部S/7		
705	961-03	土器部	杯	D 地区 底面部	—	(9.9)	—	底面部内面ヨコナギ 底面部内面ヨコナギ 底面部ヨコナギ	土	良	灰白色	高台部S/4		
706	205-02	土器部	小皿	S E 3	(7.5)	—	1.5	口縁部ヨコナギ 底面部ヨコナギ ナカヘ 内面ヨコナギ	土	良	灰白色	全体S/4		
707	203-01	陶器	器	S E 3	(15.1)	—	—	ロクセナゲ	土	良	灰白色	口縫部~全体S/4		
708	204-01	陶器	器	S E 3	16.7	7.8	5.9	ロクセナゲ 底面部内面ヨコナギ 底面部ヨコナギ	土	良	灰白色 灰褐色	全体S/4	付着花斑	
709	w014-01	木製品	器物	S E 3	12.5	(16.2)	厚さ0.4 P H 0.4	—	—	—	—	—	—	
710	w033-01	木製品	器物	S E 3	10	(18.5)	厚さ 0.7	—	—	—	—	—	下端欠	
711	226-04	ロツリ土器部	小皿	S E 4	9.2	—	1.8	ロクセナゲ 底面部内面切痕	土	良	灰白色	付着花斑		
712	206-02	陶器	器	S E 4	(16.8)	—	—	ロクセナゲ 脱け真白	やや暗 小口尚	良	灰白色 灰褐色	口縫部S/2		
713	205-03	陶器	器	S E 4	(17.4)	(9.0)	(5.0)	ロクセナゲ 脱け真白	やや暗 —	良	灰白色	口縫部S/4 底面部		
714	226-01	陶器	器	S E 4	(16.8)	8.0	5.5	ロクセナゲ 底面部内面切痕 脱け真白 稼働痕	やや暗 —	良	灰白色	口縫部~全体S/4		
715	226-05	土器部	器	S E 4	(23.2)	—	—	ロクセナゲ 底面部内面切痕	土	良	灰白色	口縫部S/5		
716	225-01	土器部	小皿	S K 15	15.0	—	1.9	ロクセナゲ 底面部内面切痕 ヨシナガ 内面ナガ	土	良	灰白色	付着花斑	スヌ付着	
717	225-02	土器部	器	S K 15	—	—	—	ロクセナゲ 底面部内面切痕 ヨシナガ	土	良	灰白色	口縫部S/4		
718	225-03	陶器	器	S K 15	—	8.4	—	ロクセナゲ 底面部内面切痕 脱け真白 稼働痕	やや暗 —	良	灰白色	底面部花斑		
719	225-02	陶器	器	S K 15	—	7.8	—	ロクセナゲ 底面部内面切痕 脱け真白 稼働痕	やや暗 小口尚	良	灰白色	底面部花斑		
720	225-03	陶器	器	S K 15	(16.2)	(7.8)	5.2	ロクセナゲ 底面部内面切痕 脱け真白 稼働痕	土	良	灰白色	全体S/2		
721	195-02	陶器	器	S D 29	—	7.2	—	モチモチ ロクセナゲ 脱け真白	土	良	灰白色	底面部花斑		
722	195-02	陶器	器	S D 29	—	7.0	—	ロクセナゲ 底面部内面切痕 脱け真白 稼働痕	やや暗	良	灰白色	底面部花斑		
723	196-02	陶器	器	S D 29	—	(7.6)	—	ロクセナゲ 底面部内面切痕 脱け真白	土	良	灰白色	底面部花斑		
724	196-05	陶器	器	S D 29	—	(8.0)	—	ロクセナゲ 底面部内面切痕 脱け真白 稼働痕	土	良	灰白色	全体S/4	底面部	
725	195-01	陶器	器	S D 29	—	7.0	—	ロクセナゲ 底面部内面切痕 脱け真白 稼働痕	土	良	灰白色	底面部花斑		
726	195-01	陶器	器	S D 29	—	(7.8)	—	ロクセナゲ 底面部内面切痕	土	良	灰白色	底面部S/2		
727	196-02	陶器	器	S D 29	—	7.5	—	ロクセナゲ 底面部内面切痕 脱け真白 稼働痕	土	良	灰白色	底面部花斑		
728	196-04	陶器	器	S D 29	—	(6.4)	—	ロクセナゲ 底面部内面切痕 脱け真白	やや暗	良	灰白色	底面部S/2		
729	196-01	陶器	器	S D 29	(15.2)	(7.0)	4.9	ロクセナゲ 底面部内面切痕 脱け真白 稼働痕	やや暗 小口尚	良	灰白色	全体S/5		
730	196-08	陶器	器	S D 29	(9.1)	(5.0)	1.7	ロクセナゲ 底面部内面切痕 ナタ 一方向ナガ	土	良	灰白色	全体S/4	自然縫	
731	196-07	陶器	器	S D 29	—	—	—	ロクセナゲ 底面部内面切痕 脱け真白	土	良	灰白色	全体S/4	自然縫 基部	
732	196-06	陶器	器	S D 29	—	5.1	—	ロクセナゲ 底面部内面切痕 脱け真白	土	良	灰白色	底面部花斑	裏面「」	
733	197-01	陶器	青磁	S D 29	—	—	—	ロクセナゲ 底面部内面切痕 月差基部花斑	土	良	灰白色	小方		
734	197-02	陶器	青磁	S D 29	—	—	—	—	—	—	—	全体S/2	火照通気 口縫部 底面部花斑 S 0.5 cm	
735	216-07	陶器	器	S D 32	—	(7.7)	—	ロクセナゲ 底面部内面切痕 脱け真白	やや暗	良	(内)灰白色 (外)灰白色	底面部S/2	スヌ付着	

第31表 遺物観察表(21)

展示番号	実用番号	種類	目録	計量 (cm)			調査・技法の特徴	馬上	地表	地調	保存度	備考	
				口述	直徑	高さ							
730	229-06	漆器箱	漆	S.D38	—	—	—	江戸 漆付文	漆	丸	(内) 黄色 (外) 漆白色	漆器小片	
731	229-07	漆器	漆	S.D38	—	(8.7)	—	ロクナガ 漆器外表面切削 漆付高台 絞割模	漆	丸	灰白色	漆器小片	
732	229-08	漆器	漆	S.D38	—	(8.8)	—	ロクナガ 漆器外表面切削 漆付高台 絞割模	漆	丸	灰白色	漆器小片	
733	229-09	漆器	漆	S.D38	—	(8.8)	—	ロクナガ 漆器外表面切削 漆付高台 絞割模	漆	丸	灰白色	漆器小片	
734	229-10	漆器	漆	S.D38	(8.9)	—	1.4	ロクナガ 漆器外表面切削 漆付高台 絞割模	漆	丸	灰白色	漆器小片	
741	231-01	漆器	漆	S.D38	(11.4)	—	—	ロクナガ 漆器外表面内裏地模	漆	丸	灰褐色	漆器部分	漆器
742	231-02	漆器	漆	S.D38	(8.8)	—	—	ロクナガ 漆器外表面内裏地模	漆	丸	灰白色 (内) 灰褐色	漆器部分	
743	231-04	漆器	漆	S.D38	—	(8.8)	—	内裏地模 内裏地ごとオキナ・ナラ	漆	丸	灰白色	小片	
744	231-05	漆器	漆	S.D38	—	—	—	ロクナガ 漆器外表面及び内裏地模 内文・ナラ	漆	丸	(内) 暗紅色 (外) 灰褐色	漆器小片	
745	231-06	漆器	漆	S.D38	—	—	—	ロクナガ 漆器外表面内裏地模	漆	丸	灰ソリーブ色	漆器部分	
746	231-02	漆器	漆	S.D38	—	6.2	—	漆器内裏地模 削りし縫合	漆	丸	(内) 漆黑色 (外) 暗褐色	漆器小片	漆器 漆器加工漆器製品
747	239-01	漆器	漆	S.D38	(11.4)	—	—	ロクナガ 漆器外表面内裏地模	漆	丸	白色	漆器部分	
748	239-02	漆器	漆	S.D38	(11.8)	—	—	ロクナガ 内裏地模	漆	丸	灰褐色	漆器部分	
749	239-03	漆器	漆	S.D38	—	—	—	ロクナガ 内裏地模	漆	丸	白色	小片	
750	239-04	漆器	漆	S.D38	—	3.9	—	ロクナガ 内裏地模	漆	丸	灰白色 黒色	漆器小片	
751	239-05	漆器	漆	S.D38	—	—	—	内裏地模	漆	丸	暗灰色	小片	
752	239-07	漆器	漆	下地区 漆器	(16.2)	(7.8)	(5.5)	ロクナガ 漆器外表面切削 漆付高台	漆	丸	(内) 暗紅色 (外) 灰褐色	漆器小片	
753	239-01	漆器	漆	下地区 漆器	(14.4)	(6.4)	(5.4)	ロクナガ 漆器外表面切削 漆付高台 絞割模	漆	丸	灰褐色	漆器小片	
754	244-09	漆器	漆	下地区 漆器	—	(8.2)	—	ロクナガ 漆器外表面切削 漆付高台 絞割模	漆	丸	灰白色	漆器小片	漆器「人」
755	244-03	漆器	漆	下地区 漆器	—	(6.2)	—	ロクナガ・一方向ナガ 漆器外表面切削 漆付高台 絞割模	漆	丸	灰白色	漆器小片	漆器「東」?
756	229-03	漆器	漆	下地区 漆器	—	—	—	内裏地模	漆	丸	(内) 暗紅色 (外) 明暉灰色	小片	
757	248-06	漆器	漆	下地区 漆器	(17.2)	—	—	上部口縫 内裏地模	漆	丸	(内) 暗褐色 内裏地模	漆器のみ	変化大
758	251-03	漆器	漆	下地区 漆器	—	4.2	—	内裏地模	漆	丸	(内) 暗紅色 内裏地模	漆器のみ	

\* 樹種同定については、元岡寺文化財研究所の分析による。

[注] あて材とは樹木の日陰の側、または山地斜面のもので根元が彎曲している部分などで、正常材と比べて構造が著しく異なり、あて材での木口面・板面面・板目面は樹種鑑定の指標にならない。

第32表 遺物観察表 (22)

## XI. 遺構・遺物のまとめと考察

藏田遺跡は、安濃川下流域左岸の沖積平野に位置する。今回の調査によって弥生時代から平安・鎌倉時代の集落や河道・自然流路、またそれに伴う護岸施設などの木組み遺構が検出された。この章では、若干の考察を踏まえてまとめとする。

### 1 繩文時代の堆積層について

縄文土器は、出土位置図（第13図）や遺物観察表からわかるようにA～D地区の遺構、A～C地区の下層確認トレチや包含層から縄文時代中期から晩期の土器が出土している。

縄文時代中期～後期の上器は、包含層からも出土しているが、ほとんどがA～C地区の下層確認トレチからの出土である。このことから下層確認トレチの青灰色シルト層が、縄文時代中期から後期以前の堆積により形成されたと考えられる。

また、晩期の土器は、弥生時代後期から古墳時代後期の河道S R 3などの遺構埋土中や弥生時代中期以降の遺構を検出した遺構基盤層および包含層から出土している。これらの土器の出土状況から遺構基盤層より上層は、縄文時代晩期以後に形成されたものと考えられる。  
（宮田）

### 2 弥生～古墳時代の集落景観

今回の調査の結果、集落は弥生時代中期前葉・同中期末～後期初頭・古墳時代中期と断続的に営まれていることが判明した。その集落を構成する建物は、一部に竪穴住居の可能性があるものの、その他の建物は全て掘立柱建物であり、本遺跡は掘立柱建物のみで構成される集落の可能性が高い。以下、各時期ごとに集落景観を考えてみたい。

弥生時代中期 C地区でこの時期と考えられる掘立柱建物が9棟検出された。これらは柱穴出土遺物からは時期決定できないが、事実報告部分で述べたように周辺の状況・棟方向などから中期前葉、第Ⅱ様式に属する可能性が高いと考えられる。

掘立柱建物は、その分布からSB 1～4（東群）とSB 5～9（西群）の2つのまとまりに分けることができる。東西両群の間は、縄文時代晩期頃と考

えられる洪水層が存在する。また、古墳時代の自然流路がほぼ同じ箇所を流下することから、弥生時代には微高地内でも相対的に低い土地であったと推定でき、東西両群を分ける自然境界と考えられる。

掘立柱建物の機能はその平面形などからみて、西群ではSB 6・7が住居、SB 5・8・9が倉庫と考えられる。また、東群ではSB 2・4が住居、SB 3が倉庫、SB 1が納屋などの副屋と考えられる。これらは重複していたり近接しそうるものがあり、同時存在したものは住居+倉庫ないし副屋の2～3棟と思われる。東西両群は世帯に相当する基礎的単位<sup>30</sup>と認識できる。

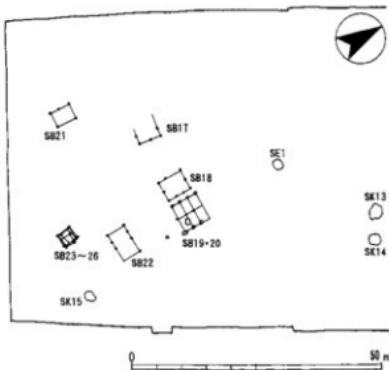
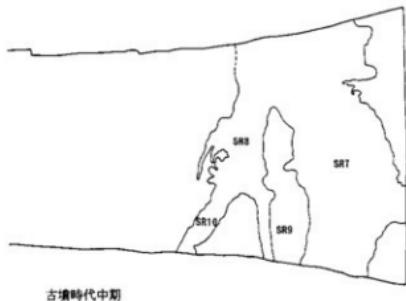
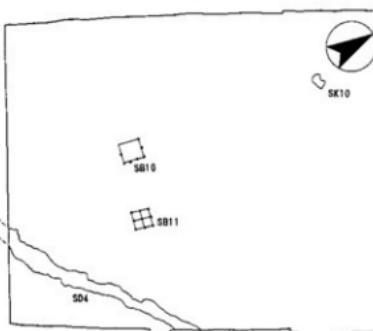
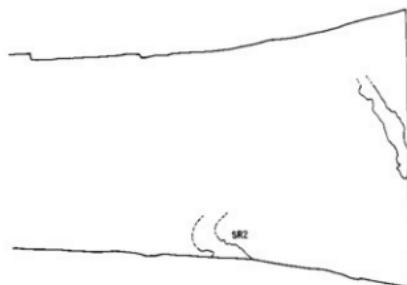
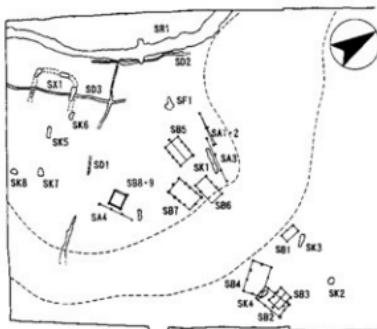
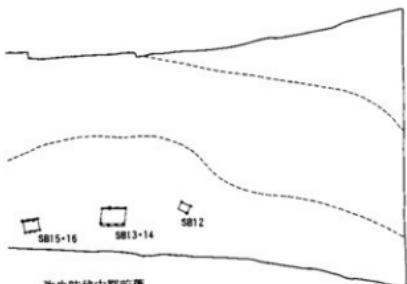
また、集落域の南側には方形周溝墓SX 1があり、集落との間には方形周溝墓と同方向のSD 1・2がある。墓域と集落域が溝で区画されていたと考えられ、同域にあるSK 5・7・8も土壙墓の可能性がある。集落域は微高地の中央に位置し、墓域は微高地の縁辺部に設定されている。

ところで、河道を挟んで南側のD・E地区では弥生時代と推定される掘立柱建物を3棟確認した。内訳は1×1間が1棟、3×1間が2棟である。柱穴出土遺物がなく、時期決定できないが、いずれも梁間1間の建物であり、形態から弥生時代中期の集落と考えておく。

弥生時代中期末～後期初頭 この時期の掘立柱建物はSB 10・11が挙げられる。SB 11は2×2間の総柱建物で倉庫とみられ、住居と推定されるSB 10に付属する建物と考えられる。この時期の廐乗土坑は少なく、建物の少なさからも最小単位を確認したにとどまると思われる。

また、古墳時代の河道に切られその規模・位置は明らかにできないが、この集落の南側には自然流路が存在する。その一部はSR 2として確認でき、隣接する津市教委の調査区では、その下流から幅約6mの井堰が検出されている。この井堰の存在からも最小単位のみで稻作などを含めた生業を維持するのは困難と思われ、周辺に複数の基礎的単位が想定できる。

ところで、当遺跡で確認されている自然流路の流



第119図 弥生・古墳時代集落変遷図（1：1,000）

下方向は東ないし南であるが、SD 4 はその方向に反して北東～南北方向となる。局地的なものとも考えられるが、その方向性を重視するならば人工的に掘削された溝、すなわち環濠の可能性がある。しかし、地盤が砂質で崩れやすく肩部の凹凸が目立ち、深さが一定しない点、その南部で小規模な杭列が検出されている点など否定的な要素が多い。ここでは、可能性を指摘するだけに止めた。

**古墳時代中期** この時期の掘立柱建物は C 地区で 10 棟検出された。これらの南北辺の方位は、同一地点の建替えである SB 23・25 以外は北から東西に 6° 以内の振れに收まり、その棟方向も南北棟のものがほとんどである。全体に北を指向する一群であり、同時期のものと考えられる。

この中で SB 19・20 は、当該期の中で最大規模の建物である。桁行より梁行が長いというやや特異な構造や柱筋を揃える SB 18 の存在からも当集落における中心的な建物と考えられる。また、SB 19・20 のほぼ真北には丸太くり抜き桶を井戸枠に転用した SE 1 があり、計画的な配置が窺われる。その他の建物は、南から西側に配置されている。

また、建物群の北側には廃棄土坑 SK 13・14、南側に河道 SR 7 があり、居住域は南北 80m 程度と推定でき、西側は低地となり広がりは考えにくい。

**小結** 弥生時代の段階では、集落は住居と倉庫の 2 ~ 3 棟からなる基礎的単位の複合からなると考えられる。建物構成では、倉庫とした建物の割合が高い点が注目される。これは未抽出の居住建物が存在した可能性もあるが、本来の様相を示すものとすれば、収穫物を管理・収納できる独立した基礎的単位と認識でき、自立した存在と考えることができる。

一方、古墳時代中期は SB 19・20 のような求心的な建物が現れ、方位にまとまりをみせ、前代とは本質的に異なる建物構成となる。後述するように古墳以外で出土の極めて少ない櫛形甌の存在は、少なくとも古墳建築主体となり得る人物の存在を暗示する。しかし、建物群の周囲には柱列・溝のような区画施設はみられない。さらに、集落の南側で検出された河岸からは、護岸施設・貯水施設などの生活に直接関連するような遺構が検出されており、これらは集落が生業と不可分な存在であること示唆する。

居住者象としては、首長クラスではなく中小規模の古墳建築主体と考えたい。

ところで、古墳時代中期の SB 23~26 は、祭祀関連の上坑と考えられる SK 15 の西約 10m にあり、1 × 1 m の規模で、ほぼ同一地点で建替えを繰り返している。同時期の建物とは離れ、常に単独で存在しており、恒常的な建物であったと考えられる。そのあり方は、奈良県綿向遺跡<sup>3</sup>で検出されている祭祀土坑とセットになる方形建物を想起させる。

集落の縁辺部にある小規模な建物という観点でみていくと、同様なものがあることに気付く。北微高地の弥生時代中期集落の南端部にある SB 8・9 や南微高地の弥生時代集落の北端部に存在する SB 12 がそれに当たる。いずれも 1 × 1 m の単純な形態であるが、床面積の狭小さから住居とは考えられない。一義的には倉庫などと思われるが、祭祀など何らかの特殊目的の建物の可能性も否定できない。

### 3 弥生時代中期前葉の土器について

方形周溝基 SK 1 や土坑 SK 1 、焼土坑 SF 1 からは、良好な資料が出土している。これらの遺構から出土した土器は、その量の多寡はあるが、ほぼ同様の内容をもつ。器種としては壺・甌・鉢があり、高杯は確認されていない。比率的には壺・甌が各半数近くを占め、少量の鉢が加わる程度である。

これらの土器は、形態から中期前葉のものと考えられる。甌では、後続する中期中集に繋がる口縁部が受口状あるいは内湾するものではなく、施文原体も二枚貝腹縁が大半で、わずかに櫛状工具の可能性のあるものが若干あるのみである。これらは中期前葉でもその前半の上器群と把握できそうである。愛知県朝日遺跡<sup>3</sup>では、二枚貝施紋を主体としたⅡ期から櫛状施紋を主体とし、単純口縁細頸甌の出現を指標とするⅢ期、従来の「貝田町式古段階」に相当する、Ⅳ期の変遷が明らかになっている。朝日遺跡の編年に対比すればⅡ期に併行する時期と考えられる。

壺 A 類は一般に「朝日式」と呼ばれる広口壺である。朝日式では、一般的には口縁部は無文が一般的であるが、口縁端部内面に瘤状突起のあるものが半数を占める。後述する甌 C 類の影響であろうか。B 類は厚手で口縁部の開きが少ないもので、C 類は口

縁部が大きく開き、端面をもつものである。B・C類は「亜流遠賀川式土器」の系譜を引くものである。いずれも口縁端面は施紋され、口縁端部内面にはほとんどの個体に瘤状突起があると思われる。頭部に押圧突帯を貼り付けるものもあり、装飾性に富む。

甕は大和形と呼ばれる外面をタテハケ調整、口縁部内面をヨコハケ調整する在地系のものが大半を占める。その他には、条痕調整する44、口縁部付近の内外面に波状文を施す66がある。44は尾張・三河方面との関連で、66は近江系と考えられるものである。県内では鈴鹿市東庄内A遺跡<sup>3</sup>・同東庄内B遺跡<sup>4</sup>・同上箕田遺跡<sup>5</sup>・三雲町中ノ庄遺跡<sup>6</sup>に類例があるが、いずれも出土量は少なく客体的な存在である。甕C類45は、体部が口径を大きく上回る特異な形態のもので、上箕田遺跡出土例がその可能性がある以外、県内では類例は見あたらない。今後の類例の増加に期待したい。

#### 4 SK 15 出土遺物について

SK 15からは、須恵器樽形甕・土師器鉢・土師器壺・S字甕などが出土している。いづれも完形近くに復元できる。さらに土坑の底部には一方に火を受けた棒状木製品や炭化した木片が数点出土している。火を使った行為と完形上器との組み合わせは、いわゆる「纏向型祭祀<sup>7</sup>」に共通するものがある。纏向遺跡で検出されている土坑とは、規模・内容とも異なるが、特異な上器を含む遺物は祭祀後の一括廢棄と考えられよう。

樽形甕は、口縁部を欠くものの体部の形状などから田辯昭三氏の陶邑編年TK 208型式<sup>8</sup>に比定でき、

いわゆる初期須恵器の範疇に収まる。周辺の初期須恵器資料としては、安濃町平田35号墳<sup>9</sup>でTK 208型式(古相)の蓋杯・把手付壺・甕・広口壺・器台・甕が、宮ノ前遺跡<sup>10</sup>で高杯形器台片が出土している。六人A遺跡<sup>11</sup>では、TK 73型式以前の大庭寺段階からその直後型式と考えられる初期須恵器も出土しており、調整の特徴や焼成具合からも在地窯の可能性が指摘されている。本例も在地で制作された可能性を考慮する必要がある。

樽形甕は県内で7例の出土がある(第33表)が、その7例中5例は古墳からの出土である。それらの墳形は円墳あるいは方墳で、規模の点からも少なくとも首長層に相当するようなものはない。本例のように祭祀遺構あるいは墳墓にその出土が集中し、儀器としての性格の強い遺物と考えることができる。

土師器鉢160は、形態は韓式系土器鍋に類似するが、底部が平底である点、体部の調整が板ナデである点が異なる。韓式系上器は、当遺跡の周辺では、メカサ3号墳<sup>12</sup>で6世紀前半の須恵質の甕が、六人A遺跡では甕・瓶・平底鉢・把手付鍋などが大量に出土しており、当時付近では韓式系土器が一定量流布していたと考えられる。口縁端部の処理などは同時期の在地のS字甕のそれに似る点などから韓式系土器を模倣した上師器と考えられる。(米山)

#### 5 古墳時代の溝、河道・自然流路について

B～D地区で溝や河道・自然流路、またそれに伴う木組み造橋を検出した。

B・C地区の流路SR 3は、弥生時代後期の土器も出土しているが、古墳時代中期の小型丸底壺やS

No	遺跡名	所 在 地	出 土 遺 様	型 式	備 考	文 献
1	茶臼山1号墳	四日市市治町	古 墳 径約25.5mの造出し付き円墳	TK 23		註14
2	藏出遺跡	津市北河路町	集落跡 径2.3m前後、深さ0.5mの円形土坑	TK 208		
3	(不明)	一志郡・志町島田地内	古 墳 古墳から出土と伝わる	—	詳細不明	註15
4	卜之庄東方遺跡	一志郡塙野町中川	集落跡 総延長380m、幅2.5～4.4m、深さ0.2～1.1mの溝	—		註16
5	朱中古墳	多気郡多気町射相町	古 墳 墓丘規模不明	—		註17
6	落合3号墳	伊勢市津村町	古 墳 一辺約11mの方墳、周溝	TK 208		註18
7	(伝)経塚古墳	名賀郡大山田村	古 墳 規模不明 横穴式石室?	TK 216		註19

第33表 樽形甕出土遺跡一覧

字壇などの出土遺物が多く、流路西に位置する古墳時代の集落に關係するものと考えられる。また流路 S R 3 の中央の S Z 3 は、2列の杭列を流れに直交して打たれたしがらみと考える。

D 地区中央の河道 S R 7 は、その河幅から安濃川の一支部と考えられる。S R 7 は、その左岸に築かれた貯水施設や護岸施設などから河道の流れに取り残されたと考えられる弥生時代前期の土器片が多数出土しており、河道の時期は弥生時代前期に遡ると考えられる。中心時期は出土した古式土師器や鐵柄などの木製品から古墳時代中期前半頃である。また左岸に作られた貯水・護岸施設などの木組み遺構 (S Z 5 ~ 8) もこの時期と考える。

貯水施設 S Z 5 は、調査区北西から河道 S R 7 に流れ込む溝を河道の出口で堰止めて水を貯めた施設と考えられる。南北2列の杭列を河道側にアーチ状に張り出させ、しかも南側の杭列は縦杭を打ったのち両側に斜杭を打って補強している。これは S Z 5 の水圧に対する強度を高めたと考えられる。またその内側に葦または茅と思われる植物質の敷物を敷くことによって水漏れを防ぐ効果とともに水位を一定に保つように工夫したと考えられる。

護岸施設 S Z 7 は、杭径のはば均一な杭を400本以上を打ち込んで、基盤が粗砂のため河道 S R 7 からの導水溝の河道側の堤を補強している。杭列 S Z 8 は、河道内に1列のみ杭列が残っているだけであるが、護岸施設 S Z 7 と共に水を取水するために設けられた堰が想定される。

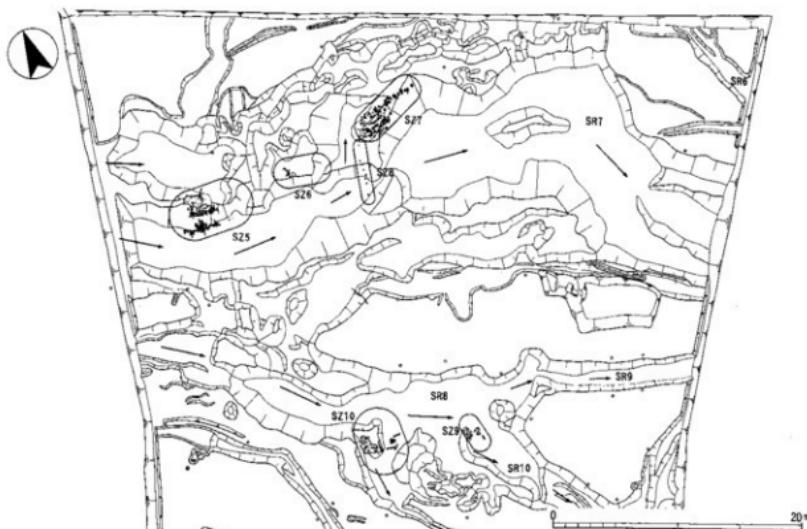
河道 S R 8 の「溜り」からは、多量の古式土師器や木製品が出土しているが、木製品は廃棄または流れ込みと考えられる。また S Z 10 は「溜り」から南側に流れ出る細い溝に水を引き入れるために「溜り」の内側に作った施設と考えられる。

## 6 S R 8 出土土器について

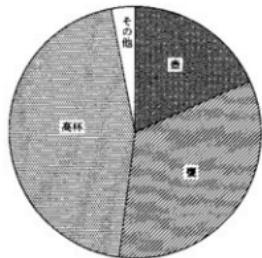
D 地区で検出した S R 8 が S R 9 + 10 と分流するところ、「溜り」から多量の古式土師器や木製品が出土した。

S R 8 の「溜り」出土の土器の器種には、壺、甕、高杯などがある。この遺構からは須恵器の出土がみられなかった。これらの土器の器種の割合は、第34表の円グラフに見られるような結果を得た。この表から高杯の割合が大きく占めることが読み取れる。

壺は小型丸底壺や二重口縁壺の割合が多い。



第120図 護岸施設・貯水施設等配置図 (1 : 400)



第34表 SR 8出土土器器種構成

壺はS字壺が約8割程で圧倒的多数を占め、それに対してく字壺は約1割もない。S字壺は当遺跡分類のB類も見られるがC類が中心を占める。また東海系のS字壺のほかに山陰系土器の影響と考えられる壺も出土している。その他には数量的には少ないがミニチュア土器や手捏ね土器がある。

高杯では、通有の高杯A類や大型の高杯C類が見られる。高杯A類は、第121図のように杯底部と杯部との境に稜がみられ、脚柱部がやや膨らみ脚部が屈折するA1、杯底部からゆるやかに口縁部にいたり脚部の屈折もゆるくなり開き気味に広がるA2がみられる。ともに口径16.5cm前後・器高12.5cm前後であるが脚部径はA2の方がやや広まる。

またSR 8の高杯には、古墳時代通有のA類が一般的であるが、丸い杯底部から段をもって立ち上がる大型の高杯C類が出土している。この種の高杯は、松阪市の粥鍋遺跡<sup>6</sup>や中の坊遺跡<sup>6</sup>、亀山市の地藏僧遺跡<sup>6</sup>、上野市の城之越遺跡<sup>6</sup>、津市では太田遺跡<sup>6</sup>や雲出島貢遺跡<sup>6</sup>などで出土している。

SR 8出土のS字壺は当遺跡分類のC類が大半であるが、C類は概ね山田猛氏の分類D1およびD2類<sup>6</sup>、また赤塚分類ではD類後半<sup>6</sup>に相当しよう。



第121図 SR 8出土土器

## 7 平安時代以降の条里地割に沿う遺構について

蕨田遺跡付近の安濃川下流域の沖積平野には昭和42年以降に行われたほ場整備以前には広範囲に条里地割の名残りが見られた（PL-1）。

安濃川流域の条里の復元については野田精一氏<sup>8</sup>や仲見秀雄氏<sup>9</sup>による研究がある。安濃郡の条里復元の基本となる文献史料は、津市四天王寺の「四天王寺文書」や度会郡度会町に所在した法楽寺の「度会郡法楽寺文書」などがある。仲見氏はこれらの文献に見られる条里坪名を基にして野田氏の復元を基本的には踏襲して津市南西の地籍図から条里界線をのばして復元している。この両氏の見解では、ほ場整備以前の道路や畦畔にはほぼ条界は一致するが、里界が両氏の間で南北三町程のずれがみられる。

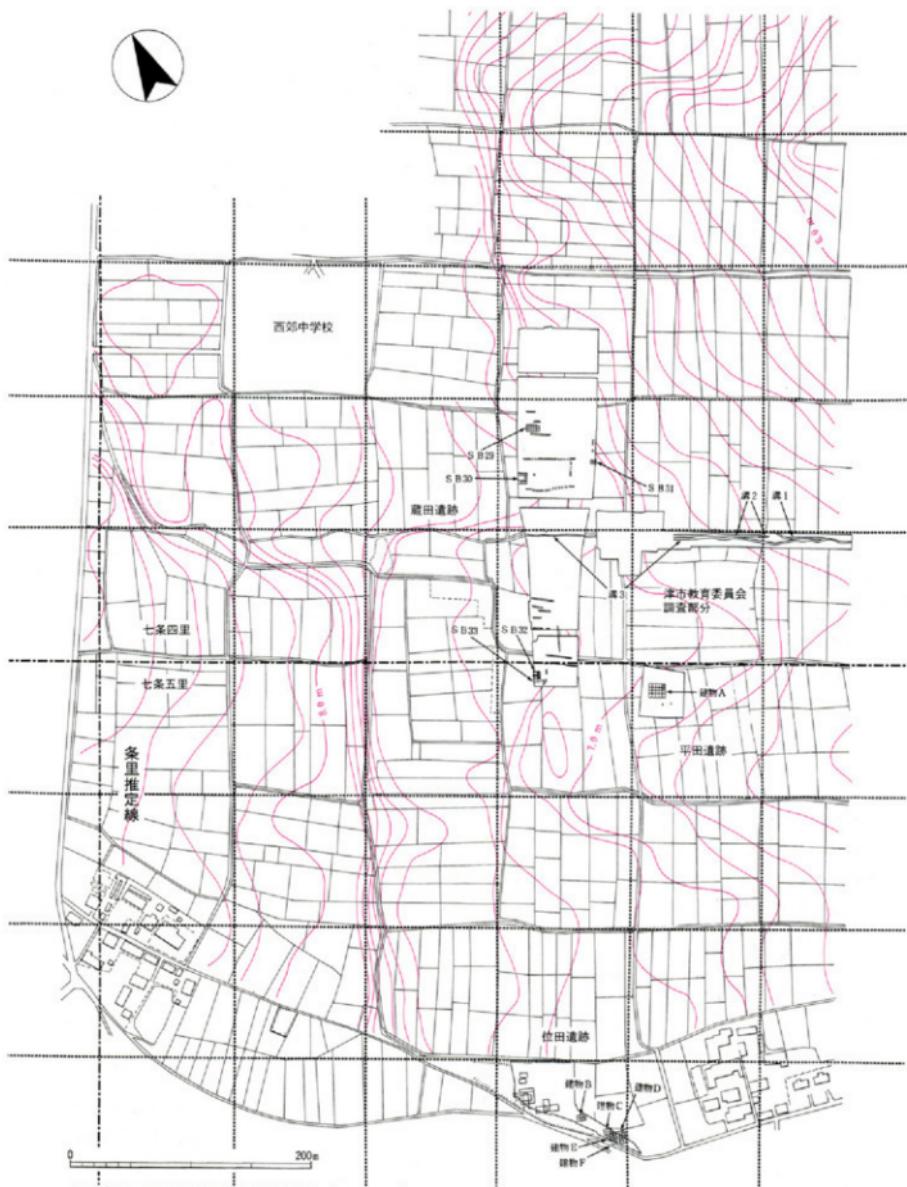
蕨田遺跡で検出した条里地割に沿う遺構には、平安時代末期から鎌倉時代初頭のSB 29~33の掘立柱建物5棟と平安時代末期以降のSD 21~23~39の溝19条（推定もふくむ）がある。

溝の中でSD 29~36は、条里坪境溝と考えられ、ほ場整備以前の用水溝に沿い、位置的にほとんど差がない。また2条の溝とは場整備以前の用水溝との間に、本文中で述べたように幾つかの溝がみられ関連性が考えられる。SD 29~36からは、陶器碗が数量的には多くを占めるが、若干であるが須恵器杯や壺が出土しており、平安時代末期から鎌倉時代初頭としたが、時期的に逆上することも考えられる。

これらの建物および溝の方位を表したのが第35表と第36表である。溝については方向に幅があるSD 37~39の2条を除く溝17条を表にまとめた。

安濃川流域の条里地割の軸線は、約N 30° Eとされる（表の破線）。建物および溝はこの軸線に対して全体的にやや西に偏っていることがわかる。また建物の平均方位は南北棟が約N 26.5° Eで、東西棟が約N 64.9° W、また溝は南北溝が約N 26.5° E、東西溝が約N 60.9° Wである。南北棟と東西棟とはほぼ直交するが、南北溝と東西溝とは直交する割合が低い。これは東西溝の溝数が17条と多く、平安時代末期以降と考える時期不明の溝も含んでおり、時期幅をもつてることを意味すると思われる。

建物群は北のSB 29~31と南のSB 32~33の南北の二群に大きく分かれる。この二群は谷地形を挟



第122図 藏田遺跡周辺条里推定図 (1 : 4,000)

んで北および南の微高地に立地する（第122図）。北群のSB 29～31の3棟は、各々1棟であるが距離的に離れて独立している。SB 31は倉庫と考えられることから、SB 31の周辺（東側）に主屋が想定される。南群のSB 32・33は同一地点での拡張による建替え2棟である。SB 30には井戸SE3を、SB 32・33は井戸SE4をもち、東および南には区画溝SD 39がめぐる。また藏田遺跡の南東約60mに位置する平田遺跡<sup>9</sup>からも同じ平安時代末期から鎌倉時代初頭の5間×4間の柱建物1棟（建物A）が井戸をともなって検出されている。このことから検出した建物は、1棟ないし倉庫をもつ2棟を構成単位とする独立した建物群が考えられる。また検出した建物群は、幾つかの共通点がみられる。

① 建物の棟方向が現状の条里地割の方向にほぼ一致することから、これらの建物は条里地割に規制されて建てられていることが想定される。

② 建物の時期が平安時代末期から鎌倉時代初頭で、建替えがあるものの鎌倉時代前期には消滅し、建物の存続期間が短いことから、建てられた時期がほぼ同じ時期であると考えられる。

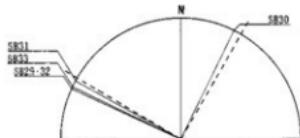
③ 建物群は距離的に散在している。

④ 建物群は1棟または1棟+倉庫から成り立つと考えられ、建物には井戸や屋敷地を区画溝をもつものがあることから、富裕な農民に隸属する下層農民でなく独立した農民層が考えられる。

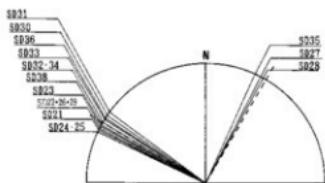
これらのことから散在的に存在する屋敷地とその周囲には検出できなかったものの生産の場としての条里地割の水田が見られた散村というべき農村景観<sup>9</sup>であったと想定される。また建物の時期がほぼ同じであることから条里地割を意識した耕地の再開発に伴う村落と考えられる。

## 8 地震と噴砂について

藏田遺跡の噴砂の時期については、明確な遺構との関連がないため、確かな時期は不明であるが、B地区東壁トレチや東西トレチの下層第3層の青灰色シルト層から出土した縄文土器が縄文時代後期末であり、噴砂は、この深鉢が出土した下層第3層の青灰色シルト層を引き裂いて上昇している。このことから噴砂を引き起こした地震が発生したのは縄



第35表 平安・鎌倉時代掘立柱建物方位



第36表 平安時代以降溝方位

文時代後期末を通過することはないと考えられる。

状況からではあるが、遺構基盤層の上面で検出した最も古い遺構は、B・C地区で検出した土坑などの弥生時代中期前葉の遺構である。このことや青灰色シルト層から出土した縄文土器から、少なくとも縄文時代晚期から弥生時代前期の間に下層第2層の暗青灰色粘質土層およびその上層の遺構基盤層が形成されたと考えられ、噴砂もこの時期に起った地震によるものと考えられる。また、南東から北西に湾曲して向かう噴砂は、上層で検出した湾曲する古墳時代の自然流路SR 3がみられるが、B地区のSR 3の基盤層は灰褐色砂質土で流路の底からは噴砂の噴出は見られず、自然流路と噴砂は関係がないと思われる。このことは青灰色シルト層の上層の暗青灰色粘質土上面が地震当時の地表面であった可能性が考えられる。B地区南西から南にのびる縄文時代晚期の洪水による堆積層（灰褐色粗砂層）に沿うように走っており、この堆積層が形成された時か時間を経ないうちに起った地震の可能性も考えられる<sup>9</sup>。

これらのことから縄文時代晚期頃の地震によって起きた可能性が高いとされよう。

D地区の東壁面で地震による痕跡と思われる波状の層<sup>9</sup>を発見した（PL-35）。層位的には古墳時代のSR 9・10が埋没した後の堆積層と考えられ、時期的には古墳時代以降の地震によるものと考える。



1. 藤田道跡  
2. 天白道跡  
3. 下沖道跡  
4. 伊勢寺道跡  
5. 楠ノ木道跡  
6. 小倉道跡

— 活断層であると推定されるもの

— 活断層であると疑いのあるもの

— 活断層であることが確定なもの

A 一志断層系

B 垂名・四日市断層系

C 木津川断層系

活断層研究会『[新編]日本  
の活断層』東京大学出版会およ  
び『活断層情報三重県版』をも  
とに作図

0

60km

第123図 県内活断層分布図 (75万分の1)

地震を起こす原因は、日本列島を形成している海域でのプレートの重みによる東海地震や南海地震がある。この海域で起こる東海地震や南海地震は、ほぼ同時期に発生することが解明されており、発生周期は90～150年という規則性がある<sup>3</sup>とされる。もう一つは内陸での活断層の活動によるものである。

県下には伊勢平野北部に桑名・四日市断層系が、鈴鹿山脈や布引山脈の東には一志断層系などの活断層が走っている（第123図）。B地区で検出した噴砂は、海域で起きた東海地震や内陸での一志断層系

〔注〕

- ① 岩崎直也「弥生時代の建物」「弥生時代の掘立柱建物」埋蔵文化財研究会 1991
- ② 石野博信・関川尚功「講向」奈良県立橿原考古学研究所 1976
- ③ 石黒立人「時期区分をめぐって」「朝日遺跡V」御愛知県埋蔵文化財センター 1994
- ④ 谷本毅次「東名阪道路埋蔵文化財調査報告」三重県教育委員会 1970
- ⑤ 小玉道明ほか「東名阪道路埋蔵文化財調査報告」三重県教育委員会 1970
- ⑥ 真田行成ほか「上箕田弥生遺跡第2次調査報告」上箕田遺跡調査会 1970
- ⑦ 谷本毅次「中ノ庄遺跡発掘調査報告」三重県教育委員会 1972  
⑧ 前掲註2
- ⑨ 田辺昭三「海邑古墳群1」平安学園クラブ 1966
- ⑩ 伊藤秋男ほか「平田古墳群」安濃町教育委員会 1987
- ⑪ 倉田直純ほか「宮ノ前遺跡」「大古曾遺跡・山難遺跡・宮ノ前遺跡発掘調査報告」1995
- ⑫ 楠橋裕昌「六八八遺跡」「一般国道23号 中勢道路 埋蔵文化財調査概報Ⅱ」1995
- ⑬ 登室康光ほか「メカサ3号墳発掘調査」津市教育委員会 1991
- ⑭ 佐々木裕「茶臼山1号墳」四日市市教育委員会 1998
- ⑮ 大西源一ほか「一志郡史(下巻)」一志郡村会 1998
- ⑯ 吉水康夫ほか「下ノ庄東方遺跡」三重県教育委員会 1988  
三重県埋蔵文化財センター「平成元年 第3回三重県埋蔵文化財担当者会議資料」1989
- ⑰ 西村修久「朱中古墳」「朱中遺跡・朱中古墳」三重県埋蔵文化財センター 1996
- ⑱ 伊藤偉裕「落合古墳」三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター 1992
- ⑲ 三重県教育委員会「三重考古図録」1954  
山本雅晴「伊賀の古式土師器とその周辺」「考古学論集第2集」考古学を学ぶ会 1988

の活断層の活動による可能性が高いと考えられる。

1995年1月17日に起こった兵庫県南部地震では、多数の死傷者を出し、地震予知が切に望まれるようになった。考古学の分野からも全国的に地震痕跡の資料を集成した『発掘された地震痕跡』が刊行され、県下でも地震痕跡が集計された。地震痕跡は、活断層、地割れ、地滑り、噴砂など多様であるが、発掘調査で検出されるこれらの地震痕跡の発見から、考古学分野からも地震の予知や被害の予測に貢献をすることが期待されている。（宮田）

- ⑩ 前川嵩宏「『』、結語」「95年遺跡発掘調査報告書」松阪市教育委員会 1987
- ⑪ 伊藤裕之「中の坊遺跡」三重県埋蔵文化財センター 1997
- ⑫ 倉田直純「『地蔵寺遺跡発掘調査報告書』亀山市教育委員会 1978
- ⑬ 楠橋裕昌ほか「城之越遺跡」三重県埋蔵文化財センター 1992
- ⑭ 茂生悦生「太田遺跡」「松ノ木遺跡・森山東遺跡・太田遺跡発掘調査報告」三重県埋蔵文化財センター 1993
- ⑮ 伊藤裕偉ほか「岐坂 第1次調査」三重県埋蔵文化財センター 1998
- ⑯ 山田 猛「結語」「山城遺跡・北瀬古遺跡」三重県埋蔵文化財センター 1994
- ⑰ 赤坂次郎「第4回東海考古学フォーラム」東海考古学フォーラム運営大会実行委員会 1996
- ⑱ 野田精一「安濃郡の条里制について」「三重の文化」第7号 1979年
- ⑲ 仲見秀雄「春雲・安濃・一志郡の条里制」仲見秀雄・吉岡武雄編「伊勢湾岸地域の古代条里制」東京堂出版 1979
- ⑳ 米山浩之「平田遺跡」「三重産業振興センター埋蔵文化財発掘調査概報」津市教育委員会 1993
- ㉑ 広瀬和雄「中世への胎動」「岩波講座 日本の歴史6 変化と衝突」岩波書店 1986
- ㉒ 寒川氏によれば、暗青灰色粘質土を引き裂いた噴砂が、その上層の沙質土層を引き裂いておらず、また、上層で検出した横構の溝などに影響を与えていないことから粘質土と砂質土の間が当時の地表面であった可能性が高いとされる。
- ㉓ 波状の層は地震による擾乱構造との寒川氏の御教示を得た。
- ㉔ 寒川 旭『地震考古学』中公新書 1992  
同 「考古遺跡にみる地震と被災化の歴史」「科学」vol. 68 1998
- ㉕ 寒川 旭氏の御教示による。
- ㉖ 埋蔵文化財保護連絡会議・埋蔵文化財研究会「発掘された地震痕跡」岩波書店 1996

# 図 版



D 地区から西方を眺める



ほ場整備前の安東地区（昭和39年、国土地理院撮影）



遺跡遠景（西から）



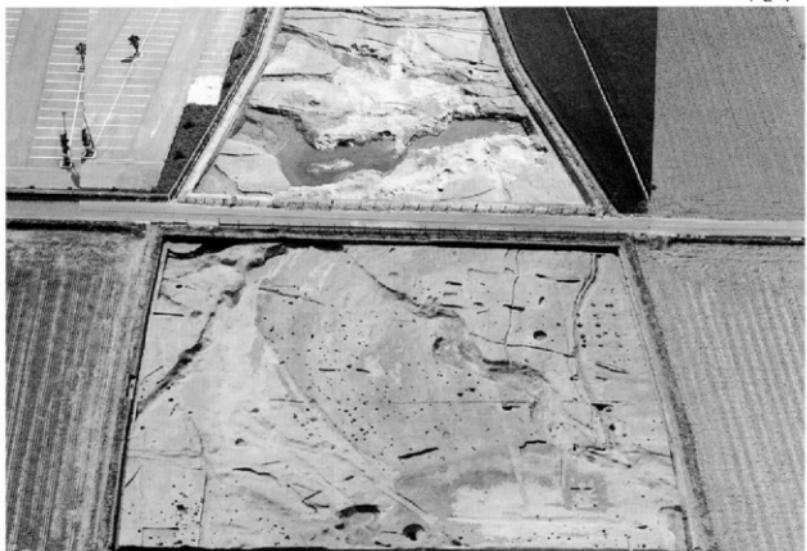
遺跡遠景（北から）



調査前（D～F 地区、北から）



A・B 地区全景（北から）



C・D地区全景（北から・合成）



E・F地区全景（北から）



A地区全景（西から）



B地区全景（西から）

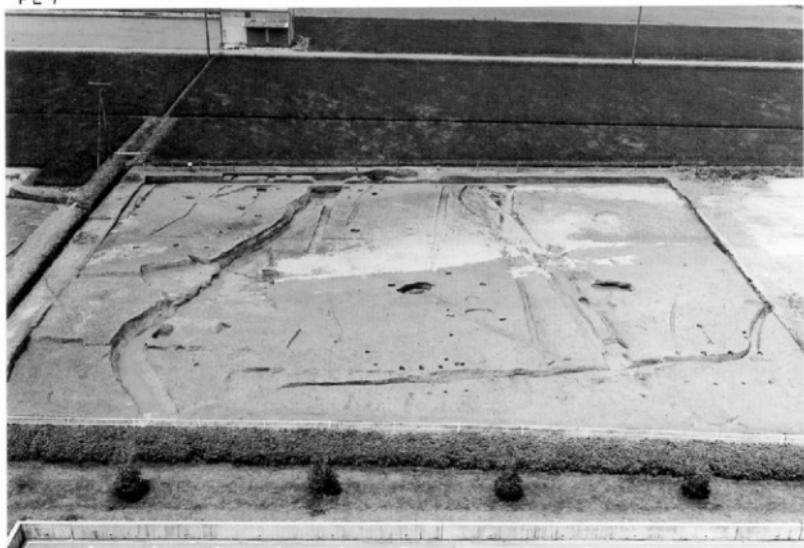


C地区全景（西から）

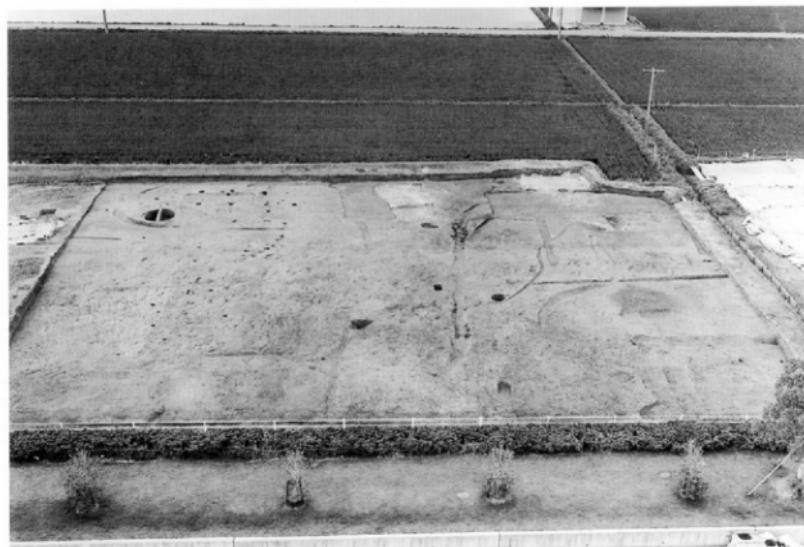


D地区全景（東から）

PL 7



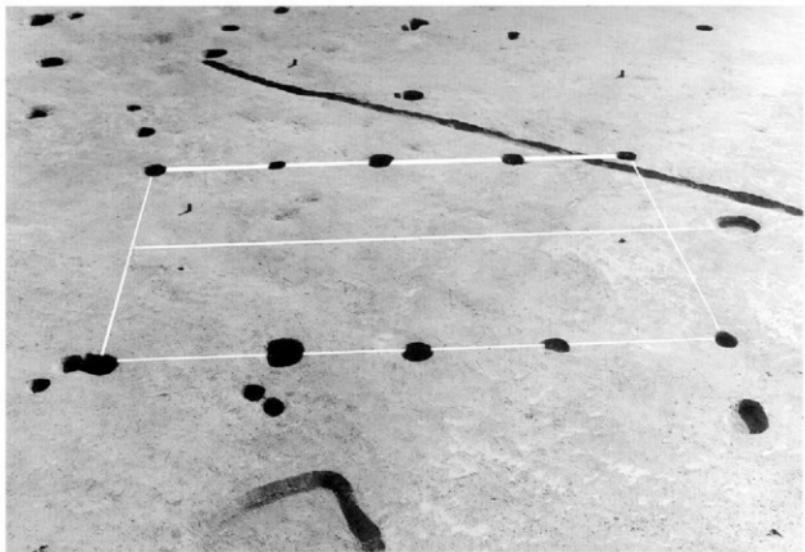
E 地区全景（東から）



F 地区全景（東から）



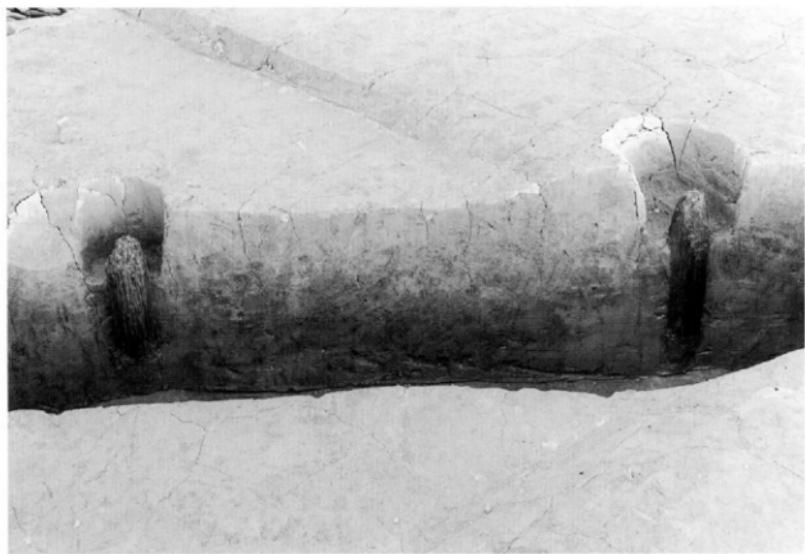
C地区中央部（北から）



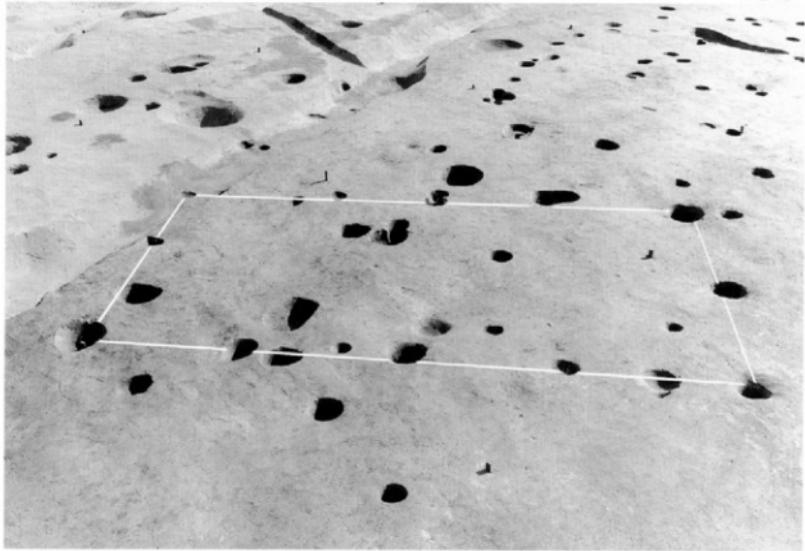
SB5（北から）



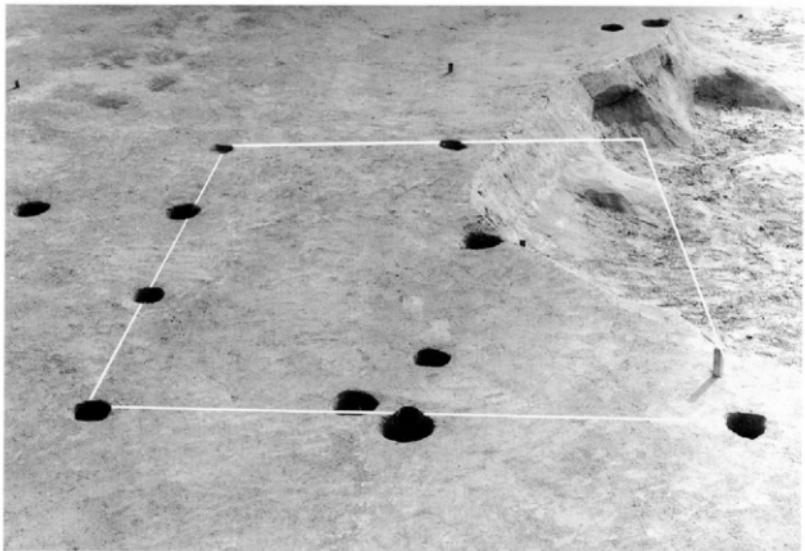
S B 2・3 (北から)



S B 2 柱根出土状況 (西から)

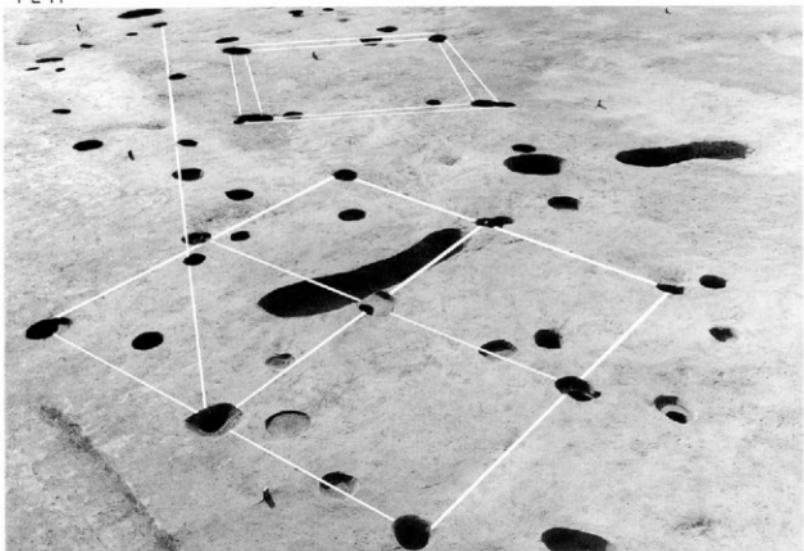


S B 7 (北から)



S B 10 (北から)

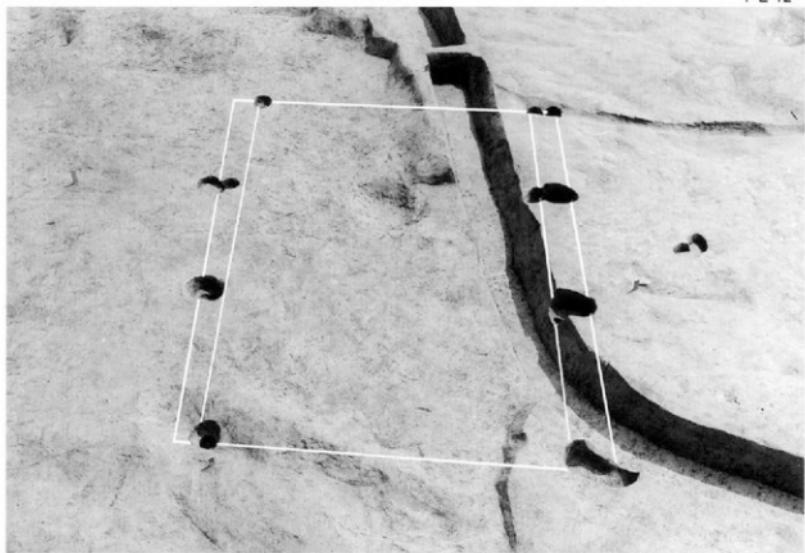
PL 11



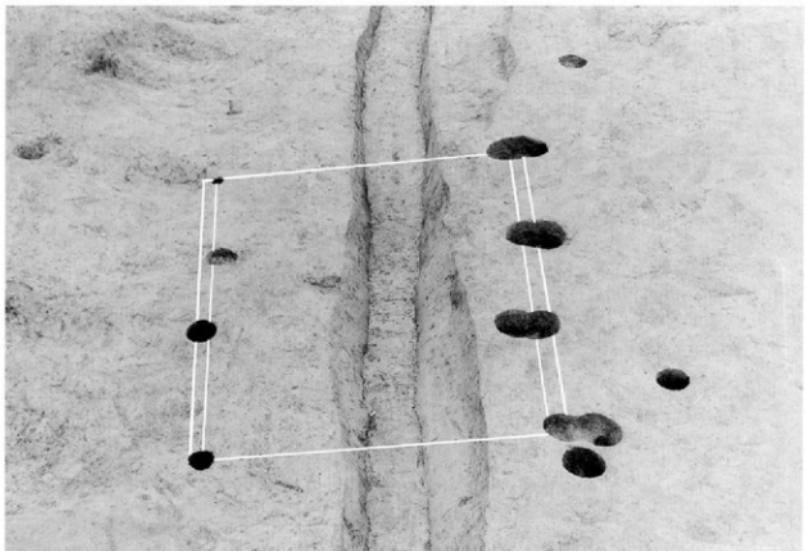
S B 8・9・11、S A 4 (東から)



S B 12 (西から)



S B 13・14 (北から)



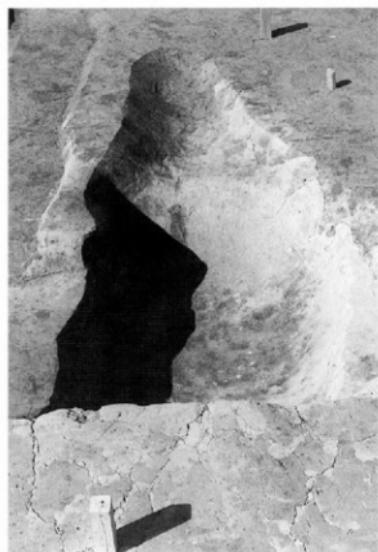
S B 15・16 (北から)



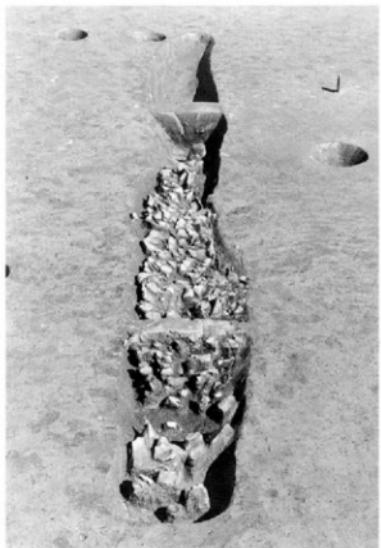
S X 1、SK5～8（西から）



S F 1検出状況（東から）



S F 1完掘状況（東から）



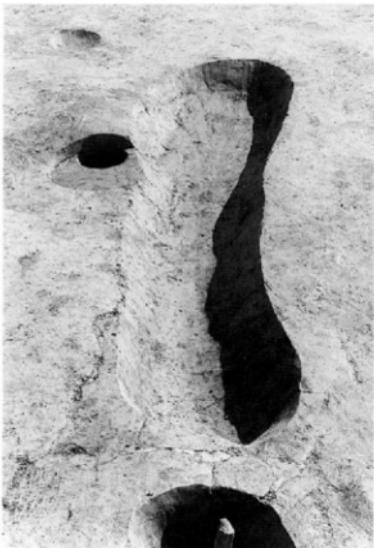
SK 1 遺物出土状況（西から）



SK 1 完掘状況（東から）



SK 5（西から）



SK 9（西から）

P L 15



S D 4 (東から)



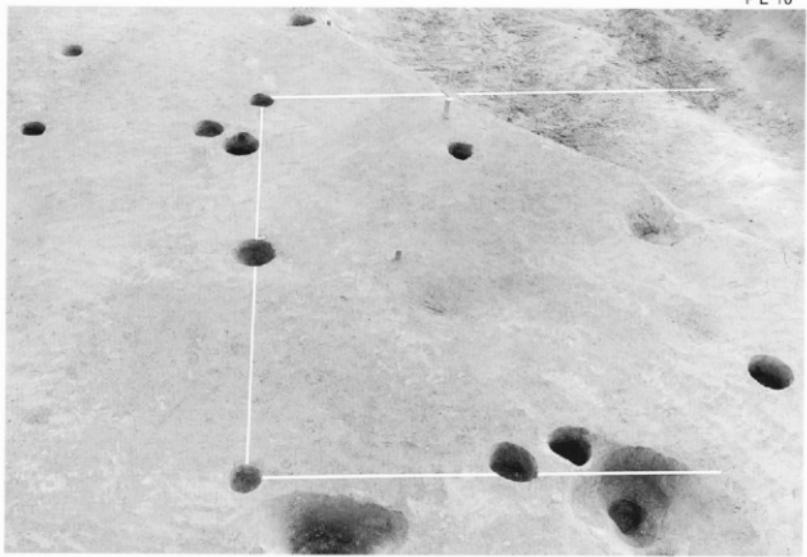
S R 1 (北から)



S Z 1 (北から)



S Z 2 (西から)

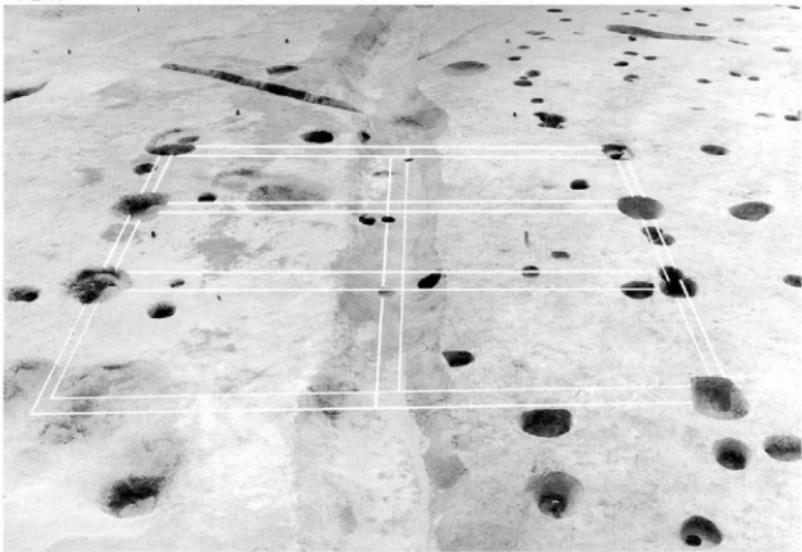


S B 17 (北から)

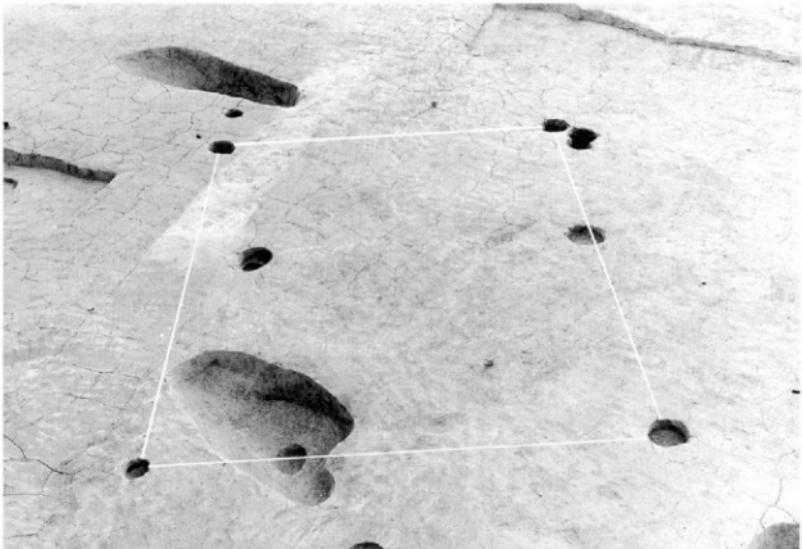


S B 18 (北から)

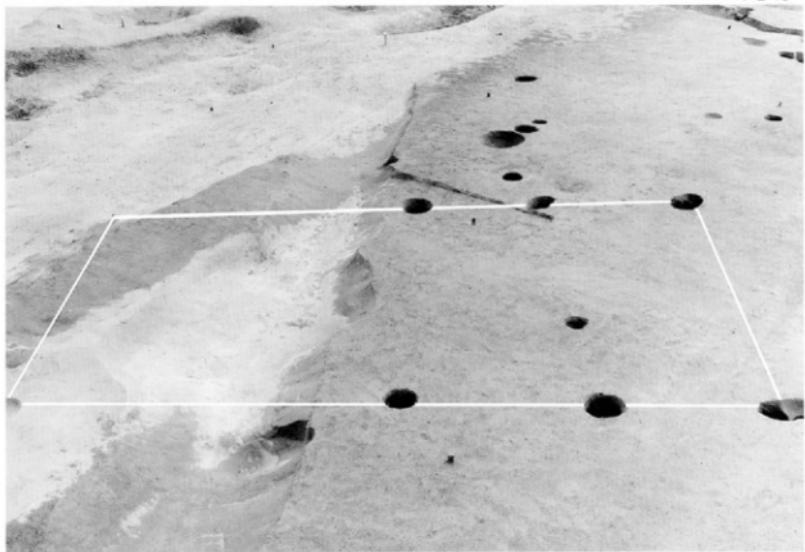
PL 17



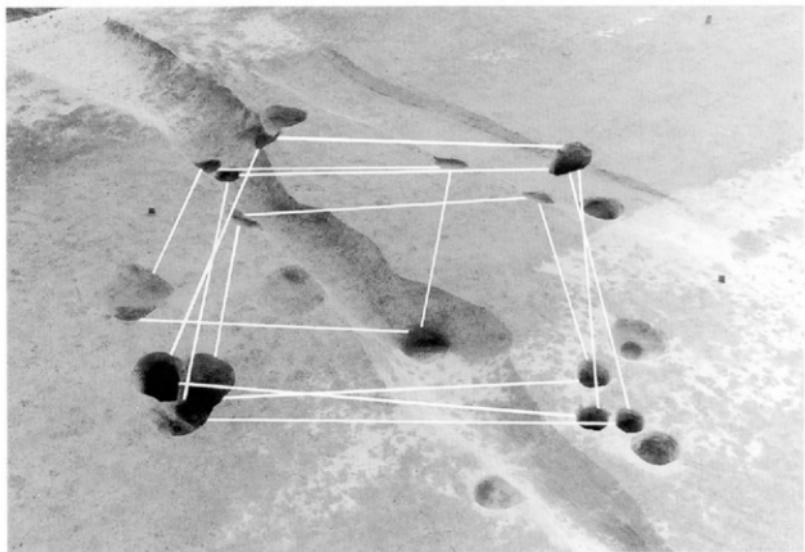
S B 19・20 (北から)



S B 21 (北から)



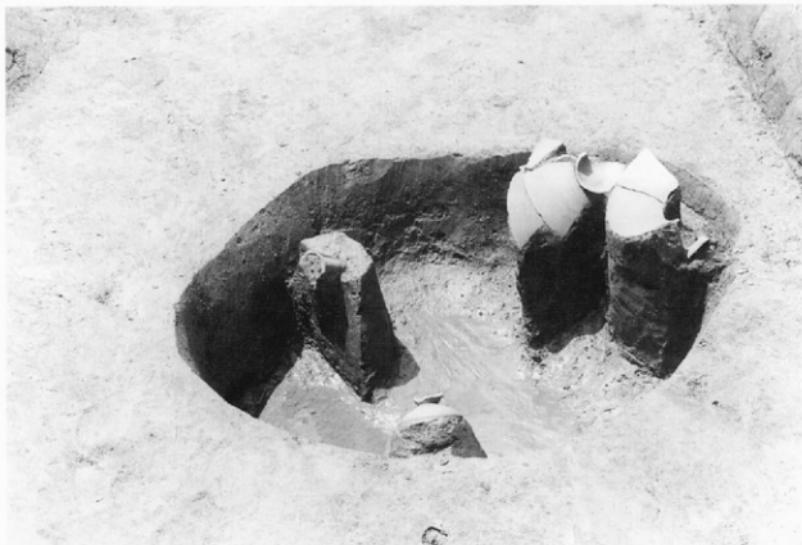
S B 22 (北から)



S B 23~26 (北から)



S E 1 (北から)



S K 11遺物出土状況 (北から)



S K 13遺物出土状況（北から）



S K 15遺物出土状況（西から）

P L 21



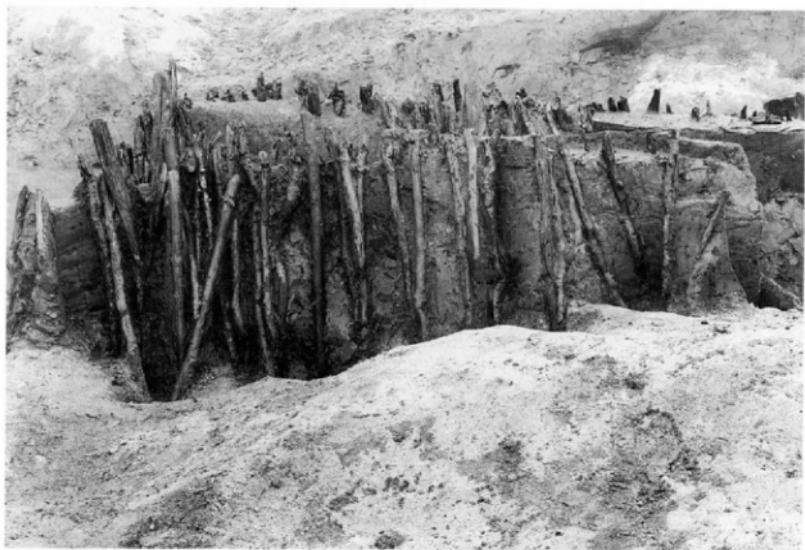
S R 7 (東から)



S R 8・9・10 (東から)



S Z 5 (北から)



S Z 5 杭列 (北から)



S Z 6 (北から)



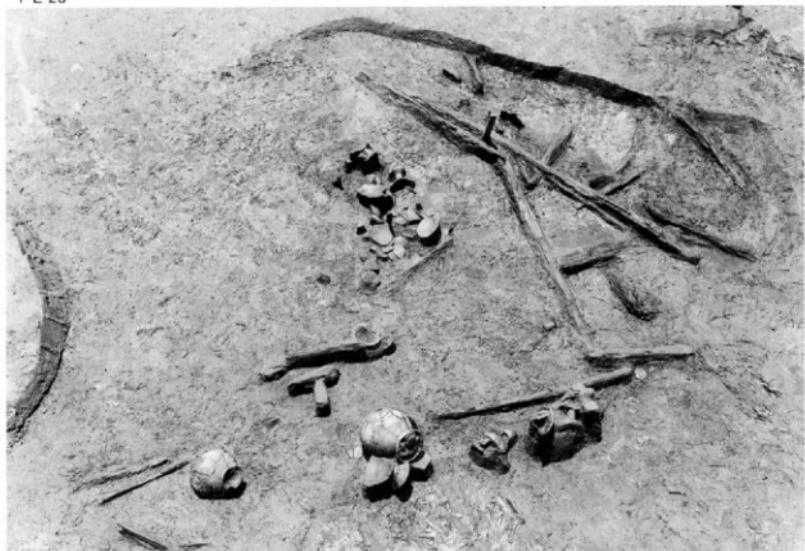
S Z 7 (北から)



S Z 8 (東から)



S Z 9 (東から)



S R 8 遺物出土状況（東から）



S R 8 遺物出土状況拡大（南から）



S R 3 小型丸底壺出土状況（北から）



S R 4 土師器壺・椀出土状況（西から）



S R 4 風呂鉢出土状況（西から）



S R 7 曲物底板出土状況（真上）

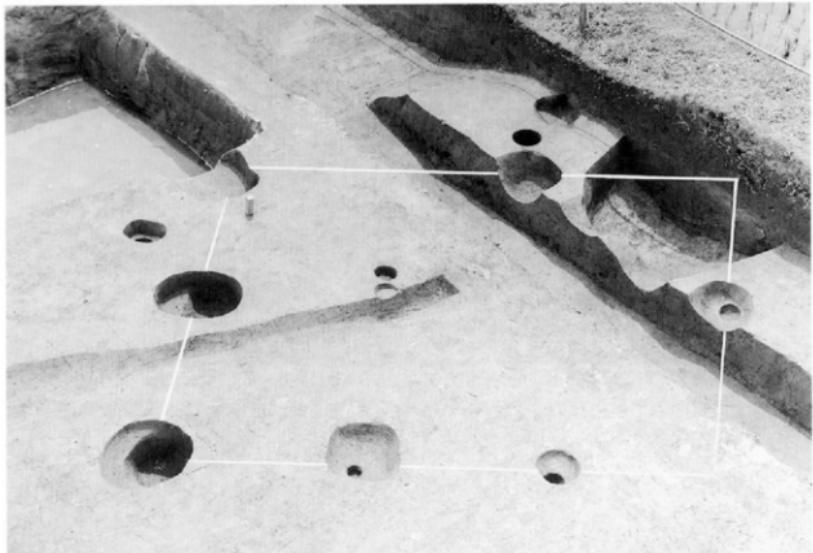


S R 7 鋼柄出土状況（東から）

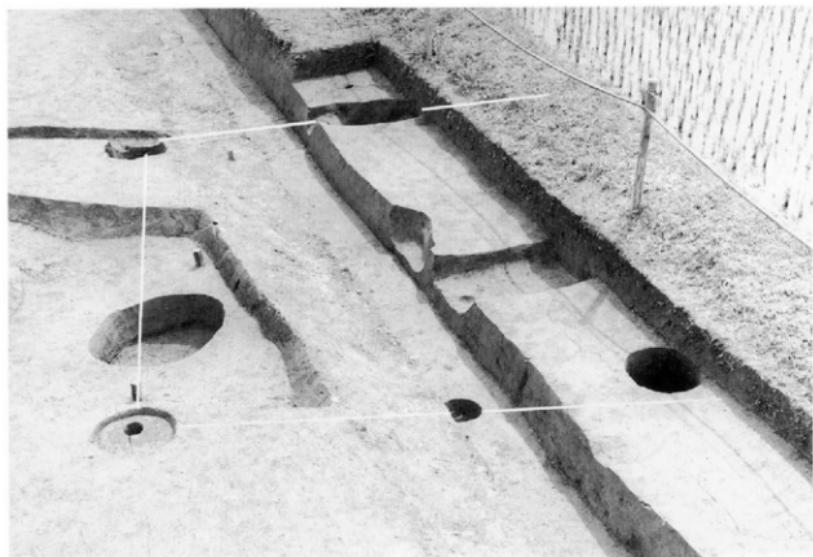


S R 8 曲柄又鉤出土状況（南から）

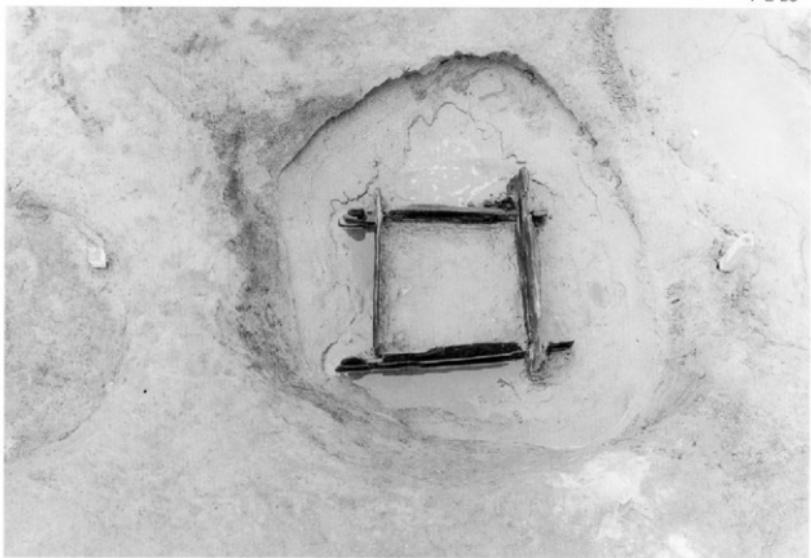
PL 27



S B 27 (東から)



S B 28 (北から)



S E 2 (北から)



S E 2 木組み (東から)



S E 2 木組み (南から)



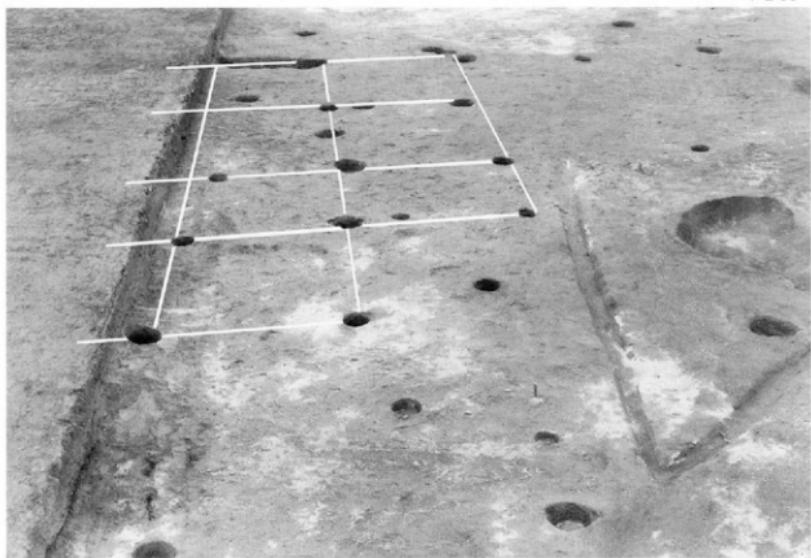
S R 11 (東から)



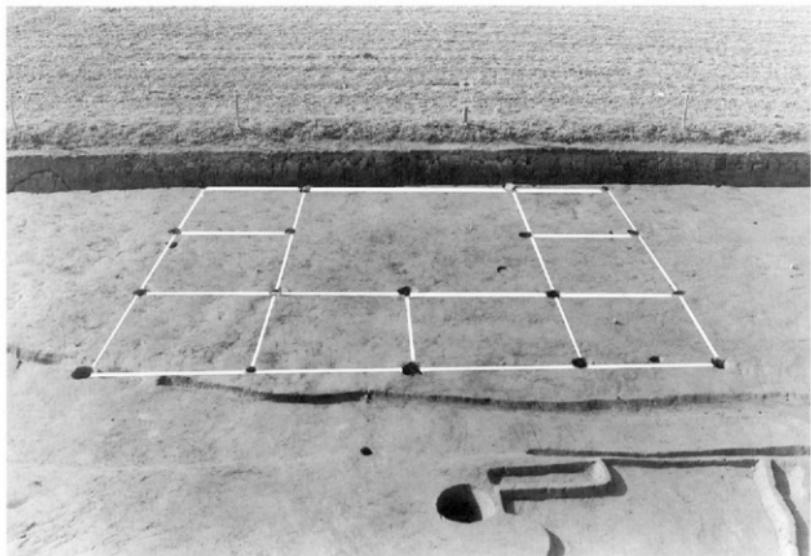
S R 11遺物出土状況 (南から)



S R 11遺物出土状況 (東から)

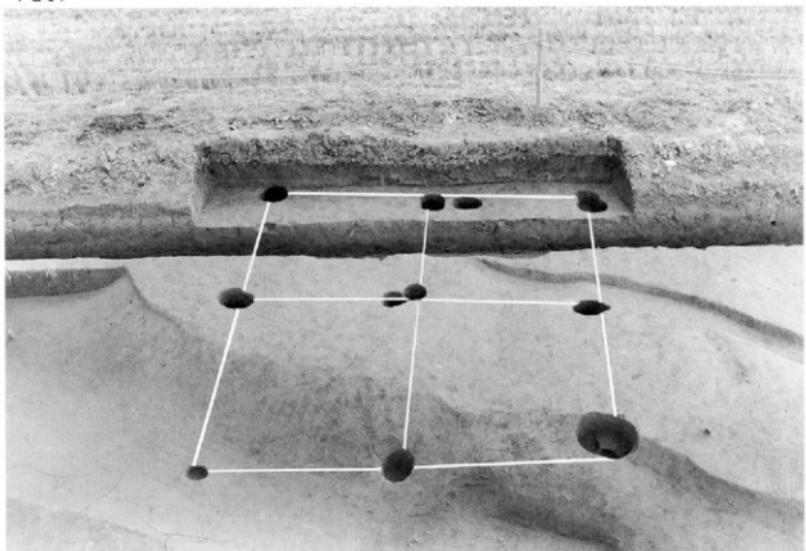


S B 29 (東から)

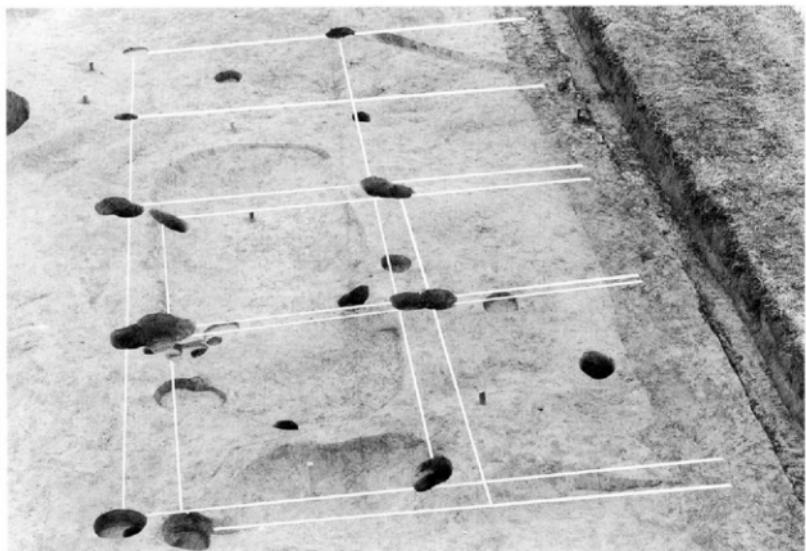


S B 30 (東から)

P L 31



S B 31 (西から)



S B 32・33 (北から)



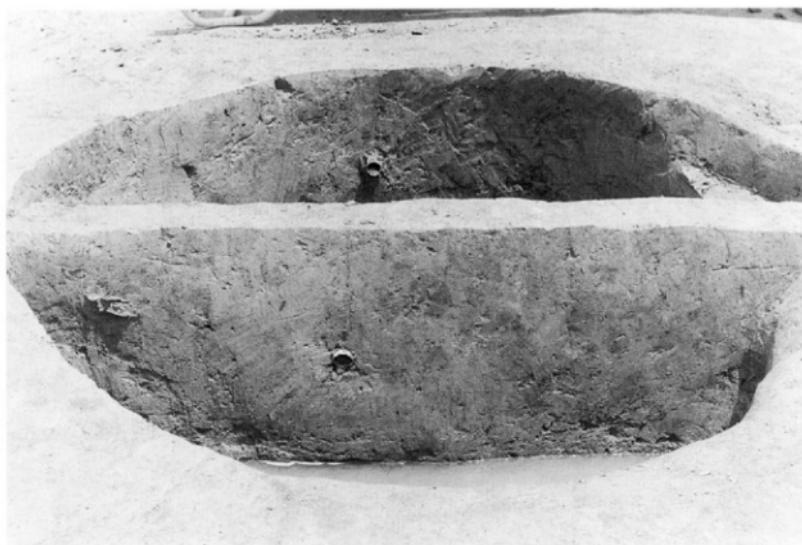
S E 3 (北から)



S E 3 土層断面 (南から)



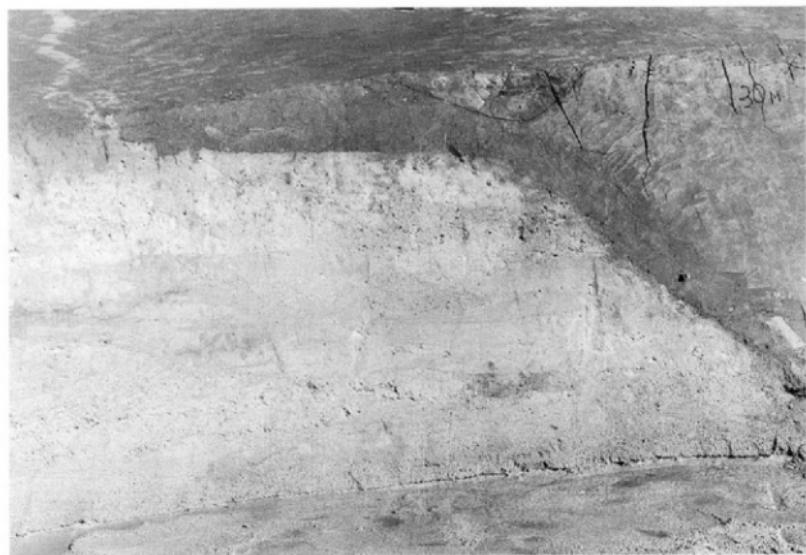
S E 4 (北から)



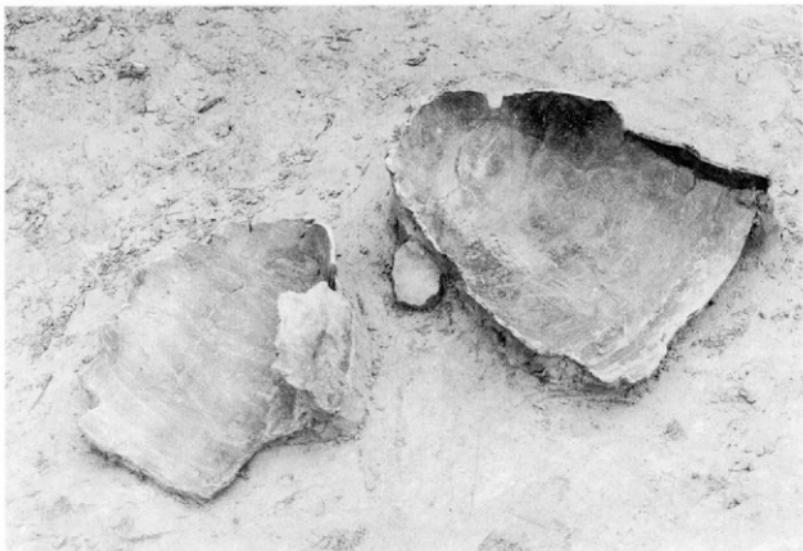
S E 4 土層断面 (南から)



B 地区噴砂検出状況（南東から）



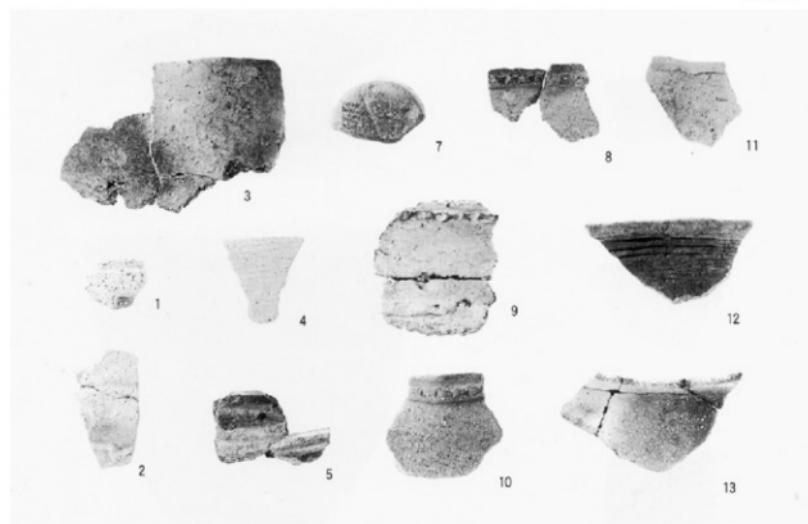
B 地区噴砂断面（南から）



B 地区縄文土器出土状況（西から）



D 地区東壁土層断面（西から）



绳文土器 1 (1 : 3)



绳文土器 2  
(1 : 5)

6



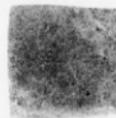
20



27



26



35

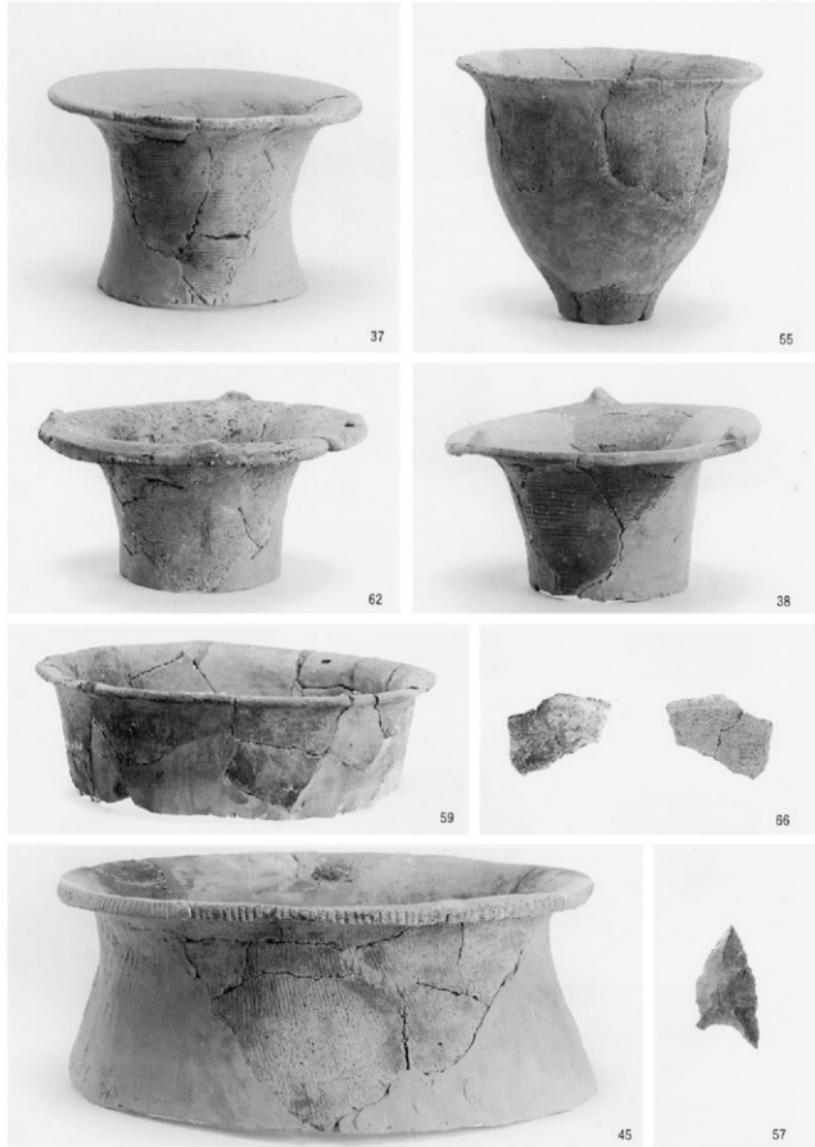


29



21

S×1・SF1出土遺物（1：3、21は1：4、35は2：3）



SK 1・3・4・7・8出土遺物（1：3、57は1：1）



SR 2 · SD 4 · SB 23 · SE 1 · SK 10~12出土遺物 (1 : 3)



SK13・14出土遺物（1：3、121・129・140は1：4、152は2：1）



153



158



155



154



156

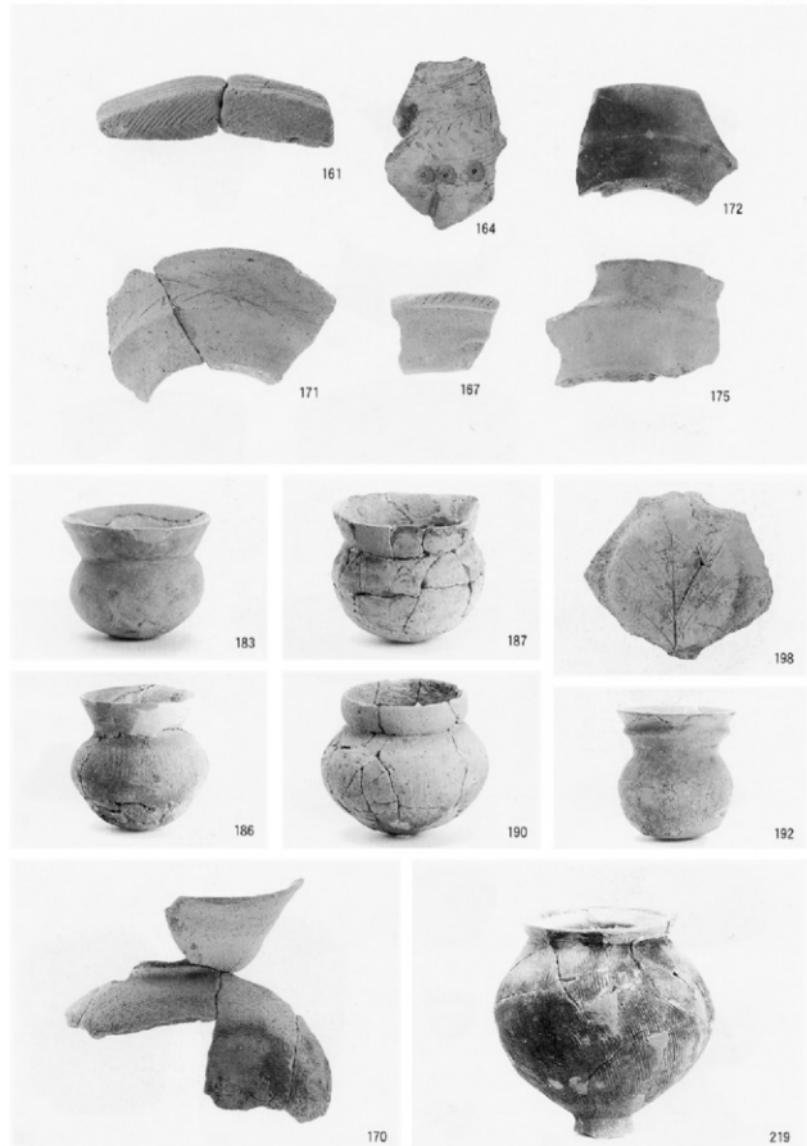


159

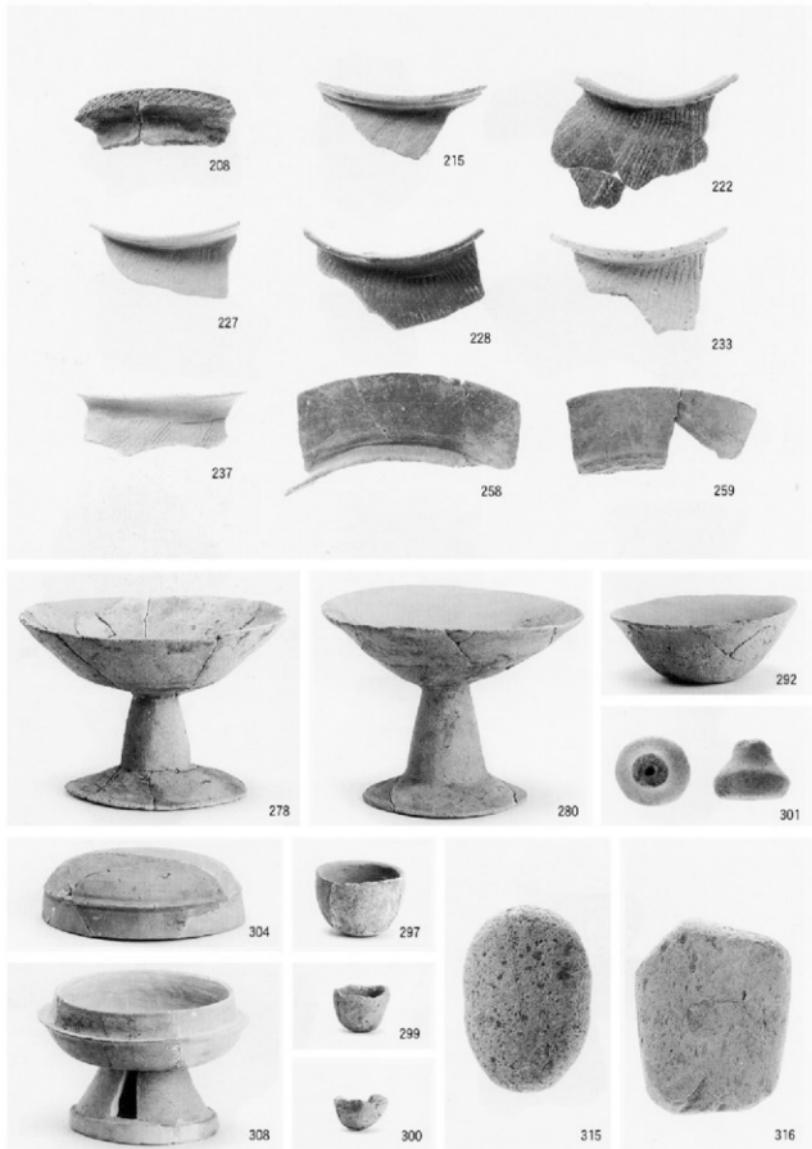


160

S K 15出土遺物 (1 : 3、155・158は1 : 4、160は2 : 1)



S R 3 出土遺物 1 (1 : 3, 170は 1 : 4)



SR 3 出土遺物 2 (1 : 3, 301・315・316は1 : 2)



346



351



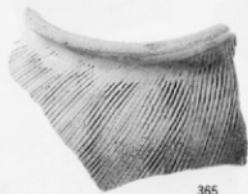
360



366



405



365



371

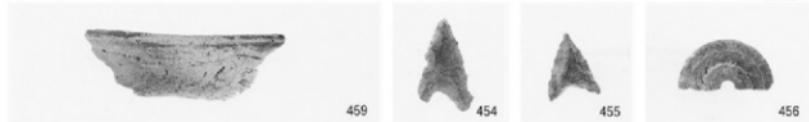


375

S R 4 出土遺物 1 (1 : 3, 346・351・360・366は1 : 4)



S R 4 出土遺物 2 (1 : 3、439・441は1 : 4、440・448は1 : 2、450・451は1 : 1)



459 454 455

456



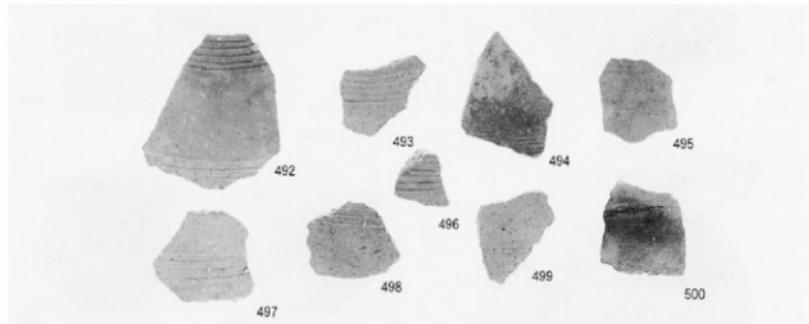
467



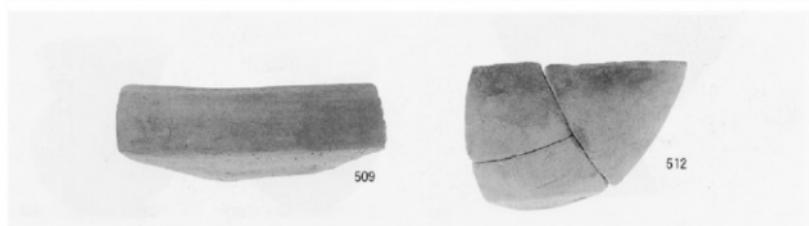
478

485

486



497



509

512

S D 8・9・12, S R 5・7 出土遺物 (1 : 3, 454・455は2 : 3, 456は1 : 2)



503



522



538



534



525



526



527



528

SR 7 出土遺物 (1 : 3, 503・534・538は1 : 4)



579



587



583



588



590



594



596

S R 7 出土遺物 1 (1 : 4, 596は1 : 3)



600



601



602



603



604



606



609



610

S R 7 出土遺物 2 (1 : 3)



636



637



638



643



644



642



651



653



652



656



659



654

SR 9、包含層出土遺物 (1:3、659は1:2、642は1:4)



677



665



666



676



668



687



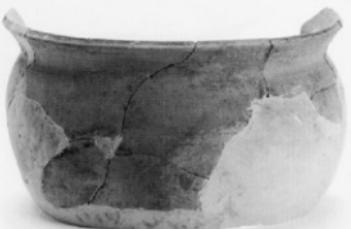
664



694



673

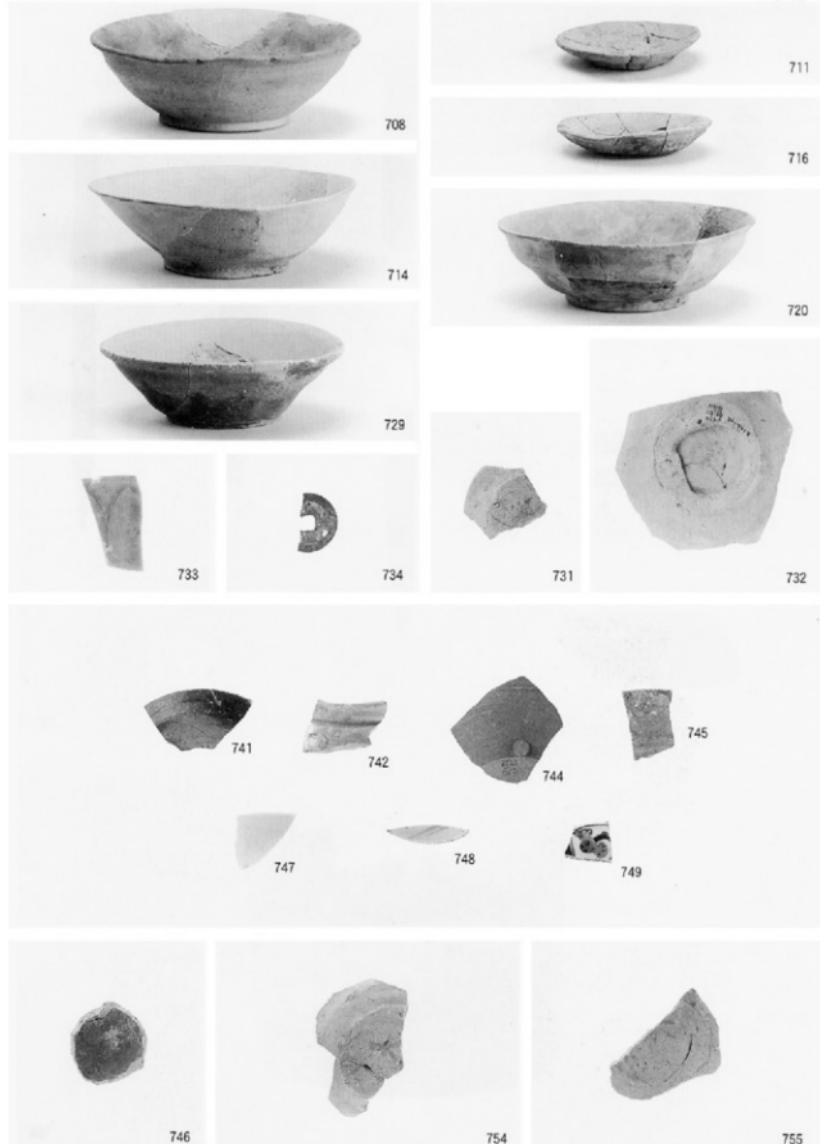


695

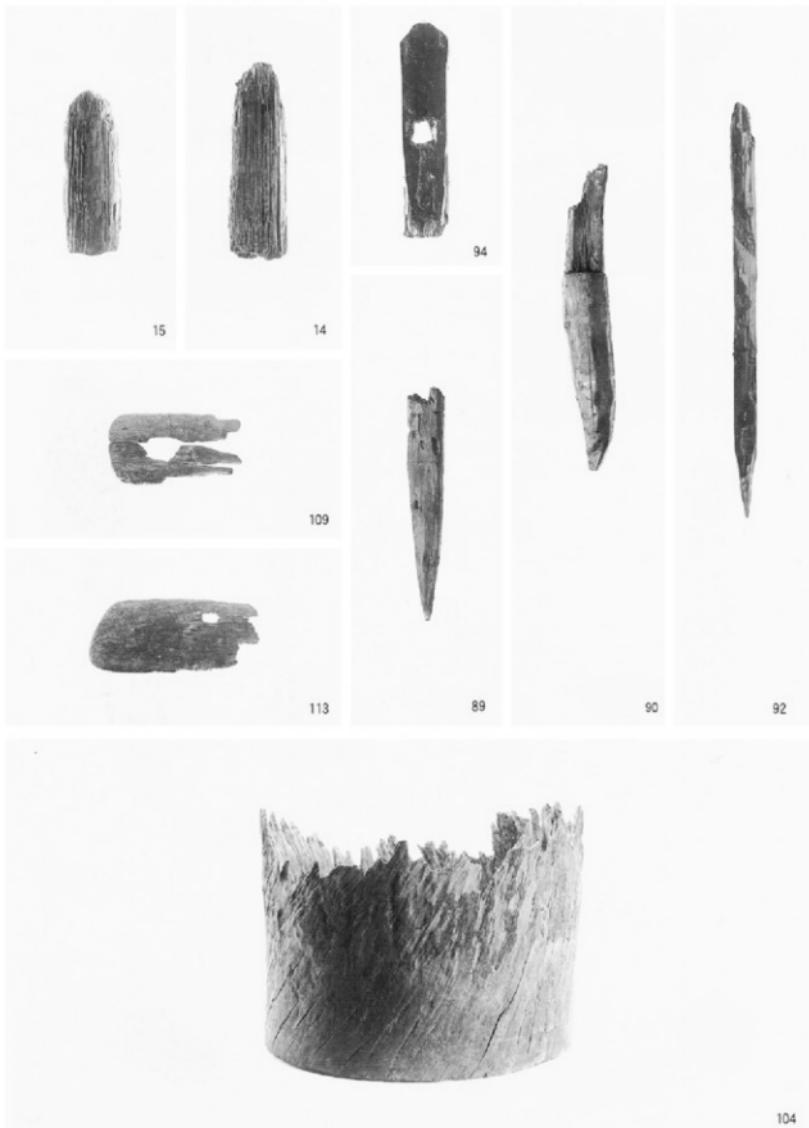


678

SE 2・SR 11出土遺物 (1:3、665は1:1)



SE 3・4、SD 29-36、包含層出土遺物 (1:3、733は2:3、734は1:2)



SB2・SE1・SZ2出土木製品（1：10、94は1：5）



317



548



452



549



550



614



613



612



551



709



710

SR4・7・8、SE2、Pit 2出土木製品 (317・614は1:4、452・548・549・550・551・612・613は1:6、709・710は1:10)

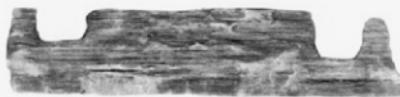
P L 55



660



662



661



663

S E 2 侧板 (1 : 10)

種實



1.毛毛 (SD13)

# 報告書抄録

ふりがな	いっぽんごくどうにじゅうさんごうちゅうせいどうろ(じっこうく)けんせつじぎょうにともなうぞうたいせきはくつちょうきほうく							
書名	一般国道23号中勢道路(10工区)建設事業に伴う藏田遺跡発掘調査報告							
副書名								
卷次								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	115-13							
編著者名	米山浩之・宮田勝功							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 TEL 0596-52-1732							
発行年月日	西暦 1999年10月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ○○°○○'	東経 ○○°○○'	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
藏田遺跡	三重県津市納所町 字藏田ほか	24201	757	34度 43分 59秒	136度 28分 83秒	1989.11.27～ 1990.2.26 1995.10.31～ 1995.11.17 1994.8.22～ 1995.1.25 1995.4.17～ 1995.12.21 1996.5.7～ 1996.6.8.02	608 748 5,600 6,810 3,310	一般国道23号 中勢道路(10工区) 建設事業に 伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
藏田遺跡	集落跡	弥生時代 弥生時代～ 古墳時代 古墳時代 飛鳥時代 奈良時代 平安時代～ 鎌倉時代	掘立柱建物・土坑・溝 自然流路・河道・土坑・溝 掘立柱建物・土坑・溝 掘立柱建物・溝 掘立柱建物・溝 掘立柱建物・土坑・溝 噴砂・牛の足跡	縄文土器・石器 弥生土器 土師器・須恵器 陶磁器 木製品	弥生時代から鎌倉時代の掘立柱建物、土坑、溝など。 古墳時代の自然流路・河道・溝、それに伴う護岸施設・杭列。 平安・鎌倉時代の掘立柱建物は条里地割に一致する。			

平成11(1999)年10月に刊行されたものをもとに  
平成19(2007)年5月にデジタル化しました。

---

三重県埋蔵文化財調査報告115-13

・般国道23号中勢道路（10工区）建設事業に伴う

咸田遺跡発掘調査報告

1999年10月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター  
印 刷 伊藤印刷株式会社

---